





斷ぞかし。惣じて此たぐひの悪口いふまじき事なり

龍灯は夢のひかり

何の虹ぞさらに今反橋わたせる夕氣色。紀三井寺のありさま近江なる湖こゝにたとへて。都の富士は磯と詠り折ふしの秋の風吹上に立り。白菊咲咲て浪にうつらふ星の林のごとし。是なん織姫のやどり木とも傳へし布引の松千代ふりて毎年七月十日の夜龍燈の光鮮なる。玉津嶋姫の姿めきたる嬬子を偲ひ。貴賤遊山船に酒哥の樂。あるひは琵琶の撥音樂天が鬚を撫つる。薄陽の江もよもやこれにはと。自慢の男こゝに寄なん。沖浪さはがしく次第に夜更方に成て。人の心も空なれやはれ行月の影を外になして。龍神の燈さゞぐるも今なるべし。見ての語り句にもやと群集の輩胞に汐風をいとわず。詠に首の骨もたゆくになりける。むかしより所の人のいひ傳へしは。此光を見る事人の中にも稀なり。随分の後生ねがひ人事をいはず腹たてず生仏様といはるゝ程の者が。仕合よければちらと拜み奉ると聞し所に。大勢立かさなりて居るを我慢に突退推のけて出し男。眞向に進み珠救の緒のながきに咄し半分繰ながら各々あれ見給はぬか今あがらせ給ふはと。目を眠り頭をうなたれしに。十人のうち七八人は磯に釣火するを見付有がたし。日比人わるかれと思はぬ證據今あらはれたりと貞皺面て拜み。また二三人は罪が深ひやらなんぼ延あがりても見えぬと頭撞程の者は眞実なるべし。道人はとても及びなしと觀音堂に通夜せんと。初は普門品讀誦などしながらつやゝ眠るうちに。其曉の空に紫の雲たな引海上風絶て。浪間に金色のひかり水玉湧かへり。微妙の調耳にひびきふしぎやと見る所に。鬢づら結の童子救十人。瑠璃燈を捧跡に無量の鳥甲と見へしは。辛螺鮑ひんとしたるが魚の尾ひれ冠して。管絃を奏し此松に掛奉り。各々海上に蹴き給ひこなたを伏拜むと。御厨子おのづから開かせられ持給ふ一室の悪夢をあげて。善哉善哉。共と三度うなづかせ給ひて。又戸眼に隠れさせらるゝと。皆波間に入と。枕の鐘と夢が覺ると。一度にて感涙膺に鈴じ宵の後生願ひおかし

氣色の森の倒石塔

杖扶しばしとまると大隅の片里に涼しき暮を待て沢辺を行細石水に夏なき心地のして。さらに都を思ふ糸を爰に。梢の茂みさながら其氣色の森にほととぎすの折ふしをしらせ。纏なる村雨も旅のならひとてうたてく。漸くにとどり來て近づきにはあらぬかたに子細をかたつて。一夜の假寝に夢みる隙もなかりき。人の姿は鼯もさのみにかはらす。明日は五月の五日とて。松火あかして跡あかりなる月代を剃など。老人は肩衣かけて持仏に勤なすありさま。東門徒の名号いと殊勝に拜まれける。女は柏の葉にて黒米の餅などをつみけるは。是なん上がたに見し眞薦の粽のかはりなるべし。釣鍋に少き籬を仕かけ葉茶を煎じて。伊勢茶碗の手厚きに汲なして我を饗應しける。いづくにも鬼はなき君が代の道の廣きを。今見る事歸りてはなしの種ともならんかし。明るあけほのいそぐ草鞋かけ脚絆のしゝ干になるまで圍爐裏の縁に掛て。取雑ての咄聞うちに。隣に人聲の喧しくいまだ盛ならざる女の叫けるは。いかなる事と尋しにあるしの語る。あれは過し比まで此國のお屋敷がたに。和田太郎七とかやいへる御内に。十一二才より四五年奥にめしつかはれて不便かられしに。俄に物ぐるわしくなりてたまらざりけるより。此比おくられて歸りしを兩親是をなげき独の娘を生ながら地獄に落す心して。力におよぶ程醫療祈禱にいとまなく。加持すれども氣色しづまらず。是より十七里を経て名譽の道人ありけるを呼越。あまりにつよくいのられおのづから本性をあらはして。我は此女と傍輩にて。はけて隱居の御ふくろさまにかはゆがられ朝夕御食まいる膳の向に前足折て。御口元に目をつけずたしなみ居るに。御心つかせられ鯛のせゝり残しを残らす。とらよゝと頭撫てなから下され腥ものさへあればいつくの屋ねの上藏の隅に居眠して居るにも。呼給ひし御心入うれしかりき。ある時御娘子御平産ありし御見舞の留守には我独



淋しき襖の中にたて籠られ。一日一夜御寝巻の上に眠り。御歸りをまつにおそくはや腹に力なく。それより臺所へ出て見るに。いつもの鮑貝には繻のごとくなりてあるをも。誰あつて心を付るものもなく。あまりの事に睡棚にかゝり匂ひを尋る處に。少き青皿に飛魚半を喰さしてありしを。手にてそろりと掻出すを。此女はしり來り夕飯に添んとおもふて置たるものをと。釘にかけたる摺小木をもつて肝心の鼻柱をしたゝかにくわされ。絶入する所を掴んで放れ。忽眼くらみ三度舞ふ迄は叶はず。息斷ける時の一念いづくへか行ん。扱骸をば竊にせゝなきの側に埋られ。聞きよりくらき畜生道の輪回をはなれず。其時隱居様へは行方しらずと詐りしうらみ。なまなかくなる事を聞せ給はゞ。跡をも吊らひたまはらんものをと。さめ／＼となげきぬ聞もの了簡して尤の事に思ひ。しからばいかやうにして退べきそといへば。我に別に望みなし一生暖なる事をしらず。夏多時をわかかず火燧して此家の内に置給はれ。扱朔日十五日節句晦日には。鱒天櫻を櫓の上に。備給はらば。只今速に退へしといふ時。夫は安き事成程心得たりといへば。うれしき笑をふくみ怡しき聲。にやう／＼といふと氣色しつまりぬ。今にいたつて其家には。不斷火燧して置ねは祟りける彼時病人。又口ばしる事あり我は同居敷の與九郎といへるもの。此女にたび／＼執心書詢きて遣しけるに。つらからばたゞ一筋につらからて情まじりの偽をまとゝ思ひ。年の二とせ心を碎き。人目を關の明合わするゝ時なく。今は時節あしゝ今宵は勤に暇なしと。根から否とも色に出さず。それをば神ならぬ身のしら糸の。夜は焦れ昼はもえ胸の煙に立まよひ。富士は思ひの磯涙に浮身の沈むにきわまりし時。既に命の絶行水の柵一夜はとどめてと。をとづれたるにも。つれなくいなせの捨言もなく。食事おのつからにやみてこれをおもひ死。誰か此うきをとはん。今はうらみの一言いふべきたよりもなく。魂は大閻寺の墓にも留まらず冥途にも往ず一念。此女の影の形に添て片時もはなれず。幸に此般の妖怪の縁にひかれて憤をあらはす。たゞうらめしきは空しく眼し後それとも思ひ出しもせられず。今は取殺して苦悶に沈むとも前賢に逢とも。共に黄泉の影の假は。一度は此

もひをはるべしといふ聲。はじめにかはりてあらゝかなる男の五音。既理を賣ての物語聞に哀を催せり。時に前説せし僧。隨求光明。大悲咒を繰返し。此後後脚をも吊ひ又は此女に出家をさせ。永き未來一蓮花生の契を祈らすべしといふに。和尚の教化骨髓に徹したりと。発起菩提の心を顯して臥ぬ。其後病氣右のごとく本腹して此事を問ふに。覺へありといひしに。死靈のあり様をかたりて比丘尼となし。浮世を忘水清き心の花をたて香を燒。人は煙の種と消し心根思ひしられ其身かたくつとめて昔の衣を露に絞。今は煩惱かへつて善根になりぬ。されどもその験には此比丘尼墓所へ參度毎に。石塔倒るゝ事の不思議や。一念五百生。歳念無量劫まとなるかな。我此所に夏の比一宿して西海残らず廻り。同年の雪の山見し時。ふたゝびこゝに來て此女の物かたりを聞。世にはかゝる例もある物かはと。彼石塔のもとに行。見ぬ其人の跡を吊らひて歸りぬ。今に倒石塔とて名は大閻寺の庭の叢に残れり

枕は残るあけぼの縁

奈良坂や露時雨のみして兒手柏の色付。雲霧の二面に渦巻鯉の形せる山もさら也。春日の里三条通に軒の松としふりて。むかし宗親といへる小鍛冶の住けるほとりに。纒なる煙もたてゝ板屋かすかなる所に。しるべの人ありて尋ねて一夜をあかし。枕に行燈の影うつりて飛火野の秋の風。尾花が袖の淋しさを旅のならひとおもへば也。漸く三笠山に朝日の出しより。乾井の水をむすびて目をさますなど。朝ぎよめの宮廻りこゝろざして詣でけるに。樺相村の奥ふかく殊勝さの外よりまさり。白張の袂を蹴し烏帽子おかしげなる様したる。八百八禪宜の良体みなかはりて世の中の廣き事のみおもはれ。我ちかづきは都に見たる。爰も紅葉の洞とて幣とりあへず神前に頭突。後にまわれは八重櫻の春おもひつる三月堂二月堂にあらりて。抑々此觀音は孝謙天皇天平勝宝四年御草創有。宝字四年二月十五日よりはじめて行れける。今に續松の奇特燈心燃ざる事ぞあやしき。其外不思議の多き事いふに暇あらず。殊更本堂に籠



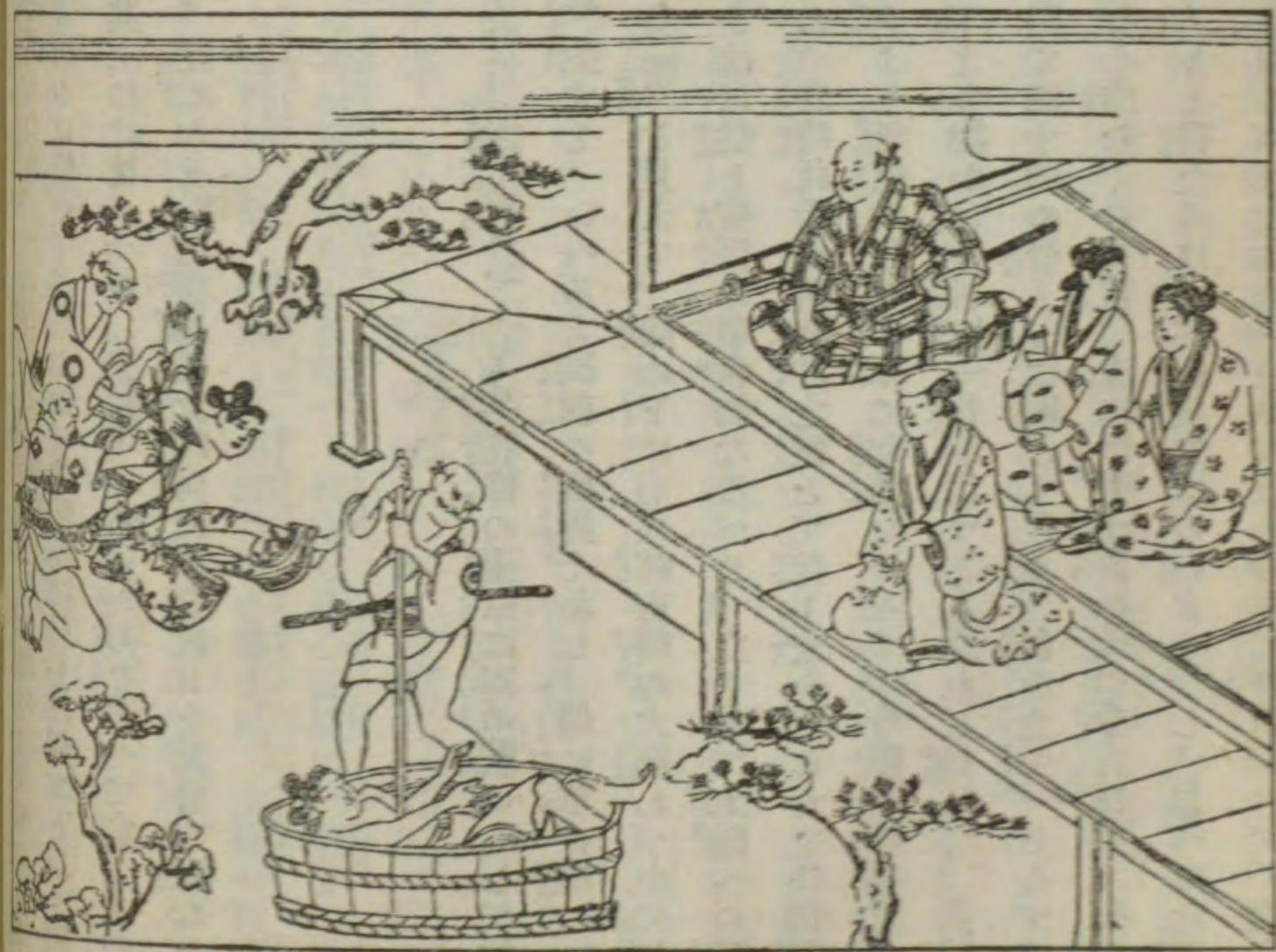
り七日の断食する輩ねがひ成就せざるといふ事なし。嗟二仏中間の利益は此菩薩にとまらせ給ひぬるよと。神に冥じてありがたく法施奉り歸るさの南堂を拜めば。役僧集りて物がたりするをきけば昨日の事。独は三条通り晒屋傳十郎とて角前髪。器量人に秀ならびなき美男。ふかく祈誓かけて此堂にこもる子細は。手具の白銀屋喜平次娘おさんとて姿も見ぐるしからず。十人は七八人も好程の生れつきなるが。此傳十郎と憐み深く教通かき詢てつかはしぬるに。いかなる因果か其いやなる事。胸につかへて物も喰はれず。随分無義道に返事すれども此女中くにもおもひきらず。あわれ大慈大悲の御影にて。彼女のふつ／＼思ひきるやうにとねがひをかけて。東の片隅に寝なれば紙帳釣て籠りぬ。また西の方は花蘭町墨屋外記娘おしな。美形此所に沙汰あるほどの器量。心をかけぬはなかりき。ある時酒屋門十郎といへる風流男に見初られ。みるから好め風な厚髪と思ひしに。出入比丘尼を頼みて是も思ひの教かきつゝり。今は千束にあまれども身毛よだちてうとましく。たとへ流の女となるともあの男とはいやなるに。しつこく奴を越を。手にさへとらねどおもひやまず。とても詮なき事に化名たちてはよしなや。かされては奴見るにおよばす返せど。いやましの續草露の命のあらんかぎりとは。いひこしたるが病となり。同じく此男に思ひきらせたび給へと。紙帳の中に断食して。兩人の願ひ微塵もちがはざる事もふしき也。七日のうち願成就せざれば爲飢き苦たへがたく。叶へは五体草臥ざるよしひつたへし。さる程に此二人の者屋夜音門品を百巻づゝ繰返し信心強盛に。祈をかけし一念豈むなしからんや。既に七日満ずる曉の雲のひかり音樂空に聞へ内陣より白髪たる老翁手に。水精の百八丸。蓮華に持そへながら枕にたゝせたまひ。兩人のものに告させ給ふは汝等がねがふ所あまり底心から丹精を抽んずるゆへに納受するなり。其證據として是をとらすぞ。おもふまゝなる事せよと天爲兔の長枕を給はると見て。夢はゆめにて覺枕はまどの枕。二つの紙帳のあいにもあり。是は有がたしと門十良急き道出て取らんとすれば。おしな是を見てそなた男は覺醒をする。それは此はうにねがひ祈て願成就から取りましたと別取を。門十良も驚き

誰かは住し荒屋敷

爰は下總の須賀山むかしはいかなる人か住けん。四丁ばかりの石垣半崩れかゝり。茅花雜の董原に器の闕のみして物の哀も折からこそまさされ。化して路傍の土となり。年々春草生すと。いへるも眼前の境界ぞかし。側に草の庵のいぶせきに八十に二つ三つたらぬ翁の。艸鞋を作りて世をわたる。營と見えて。蔭の下に石火鉢古綴の火繩わづかに煙をたてゝ。絞り蓑蓑を樂むより外に。おのづから求めすくなきは自然と聖賢の似世物なるべし。立よりて上總への道筋を次而に。是なる屋敷はいかなる古き跡なると問ば。語りぬ。昔時此所に高塚沖之進とて代々爰を領じたまひ御家の繁昌に時を得て。隣國の太守の娘を嫁りけるに此奥。ある夕より氣色例ならず床に起臥なやみて。今際の時御念仏を進て。久しく垢つきたる蒲團を取かゆるに。お乳姥御枕の下より物かける杉原一枚取出すとあきれし良して。其儘懐に押入側に行てよく／＼見れば。廿二才の女の姿を書て四十四の骨／＼に明どもなく。針を立並。さもすさまじき調伏の形。身の毛よだちて怖しく。其着物の色下に黄むく白むくの衣紋。上には芥子鹿の子の少古びて。菊流しの模様染。帯の寄金良だち目元の上脇に痣のあるまであり／＼と書たるは。其儘奥さまのいきうつし。思へは此度の御煩ひはいかなるものゝしわざならん。扱も悲しきうき目見る事よ。おちいさき時より今まで撫育奉りて。御心



も人にすぐれさせ給ふに淺ましき此ありさま。穿鑿せては堪忍成がたしと。竊に沖之進に話ればそれは憎き仕かた糺明の仕様ありといふうちに。奥様の御氣色かはり給ひて。立さはぐうちに息引とらせられ。廿一才惜む人はかならず死するならひ。なげきて歸らす野辺の烟とはなしぬ。此事七日たつと詮議するにまつお寢所に相つめたるものならて。お枕下にはおかぬはつなれば。腰元のゑん。お梳のもん。かぶろ共は除て此兩人のうちなるべしと。竊に奥の一間に呼よせかやうの事よそよりするわざにあらず。きわまつて二人の中にまがひなし。子細はやく白狀せすんばあらゆる責にかけても。いわせねばおかぬがといへども元より此ものどもそのおぼえなければ。口を揃て是はもつたいなき御意を蒙る。身にさら／＼おぼえなければ。たとへいかやうの責に逢ととも。申べき事なし。つね／＼奥様の御心やはらかにまし／＼。こまかに御氣つかせられし御恩の報じがたなく。御はてあそばしてより。只今のかなしさこそ一かたならぬ。歸ておもひよらざる御あらためいかなる因果と。殿をながし殿を擧げて歸出すを。何程にちんじてもおのめを



其まき置べきか。とてもやはらか成うちには。いふまきしき氣色に見えたり。それ責よと下知をなし大裏の襦の衣に。襦袢に脚布ばかり。三日の間水をも飲ず。随分術なき責をたくみて是を思ひしれと。内股よりはしめて針をさしこみける此つらさ。見ぬ後の世の刃の山はなまなかな命のはやく消んものと涙にくれて。死する事は定業なるべきが。いかなる悪事をたくみて。此ごとく殺るゝと。たゞ人の心底に嘲られん事の口をしといへば。まだ責のかるくやあらんと。堀の深く湛し所に。足に石を絞り付て追込首はかり出させ置る。比は十二月廿二日殊更其近年穠成寒じやう。雪は降らずして竹の破るゝ音屋夜止す。あの山かげの瀧氷りて音絶るばかりなるに。二人は水の中に一日一夜は息の通ふ程念仏して。五日目の夕昏に兩人聲をあげ。科なき事に一命を取。主なればとて非道はたつまじ。此一念つるに思ひしらすへし。無念や口をしやと罰りながら其堀水の泡と消ぬ。此女の兄弟はあれど主命ちからなく。過ぬる月日沖之進今はめしつかひの下女あまた用なければ。皆御暇給はる内に物縫のゆたは。御病中より其身も煩ひ程經て里に歸りしが際つかはざるゝにつき着替共取に來り。私が手馴し大事の針が見へませぬ。お乳の人に穿義し給はれといへば。針程の物が何とせんさくがなる物ぞといふに。それは百五十里あなた京のみすや伊豫が。上磨。男なれば刀脇指と同じ私が針といふに。尤なり何にさして置たるそと問ば。それは隠れもない奥様の御煩。まへに下されたる。衣袋繪の雛形にしかも七本さしてといふに。お乳はつとおもひあたり彼咒咀たる繪を出して是かといへば。成程これ／＼と嬉ひて歸りき。扱は責殺せし女には科なかりし物をと。いひてかへらぬ非道其年たゞずお乳頓死をし。沖之進は其翌年怖しや氷の刃身を通すと叫死にして消。跡は散々に潰れて財宝春の雪のことく萌出る草原なれり。是を思へはたしかならざる事に人をうたかひ。鼻のさきなるは女の心より針を棒に取なせしわざ也。今に其屋敷残りて雨の夜そ月ふる月には化したる姿見ゆるよし。扱苦与樂の資糧にもと。法華經の提婆品讀て通りぬ



大盗人入相の鐘

山寺は物の不自由なる事こそおほけれ。錢有ながら豆腐菹賣も絶て。酢醬油にさへ事を欠のみ。爰に越後の國立山のほとりに。嶺梅庵とて常は人の通ひも稀くなる草の戸の明暮。吐雲といへる独法師よろづ冥風に紙衣の襟をも折らず。清貧をのづからの樂となして世塵を食らす。朝に一飯あれば夕には素湯啜るに新なく。ある時其麓の里より心ざしあるよしして。齋料調菜を送りて施を行ひたるその明の夕。隣國にあばれし夜盜六人此庵に押入て見るに人ひとりもなければ。此屋には主はなきかと評判する時。吐雲古き皮籠のうちより誰なるぞさがしや。あまり寒きに爰に風を防ぎて居るといへば。みなく是を聞て此過賄仕はしまりてから。寢道具ひとつなき貧家にはいりたることなし。せめて湯なりとも沸して飲べしと無興すれば。吐雲葛籠の中より湯より酒がそこくの棚の隅にあり。煖をしられたらばおれも一つ相伴すべしといふに。扱は氣の透りたるあるじと打甘ぎて。終夜仏事の残りを賞翫して。四方山の雑談になり此酒たゞ飲べきにあらず懺悔して後生にすべしと。上座の男より語りけるは。我そのかみは出羽の國秋田の城下に梅倉徳介とて氏系圖家中に肩を並るものなかりしに功なくして祿を不足におもひ。拾一年虚病を構へ一年に一度の礼にもあがらす。比は櫻咲山陰に女房子共伴ひ。京を心に慰み花見て歸る夕暮。乗物つらせて運びける所に。國の家老の歩行若黨五六人酒機嫌とは見へなから。此女まじりなる中に戯れかゝり無左法かずくなるを見かね。向に進む大男めを切倒せば。殘る五人抜合せたるをまた三人討て捨。此よし奉行所へ訴へしにまづは手柄と讃れ。自を仕まつりたり今の世には軍なし。これを武邊と自慢心なる所へ。家老中よりの使者として。只今登城すべしとの事。扱は褒美の仰付られか知行加増かと悦びて。城にあがれば遠騎兵庫外立出て此たびの手柄申はかりなし。扱殿に仰せ出さるゝは。教年の朝氣に似合ざる遊者。眞なくして。眞に此品に仰せらるるといひわたさるるに。か落て此面目なき忘れられず。それより鐵類の冴へも住て詞なく。かへつて過をかたるどの恥しさに。野にふし山に夢見て。命つれなきに鐵はたくはへず。むかしの義理外聞も入らず吟ひありくうちに。野迎のおくりの枕飯といふものをちよつと盗そめて。今はそれになりかたまりしと語りぬ。今老人は關東の學寮に十四才より師の坊の前をはしり出て托鉢に飯料を求て七年の勤學。所化あまたの中に秀たりと人もさたし。後にはいづれの本寺の和尚にかすはり給ふべしと。いはれける夕の窓の下に。意魂を書にうつして繰かへす夜はほのくんと。あかり窓にはりし反故をみれば。かすかに假名象のはづれ其水壺のながれに消る思ひ。命とる程にかきつゞりたるは。なれし中くのちきり誓ひしてかはらしと見へしは。禰宜町にかくれなき玉川の何某と。其末は消なから是に心うかれそめ。何とやらおもしろき其ゆかりのしたはれ。假初に通ひ馴。度かさなるに色には染やすく。花紫の一もとに學象こゝろにのらず。資縁の少なるに書物買ずこれに打入隣の僧の七條かりて二度かへさず代なして首尾を調べ。生れ付如在なくて大管者といはれ法中に。嘲れ學寮にイテならず。終帷子一卷にふきあげての上。悪名ばつとたち追放せられ。こゝへもよせられず。彼地も塞り。漸法券の僧の寺持るをさいわみに尋ね行無理に躍り込詞堂銀を放して夜脱して。次第に功つもり今はかくの如くなり下りぬ。又老人は伊賀の國久村の右衛門太郎とて。田島五町作徳大分なりしも。皆濟時には横に寝て幾度か水籠に打こまれ。未進首だけにもおどろかす。此誑惑天に通じけん一歳の洪水に榮の秋を頼みし五月の末に。ありたけの早苗田をひとつも残らず。流され。其荒田買手さへなく難穀すこし山島に作り置たるもまた早に。青葉多枯のとくにしなされけるにも人夫雇ふべき力もなく。よそには水を取つて耕作。忽生かへりぬる羨。此時分別の仕はしめに我ものいらすにたゞ取事を思ひつけ。隣の島に水一はい湛しを。夜のうちに曝を切落しおのれと崩しやうに拵置ば人の干瀉となしぬ。是よりよき工夫出来たりと。此類の事幾つかつもれば人みな氣をつけて。所を追はられて此躰なりと。今老人は飛彈の國草鹿大明神の神主。八卦はひとつもしらねと一生人の身の上

るに。か落て此面目なき忘れられず。それより鐵類の冴へも住て詞なく。かへつて過をかたるどの恥しさに。野にふし山に夢見て。命つれなきに鐵はたくはへず。むかしの義理外聞も入らず吟ひありくうちに。野迎のおくりの枕飯といふものをちよつと盗そめて。今はそれになりかたまりしと語りぬ。今老人は關東の學寮に十四才より師の坊の前をはしり出て托鉢に飯料を求て七年の勤學。所化あまたの中に秀たりと人もさたし。後にはいづれの本寺の和尚にかすはり給ふべしと。いはれける夕の窓の下に。意魂を書にうつして繰かへす夜はほのくんと。あかり窓にはりし反故をみれば。かすかに假名象のはづれ其水壺のながれに消る思ひ。命とる程にかきつゞりたるは。なれし中くのちきり誓ひしてかはらしと見へしは。禰宜町にかくれなき玉川の何某と。其末は消なから是に心うかれそめ。何とやらおもしろき其ゆかりのしたはれ。假初に通ひ馴。度かさなるに色には染やすく。花紫の一もとに學象こゝろにのらず。資縁の少なるに書物買ずこれに打入隣の僧の七條かりて二度かへさず代なして首尾を調べ。生れ付如在なくて大管者といはれ法中に。嘲れ學寮にイテならず。終帷子一卷にふきあげての上。悪名ばつとたち追放せられ。こゝへもよせられず。彼地も塞り。漸法券の僧の寺持るをさいわみに尋ね行無理に躍り込詞堂銀を放して夜脱して。次第に功つもり今はかくの如くなり下りぬ。又老人は伊賀の國久村の右衛門太郎とて。田島五町作徳大分なりしも。皆濟時には横に寝て幾度か水籠に打こまれ。未進首だけにもおどろかす。此誑惑天に通じけん一歳の洪水に榮の秋を頼みし五月の末に。ありたけの早苗田をひとつも残らず。流され。其荒田買手さへなく難穀すこし山島に作り置たるもまた早に。青葉多枯のとくにしなされけるにも人夫雇ふべき力もなく。よそには水を取つて耕作。忽生かへりぬる羨。此時分別の仕はしめに我ものいらすにたゞ取事を思ひつけ。隣の島に水一はい湛しを。夜のうちに曝を切落しおのれと崩しやうに拵置ば人の干瀉となしぬ。是よりよき工夫出来たりと。此類の事幾つかつもれば人みな氣をつけて。所を追はられて此躰なりと。今老人は飛彈の國草鹿大明神の神主。八卦はひとつもしらねと一生人の身の上



の善悪よい加減に嘘をつき相神主の與五大夫が目くらまして散鏡をみなこちへしてやり。むかしより二間の社家なりしをなんなく一間をつぶして。我独に司どりし心より横道かづつもれば庄屋が利発に理を賣られ。丸裸にて所を追出されたるなれの果。今烏帽子といふ名字は此因縁なり。我はまた大坂の大湊にかくれなき木屋小八兵衛問屋の第一なりしにかけ木の千斤の權をためし革に取かへ。此重みのちがひ救大分の事なれば。利徳存の外に取こみ。俄長者となりしも。一旦の依怙は終に天道の罰を蒙り。二年のうちに入しれずめたくとなりて。塵も残らず手をうちあらひ。家屋敷鼻紙袋まで遣て。まだ不足銀を貫三百九十七匁五分貳リン扱にしても聞ず。命ばかり我物にして其夜に近江の従弟を頼みに行は。はや死し跡なるをねだりかゝつてわづか貳三拾目ねち取。これより此道おもひ付て是程に執行したりといへば。某は京三条通の西。白銀屋彦九良とて上手の名を得たりしに。烏丸大隅屋道關老其身は隠居しなから自然の時の金子を兩。枕宮に仕込其外家督も孫の太郎吉とらるゝ管なる時。此太郎吉かりそめに。ひよつと鶴原へ通ひ。若げ跡向しらずつかひ出し。彼枕宮をねらはれしかども鏡をあくる事叶はざるを。我に談合ありしによつて心もとなかりしより。生うけせしに即座に巻歩十を手つけとて給はるこれ我にまかせ給へと其寸法大かた合点仕りたりと。七つ八つ輪をうちてやれば其うちに丁どあひたるがかりて。其後はあひ輪打やと看板を出しけるにあらゆる夜盗とも忍びくりに頼にくるに直段聞までもなく巻歩づゝにきわめ。程なく金子たまりて家をも買べきと思ひし時。つかまへられし盗賊ありて。相輪の打手穿鑿にさゝれ。雜識共つけ届けするうちに。裏の路次よりぬけてまよひ初て是と。大笑になりて此物がたりも亭主の心にほだされて心やすく仕る。是はお徳燈と銀包でさし出せば。吐雲腹立して盗人のもの仏はうち給はずとつきかへせば。なを殊勝がりて巾着の底はらひて。みな鏡管に無理にをしこみて歸りぬ。今もかゝる無欲の道心者あるものかまどに心は善悪二つの入物ぞかし

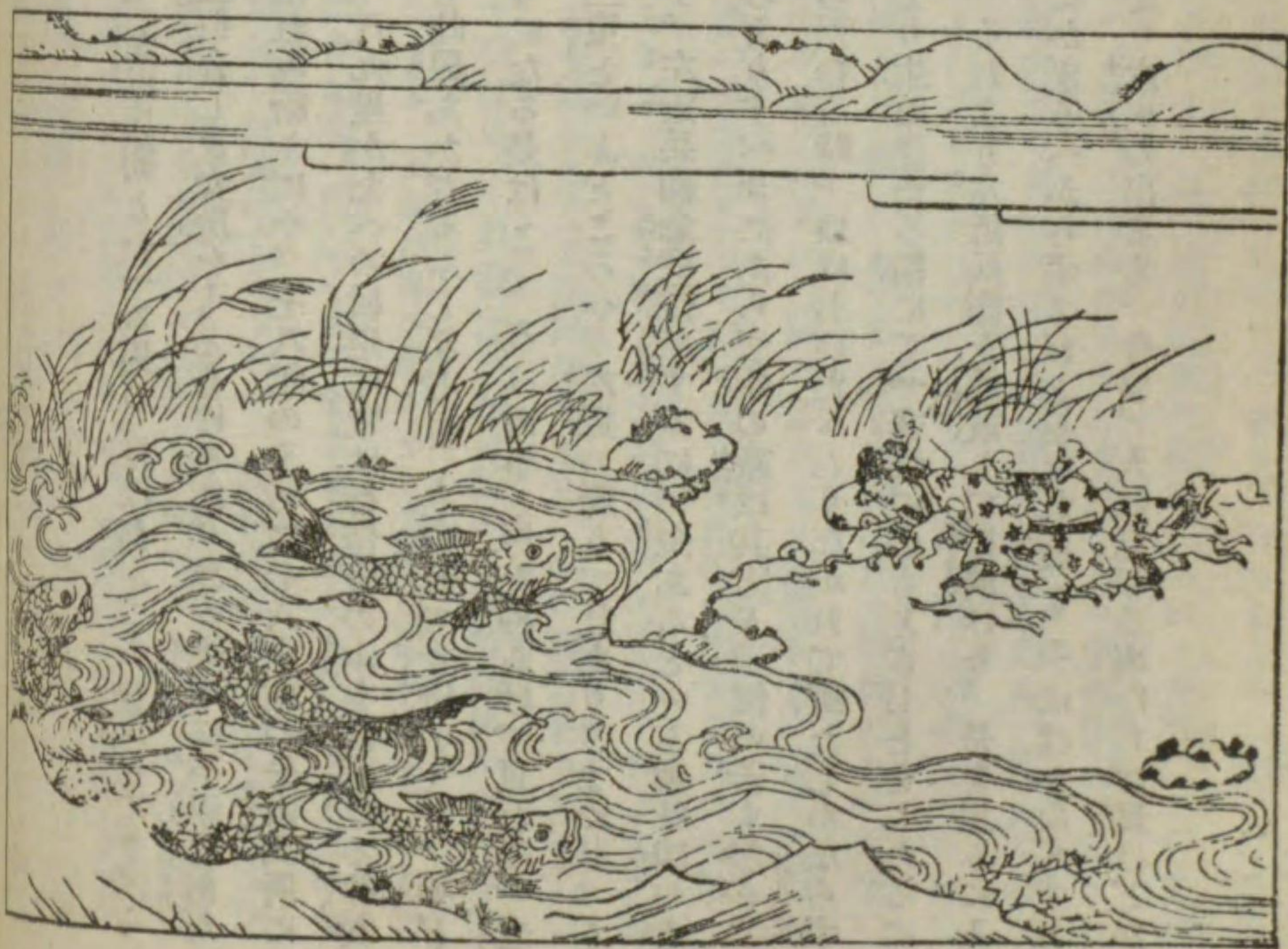
憂目を見する竹の世の中

うき世の月を見果ぬる岩見の國。人丸塚の邊にちかき在所に。左近兵衛といへる男の。軒は蔦かづらの茂みにまばらの恥をかくし。朝げのけふりたへくなるにも。破鍋にとぢ蓋似合しき女房をもとめけるに。独の老母に不孝にあたる。離別しむづから昼夜孝をつくしぬ。天よりこれをあはれみ給ふにや。七八年のうちに七八十兩の分限其所にはめづらし。比は五月のなかば枕蚊屋濫團手細工などこしらへ。八九里かたへの村里に賣に行留守の中をば隣なる律義男を頼み。今宵は歸るましといひて出。其あけの日になりても此扉あかざるふしぎとをとづれて老母くんと。呼ども返事なく扱もよくね入給ふと其まゝをけば。はや七つさがりになる是はこゝろへぬ事と戸を押あけて見れば。老母朱になつて其あたりは血ながれて息もはやたへたり。南無三寶といふところへ。左近の歸りて此ありさまに肝つふして思案に落さる事。誰か意趣をふくみて殺べきともおぼへず。左近兵衛急度推量するに。金あるといふ事此隣のものしるゆへ。母をころして取べき分別とおもひさだめ。此事外よりすべきにあらず親の敵は其方と。何の苦もなく。打殺し此段々名主にとわり。代官穿鑿して検師きたりてあらたむる時。血はおひたしくながれて疵たしかならずと改れは。其後に大敷ありしが折からの根ざし。寢間の下より生ぬきたる精にて。老母の心もとさしとをしたるにてぞありける。扱は彼男をゆへなく打殺しぬる科のがれすと。それより左近兵衛を成敗して相濟けり。是を思ふにみ届けさる事はいふまじきなり。世にふしきなる事は此たぐひにかざるへからずされと見なれぬものにはかならずおとろくならひ。鳥の空を飛。蛇は足なくてよく行。一つの玉より水火の出るも。今まで人の見ざる事ならば幾ほどかうたがふへし。算人の命を取といふ事もはやめつらしからず



文字すわる松江の鱈

神無月の朔日の日出雲の國八重垣の宮居にまふてけるに。海辺浪高く松にあらしひびきて殊更に神さび。社僧神主の外。民家の門を閉て。むかしよりの教を守りよるづの鳴をしづめける。まことに日本の諸神此大社にあつまりたまひて。男女の縁をむすび給ふといへり。其二柱を立出かたべなる杉むらの茂き一里に入しに。四阿屋づくりの藥齋の庵に。八十餘才の法師眞言律をおこなひすまし。寂殊勝に住なされけるに。おのづからの生垣を破り。あるひは片板戸押たをして。南面の縁側西の鞆。人みな立こそり物見るけしき。いかなる事ならんと我も其人なみに立のぞけば。いまだ髭ふさきてまのなき女のうば玉の黒髪をみづから鉄にして散行柳のけうとく。あたら花の春をまたずや。こはいかなる事とたづねしに上罷りんとつくりたる男のかたりけるは。此里のかたはらに捨捨老。丸之介といへる穿人ありしに。所作すべきわざなくたくはへしものみなになし。人しれぬ薬を賣しに。家中の端半女のいたつらに低めるをおろす名譽を得。もとてわづかなるに



聖代に金銀おほく取て。渡世とするうちに一人の娘をもふけぬ。成人するにしたがひ器量人にすぐれ。十四才の時。似合敷所ありて祝言ことすみける其翌日暇の状をもつて歸りぬ。また其秋幸の取むすびありて千秋樂とうたひ。嶋臺の松に千代かけて。盃の浪は越ともといはひたるも。其夜の明るをまちかねて里にをくられけり。漸四五年のうちに五所さられて歸るは。いまだ縁のきたらざるものと悔し明の春は疫病はやり丸之助夫婦相はてしより。此娘は姨なるもとに二とせ暮す時。隣りに身躰よろしき好色男に。若右衛門といへるが一め見て美形にうちこみもらいかけしに。今の世はいつわりにてはたはず。さい／＼嫁入し事ありやうにかたるに。たとへ千所へ行たりとて。それにはすこしもかまわすと執心ふか／＼りしうへに。相性八卦残るところなく吟味して。逢たり叶たりと悦びてつかはし祝言目出度とりおこなひ。相手はかほる新枕其身には夢にもしらざるところに。いづくともなく此女の前後より。胞衣かふりたる赤子救百人惣身にひしと取つき。水泳くまわして立ならびたるを見るより。身の毛よだち申／＼傍によるまでもなく。日ごろの戀たちまちさめて夢もむすはず。紙の一間によすがら所作くりて何こゝろなく氣縮まり此男これより其所にかくれなき後生ねがひになりぬ。今おもひあたればたび／＼さられしも。此ありさまを見られたるにぞありぬらん。扱其明の朝姨のかたへおくらせける。是はいかなる因果もはや縁のみちはおもひ絶たりとかなしみ自身におぼへなく。人のおもはくあまりのこゝろうさに病となり。物狂しくされど此事をわすれず大社御神前にて。其所謂を告しらしめ給へと祈りけるに。夢の中に語らせ給ふは。汝が親のなせる罪の酬きての寢姿のありさまをくはしく教給ふに。ありかたく。発心して跡吊ふべしと。歸るさの松江を通れば怪魚あがりたりとて人たちあまたなるを見れば。鱈に文字すわりたり。丸之内に捨捨と。さては親の靈にまがひなし淺ましと。流灌頂を執行いよ／＼後世のいとなみして彼これの菩提を祈らんと。此老僧に頼みて剃髮するにて侍るとかたりけるを聞にあわれましぬ



人眞似は猿の行水

心猿飛んで五欲の枝にうつり。風は無常を告る鐘が崎筑前の國の浦里を過て。はるかなる山ぞひの野をかけて行に。煙は愁の種なる三昧を見しにおほくは少年の塚。其中にあたらしき塔婆を削りなして折ふしの花菊を手折。前なる竹の筒に水をむすび。子細ありげに竹垣のありさま。是なん猿塚とするせり。いかさま様子あるべき事とそれなる一つ庵に立よりたつねけるに。隱坊此事をかたりけるに。當國太宰府の町に白坂徳左衛門とて沙汰ある分限。殊更息女お蘭美形またならびなく。今年十に六つ七つあまり。名は國にかうばしく見ぬ戀にしづみぬ。こゝに隣町葉森次郎右衛門とて。色好みなる男深く是に惱み。いつぞの比より人しれぬちぎり。人目の関もかよひなれてはとがめぬ方もあるぞかし。されともたかひの親たるものはおもひがけなく。最早年のさかり縁づきおそき事を氣の毒がる折ふし。出入の男を頼みてとこしなへの祝言をむすべしと肝煎せける。殊にこなたは酒屋あなたは質屋さいわいの事ねかふてもまたなしと。仲人口をもつて手にとるやうにすゝめたるに。徳左衛門合点しながら宗旨をとへば次郎右衛門法華宗にあらず。それなればいかほど金銀ありても男ぶりにもかまわずならぬといひきること笑止なれ。此よし次郎右衛門にかたれば世の中とはうらはらにおれが宗旨をかゆるばかりと俄に妙法寺をたのみて總の永き珠救に持かへて。是を又徳左衛門が方へ彼男つかはして次郎右衛門殿今朝御經頂かれ改宗なされたといへば。徳左衛門いや／＼根ぬきの法華てなければ信心うすし。はや此方にこゝろあてありて約束して置たりと。手みじかくいひたるを。次郎右衛門に傳へけるに臍を潰し。扱は我かおもひはむなしうなりけるよ此事お蘭にしらせての相談かと。ぬ／＼とかき詢きやれば。露もしらざいかなる所へかやられてうきおもひをすへし。中／＼君ならてはと誓ひし妹背を。親の合点なければとてなるましきものにあらす。もし願へまいる事たしかにさだまりなば此方よりさう致し申さんと。返事したるあけ

の日徳左衛門前に呼て木町紙屋彦作方へ縁邊きわめしと。いひつけられしに胸せまりけれども。さすが色には出さず何となくうけて急ぎ部屋に立入。ない／＼の首尾にわかにとゝのひ申よし。しからばこよひのうちいづかたへも忍び出たき。おもひのかす／＼かきてひそかにおくりければ。次郎右衛門此支度して裏門に待あはせて。夜半につれだち出夜の中に七里あゆみ。あけの八つ時分に此里にゆかりうすきをたのみ。才覺の路金にて小さき庵を結び。つらきうき住居の中は古里忍ひ出し時。此娘日比かはゆかりし猿ありけるか。夜の事なりしに跡よりしたひ來るを。道一里あまり過て見付。扱も畜生ながら此心いれ不便さに伴ひきたり。ありしにかはる賤の手業は戀よりおこりて此日かげに身をぢめ。様をやつし次郎右衛門はたばこを刻めば。お蘭は木綿の柳といふものをくりて。渡世とするも二人かく和理なきかたらひと思へばこそ一日もくらさるれ。淺ましきありさま此猿も過し時寵愛せられしも忘れ。氣の毒なる顔してそれ／＼にあたりちかき山に行て。新なと柏枯枝松の落葉掻あつめてきたり。茶の下をもやし二人に給仕する躰おかしき中にもしほらしく。夜は痲痺所を打捻さすり。朝夕の貧しき躰此女やつれし姿をつく／＼ながめて涙ながし。さなからむかしをしのぶおもひいれ。目見え物こそいはね人に同じく氣をかねたるぞ。やさしく。せめて是をおり／＼のなぐさみにうきを忘れて經し年も暮て。あけの秋一人の男子を設け名を菊之助と呼て秘藏是にかゆるものなしと寵愛するにつけても。むかしのくらしの程思ひくらべ果報なき子の行末まであわれに不便ふかくそだてぬ。ある時此子を寢させ置て。ひなびたる所のならひに朝くらきうちより茶わかしたるに呼て。四方山の物語のうちいつもの事を思ひ出けん。此猿留守の中に湯をわかし湯玉のたつを見て。鹽に丁ど一はいとり。何の加減見るまでもなく。此子を丸裸になし内義の取さばきよくみおぼえし通に。湯の中へ入ると喚といふ聲ばかりに息絶ぬ。これにおどろき夫婦はしり戻り取あげてみれば。はや熱海老のごとく皮もつどかず。二目とも見ず扱もしなしたり我身にかはらば今一たび。倅をまみへたしと。聲をあげてなげくもとほり。次郎右衛門もあきれはていかに畜生なればとてあまり



なる事共よし。因果の生れあはせとあきらめながら涙はとまらず。内義猿をとらへ。とかく汝は我子の敵今打殺すと。木刀振あげしを次郎右衛門とめて。尤とはいひなからもはやかへらぬ事に殺生するもかへつて菊之介が菩提のためあし。奉公とおもひてしたるべけれどもさすがち多なきは詮かたなしといへば。猿涙ながして手を合せけるもまたむごくおぼへて。まづは野辺のけふりとなしぬ。其後此猿七日に墓所へ参り。折くの草花山に入て櫛手折てこゝにさし。一日に三たびづまうて涙をながし。百日にあたる朝水こゝろしづかに手向。竹の幹にてみづから咽ぶえ突とをして果ぬ。是を見て夫婦子に放しあとにはせめて此ものなぐさみぬるに。それさへこのありさまぞめいわくにおもひ込しこゝろ根を感じ。右の墓の隣に猿塚つきならべ。二人も發心をとげ。あの庵にたへず題目唱て法華讀誦の聲やまず跡吊らはれしとかたりぬ

見て歸る地獄極樂

僧佛を賣て世をわたる。四國の海の深きたくみをして淺き衆生をまよはす事あり。是みなこゝろの闇秋も末つかたに風絶て類船こゝによせ。泊りの磯といふ所に一夜をあかし。山は南に讃岐の國の浦氣色松も殊更に年経り一しほながめにつゞき是なる苦の屋に海士の子共のあつまり。今仏法の昼なるに仏檀をかざる三具足の鶴龜華足などをそこゝに抛やりて。草庵おのづからに荒し邪見の濱里見るにいたましく。かゝる狼藉はと塩木樵翁にたづね待るに。重荷を岩に打かけ肩毛の白ふしてながきををし撫。鉢切に諸手を助けて徘徊子細をかたりけるは。過し年此所に空樂坊として修業に功を積不思議さま振舞。たとへば金比良の獄三十餘丈の所を鳥よりかく飛。法談の詞に花ふり。聽聞衆の中の善人悪人を見どをしに。万の失物まで此僧に頼み。其外にも奇妙を見せければ。近郷の優婆夷群集してたつとみ。日にまして數百はじめは藤竹四本の杖なるも後にはおのづから結縛に美を盡して。此一庵を建立し今年

の春より。先達而六月十五日の日中に往生すべしといひ觸し。前かどより其用意に臨終壇をかざらせ三ヶ國にふれさせ。月日ははやくながれて程なく水無月中旬になる時。近國よりあつまる人救万人におよひければ四丁四方に野埒をいはせて。かねて其儀式をかさり十五日の朝襲束を改めて床に座すると西の方にむかひ低頭合掌して心よく終りを執り。遺言として椅子に載せ是を拜ませ三日のうちは結縁のためにと勿寐なくもそのかみ。冥山の釈迦入滅にとならず群集して。散錢山のごとし扱十八日の朝弟子なるもの諸人にむかひつね。空樂申されしは。遷化したりともあたゝまらあるうちは茶毘すべからすといはれし。ふしぎなる事は今にあたゝまりさめすといへば。もし万一蘇生給は、何かあらん。かくありかたき御僧のまた世に出給ふとおぼへすといふ時。息出てそめて夢の灸たるこゝちなりと。眼をひらき扱も我度地獄極樂を見てきたりしに。日比各々に教化したる通り後生のねがひやうにて入寒入熱のくるしみに落んとも。金銀の眞砂の樂みなる所へ行べきとも。望み次第見せらるゝものならば。うたがひおほきものをつれだちてみすべきに。かまへていつれもたしなみ給へ。其證據は閻魔大王より御板をたまわりし。是見たまへと背中を脱ば。七の椎に王といふ文字の下に大きな判すわりたるをみなく拜みて。今まで未來のあるかなきかとうたかひをなせしものも是に我をおりて信心を起しぬ。此事國中にかくれなく夥敷かりしを國の守より御たづねあり。此僧をめされ末代におよびて此類の事あるべき事にあらず。其閻魔の判あらたむへじと裸になして見れば黒く熱こみたるやうにありくゝとあり。洗ども落ず是は合点往ずとかく一責せめて見よとありしに。水をくれてもおちす鉄鉤にかくる時もはや何をかくし申べし。此命ありての事あとかたもなき作り事なり。餘資に生れつき錢のほしきあまりにかくいつわりをたくみたりといふしからは其王の判はいかなる事そといへば三年以前背中をほらせ入炭いたさせたり。さて高き所より飛たるはいかにとたつねけるに。是も二年のうちたかき所からさいく飛つけ。練磨の功にて下へは飛とも上へはならずと。ありのまゝにかたるを其まゝ成敗にもすへきをそれさへ出家といへる徳にて。うつろにつくりて絞



りながら乗せ。行衛白浪のさだめなきうき世にかゝる事もあるぞかし。今はいひ出す人もなく残る物はあの庵に立像の弥陀如来もこれに信心をうしなひ。誰參下向の者もなくけうとき破窓に月のよなくかよふのみにして風の音もすごく。屋は童子のあそび所となりぬ。まことに仏法の瑕瑾なりとかたりぬ。

佛の似せ男

西の海嶮が原にあらはれ出し似せ男ありける。旅の夕ぐれをいそぎ。日向の國橋の里といふ所に一夜をあかし。折ふしほとよきすの田舎ごゑさへめつらしく。浮世の事どもかたらせて聞に。いまだ此程の事とて宿のあるじのよばに子細を籠てはなしけるは。是より一里ばかりみなみに落水村といへる所に。榎森與大夫とて庄屋につゞきて。田畠の高をつくりて有徳なる百姓あり。よろづの事かしこく天命をかんがへ。下人とおなじく耕作をばげみぬ。ある時岡山に行て下刈をさせて。下人下女まで眞柴いたゞきつれて。歸るさのあとに独残りけるが。其合におそびても宿へもどらざりしに。おのゝ驚きそこにたづね行しに。形は見えずなりて梢の烏啼あらそひ。是にとふべきたよりもなくて。みなく不思議をたてしに。小笹のかたかげ道なきかたの末に。茶小紋の羽織あらく爪やぶりにて是のみ残りぬ。いづれもなげく中に女とさらに身をもたへ。諸神を祈りそれより廿日にあまり。國中の深山海邊をさがしけれども何のしるべもなかりき。是非なき愁のかた手に三才の一子をそだて。かひくしく其跡をたてける。里女にはすぐれてうつくしければ。所のわかきもの此後家をしのぶにすこしも取みだす事なく。年月を累ね程なく九とせの過るは夢なり。其また村つゞきに溝越傳介といへる小百姓。四五年の不作にあひ日比かくまへのあしく。妻子もそれ／＼に見はなち。おのづからの袖乞となりてさまよひありくうち。安藝の國宮の市にまぎれ。千疊敷といふ堂に丸ねせしに。あわれはおなじ袖枕のほとりに。聲まぎ／＼と古里をおもはれける。橋村の與大夫に聞ければ。あけほのをましかね彼がおもかげを見るに。年はふれとも形はたがはず自然の涙こぼれ。何と與大夫たがひに此あり様はいかなる因果ぞとすがり付てなげくに。此男けんによもなき良して我名は與大夫とはいわず。いかなる事に尋ね給ふぞ。我生國は大隅風の森のほとり櫻村といへる所の者なるが。一門ちり／＼の身となり。名は小平太とこそ申侍れと身の上委



細にかたりぬ。聞ても不審はれがたし。世に似たものこそあれ年の程良かたち。左のかたの首筋に打疵のあとまで。與太夫といへる人のおもかげと。横手を打て世界はひろし。是程似たる事はと申しけるにそ。小平太興をさまし。其與太夫といへる人はいかなる事と問ける。傳介かなしき中の永物がたりせしは。抑與太夫といふ人日向國たばな村の老百姓。親類の事ども妻子のなげき。九年あとにくれてんに見へざる事。つどくにはなしけるうちに。小平太横道ものにて。我その與太夫に形の似たるこそさいわ。其里に行て其女房をたぶらかし。世を樂くと渡るべき悪心出來。なを傳介に様子を聞とどけ。爰をわかれて日向の國ちかく分入。わざとつつけを面につくり。狗品につかまれしものと折く詞のすゑに申せば。いつとなく是をさたして與太夫こそ其そこに天狗がおとして世に命はありけるぞと。いふ程なく女はつたへきよて。あるにあられず尋行あい見しより前後を忘じ涙に暮て。むかしの與太夫に思ひこみて我里の屋にいざなひて歸り。ふたゝび逢事のうれしさと。あたりの在所より從弟の末まで密にあつまりて。祝の長舞酒事あり。扱も年月の難儀にや扱れ給



ふ事よと。悦油をながしてみなく歸れば。女房こしかたのうき思ひを語り。忘れがたみとおもひてそだてし與太郎もはや十一才。此成人見給へとうつりかはりし。四方山の物がたりに夜ふけてめつらしき添寝のまくらをかはし。きのふけふとたつは程なく。二としめの春與太郎が弟も出來て。なをく落つきけるに其夏殊さらの早にて。天下の百姓雨を乞龍神をおどろかし。様とおこなひありしかども其しるしなく。青田の早苗はさながらの枯柴のごとくなりし時。此橋村の御社かたじけなくも住吉大明神の御本所にてわたらせたまふ。既に十一ヶ年跡の干魃にも當社を祈り奉るに。たちまち其利生あつて万民を潤せり。其時の願書も與太夫書る吉例なれば。此度も幸堅固にて居るこそ吉左右。書せらるへしと呼出に。小平太元より無筆にて。此時目のさやははづれし男ありて是に氣をつけて。與太夫にあらぬ事を見出しけれども。女房合点せず。物書たまわぬは天狗につかまれて氣のぬけたるゆへと。そのけぶりいふものあればかへつて腹をたてて泣かなしむを。影にて笑らひて面々の好くとそのなりけりになりてかまふものなく。今にかたり傳へり。世にはかゝる事もあり

明て悔しき養子が銀宮

世になき物は郷の刀と化物と人の内證に金銀ぞかし。いづくはあれと江州の大津は。山市晴嵐渡海歸帆此津の繁昌馬借際なく。逢坂の車旅人袖をつらね。これや此関戸さぬ御代のためしなり。爰に篠原屋の勘吉とて北國の商をして一たびは家さかへけるが。いつとなく身躰うすくなりて。世間向はむかしにかはらず随分氣がさに取まわしけれども。おのづから不自由さあらわれかゝれば。日比の律義にかわり。人はかならず貧より無分別をたくみぬ。勘吉ひとりの娘十六になりて形も大かたに生れつきぬ。母親は過にし春の末世をはよふして。其後は寡そだちによろづの賤しげに。または徒にもなりぬべき事をなげくうちに。旁よりいひ入れどかつて其談合にのらず。我うちへ似あひの養子をねがひ



ぬ。見え渡りたる所は棟たかふして庭ひろく住なせしが。世上おもひの外銭が尠なき世とはなりぬ。入聲の敷銀にて此家を継すべき事をたくみ。拾貫目入十箱中にはわけもなき物を仕込此宝瓦石におとれり。いかなる聲にてもあれ銀百貫目娘に相添。家屋敷ゆづりて此身は其日より發心の望みといへば。みな欲の世の中此家養子をのぞむ事救をしらす。其中に志賀の浦里にかくれなく松崎九助とて其一村の主筋めなる家として内證さびしく。表向の虚大名なまなか旦那様といはるうらめしく。いまだ極る妻女もなく渡世何をいとむべしと思案なかばに暮しぬ。是を肝煎を身過にする古手六次といふ男。勘吉が事を聞てよき勝負と心にかけしに。おもふまゝならざる方もなくかけまはる時。九介と前かたより近付なればさいわみにおもひて此段かたり。今三拾貫目さへ持てはいれば。家屋敷と常銀百貫目を美目形すぐれたる娘とを其まゝわたし。殊に聲入の夜より勘吉は発心の望みなれば。當分の見せ銀さへ三十貫目論へたまへば。此跡識は丸取个様なる結構な事はまた日本にふたつとなき事。殊にこなたの年比と能夫婦。それは打て付た事と仲人口に嘘をつきまぜてすゝむるに。九助も聞とはや心ときめき是は成ほど相談いたすべしと。伯父に長濱屋とて彦根の家手中びろくする商人。其日に志賀を出舟を借て急ぎ。六次がはなせし通を一かたれば。それはたのもしき身体相透あるかなきを聞合せ。しかと治定したる上ならば。當分の見せ銀は何時なりとも借出してつかはすべしと請合たるを悦び志賀に歸り。六次を呼にやりて見せ銀はいかほどにても借べきとの事といへば。扱は目出度此方にすこしもいつわりのなき事はわたくしのうけあひます。急ぎ銀を取らせ給へ。一日もはやいがよしともみたて。程なく日限さだめ聲入にきわまり。彼三十貫目をもたせ運ばせ。首尾残るところなく千秋樂うたひて祝言は相濟。勘吉は其夜より只今財宝わたすと。藏を開かせ有銀百貫目をたしかに見せていづちへか行ぬ。かねてより此覺悟さだめて諸國の靈仏を拜みめぐる修行よき仕廻とやらやむ人多し。扱九助は。商に取づくに。諸方の問屋共聞つけて何をかけても氣遣なし。まづ有銀が百三十貫目は目に見えた身財と。方より米穀柴炭なり共計大幣に。たのまねども人が所期千貫目か

商もなる様仕かけたるに。九助おもひの外の仕事まづ見せ銀は濟へしと右の三十貫目をは幣の封もたがはず伯父がかたへひそかにすまし。いまだゆづりの百貫目には手もつけず。外よりきたるあきなひものにて利徳大分あがり。此比まで思ふやうにつかはぬ銀を沢山に遊女博奕にも瓦落とやり捨。五貫目三貫目の當座借銀の分は人も氣遣せず。みづからも水の泡ともおもはず。次第に懸所にはまりよからぬはづみの募出し上に。仰山商物かさみ舟九艘に積せ北國へ廻しけるに。例の比叡の山嵐に打返し以上三十二人の水主一人もたすからず。漸船頭片生になつて竹生嶋に打よせられぬ。此時諸方の賣物うけ込よるづ損銀四拾八貫三百九拾匁俄に是をたてねばならず。かさねての爲なれば成程きつと払ひて見せんと。藏をひらき彼百貫目の箱を五箱取出させ。封をきつて見るに是はいかな事銀にはあらず石瓦なり。九介工夫におちず一箱く明させけるに。四番目の筥のうちに一通の文あり。我はしめは身体人にまけずゆづり銀三百貫目ありしを。修學あしく次第にへりて只屋敷ひとつ残り。内證人にしられんも口おしく。さいわひの娘に此銀をいつわりて聲を望みぬ。夫婦は二世の契なればたゞ不便とおもわれ。此事人にしらせず持參の敷銀にて跡をたて給へ。近比はづかしけれとも世は張もの返すく頼むと書とどめたり。九介つくく思ひかへせは無念やらとはりやら。さためかねて女房に此事をかたれば。わたくしは少しもしらする事といふに。恨みて詮なき事ながら此百貫目をあてにこそよろつ大かゝりに仕ちらし。今さら人がゆるすべきにあらずと案じわづらふにはや大節季の程ちかく。損銀をせがみかけを乞。人のしりたる百貫目をさし置て。人に借べき手だてなく。安否爰にきわまりて師走廿八日。不埒なるに人も不審をたて。とてもイ予ならず節角聲に入彦年たぬに引合七拾貫目。今はむかしの在所はなつかしなから此顔では歸られずと分別しめて宿を出。高觀音の山下陰に行ば。独の非人ありしにとばをかけ。扱も其方は何として其なりになられたぞ。故里にて朝夕うわさにて行衛おぼつかなしといひくらすに。爰にて逢は觀音様の御利生。此寒きにいたはしやこれ着給へと。羽織を脱て着せ酒を振舞ての馳走に。此乞食自分におぼえはなけれど



も。是は過分とよい加減にあいさつしたるに。たわひなき程に酔せ。着物帶脇指頭巾まで遣ての上に。咽ぶえ突とを  
して自身は北國に立退ぬ跡にてこれを見付。やれ九介こそ自害したれと沙汰ありて其なりけりに濟ぬ。其後木め峠の  
茶屋して又此女房を呼しとなり

居合もだますに手なし

浪の音ひびきの灘を過播磨海室津に舟をよせて。こゝに一夜の磯まくら旅のくたびれを助る。橋風呂といへるに行  
て。入そむるよりいづくも同じ訛聲諸人のつきあひ。あるひは上り鼻うた芝居の狂言ばなし心くの中。此程の  
事とて此所の喧嘩のあらましかたる人ありて聞に。いかなる律義者も色町にては。おのづからうはきになつて鑑とが  
め詞論。人の山をなす思ひの海。こゝの傾城町の事とよ毎夜噪ぎ中間の男風流革枕夢藏高砂の久入釣鐘救右衛門閻魔  
の八左衛門彼是四人遊興は外になし。人を打擲して是を慰となして所のめいわくたひくなれど。人みな怖れてた  
てづくものなく。日を追て此組下八十四人悪にはかたむき安き世なり。ある時備前よりしのひて色遊びに通る男四五  
人。彼さはき中間に出合。すこしの事をいひ分にとりむすひ。たがひに爰はやめかたく抜合て打あひけるに。備前の  
者とも一命ををしますかたはしより踏倒し。或は手負または叩れて息絶る難儀の所へ。尾上八九郎といへる穿人かけ  
合せ。まづは所最眞真中に立入扱ひけるに。死人はなくて各々左右へ別れ。備前の人は是を仕合。さはき中間は危き  
命をのがれ。皆く宿へは歸らす。ひそかなる野寺に行て面疵痛所を養生しけるこそ身より出せしとかめなれ。  
漸健になりて彼穿人八九郎に一礼も申べき事を。かへつて悪をたくみ。年來我くか男風流此度の卑氣とる事の  
口をし。八九郎此まゝおかば世間へさたして生たる甲斐はなかりき。何とぞ手だてをまわし。討て捨んといひ出すよ  
り。各々同心して内談きわめけるに。中へ。勇力人に敵れ兵長殿して朝暮其身に油断せ

ざりき。いつその時節と見合すうちに。山は紅顔のさかり夕日とさらの折ふし。八九郎人をもつれず驚たとり行  
を。釣鐘の救右衛門つけ出し。俄に竹葉の一滴をとよのへ。跡より山ふかく分入て八九郎を是非に招き。おもしろ可  
笑酒になして。挨拶入かわり立かわり。前後わするはかりにもり流し。我しらす草まくらの所を各々鋒先そろへて  
さし殺し顔の皮をめくりて遙なる谷陰に捨て歸りける。其後柴人の見出し此沙汰つりて。諸人見まかれとも面損  
じて見知がたし。こゝに八九郎が妹お七といへる女いま十六成けるが。兄八九郎宿に歸らぬ事をふしぎに彼山に  
入て死人の俤を見しに。奥嶋の綿入に繻子の袖裏。我手にかけて仕立着せましたにうたがひなくこゝろは空にな  
りて死骸に取付んとせしが。外より見るを忍ひしばらく涙をおさへ。何となく私宅へ歸り母のなげきを思ひ此事をか  
たらず。其明の日早く身に薦をかけ破れし笠に貝をかくし袖乞の如くなりて。八九郎死駭より遠き松陰に打臥て。見  
物のありさまを見とがめけるに。みなくあわれとはかりいひ捨しばらくは見る人もなかりしに。血氣さかんの若者  
一日に三度まで見にまかりて是をなげかずわらはず。人立の所をはなれてとかく神ならぬ身なれば人間はだますに手  
なしとさゝやきて歸るを。とくと聞とめてけて跡より其宿に付込それより私宅に歸り母に此事をかたりて人しれず訴状  
をしたため。所の奉行職に言上申てなげき奉れば。彼者ともを俄に取へて穿鑿におよひけるに。證據たゞしからねば爰  
をあらそひぬ。されども傾城町の喧嘩世上にかくれなく。八九郎其時出合あつかひし事より吟味仕出して。獨くた  
づね給ふに。其たびく詞相透してあらはれかゝり。さまくの詮義に落て人を殺せしその科をのかれず。此中間残  
らす世の掟とはなりぬ。彼娘が事さすがは武士の家に生れ。女ながら智あり勇ありとて。歴々の郷侍是をもらいて  
一子に嫁合。母も一所に引とり孝を盡し侍る。哀や人の身の果八九郎生國は肥前嗟峨の者なりしが今播州の実相室津  
の土とはなりて塚のみ残り

織物屋の今中将姫



古代より袖を入す櫛の梢茂り。位山の氣色名にふれておもしろく。折ふしの涼しさ夏なき飛彈の山里に入て一夜をあかしけるに。賤の手業にはやさしく。上機の箴のをとまくらにひびきわたり。夢もむすはぬ旅宿のあるじ取ませせての物かたりの次でに。ふしぎなる事をこそ申侍れ。此里に岡村善太夫といふ夫婦四十餘才まで一子もなき事をなげき。尾州熱田の宮に宿願をかけしに祈るしものうし子。其程なく誕生して鄙には井なき形の娘なりき。次第に成長して五才より教ぬ道の讀書くからず七才にして詩哥をつらね。十一より所ならひの袖嶋いとなみけるにさのみ餘の女に手わさのちがふ事もなくありながら。人の三日に一端を織下すを半日に織てしかも勝れてうつくしく。是ゆへ此家富貴してとさら仏のみちうとからず。人皆申ならはして今中將姫といへり。此娘毎月朔日に八剱の宮へ參詣しけるに。國里隔しはるくを一日のうちに下向し侍る。此事うたかひて様子を尋ねけるに。尾張の事とも道すがらのありさま委細にかたりけるを其後聞合せ侍るにすこしもたがはず。いよく奇異のおもひをなしける。程なく十五才になりて都にもあるましき程の美形。爰の山家にこがれ嫁に望み入縁のねがひ若男どもの是をなづむ事かぎりなし。善太夫夫婦次第に家さかへければおのつから娘自慢して。世上を見合今に聲といふものをさだめず。彼は見合せ里つづきの長に菅垣伊兵衛といへる人よるつに不足なく。材木の商賣して世をわたりけるが。是に望まれ一子の伊之助に嫁合ける。時にふしぎは此むすめ最愛のこゝろ出しより。熱田へもふての通力も失り。機物の早業も常の女のごとくなりて形もいつとなく醜く山家そだちの風俗となれり。世にはかゝる希代もあるものと此事をかたりぬ

御代のさかりは江戸櫻

同じ櫻もよき所に咲て人に見らるゝこそ花も仕合なり。ある時むさしに行て淺草のほとりに一夜を明し。折から八十八夜の朝霧散の草鞋に踏分。上野の春に値りさなからよし野を爰に。花の都もおよばはさりし氣色。黒門向より末の

松陰まで唐織の慕、うたせ。袖黒ねの衣敷つくし鹿の子ならさる小棧もなく美をかざりての女酒もり。機音の色糸あるは一節切に吹たてられ。裾かへしの紅裏などほの見へ。かゝる法師の身さへ心うかゝとなりぬ。また糸櫻の影に散まへををしむ。少年のまじり衆道はこゝこそさかり。張つよく情ふかく是また見捨て歸る厭つてもなく。筆のはやし墨染櫻のもとに。玉むし色の縞子の廣袖を着て。厚鬢跡さがりに剃なし。金鐙の一差艶敷せて座して艶しき花は見すして。古文の上巻をひらき朱をもつて頭書己が宿にてもなるへき事を。無用の出過ものとはおもひながら。千差万別の人心。とさら天下の町人おもふまゝなる世に住るは有かたき時津風しつがに並木櫻の影に通町の中橋あたり何某。噪ぎ哥に四五人頭をふつての手拍子いづれか當世男ならさるはなし。酒も半の所へ十七八なる若衆空色の小袖に唐鹿の紋所黒縞子の袴股だち取て抓さしの大小浮世笠にて貞をかくし。羽織は小者にもたせ。彼小立聞せしか遠慮もなく其座に入て。眸に座して捨盃を取あげ。給仕せし小坊主につげとてさし出しければ。こぼるゝばかり盛かけ。各々うつくし過て興をさましにける。其座に伽羅屋の新吉といへる美男に。二世までおもわれたきとて。飲錢して手より手に渡しけるに。いづれも酔のまぎれに無分別に聲を立祝言のとはじめ。三國一とうたひける其後盃かすゝにめぐりても此若衆笠をとらず。さらに心うちとけす。暮かたまで歸りもやらす折く酔狂に見せて。新吉が膝枕して爰をかりの情と空齎せしとは思ひながら嬉しさ袖に餘りたはふれも今ぞと思ふ時。江戸に住透の付合獨くはつして残るものとは松の夕風。弁當取置親仁ばかりしかも耳うとく。首尾ならば此時になりぬ。彼若衆ほとりを見合せ。花よりさきに人の散事を悦び。ひだりの袂より金子三百兩つゝみしを取出し。新吉が膝の上に置く置けるは。すこしさもしきやうなれとも苦しからぬものなり其後耳ちかくさゝやきしは我親とても親類もなく。仇に朽ぬる花なれば行末までを頼むなり不便をかけて見捨給ふなど。貞にまをあらはし少なみだぐみしは戀といふたゝ中。其まゝ消たき程になりぬ。さまゝちかひして命をかぎりにと申かはせしは。前後のわきまへもなく愚な



る事ながら其身になりては道理にそありける。しばしのうちに打とけ忍ひ笠も脱こころの程をあらはしけるに。此人  
 まとは女小姓なり新吉にいまだ婦妻のなき内證を能しりてかくは仕かけ侍る。此面かけを思ひ合すにいつぞやさ  
 るお寺にて見しやうにおもふ程それなり。とかくはふしぎはれかたく我宿につれて子細をきくに。腹にわけありて産  
 月もちかき難義をおもはれ。長老様のをくられけると。思案して仲人なしの縁組是仕合のはしめ。近所へひろめて千  
 秋樂をうたはせける相生の松風なを千代かけて夫婦の中橋に住なして東の伽羅屋と其名を残しぬ

武道傳來記



武 道 傳 來 記

和朝兵揃の中に爲朝のくろかねの弓むさし坊か長刀朝比奈かちからこふかけ清か眼玉これらは見ぬ世の事中古武道の忠義諸國に高名の敵うち其はたらき聞傳て筆のはやし詞の山心のうみ靜に御松久かたの雲によろこひの舞鶴是を集ぬ

永鶴

壽松



武道傳來記 卷一

諸國敵討

目録

第一 心底を彈琵琶の海  
形も情も同じ美童の事

第二 毒藥は箱入の命  
人質は夢の内蔵の事

第三 嗚嗒といふ俄正月  
寂後はしれて女郎買の事

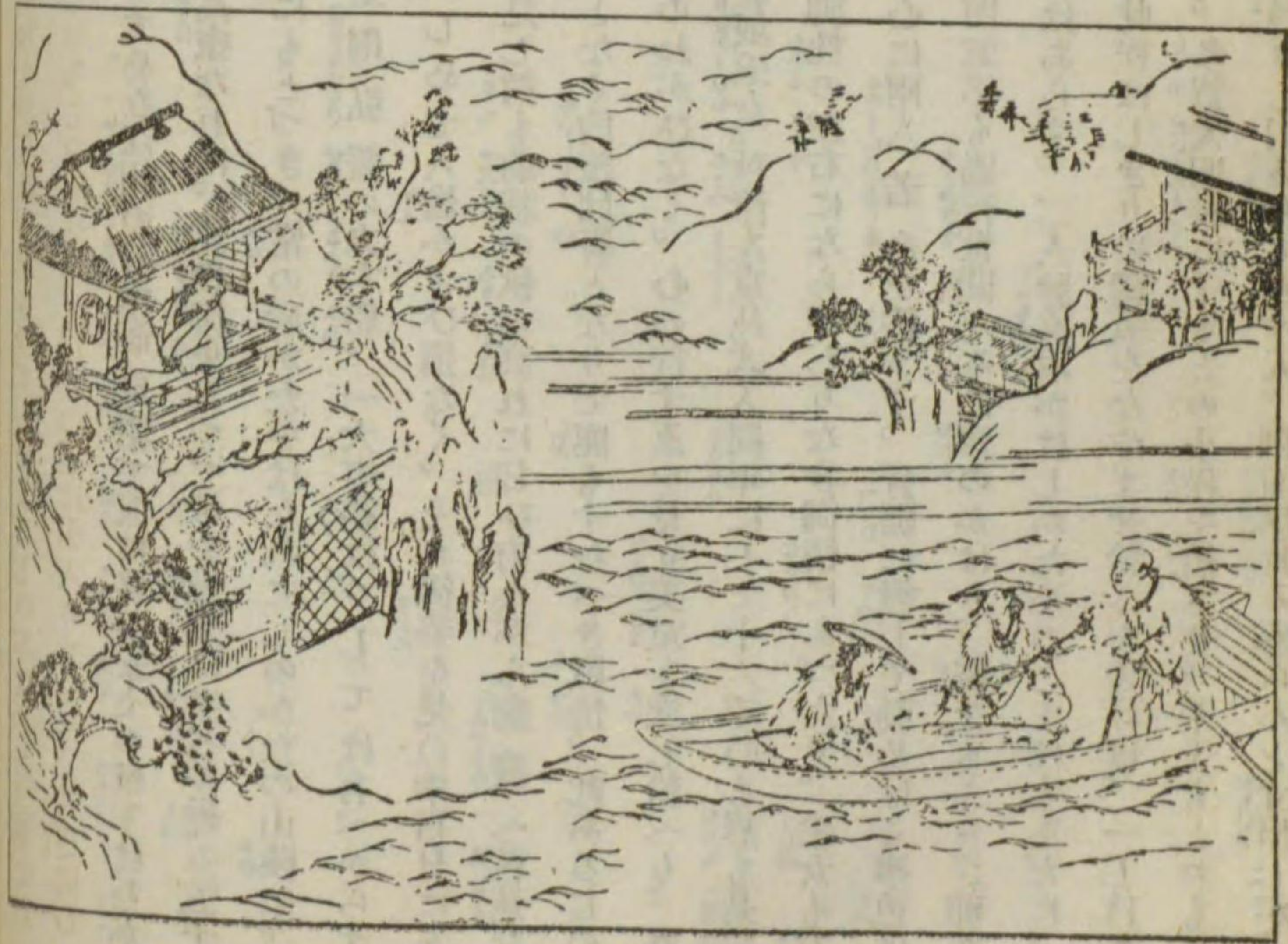
第四 内儀の利發は替た姿  
せはしき中に預け物の事

第一 心底を彈琵琶の海

武士は人の鑑山くもらぬ御代は久かたの秋の春。千鶴萬龜のすめる江州の時津海。風絶て浪に移ふ安土の城下はむかしになりぬ。其比平尾修理といへる人天武天皇の末裔にして高家なれば。諸役御免あつて世を遊樂に其名を埋み五十歳の時入道して眼夢と改め。其後は長劍馬上をやめて禪學にもとづき。常の屋かたをはなれにしかたの山陰に。小笹かり薺の庵むすべば。佛のえんに引れ。生死目前の湖。是則弘誓の丸木船。一大事踏はづしては有べからずと。觀念の南窓に。諸釈を集めて見臺氣を移し。板戸内よりしめて人倫かよひ道なく。それ御姿を見ぬ事百日にあまりてすゑくの者はを歎きぬ。かはらずして長屋淋しく花見し梢も前栽の秋の哀れに匂ひ有ながら蘭衰へ芭蕉なを夕風に形をうしなひ。門に人稀なれば鳥の聲つにつていつとなく内證は野となりて鹿もすむべき風情。此あるじの心ざし市中の山居是なるべし。兼て妻女もまたせ給はず子孫のねがひなく。心の行するを見立美童を愛し給へり。是もみだりに此道におぼれ給はず。筋目たゞしき浪人の子共に森坂采女。秋津左京此式人同年にして十六才心も形も是程かはらぬ生れつきはなし。朝暮御目どをりをはなれず。夜は御枕の左右にならびわりなき御情にあづかり。采女も左京もいやしからず互に衆道の義理を耻かはし。旦那一人の御心に兩人若命を惜まず。骨髓に徹して勤めける事色ばかりには非ず。武勇を元として前髪役の意氣地立すまし。今四五年も過行世間なみに形のかはり。脇をもふさぎ前かみ取なば。其節は又。自然の御用にも立ぬべき心底更に申にはあらず。二人神文取かはしかたのためことばもあだに。おもひのほかなる主人の御發心生ながらあはて別るべきか。此程はしきりに御氣をなやませ給ふをきけば。一しほかなしさまさり諸神諸佛を祈り石山寺の觀音經をどくじゆし。多賀大明神に千もとの小松を植させ。千よもとおもふかひなく次第に御こゝちいたませ給へば。今は仰せをそむき戸さし引破りてかけ入。御面影拜み奉らんと立出しが。



爰は又分別所さもあらば。結句頼みすくなき御心にやさはらん。何とぞ今生にて御拜顔すべき事をと。やう／＼に思案をめぐらし。うら人をまねきよせ棚なし小舟をかりもとめて。二人義笠に身を隠し其まゝ釣の翁になりて。琵琶琴ひきつれて汀つたひに御庵室のうしろにまはり。折ふし月の秋中の三日。浪の花のうちつゞき春は磯と詠め。旅鷹心あらば其聲にして此歎きつげよ掛浪の玉には濡ぬ四つの袖。糸の音しめに愁歎ふくみて。いと哀れにぞ聞えし。眼夢入道うたゝねの枕にひゞき。紙窓を明て。見渡し給ふに。人の心をつなきとめたる舟の中にして。いとなみいとま惜き身のそれにはやさしく。漁父かゝる者有明移る南江のおもしろやと。御心おのづからに進て此琴にあはせてうたはせ給へり。歌臺暖響春光融々。舞殿冷袖風雨凄々。春秋のしづかに世の替れる有様。覺る間もなき夢なりしはしも是に氣をうつして。江はよく舟をうかべ。又よく舟を覆すの道理。おこなひのさはりなり明鏡に像の跡なく。虚空の色にそまざるごとく。戸車の鳴るとき二人義笠をぬぎて。是殿さま采女左京があまりにかなしくぞんじ御音信を



申あぐるなり年月の御厚意をもやわすれはつへきか。御發心のおりからはなをもつてちかうめしつかはされ。朝に岩もる半を結びあげ夕にお茶湯のかよひをつかふまつり。むかしのみちをかへてぼだいの道に引入させ給へ。殊更御心も常ならずなやませ給へば。御命の程も定めがたし今生にして。名残の拜顔を御ゆるしあそばされ二人がおもひを暗させ給へ。いかなる御氣をそむきかほどまで。御悪しみの深き事運命につき果ける。是殿様／＼となげくにぞ。眼夢も取みださせ給ひしが。是もと色道のまよひなり。なんぞ此色に大願を破るべき事の道ならずと。なを心底すはり大かたの斷り聞分ては歸らじ。爰は方便の偽り諸天ゆるし給へと觀念して。おのれら爰に來れる者にあらず。年月我をそむき前後わきまへぬ非道。其救かさなつて須弥山にもあまされ。然れどもゆくすゑ此姿の願ひあれば。日比の情にそれをとがめず。まつたく對面正入幡も照覽あれ。七生までの勘當とあらけなく仰せければ二人立すくみてかさねてかへす言葉絶て。目と目見あはせ涙湯玉をつなぎ。覺えてあやまりはなき身にも御一言にさしあたり。子細をたづねたればとよもや分ては語らせ給はじ。後日に分別有べしと歸る浪のうちふして。夢心にて屋敷に入亭せんとする所取後なり。眼夢も次第によはり行せ給へば御死去も程はあらじ。願はくは見奉りて後心靜に御供申度物なれ共。兼て腹死の事仕るまじきと再三の仰せをかうふりければ。是もまた主命をそむくの道理。武士は命を捨る所をのがれては。其名をくだすなり。昔日御光嚴院文和元年二月三日に細川頼春の家來追腹はじめて今和朝の手本として。其ほまれ世に高し。只我々は先腹切て。死出の山路の案内せんとおもひ立日を定め。一方口の部屋に入内より戸さしを釘付にして。采女左京が取後銘々に腹二文字に引捨。其後さし向ひ劍を互につらぬき。只今といふ聲におどろきをの／＼板戸を破りかけ入てみれば。魂はや浮世を去て是非もなき面影。白小袖に紋なしの袴ゆたかに。なでおろしたる鬘もそゞけず。身をかため。二人ながら中眼にひらき笑へる良ばせつねにかはらず。書置の段々至極して此事眼夢に申あぐれば御せいごんもわすれさせ給ひ。やう／＼庵室をはなれさせ給ふに。御足立せ給はぬを人々肩にかけ屋かたに



うつしければ。此有さまに取みたさせ給ひ。勘當せしも汝等が命の程をおしみてさま／＼申せしもあだとなり。我に先立心底ざりとは武士の子なり。老足なれ共此道は追付べしと左京が脇指を取給ふを。皆々取つき世の聞えもいかゞなりと無理にとどめたてまつりしに。是より御心もつかされ給ひ三日も立ぬに御命かぎりとなり。彼是歎きかさなり。一子ももたせ給はねば。あたら平尾の家絶果ける。されば人程心のおそろしき物はなし。兩人が首尾後記にもとまるべき事なるに。同じ屋形に勤たる近習の侍に關屋爲右衛門といふ者武の本意をそむき。左京に執心の救通かよはせける。はじめの程は戀ぢを思ひやり。ひそかに道理を合点させ主命をむく事ぞんじもよらずと。もつてひらきて申聞せしに。又もや難義をいひかけけるに外にも聞人の座にて。爲右衛門一分立ぬ程に返事申されば。中／＼いきては堪忍ならぬ所を日比の大膽とは透ひ。おめ／＼と其通りに濟しけるが。其野心今に残り左京相果て跡形もなき悪名をさへづり。國中に此さたさせける事人倫にはあらず。此たび左京は命を惜み主人御恨みあれは暇をすて他國といふを采女引とどめ。申かはせし通り是非さし透へて二世の同道と。義理にせめられたい腹を切けると申なしぬ。左京草のかげにてもさぞ口惜かるべし。有時森坂采女が弟求馬といふ人の一座にて。爲右衛門左京事を又噂して若道にも各別の透ひありと其座なるに采女事を。言葉ある程つくしてほめければ。求馬よく／＼聞届け。是は爲右衛門殿には無用の御褒美。左京采女いづれかあひおとるべき心底にあらず。然も左京は采女にまされるの所ありて。すこしも人におくる、若衆にあらず。其上そなたにも傍輩の事今になつてよしなき流布せらるゝ事天命しらすなり。大勢の中にして露顯のうへなればかさねて申さぬとはいはせじ。此事左京弟左膳にしろせて正入幡も御じけんあれ。其身のがさじといへは。爲右衛門聞もあへず推参なりと立ちあがるを。求馬天理をもつてうつつ太刀はやく車に切はなち。靜に鞘におさめて。立出るを。いづれも廢妄して是をとどむる人なし。すぐに左膳宅に行て此あらましを語るうちに。爲右衛門一子次郎九郎素齋ひつさげ懸つけしに。左膳長所にてわたしあひぬ。求馬は髮髻取出し衣を脱ぎして。黒髮髻付てる

第二 毒藥は箱入の命

ながら見物をしける。跡より家來はしりつく時門をかため。むくろはおのればらにとらすべしといふ。此勢ひに下々あさましくにげかへりぬ。其跡にて左膳次郎九郎を切ふせ。とどめまでさしおほせ今ぞのき道と。二人一家をつれて成程いそがす丹波路に入る。古今の稀者はぞとかたりつたへし

むかしの人の家の紋橋山刑部とて。奥州福嶋にて出頭此ひとり殿の御心底我物にして。御機嫌よろしければ榮花の時をえて。武士の冥加にかなひ一家中此人に思ひ付事御威光ばかりにあらず。其身更に悪心なく智仁勇のかねそなはりし人。今年廿五にしてなを行末頼母子。妻女は一家老市川右衛門息女を。殿の御姨君妙松院の娘御ぶんにあそばされおくり給はり。三年の契り浅からず男子を平産あり。名を市丸と改め後喜の祝ひをなしけるに。此母兒枕なやませられさま／＼醫術をつくせるかひもなく。十八の秋のはじめ紅葉もうすきえん散て。風は無常の世とて親類歎きのやむ事なし。殊に刑部は愁に沈みかゝるうきめは我ばかりの袖の海ぞと。命もつなぎかねたる舟の行水に救の思ひをなし。泡のいどに消る身ならば今のかなしさあるまじき物と。世間むきは歎きをやめて内證の愁歎外より見る目もいたまし。喪に籠給ふうちは昼夜に法花經二座つゝ讀誦。殊勝に哀れにすゑ／＼の女房共まで香花のいとまなく。奥様御跡を吊ひ奉りける。やう／＼日救ふりて。四十九日も過ければ。臍などあらためて重陽菊の祝義に御前に出初て替らず大役を勤られ。此程重なる御用共埒の明事をよろこびける。人はありて人なし形部諸事の取まはしまねもならざる侍なり。いかなる縁の深きにや今に妻の事忘れ給はねば。をの／＼内談してせめては御思ひ晴しにもと。色盛の艶女あまた取よせ御寝間のあげおろしに風情つくりて出しけれ共更に御心も通はず。あたら姿のいたづらに過行けるそれより豕の夜になりて此御家の作法を覺えたる老女花餅のしほらしく作りなし。上へあげて下まで祝ひぬ。盃 救



めぐりて後素人藝の物まね。引語りの淨るり何の面白き事もなかりけり。義理譽に夜をふかしひとり座敷を立。男は且那ばかりにして女中は耳の役目に聞ぬれば。道行の中程よりしらせて三味線すてゝやめける。其跡は俄に淋しく成て東のかたの書院に出給へば。宵は月を見しに空定めなく時雨で軒の松無用の嵐をおとつれ瑠璃灯のゆらくを。誰かははづせとありしに。野沢といへる女かいどりまへして。御意にしたがひこの 灯をおろし立歸る面影何ともなくしめやかに悪からぬ身振。東ぞだちの女には稀なるやうに御心うつりて。後帯のはしをとらへて我にいふ事ありと。口ばやに仰せられしを聞捨ににげ行けるが。帯はほどけて跡に残り其身のかさねづままばらにあまたの女部屋にかけ込しは氣うとかりき。女郎あつかりの紫竹といへる人氣を通して。そなたも十九廿になりて大かたならぬ初心と。手を取腰を突出せば野沢赤面して。自もそれほどのわかまへなきにはあらず。けふは大事の母人様の命日といへば。扱も律義千万なる人もあるものかな。主命に親の日はかまふものかと往生すくめにすれど。佛は見通しもつたいなき事と合点せぬをもどかしく。小梅といへる女お座敷に行て野沢どの、帯を御かへしあそばされませいと。ひろき口をすばめて遠慮もなくちかくよれば。折ふしよく此女もうつくしげに見えて。此帯縁のむすびとなつてちよろりと人の戀をぬすみける。其後はおのづから奥に入て御情つり。我になりて是をにくまぬ人はなし。され共小梅の女且那の御氣に入事は非なく。様つけぬばかり主あしらひになりぬ。次第にうるさく思ふうちに心入のあしき事あらはれ。又軍前の野沢に移りかはらせ給ふを小梅ふかくそねめど。さもしからねは頼のたはれのごとく。浪の瀬枕をかはずたび毎に。御不便深く成て外なく此女に惱せ給へば。小むめ噴志の猛火燃やまずして神木に釘をうち。人像を作りて山伏に祈らすれど。元來まことならねば。仏神是をうけ給はずかへつて其身をとがめ給ふ。なを執念おこつて野沢が命をうしなはん悪事をたくみ。有時菓子に斑猫の大毒をしこみて野沢のかたへおくりけるに。此山吹餅をひとりひらかずして。女前中間をよび集め茶事して是をもてなしけるに。其夜に入て血をばくも有。又は胸をいたませあるひは腹

中燃てうき目を見せて。此難義かなしく。彼是七人の女房たち同じ枕に命をはりて。小梅を人生残るを穿鑿しけるに。因果をばのかれず。其毒薬の事終にあらはれ出。此科の果す所牛割にしてもあきたらずと。松の木を箱をさして目口の所に穴をあけて彼女を入毒害にあひし女房どもの親兄弟をよびよせ恨みを晴すためとて此箱の蓋より。身にこたゆる程の大釘をうたせける。歎かた手に悪やと打ぬる者もあり。かへらぬむかしとうたぬもあり。身うちにあき所もなくして人の命もつよし。九日十日までは慥に息のかよひ十一日の暮かたにおはりぬ。死骸は野に埋みて其悪名は世にのこれり。此小梅生國はむさしの熊谷の者なりしが。弟に九藏とてわたり奉公して淺草に有しが。此事聞て姉が科の程は外にして荊角かたきは主人形部と思ひ定めはるの陸奥にくだり。里の草の屋に身をかくし。旅がけの商人と申なし。小間物のいろ／＼を仕込。笈箱に心覚えの刀を入。屋かた町に出入。いつぞの程に刑部殿の下臺所にも自由にまはり。心をくだきねらひぬれ共たよるべき首尾なくて程ふりけるこそ口おしけれ。其秋冬もくれ過て明年の二月のすゑに。花島の菊植かへらるゝとて中間参人つれられ。萩垣の外に出られしを見届け。此ときうたずは又の時節もあらじと手ばしかくくだんの刀を取出し。しのびてうしろに立まはり。名乗もかけず打太刀夕日にうつりてかやく影におどろきよけたまへば。すまたへ切付し間に脇指ぬきあはせ打つけられしに。鬢先切れながらかなはじとやにげて出しが。折ふし市丸殿御乳の人抱き参らせ廣庭に出しをうばひ取。ひつさげて米藏のうちにかけ込。せつなきまゝに人質をとりて。此おさなき人にすてにうきめを見せんとす。此めのとかなしくてかけいらんとする時。おのれらあたりへちかよらは。此世悴をさしころすと胸に劍をさしあてければ。さながらそばへも近付えず。遠くより身をひかへ手をあはして自と取かへて給はれともだゆれど。其斷りも聞わかばこそ又其まゝにころしもせず。おのれのがるべき所にあらず。天命つきて待ける所に家來の面々いづれもすゝみてかけいらんとするを。形部かけつけ給ひをしとどめ。しばらく方便をめぐらし給ふうちに。家中一番の鉄炮の上手後藤流左衛門が二男森之丞とて十五歳なり



しが。是を聞より小筒に鎖玉を仕込火鉄切てかけ寄を。皆々引留爰は大事の所といへば。しそんじたらばそれまでの命手ぬるき評儀此時にまつべきかと。風通しの窓より目あてを定め打けるに。劍持たる腕首をあやまたずして打落し。それといふ聲にをの／＼一同にかけ入。まづ市丸殿を子細なく抱とりあやうき命をたすけ參らせ。跡にて九藏は切くだかれ形は當座になかりき。此たびの手柄森之丞が働き。國中において是さたなり。形部殿よろこひ淺からず。扱いかなる事ぞときひしく吟味し給ふに。彼者小梅が弟たる事くはしくしてなを／＼悪しみ深かりき。それより年ふりて。市丸殿十四歳の時。國中ならびなき美童すこしは我身ながら若衆自慢なりしに。左のかたの鬘の脇にわづかに黒き疵ありて。御髪結せ給ふ度毎に。是をかくし奉らんとす。小者が氣をつくしける。姿見に御かたちをうつさせ給ふ毎に御心かゝりのひとつなり。有時めのとに是はと尋ね給ふに。かの鉄炮の玉のかすりあぶなかりしむかしを御物かたり申。扱は森之丞殿の御はたらきにて我必死の難義をのかれし命の親御さまなれ。一向兄ぶんに頼み奉るべしと。俄にいとをしくなりて。衆道契約の状をつくれば。森之丞うれしきあまりて念比するうちに。森之丞兄森右衛門不慮の喧花を仕出し相手三人に切結一人をば矢庭に切ころし。相手二人になりしはかひしが天運や弱かりけん。二人がために終にうたれてけり。其残る相手。留山義太夫鳥崎勘九郎兩人其所より立退逐電して失けり。森之丞安からず思ひ。兄の敵をうたため國もとを出けるに。市丸も共に付そひ。常陸國筑波山の麓の里にして見出し。市丸助太刀を働して首尾よく思ふ敵を打とめて。本國に歸宅して悦びの眉を開きけり。敵うつ人は此森之丞にあやかり物なり。市丸が心ざしいとかたじけなし。美形には取わき摩利尊天もうしる立強く守らせ給はんと皆人は是をうらやみけるもことほりぞかし。なを筑波根のはたらきの後いよく戀ぞつもりける

第三 吟 嘯 といふ 俄 正月

天正の比陸奥若松に五月のすゑ大あられふりて。板屋の軒端はあれて。東に不破の関屋見せける。其丸雪しばしは消もやらず。秤にかくれば八匁五分六ト有といへり。是にさへ人は欲心おこりて是程の珊瑚珠あらば。願どりの世中なる物をと大笑ひして人の心も空に成ける。其後鹿嶋の事ふれや告來りけん。此六月朔日を正月になして祝ふべし。さもなくば人間三合になるべしと。愚癡の世をはかりて神託とおどしければ。智あるも死ぬる事をすく人はなく。女は子共の身の上を思ひ。餅花に春をさかせ。千よもと祈る松立かざり。礼者は帷子を着たるばかり。其外は元日にすこしも替る事なし。陰陽師は事かな笛ふかんと神樂姫をこしらへ。お初尾袖にあまりて。よろこびの舞の拍子見し人山をなしける。爰に岩國善太夫といへる人の一子。善太郎とて七歳に成けるが。御乳に小坊主抱守の者草履取いかめしくざゞめき三千石の威勢を見せて人立の中に遠慮もなく割入。それより先に立て宮越十左衛門とて百五十石にて。筆役の人の二男龜松下人もなくて只一人神樂を見物しけるに。善太郎小者首筋に手を掛つきのける。若年なれ共龜松氣色をかへて諸侍を推參なる男目といふ。小者手を打て袖につきのあたりし帷子を着ても。唇々のお侍と笑ふ。龜松脇ざしに手をかけしに。いまだ九歳なれば小腕をとられ。人せりにおしたふされ其内に善太夫小者は屋敷にかへりぬ。龜松兄に十太郎當年十九になりけるが。つね／＼おとなしき若い者は聞付。刀をつとりかけ出しを母親抱とどめ。様子聞届て後何やうにもなるべき事なり。はや此さたあるなれば善太夫より届の使參るべし。然らば堪忍してもひけならずとせし給へば。進し胸をすへ内通有かと其日夜まで相待に其義なく。もし又善太夫他行の事も聞あはすすに。成程宿に有ながら踏付たるしかた。今は分別して善太夫を打て捨。すぐに京の姥の許へ立のけと手箱を明て歩歩五十肌着の衣裏に縫こみ九重の守袋を掛させて暇乞の盃出せし時。龜松袖にすがり。我ひとつにつれさせ給へと涙を漏す。武運つきて我らうたれなば成仁の後に相手をうつべし。此たびはひとりの母に孝をつくせといひすて。明がたに出て善太夫の當番の日をくりて。柳堤に足場を見合。地藏堂のうしろにしばらく待處に。善太夫乗馬



ひかせ人あまためしつれきたり十太郎を見かけて近寄きのふは小者が何とやらといひも果ぬに。其断りおそしとぬきうちにして早業の首尾残る所もなし。それより山傳ひの退道他領へ入て花山院春林寺といへる眞言寺にかけ込。子細をかたれば扱も手柄それ程の事はしかなまじき人と。かねてぞんずる所なり。此上は愚僧請取髓に落付給へと大師堂の天井にあげ置。寺中を集め俄に密經をはじめ法事にまぎらかし給へは。僧中さへ氣のつく事にはあらず。つねだに出家は頼母敷にましてや。十太郎前髪たちの時かり初ながらよしみあれば。かゝる時命にかけて如在なくたとへせんぎにあふとも。今生後世息の根のかよふうちは出さじと。此事思ひ定て追手を待給ふに。爰には心つかず善大夫一家はだし馬にてかけあつまり。十太郎かたへ行に表の門をも閉ず。母の親老人藤纏目の鎧を着て。くれなひの天巻長刀の鞘はづして鞍掛に腰を置て。一命をしまぬ眼色にしへの巴山吹もかくあらんと。見し人いさぎよくほめて女なればかまはず。十太郎國を立のく事を聞届てをのく屋かたに歸りて。内談評儀の所へ横目役の兩人大平主水駒谷源右衛門まいられ。十太郎罷出るまでは一門のこらず閉門仰せ付られし。此かたにも御僉儀とげらるゝまでは寄會遠慮有べしと申渡して歸る。其後十太郎は國の様子を聞に。別義なく其通りといふ人あれば。母の御事あんどして春林寺をひそかに出。道中を夜ばかりありき。無事に京都につき松原通因幡藥師のあとりに。外戚の叔母東本願寺のすゑの道場に縁付しておはしける。此許に身を隠し都ながら花なき里の心ちして。夜見る東山高尾の秋の色も闇の錦となし。古郷の片便宜になを氣をなやまし日かすふるうちに。國もと僉儀つにつて十太郎出さぬにおいては。一家いとこまで切腹と仰渡され。是非もなき折ふしはうき秋のはじめ十一日に御意あつて。八月十五日までに捕て出すべし。さもなきにおひては。宮越の一類滅亡たるべしとのがるべきやうなき仰せ承り届け。いづれも内談かため。かくあればとて十太郎は出さじ。此上は死出の首途に人の山をなし。岩國が屋形を極樂の西門とさだめをのく私宅に歸る時龜松が申けるは。此義はそもく。賊の身の上よりおこりし事。舎兄十太郎のかはりに。我ら切腹仕るやうに眞日衆へ御

申入頼み奉ると。いさぎよくすゝみ出れば。此なかにも義理にせめられ感涙をもよほし。しばらく良をうち詠め。菟角は各次第に京後の用意と有時。母のいはくとももの事にそれがしが願ひあり。十太郎をよびくだし。是も一所に相果なば何か浮世に思ひ事す事いまじ。十太郎生残り跡にて恨むべき所もあり。日限は名月まで。御待給はれと。都に刻付の早飛脚を立。くはしき状をつかはしける。七月廿五日に京着して。姉の御かたの御心もとなしと明をむるより泣出し。十太郎への状をばいまださし出しかねて。扱も浅ましや是非なき首尾とうちふしけれど。十太郎は元來覺悟の身にて。今更おどろく事もなく。御歎きをやめさせ給へ。人を殺してのがるべき身にあらず。女こゝろに道理をふくめ。合点させ參らせ。我此たび花洛の帝都を見はじめの見おさめなれば。日つもりして五日の隙有。諸山を詠め廻り。かりの世の思ひ出に。案内者を一人めしつれ。方角をわけて五条を夢の浮橋と打渡り。音羽の峯に別るゝも東路の雲行けしき。風よりさきに梢散なん心に成て。無常は鳥部山にされての命。三十三間に矢教の武勇を思はれ。河原の狂言綺語も移り變れる慰。きのふは北山けふはにし山。入日を名残に四日つき。今一日の遊山に心ざす所は。爰遊女町六条を。みよし町の花のえんといふ太夫を。丸屋が座敷へ取よせ人の詠めを無理共にもらひ。酒おもしろくかはして初會とは思はれず。十太郎より女郎の心ふかく乱れて。夕暮急ぐ床の情。是には偽りさつてもだくとなり行心。かしらから身を其人の物にして。しやらほとけの黒髪いとはず。枕にちかき蠟燭の立切とき夜の明がたを惜み。さりとはく更に申もはづかしけれど。我ながれを立初六年の日救ふるうちに。それにこしらへ置銀が敵の身なれば。貴賤のかぎりもなく逢見し中に。馴染を戀の種となし正しく其御かたの心のかよひ。懷妊せし程の男も今宵はじめの君にくらべて。富士のけふりと長柄の水底程の思はく透ひ。いかなる縁にや是程いとほしらしき御かたに。あひ參らすもふしぎのひとつ。さゝまいりて二世までと約束の此男目。大かたならぬ因果と心底うち明て語る時。十太郎身には嬉しき事をいさます。是はかたじけなさあまりてとかふ言葉にのべがたし。然れ共ぞんじ寄有身な



れば。御情も今宵をかぎり。かさねてはまたあひましての事といへば。大夫申かゝつてせき面。復もく口惜。此身にまことすくなしと御うたがひもにくからず。近道に證據と小指嚙きるをやうく留め。我ら事おぼしめしの外なる身にて都を見しも今晚ばかり。鶏鳴ば東に行て。八月十四日に相果る至極段も語り聞せ。男なきに前後を忘れ身にはひはなかりけり。太夫聞になを哀れのまさり。死せ給ひて濟事ならば所にかまひはれまじ。いざ自と同じ道にと思ひ切たる氣色を見て。爰は大事とふんべつをめぐらし。いまだよしみなきにさばかり御心ざしのうれしさ。神もつて忘れがたしさもあらば。宿なる身じまひして寢後は爰に來て明日の事と契約して。おそろしやと立歸り。門から姨にいとまの泪。鬨の清水も濁りて。大津馬に次かへて。いそぐに程なく生國若松に着て。檀那寺徳泉寺に入て。大平主水かたへ内通して。儉使を待宵の月の顔もかはらず。親類にもしらせず。切腹の次第。流石弓馬の家のほまれを羨しぬ。其跡目は別条なく善太夫家督は長太郎。十太郎跡は其弟龜松に仰せ付られ。兩家共に筋目ある者なれば其通りにしづまりぬ。扱は流れの都の女。十太郎を思ひにこがれ。十四日の月見るまでは待すして。身事書置したゝめ。心ざしは万里にかよへ是より女の追腹と。男のすなるやうに。此自害のさまほめぬ人なく後代にもためし有まじと聞傳へて袖をひたせり。そのうち善太郎龜松成人して七十五歳になりぬ。互に意趣ふくむ事なかれと仰付なれ共。武勇はそれに遠慮なく。兩方ともに時節を見あはせけるに。人も此色を見て出合なきやうに其中をへだてぬ。有時野寺の觀音に參詣して。善太郎は參り。龜松は下向。巻打の細道にして。兩人出合けるこそ生涯の寢後なれ。年來宿願の怨思ひの晴し所爰ぞかし。是偏に仏神御引合と。互の心にうけ悦びいやくもまぬかれず。すゑく一人も助太刀無用とせし股立取て羽織をぬぎ。大振袖のひるがへるは。花紅葉の色みだれて。さなから化粧車かとおもはれ。下下拳を握り齒をかみ。銚々の主人祈るにまげずおとらず。淺手を覺えず。多野の海眞紅の糸をみだし。火焔を立て切むすべ。つるに式人共にたゝかひつかれ。相うち切こまれ切込てうき世の夢とは果にける。

第四 内儀の利發は替た姿

御吉例の御詔初二日未明より。紅梅の間へいづれも相つめ申さるべし。十三以下は若松の間へ出座御免。又老人は嘯戸の間に安座御ゆるさる。法琳は小書院にて見物仕つらるべし。則頭巾。御赦免なり。諸役人は夜半の太鼓を聞て登城有へし。役者は宵より新長屋まで詰申べし。此通り金塚救馬照徳寺外記兩人として申渡され。それくの役儀承り各退散申されし。既に其時いたり番組は高砂田村三輪祝言。上代風の能筆作法あらためて書付。大横目安川權之進指圖に任せて。大廣間の見付なる。長押に張置しを。金塚出頭家老にて諸事出來しだてに物母子細らしく吟味するに。無用の事ながら時の權威におされて。其とをりにしたるがひぬれば。勝につて我まゝをふるまひけるを人みな是を疎みぬ。此番組の張所をしばらく詠め。惣じてかやうの物は勿字のくらの備紙を見合張事なり。番付八寸あまりあがり過たり。かり初の事ながら是をおろすべしと茶堂坊主に申付られし時は安川權之進殿の差圖にてかくの通りあそばしおかるゝ上はと申。此國におひてそれがしが言葉をかへす者奇怪なる推參と持たる扇にてかしらを用てば。休林かんにん成がたく小脇指に手懸るを。救馬ぬからぬ男なれば即座に拔打にしてあへなく夢とはなりぬ。此休林生國丹州のものなれば。此家中におひて。親類ともなく哀や我心からかくは成行けると。理に非を付て取置ぬ。權之進是を聞付廣間に來り。救馬をよび出し。只今休林うたれけるは元それがしが身の上なり。兎角の僉儀に及ばずと。互ひにぬき合せしが救馬を椽より下に切おとし。手ばしかくとどめをさし。まつたく命をしむにあらず。存する子細ありと聲をかけて立のくを各ほめこそすれ打留る人なく。裏の御門よりかけぬけ屋形町の野はづれにて。家來の若黨一人追付先我草履をぬぎて旦那にはかせ。扱奥様はいつかたへのけ參らせんと云。妻子は細井金太夫かたへ此様子を申てたのみ入べしとあれば。家來一圓合点せず。是は日比不會なるかたへ此事いかゞと申。汝が不審尤なり



是には思案の有事なり。早速金太夫に頼むべし我は是より上方へ立越といひ捨て別れぬ。主人云付にまかせ屋敷にかへり。すゑ／＼の女には此沙汰をもせず。娘御を内懐に抱て奥様にはしたの着物を打かけさせ。裏の忌門よりつれまして出しに人の氣の付へき事なし。程なく金太夫殿の屋かたにかけ込。ひそかに此様子を申上しに金太夫少しもさばく氣色なく。親子御兩人拙者請取預り申上は。心やすく思ひ氣遣する事なかれ。其方は急ぎ立のくべしと。折ふし有合せたる路金をとらせかへされける。扱權之進屋敷へ救馬より一家一族密子の輩迄。追々につけ付門を取かこみ内に入てせんざくするに。中間供部屋にはいまだ此事しらざりけるにや。木枕にあて蓑若をきさみ或は塩をなめて酒を呑。下臺所には。朝飯を焼上臺所には女のあまたの慰業にや。はや乾餅を取散し搔餅霰餅をきさみみるしか。奥御前屋敷出を夢にもしらざりき。おとろき騒て泣出す。姨介抄の人もこは何方へと身をもみて一どに泣出す。扱は妻子をかくして其身も落けりと此有様に各立歸り。段々を言上する時則下知有て。先城下の口々に加番を付られ。きひしく人をあらためて往還をゆるさす權之進親類の輩にはのこらす屋さがしをすへし。若行方しれすは土をかへして愈儀をとくへし。年立歸る祝ひの先より曲事をなしけりと。上より御立腹淺からざるも理りなり。其日は吉例の儀式も鳴をやめける金太夫方には弟金右衛門忍ひ來り。此度の義つねの事にはあらず。彼人々を手前にかく隠し置るゝ段。ひとつは上をかるしむるの恐れ又は年比さばかりのよしみもなく。殊に愛抄よからぬ人の妻子を預りかくし給ふいはれなし。此義憚りながら御思案然るべくいと申せば。金太夫聞届け。それ窮鳥懷にいはれ御士も殺さすといへり。武士の意氣道理をたつる者は世間の見る目と各別なり。權之進と自分が日比不會なる事は少しも遺恨の子細に非ず。先年関が原の陣旅におきし時。かれが親安川權藏我らが先祖準人と同じ組下成しが互に戰功をはげみ。高名牛角の感狀有兩輩共に千石づゝ所知くだしおかれ。役儀等しく大横目に仰せ付させられ。安川流細井流とて錦に一流つゝのはそれをあらはし武勇をあらそひ目から目まであひて家名をいどみしばかり。共に並君の勳功を認めし。彼此郎党も恥を

見定め。是非隠しとくべき者と頼み掛。我に強し女子。たとひ一命にかへても安は出さぬ至極なり。いよ／＼常住琳にもてなしすこしも色を見らるへからすとかたくしめしあはせ。扱内室にははじめを語り。よく／＼いたはりてかくし參らせ給へと云ふくめ給へは。女性も心頼母數人に情をしらるゝ事かゝる時なるべし。おろそかにならじと自御茶のかよひ迄なし參らせ。何事も御心に任せ給へといと懇情にもてなし給へは。奥御前嬉しさ限りなく此御心入。いつの世に御恩をくり奉るへきたよりもなし。いたつらに身のなり行事一しほ口をしくこそさふらへと。袖のしがらみ安川を流し女性ながら互の礼義石流やさしく深かりけりされば此度の念劇止事なく。不日の間に此屋形町をも井の底までさかすべしとの風聞す。もし吟味役のかた／＼に見いだされては詮なし。先我身は申通りの女ぶんに成べし。わたらせ給ふ御前を此屋かたの奥になし參らせ。首尾よくうきめをすくはせ給へと。女性の智慧かしこくいみじきはかりをすゝめられしかは。金太夫よろこびさもあらば其方此屋敷におはしては。其ばかり事心もとなき事あり。しばらく親のもとへ歸り給へと内談して。風俗を使やくの女に作り。眞紅の網袋に葉付の密柑を入。長文笥を持そへ奇特頭巾をかふり。小者もつれず只老人屋敷を出。はじめて玉銚の陸地をふみ。別義なく御里の屋形へ入せ給ふ。金太夫安堵し給ひ權之進奥に。何事も難義をすくひ參らせんため主命にかへてはかり事をめくらし奉るなり。今よりしばらくの程詞を改め。わが妻子のことくおさなき息女には眞言の親のごとくいひをしへあひしらせ給へは。此娘いとかしこくも今ひとりの。鬘のあるとゞ様はどこへゆかせ給ふと尋ねられしに。それは伯父様なるぞ我とゞ様は是ぞと。金太夫殿の御ひざの上へ渡す時。門外に人の聲とよめき人あらためと斷り申。役人大勢かけ入て見るに。いづくに權之進が妻子らしき者をかくしおける風情もなし。金太夫權之進は日來白眼あひて不會なる事をの／＼存じければ。大かた有増に吟味して立歸る。虎尾鱒の口をのがれあやうかりし所なり。かの九郎判官殿弁慶がために強力となり富樫が関路にあやしめられ。大塔護良親王の般若の箱に御身を縮め。按察法印が難をのがれ給ひしも。今の思ひによも過



し。それより廿日ばかりも過ぎて様子を見あはせわざと雨風さはがしき夜半にしのばせ。弟金右衛門を付て權之進隠家吉野の中市と聞えければおくりとどける武士のやたけ心ぞたのもしき。妻子の對面其悦びいくそぼくぞやたとへていはんかたもなし。此度細井殿淺からぬ懇情弓矢の本懐書中に籠。礼義をたゞし。金右衛門は國本姫路にかへりぬ。世に浪人となり敵もつ身の安からぬ事。いまだ男盛の花櫻一片の太刀風に今にもふかば散べきと朝暮の心油斷なく年月をくりける武勇の程こそいさましけれ。金塚救馬が一子勝之丞後見三人同道して。權之進をうたん爲諸國をめぐりて幡州にくだりける。つれたる供の者は本國姫路の者なり。家中の人をも見しり案内も覺えたり。たのもしくつきそひしが。勝之丞が運のつきにや山崎越に上り。瀬川といふ里の出茶屋に腰かけて。手にはきせる筒を持ながら。旅つかれにやつらゝ居眠り正躰なき所へ。それとはしらず六十郎行あひたり。小者袖を引て。念願の勝之丞はあれいと小語。聞もあへず刀をぬき休林が一子六十郎親の敵ぞ覺たかと名乗かけてうつ太刀に。勝之丞ひだりのかた先をきらぬきあはする間に。たゞみかけて本望とげ留めをさしてしまふ所へ。跡より三人追つき又切むすび。しばしが程二人と三人と一命をしまはずはげみしに。つるに六十郎もうたれ小者もむなしくなりぬ。三人かたにも式人うたれやうく。老人かひなき命生残り行方しれずなりにき。其後權之進事は。武の本意至極の僉儀に相濟て二度歸參して。安川の家榮へけり。此時細井金太夫はたらきも世にあらはれ。當家稀なる者式人と其名をあげて今の世までも語り傳へぬ。

武 道 傳 來 記 卷 二

諸國敵討

目 録

第一 思ひ入吹女尺八

落鞠に色見そむる事

第二 見ぬ人良に霄の無分別

熊野に夢の面影出る事

第三 身袋破る落書の團

水浴せのぢやゝ馬作る事

第四 命とらるゝ人魚の海

忠孝しるゝ矢の根の事



思ひ入吹女尺八

安藝の廣嶋へ京より枯木内匠といへる。鞠の上手くたりてあなたこなたへ指南して。一家中に蹴鞠の柳なびかせ風なき暮を急ぎて踏音のせざる屋形はなし。惣じて慰む業も國のはやり物に心の移り色になづみぬ。爰に福嶋安清とて殿に筋目ある人なりしが。無紋にて歡樂に暮し給ひ殊更鞠好にて。其友を集め七夕の興行有しに其中に鳥川葉右衛門弟村之助と云人今年十八角前髪ながら美道の花の香残りぬ漸々暮もつまりて名残の高足横きれして。藪垣を打越して隣の花畠におちける。村之助はしり出籠の葉わけて咲ば鞠は唐萩の枝にとまりてそれより東の池の溜水のきよげに棚橋のかゝる所に隣屋敷の息女と見へて。紋羅のしろきに紅の裏を付檜扇のちらしかた大振袖のゆたかに紫糸の組帯しどけなくむすびて乱れ髪の中程を金の紙の平巻にしめよせ房付團に梶の葉見えしは。けふ織女の哥を手向ならんと思ふに案のごとく沢水に浮て立歸らるゝ面影天人の生移しかと心も空になり前後かまはず詞をかけ慮外ながらあの鞠にお手をへられてこなたへ返し給はれといへば。草分衣に露もいとほず鞠を手にふれて聲の通ふ所へさし出し給へる手をしめて。互ひに面を見合ける社戀のはじめなれ。其内にすゑの女のあまた來れば。村之助是非なく立歸り糞束ぬぎ捨各々より跡に残り又竹垣をみれば。彼娘も殿めづらしく戀をふくみかさねて花崗に立出しにわりなく物いひかはして。筆にて心をかよはす迄もなく忍びてゆかばといへばそれをいやとはいはぬ女と。男に約束深く闇になる夜を待て。裏道より高塀をこへ身を捨て通へば女も偽りなく狼戸の鑰を盗出し人しれず我ねまに引入ふたりが命をかけて。二世迄かはるなかはらじと互ひに小指を喰切。其血をひとつに絞り出し女は男の肌着に誓紙をかければ男は女の下着にかきかはして。後には戀の詞も盡て逢たばに物はいはす泪に更て別れを惜み次第につるは此道のならひぞかし。情の日記かまなるを天香の世の世より外に知者もなかりしに思ひの種となりて雪中の花に見ながら青梅もがたと

い物すきをして腹味おかしげになりぬ。此息女の親は藤沢甚太夫とて物頭なりしが廻り番にて御江戸を勤め歸程の折ふし遠州濱松に立寄同名甚左衛門二男甚平十九歳になりて然も骨骸たくましく殊に大力なれば行末たのもしく娘ながら子にもらひて。娘の小督にめあはせ追付隠居の願ひを嬉敷同道して本國に歸り奥にはじめをかたりければ。悦び限りもなく養子の御訴訟叶て後祝言の事共取急しに小督かつていさまずして母親に歎きけるは。仰をそむくは不孝の第一なれ共。思へばかりの宿の夢と極め仏の道の有がたく後の世を願ふなれば一生夫妻のかたらひ捨て身を絞なしの衣になし。いかなる山にもわけのぼり執行に思ひ入れれば。甚平様へは外よりよび迎へさせ給へと思ひよらざる事共母人驚き給ひ。内證にて色々異見積れ共いかなく承引せず。今は了簡盡てとやかく此さ大慎にあらはれ甚平も少しは口惜く恨みをふくむ折から。村之助が忍び姿をみ付濱松より召つれたる小者と心を合せ木蔭に待臥して。歸る所を何の子細もなく打て捨。扱穿鑿になる時小督是迄と思ひ定め長刀振て出るを乳女抱留めて敵はかさねて打品有。先は屋形を退給へとかひく。敷も手を取てどさくさまぎれに裏門よりかけ抜行かたしれすなりぬ。村之助密通かくれなく武命の盡とさみせられ甚右衛門は面目にて遠慮甚平は立退ける小督は姥が。働にて廣嶋をのがれ。幡州明石の里にしろべ有て女の道も日救へて此所に立越賤の屋の住ゐして手掛ぬ經營も見なれて縮布を織ならひけふにおくりぬ。月もはや累りて取揚婆々のね覺驚かせ。産湯湧して待時守刀を身に添て諸神も憐み給ひ男子をよろこばせ爺村之助敵甚平を打せ給へもしも女子ならは立所を去ず腹搔切て果べしと此一念の通じ初音つよく男子を設け願ひのまゝの帯しめて大事に育あげ名を村丸と髪置袴着引のばすやうに祈しに。程なく九歳より須戸寺につかはし。手習の時過て若木の櫻色ふかく若衆のつぼみと僧俗に詠められ十三の春にぞなれる。今は昔を語り聞せ敵を打に出べき時節と。父村之助寂後の有様を荒増咄も果ぬに其甚平が生國濱松に立越首を土産に追付歸りて目出度御目にみくらんと身拵して立行を二人すがりて抱留め。我々一所に立行打べき日比の大願なり兼て心懸たるしとて女ながら尺八を吹習ひ。鎖の肌



着にかくし脇指油断に仕込。髪散切に深綿笠其まゝ男の出立と成。明石の借宿を忍び道浪の音松の嵐子を思ふ夜の鶴の巢籠と云を三人の連吹。鳴音も自から哀れに物悲しく息つかひは千年を祝ひ鉄拐が峯に別れ。夢の浮橋生田の里布引川など渡りて西國海道を淀より東路の逢坂山越て。勢田の永旅に身を勞し氣を凝し石山寺に參詣して柴式部が源氏の間を長崎の道者開帳し給ふを。結縁に拜て古へはかゝる女も有し世と女の身には殊更に感じて心靜に下向するに年の程四十斗の侍下人一人召連られ。旅裝束かくる矢立の筆をはやめ里人に爰の名所を聞書しておはしけるが。村丸が面影を見給ひ。扱も眼ざし鬢の縮たる所腰の付其まゝ生移しと跡より私語給ひしが。下人が聲して村之助様の幽冥なるべしと云にそ名もなつかしく立とまり貞見合せても言葉をかけ兼。此湖の入景より國島原の目よりは嚴嶋の氣色面白や馴しやと乳女に耳雜談すれば彼男近寄をのくは廣嶋の衆かと問れたるにまだ身を隠し幡磨の者といへは正敷安藝の詞つき有。此少人は若も鳥川葉右衛門殿の御親類にてましまさぬかと問れて返事し兼て涙くめば此男もしほしほと語らぬ先に歎き我は大谷勘内とて村之助兄弟分の者也。不慮に是を討せ其相手を遠州迄尋ね心のまゝに打取孝養にせんと遙く行しかひなく其者今程は吉野の山里に在家を聞出し只今立行と語り給へは人々は勘内に取付其村之助が一子村丸と心底始を語れば皆一度に泣出し歎き爰にして盡ぬ事なり。さあゝ大和に越て甚平を打ての上の事。それより吉野にわけ入髓に見出し勘内後見をして村丸に願ひの仮に打せ始終の首尾残る所なく無事に此里を立退けると昔を今に語り傳へり。

見ぬ人貞に霄の無分別

女春後家として肥後の城下に名を得たる女の針立あり。夫一流の上手なりしに一子相傳の屋敷もなくて相果る時大事を女につたへたり。それより後夫を求めず郷懸して勢田に嫁ぎて勢田に嫁ぐに願なく疾更奥方の柳中に重寶なる者として屋敷

町心やすく出入出まつる。有時善通寺外記といへる人の妹。におたねとて十八まで嫁とをく部屋出るの氣つくしこゝちなやませ胸のつかへの養生に。妙春に針をうたせられしに次第に驗氣をよるこはせられ。其後は朝暮御見舞申入外よりは御惡意にあづかり折々の衣類まで召おろしを給はり其身は飢寒からずして世をわたりぬ。又同じ家中に福崎軍平といへる人御使番を勤め仁躰すぐれて武藝に達し今年二十六才なるがいままた妻女もなかりき。かねてのねがひに容儀よく器用形氣を人に尋ねられしに。妙春是へも此程より御出入を申世間ばなしの次手に縁付比の息女はあらずやと尋ねられしに。折に幸彼外記殿の御妹君の御事世に又もなき美女のやうに萬をよろしく取合を申にぞ。見ぬ人をこがれ其息女を我らに給はりなばいかにもして申請たきよしを語り給へは妙春此義わたくし御肝煎で首尾させ申べしと手に取やうに談合外記殿へまいりて仲人口を出し御内證へよく申通じ此婚禮を調へしるしの頼みをはこばせ其霜月の十一日姫取の吉日とて外記殿にはおくり用意軍平殿には迎へこしらへ妙春は先乗物にてびしく大座敷にさゝめき一代一度の花をかざり挑子加への千代のはじめ軍平も心嬉しく其面影を見しに。思ふに各別の相違ありて姿ばかり尋常にて横良に幅廣く額あかりて髪すくなく然も唇あつく鼻ひくうつきくくの女に見くらべてさへさりとはおもはしからず。軍平腹立胸をすへかねて妙春をよひ立世の屋盗人とはおのれが事なり女にあらずはいけてはかへさしなれ共。命をたすくるかはりにあれをそのまゝ。今宵のうち外記かたへもどせと思あんもなく無分別に申せは。妙春挿箱の蓋をあけて金子式百兩取出して右に御契約は申さね共あなたにの御手前よろしきゆへに此小判を送らるゝなり。今の中はかうした事が勝手つく女房がよいとて御身躰のたよりにはなりませぬ。御ためのおしき事はいたさぬといかめしく見せければ。軍平たまりかねて妙春に繩をかけて乗物に押込長持手道具残らず外記門外につませければおたねは世に口おしく思ひつめ宿にはかへらず軍平かたにて自害して果にける。外記堪忍ならず早馬にてかけつれば軍平かたには覺悟して大門ひらきて待請外記馬よりをりて玄關前にはしりあがるを兩方より長道具にてはさみ立心まか



せにはたらかせず。やう／＼若黨二人切隊四五人にも手を負せ奥へ切入所を石倉慰右衛門といへる率人軍平にかゝり人にてありしがうしろより十餘字にて突付つゝに外記はうたれける。近所の屋形立さはきたるうちに手前ばやに立のきさまに妙春も打て捨一家行かたしらず明屋敷になりける。其折ふし外記第八九郎といへる者熊野山一見の同道有て參詣せし留主のうちなり山は雪に埋み大木小松に見なし枝折の薄も葉がくれの道しれす岩根つたひに行すへは鳥の聲なく風あらく氷をくだきて息をつぎ身をこらして行うち。和田林八と云者足をいたませ心ばかりはすゝみて臍甲斐なく見えければ八九郎立寄日比口ほどにもなき男今から其ごとく腰ぬけてなを行さきの峯はいかにしてこゆべきやと手を打て笑ひ此度の參詣も汝思ひ立ゆへにつれ立たるかひぞなき。小者にあれまてかたにかゝれそれよりは我らが抱てなり共越べきをと林八に力をつくべきために言葉あらしければ。此者これを無念におもひ足はたゞ共其方にまさるつよき所を覺へたり。八幡のがさじと刀ぬきかさして打てかゝれば八九郎も是非をこゝに極め切先より火を出ししるのぎ削てあやうき時。枯野より外記常にかはりたる姿のあらはれ出其中に飛いり是は當座の言葉とがめ我は福嶋軍平にうたれ浮世をさつての亡霊なり。敵うたすべき者は八九郎なれば大事の命悲しく爰に二たびまみゆるなり。此意趣やますは軍平を打ての後たがひの思ひをなし給へ。是非に頼むといふ聲の下より消て形ちはなかりけり。兩人眼前に驚きしばし十方にくれけるが八九郎涙にじづみて運命のつきかとは是をなげく。林八いさめて今はかへらぬ事なり天をわけ地をかへして軍平を打給へ助太刀はそれがしと八九郎に力をそへ本國にかへれば外記夢のつげにたがはねば八九郎林八すぐに肥後をたち出いづくを定めすたづねける。かくて二とせあまりも心をつくしたづねめぐり信州戸隠山の社僧に内縁ありて是を頼みにして其山中に住けるよし聞出し。やるせなく心の燃る信濃なる其山に忍び行ひそかに様子を開に軍平道傳と名をかへ世をのがれたる墨衣佛もなき草庵をむすびひがしの山はらに黙然として年月をおくるはさらに心にはあらず藤原氏に罪難り世をわけての山居ぞかし。八九郎林八雙戸を懸懸りてかけ入取平今月今日

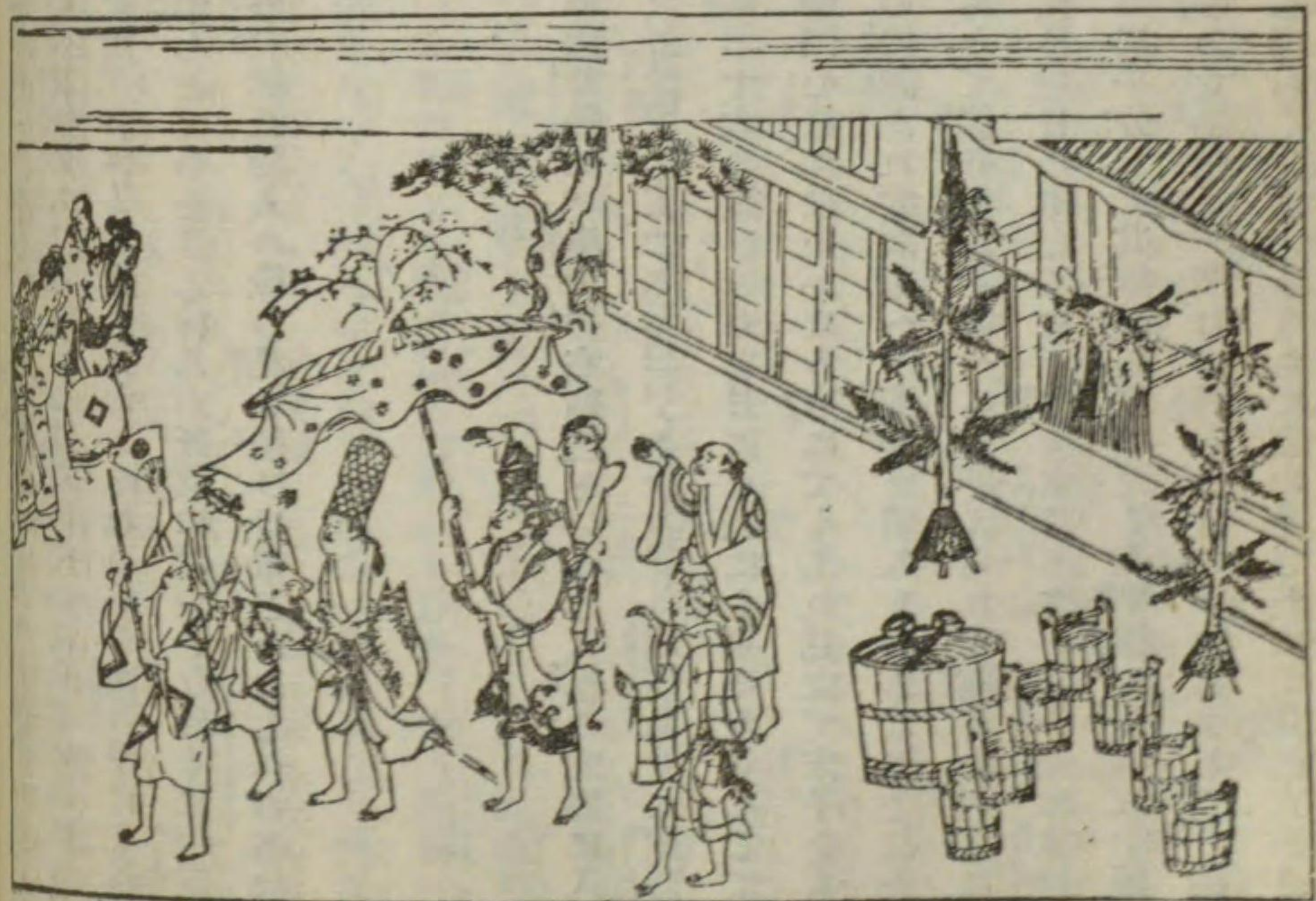
身軀破る落書の團

人の風俗今ぞ髪かしら眉山の姿も見よげになりぬむかし阿波の國徳嶋に。奥田戸右衛門といへる人都の北野に久敷浪人して居られしが。此家中によき親類ありて身休取持れて町打の鉄炮を申立に三百石くだし給り。明所ありて屋敷迄仰付させられ首尾残所なく相濟事武藝のあつきゆへあり。此人當年十六の娘ひとり月にも花にも京をだちにして。美形田舎には目なれず見ぬ人まで聞つたへて戀忍びぬ常々戸右衛門心底にはいかなる方にもあれ見立て末子をもらひ娘にめあはせ奥田の名跡をつがせたき念願なれば外より婚禮の内証あれ共取あへず養子を望みしにあはたこなたより此家に入縁ののぞみあまたなり。其中に篠原文助といふ人縁ありて諸井頼母といへる人肝入られて極月廿六日に歿すけ戸右衛門かたへ入て祝言の事はじめ目出度其年も暮て明る正月三日の事なるに。若き者集りていざ多助に水掛祝ひといひ出ればをの／＼進て無用といふ人ひとりもなし。血氣の男手分して其拵への程もなく金箔置の手桶五十銀箔の柄抄五十本衣裝つくしの笠鉢十二本落書の大團に竹馬壹疋籠張の立烏帽子。門口に持かけさせいはあましての御事と急使を立ける。文助聞届て御返事は是よりと其者を歸してしばらく分別するうちに家中是きたにて見物立かさな

敵後の覺悟と名乗かけしに。むかしの勇力出す手を合せ降参して今はこの身になりて外記殿の御跡を吊らひければ命をたすけ給へといふ。八九郎庵を見まはし汝心中に。偽あり用心の枕鑑形ちは墨染一心は以前にかはらじいかにのがるべきさあ立あがれと責かくればかなはじと鑑を取手を打おとせば。かひ／＼敷も打おとされし手を左の手にもち林八が助太刀を打おとし林八を切ふせる所を八九郎とびかゝり切倒しとゞめをさし林八が死骸に取つきなげくに甲斐なく今ははや、齧切て發心し津の國中山寺のほとりに身をかくし外記林八兩人の後の世を吊ひけるといにしへの名は朽すして今に石塔のみ残れり



り作り物の風流をどつと笑ふて果しける老中の耳に立。此義は先年御法度わたされしに今又掟を背者せんさくすべし大横目兩役人に申わたされ吟味をするに。若手老人も組せざるはなし。兎角は其なりけりに濟せと。其道具を取おかせ水も浪風もなく阿波の鳴戸はおさまりぬ。され共文助勸忍せず。團の書付を見しに尊圓やうの筆のあゆみ正しく是は千塚林兵衛が手跡にうたがひなし。外の人だに心外なるに此林兵衛は我らと従弟なるにさりとは悪きしかたと腹立やむ事なくて其夜屋形に尋ね子細いはずに打捨ててすぐ立のきける。團の落書せしは林兵衛にはあらず。杉森新藏といへる人の書しに文助心のせくまゝにはやまりけるとばつと沙汰をしけるに新藏扱は我筆ゆへ林兵衛はうたれぬ。此上は文助を打て林兵衛に手向んと何國をさだめなく尋出し船中より腹中をなやませ色々養生のかひもなくやう／＼大坂に付て五七日後他國の土となりける。思へばおしき命ぞかし。扱林兵衛が一子林太郎とて其比二歳になりしが女房生國は備後の福山の人なるが此子をつれて親里に歸りぬ。うき世に武士の妻女程定めなきものはなしと見し人は是を驚し。然も御母なれば何に付てもお



はしからず。殊更此腹かはりの妹三人までありてうるさく。随分如くなく名人をさばけ共心にかゝる言葉も耳にいれぼ本の母人の事をのみ思ひ出し。身のかなしきに付てつれあひ林兵衛の面影を現にもわすれはやらす。悪や其文助目を林太郎成人してうたせ給へと諸神に大願をかけて心の劍をけつり利道の一念骨に通て此勢ひ。千尺の岩屋に籠り七重の鉄門をかまへたり共安穩にはおかしと備後を忍ひ出林太郎を抱守て夜露沙風をいとほず磯つたひ行に備前の國瀬戸の明ほのに旅の姿を耻て唐琴の泊りさだめず牛窓の濱里に網引の長九郎といふ者あり。是世をわたり奉公せし時母人ふびんをくはへられ季をかさねてつかはれし今は古里のいとなみしける以前の上しみに此男をひそかに尋ねしに。やさしくも昔の御恩をわすれず是はと涙を流し様子語るに哀れをもやうし此たびのうき事せめては是にてはらせ給へとそれにつれし女も念比にもてなし。芦火焼など鮑の酔あへ飛魚の丸焼あるにまかせて此人をかくまへ世間へは女房の姪あしらひに年月送て林太郎も十一才になりて母うれしき限りなく又二年も過は諸國を尋ぬべしと。明暮人かましく育給へ共浦邊の業を見ならひ塩にて馬刀を取具ひろふなど姿から心までいやしくなりぬ。なをすゑ／＼を思はれ讀書の道しるために縁を求て津の國金龍寺にのほしおかれけるに。石流筋目をあらはし外の兒よりおとなしく十四になれる春の花ひらきかゝれる若衆の盛和尚も惱ふかし此麓の里に伊勢寺と云所有。是はむかしの哥人の伊勢が古里にして草ふかき山陰ながら面白き所に篠はら文助兼田自休と名をかへ散切にして身を隠し林兵衛へうつての此かた爰に住なし有年の正月三日に密枝ながら手折て小者にもたせ。其身は十徳に朱鞞の大脇さしひとつにて此御寺に參詣和尚に對面して世の無常を語り出し。今日の亡者改名もなく千塚氏の何がし十三年忌に相當るなり拙者ためには従弟づからなるが不慮に相果ける御吊ひあそばされ給はれと涙をこぼす。をりふし林太郎薄茶をはこひて此物がたりを聞すまし。小脇指をぬきて飛かゝるを自休さそくきかして。其手を取て引ふせければ和尚をはじめをの／＼立さはぎははいかなる事やらんと穿儀をしけるに自休はすこしもおどろかずいづれもしづめて。是には様子の御入事なり。汝は



林兵衛が悴子なるへし林兵衛最後の時分二才にて有しかそれより十三年過ぬれば今年十四歳なるへし兼て存じけるに十五にならば定て我をねらふべし其節は此方より名乗出心まかせにうたるへきと諸神かけて覺悟せしに今爰に居合せそれがしに出あふ事其方武運にかなふなり寂前申あけしは此者の親が義なり。林兵衛草の陰にてさぞ嬉しからん。さあ本望をとげよとて林太郎が劍を持そへ我腹に差とをし目前の夢とはなりぬ。林太郎と、めをさして親の敵を討事を悦び其首をうつは物に入御寺に御暇を乞捨又備前の國にくたり。母人に御目にかけて年來のおもひを此時晴し給ひぬ。此さた世にかくれなく阿波にのこりし文助後家は是を開付牛窓に忍び來て林兵衛後家のかり宿に。名をしらせて切込夫の敵うちといさみける心得たりと林太郎切て出るを母親引とよめ互ひに女の勝負かまへて手をさす事なかれと。兩人しばしたゝかひ薄手救ゝのはたらしき文助女房の太刀をうちおとしきつと引伏。命はとらすして其断り申はいかに女なればとて道理を聞わけ給へ。妻うたれての恨みをいはゞ自こそこなたへ申べけれ。元林兵衛殿を文助殿討てのき給ふを林太郎が親の敵うてばとて我らを其恨みはふかくなり。文助殿あやまり給ふ心ざしあらはれ此たび討れ給ふ首尾石流武士の正道なり。うつもうたるゝも先生よりの因果今もつて何か互ひに恨みはなしかく手に入れれば御命取事やすけれ共ざりとはゝわれは各別の心中自をころし給ふが本意ならば。思ひのまゝにし給へと心の劍を捨て至極を段ゝいひ給へば。文助後家泪に沈み扱も耻かしき御心底只今肝にめいじ義理に責られ身の淺ましき思ひ立まつひら御ゆるし給れと其まゝ自害と見えしを是非にとよめ給ひそれ程の思しめし人ならば我と一所に形ちを替させられ文助殿の御跡を吊ひ給へ。夢は覺る間もあるまほろしの世なりとすゝめしに。なを有がたき御心ざしうれし袖にあまりてなみだおのづから手向の水となりて二人の女姿其まゝに髪を切て此所もさはり有とてそれより幡州の書寫坂本に立越。心のすむよき山陰を見立草薺の庵をむすび薄を枝折の道しるべに分入しより里に出ず。常念仏の鉢の音殊勝さ次第にまさり外なく後世の一大事むすれ給はすおこなひすましておはします。林太郎も髪を切つて道林と法名し。里ゝめぐり

命とらるゝ人魚の海

奥の海には目なれぬ怪魚のあがる事其例おほし後深草院寶治元年三月廿日に津輕の大浦といふ所へ人魚はじめて流れ寄。其形ちはかしらくれなるの鶏冠ありて面は美女のごとし。四足るりをのべて鱗に金色のひかり身にかほりふかく。聲は雲雀笛のしづかなる音せしと世のためしに語り傳へり。爰に松前の浦の奉行役人に。中堂金内といふ人里の仕置して廻りし時。鮭川といへる入海にして夕暮におよび横渡しの小舟に乗て汀入丁ばかりもはなれし時。白波俄に立さはぎ五色の水玉救ちりて浪二つにわかりて人魚目前にあらはれ出しに。舟人おどろき何れも氣をうしなひける。金内荷物にさし置たる半弓をおつ取是大事とはなちかけしに手こたへして其魚忽ちしづみける。それより高浪靜になりて子細なく陸にあがり本國松前に歸宅して村里の仕置の段々老中迄申入次手に旅物語の中にも鮭川の渡りにして人魚射とめたる事有のまゝ申せば。いづれも手を打て是はためしすくなき手柄なり明朝御機嫌を見合此義御披露申あげんといひあはされし時。其座に青崎百右衛門といへる御留守番組して悪人なれば今年四十一迄いまだ夫妻もなぐ世を面白からずわたりぬ。御家久敷者殊に親百之丞御用に立ぬれば先知をくだしおかれ日比我まゝ申も人皆ゆるし置ぬ。金内此度人魚の事を偽りのやうに申なし。惣じて慥に見ぬ事は御前の御耳に立ぬがよし。鳥に羽有魚に鱗有。それゝに其身かしく自由にならぬためしには拙者が泉水に金魚有。わづか四五間の浅水を樂とするに此程雀の小弓にて二百筋ばかりもるかけしに。是にさへ當らぬ物兎角生物には油断がならぬ世に化物なし不思議なし猿の面は



赤し犬には足が四本にかざると。檢校の下座に相勤しを物語の相手にして。無用の高聲大横目野田武藏聞兼て。百右衛門に差向ひ貴殿廣き世界を三百石の屋敷のうちに見らるゝ故なり山海万里のうちに異風なる生類の有まじき事に非ず。古代にも人王十七代仁徳天皇の御時飛驒に一身兩面の人出る。天武天皇の御宇に丹波の山家より十二角の牛出る。文武天皇の御時慶雲四年六月十五日に長八丈横一丈二寸。一頭三面の鬼異國より来る。かゝる事共も有なれば此度の大魚何かうたがふべき物にあらずと。分別員にて申ければ。百右衛門眼色かはり金内殿とても御手柄次手に其人魚御持參なればならびなき首尾と言葉やむ事なし。皆々外の事にまきらかし泊り番衆に入かはり屋形に歸りぬ世間の人心なれば。百右衛門悪敷と沙汰するも有。又金内何事か申もしれずと笑ふも有。金内聞ずてには成がたく。百右衛門と打果さんと思ひしが。然ば我いよゝゝ迂乱なる事を申せしと。跡にて人の嘲哂も口惜と是非なき命をながらへ彼人魚のからだを僉儀して。武運つきずは是を一家中に見せて其後百右衛門めを安穩にはおかしとひそかに屋敷を出鮭川に行て獵師あまたに金銀をとらせ俄に大網を引せけるに。其うを更に見えざる事を歎て。水神を祈りけるしもなく明暮に浦くを詠めありきて磯に寄藻を掻さがし岸に流れ木をそれかと心をつくし日救をかさわは思ひの種となりて。次第に胸せまりあけなき岩に腰懸ながら。入日を西のかたとふし拜み惜や命かけ浪の泡のこくとくに消ぬ。浦人のしらせ来て屋敷に歎くものは十六になりぬる娘より外はなし。此母親も過し年の時雨ふる比定めなき浮世の別れせしに。又もや父にかゝるうき事袖は其まゝ海となしてせめて其御死良なり共見て後世の御供申べしと思ひ定てかけ出るに何れの女か跡につゞくはなかりき。金内寢間のあげおろしせし女に鞠といるへ者二十一になりしが年月の情を忘れずやう老人御跡をしたひ野を内となし浪を枕のやどりもせず。女の歩みはかとらず三日と云くれかたに父の哀後の浦に付てすがりて歎くにかひなし。天を祈り地にふし様々身をもだへ腰さへ笑ふも耻すして今は是迄と金内死骸を。二人の女抱て歸に飛込處へ横目の野田武藏上意にてかけ付此有縁に轟きまつ引とよめいかに女なればとて親に流の有を知らずや

といふ。二人の女合点をせず金内は病死と申。其病死は百右衛門か言葉よりとはじめを語れば。娘涙を流し其百右衛門は。自を縁組しきりに申懸しに金内請給はぬ恨みにやこれ武士たる心入にあらず。然らば百右衛門を討べしと二たひ古郷に歸るを武藏道中を守護し御前をよろしく申なし。其後手前にはごくみ置し増田治平といへる浪人に後見頼み遊山の歸るさを付込。各乗かけて右の手を打落し左にて抜あはすを娘長刀にして切込たるゝ所を鞠とびかゝり。心もとをさしとをし思ひのまゝに本意達し屋形の門を閉て御意を待請女ながら切腹申べしと覺悟極るこそ石流武士の娘なれ翌日御愈義の時分おのゝ日比に悪みあるなれば。老中諸役人口を揃てあしく言上申其家滅亡させける。金内娘には伊村作右衛門末子作之助を入縁仰せ付られ中堂の名跡をつがせくだされ。妾の鞠事は女と申下ゝにはやさしく思しめし。歩行目付戸井市左衛門といふ者にくだされ有がたき仕合ぞかし。それより五十日程過て北浦春日明神の磯より夜中に註進申上。目なれぬ魚と哀前の上魚さしあげけるに。かくれなき金内が矢の根皆く感じてなき跡にてさふらひの名をあげける



武道傳來記 卷三

諸國敵討

目録

第一 人差指が三百石が物

小道具賣に替姿の事

第二 按摩とらする化物屋敷

うてど手のない小鞍の事

第三 大馳も世に有人が見た様

簀は當り眼の事

第四 初茸狩は纏草の種

義理の包物心のほどくる事

第一 人指ゆびが三百石

菖浦の節句は職甲のひかりをかざり。屋形町は刃更びしく中居茶の間の女の手業に。粽の小笹は戀の山山羽の國庄内に。昔日徳岡伊織として中古御家に濟て七十三歳まで堅固に相勤しが。それ迄御用に立程の御奉公もなく。外様の番所に替らぬ役目を承はり。初知行三百石今に立身なく。馬壹疋若黨三人世並にかゝへ身に奢なく輕薄いはず。一子もなく養子もせず我一代の覺悟。律義千萬に物かたきむかし作り男なり。五日の未明より家中残らず大書院に相詰大馳鹿獅子の間に御安座あそばされ近習の諸役人怒かしく列座して独りく召出させられ目見へうけさせられ御手づから御菓子を給はる事御作法なり。伊織罷り出て首尾よく頂裁仕る時右の人さし指のなかりしを御らんあそばし。其方が指はと御意あそばされし時跡へしさりて若ひ時の過とばかり申上る。折ふし御せんに豊田隼人といふ大目付有合せ。伊織指の義は古主相州さまに罷在し時同じ家中島本權左衛門と申者の留主をかへ。夜盜あまたしのび入財寶をうばひとりそれのみ其老母をさしころしうら道を立のく節伊織野す多を通りあはせけるに。權左衛門若等追かけそれ盜人頼みますと聲をかくる。伊織二人とらへ兩脇にはさみ其男を待うちに身のせつなきまゝに指を喰切どもはなさず。子細聞届て縄をかけ權左衛門屋形に渡し。此時のはたらき伊織十八の年と申あぐれば。其比若年にしてよくも仕りけると即座に三百石の御加増下し給はり。面目世の聞え彼是有がたく老後の思ひ出此時なり。次第に行歩も不自由なれは是非に養子と念比なるをのすゝめければ。菟も角もと人ゝにうちまかせ置しに。同じ組中間龜石仁左衛門末子仁七郎今年十六満足に生れ付伊織子にして耻かしからねば是を取持内證相濟御前へ御訴詔申までの折ふし。山吹の色深く岸の坊といへる眞言寺の花盛に若盛の人酒に暮し覺束なくも藤村佐太右衛門といふ男。人の咄しを外になして先新しき事は伊織養子に仁七郎行に極れり。此若衆も念者に指切てとらせければ。又三百石御加増取べし十本切は三千石が物。食は人



にくくめられても知行になる指を切給はんかと大笑ひして。然も下戸の口から人の身うへをあざけしは武士に淺ましき心底なり。仁七郎が念ゆう駒谷木工左衛門が耳に入て是堪忍ならず。折から病後にて足の踏所も覺へざりしが。堅固の時を待兼仁七郎にもしらせず佐太右衛門屋敷に狀を付て風松といふ野原に待ける。今はひかれぬ所にて弟佐太九郎と心をあはせ。木工右衛門に渡りあひそもくより助太刀うしろには下人を四五人まはし置ぬ。木工右衛門隨分はたらしきぬれ共病あがりにして氣勢なく。初太刀は勝をえたれ共。相手大勢なればつるにうたれて哀れや。それより佐太右衛門は國遠して丹後の宮津に重縁あつて身を隠しぬ。仁七郎開付北國に尋ね行まだ踏はじめの磯道天の橋立のさとに忍び。敵しる迄の手便に京より的小道具賣となつて。小者に眞箱目貫小柄の品も持せて其身はひとつ脇指に編笠被き。近付もとめて見合せまはりしに若菜比と思ひをかけ。無理にたはふれられて商物を小者かいふ通りにわきらずに買るゝも下心ありておかし。身に望みある故にさまゝの難儀にあふも。是皆木工左衛門殿の御爲なれば。何事も口惜からずと氣をつくしてやうく佐太右衛門が有所を開出し心靜に打ぬべき事を悦び。此三月廿七日祥月命日に相當ればせひに念願晴さんと思ひ極めしうちに。宮津の家中に内海丹右衛門といふ者有。中將基の友として朝暮參會せしが佐太右衛門無用の助言いひつりて丹右衛門と口論になる。兩方共にいかりて人の愛ひも聞ずして既に其夜野墓に出合うち果すのよし其内證を小者が聞出しければ。さりとはかなしくもしも佐太右衛門其者にうたれたれば。年月の大願あだになり行事の無念なりと。身拵へする迄もなく刀をつ取出て行。暮ての道の龍月歸馬はるかに聲つゞき。沢田の蛙雨を乞岸に角組首のしげく。踏越足をいたませ。心玉飛せて行は。少年の塚のみ立竹の哀れに詠め。丸葉柳の陰にして息をつぎしに。所へ内海丹右衛門下人あまためしづればはたし眼にて來る。是ならんと立よれば。丹右衛門何者かとあらけなくとがめける。仁七郎禮義たゞ敷詞をのべ段々はじめをかたり。それがしが兄の敵なれば佐太右衛門を我にうたせて給はるべし。御自分の御事は申ても當座の義なり。御手にかけれ打給はゞ殘念後の世迄の思ひの種此事御聞分あそばさ

れ御ゆるし給はれと。手をさげて鑑みしに。さりとは道理をわきまへぬ武士にて其段存じもよらぬ事此男が柳手取にする者を。此時にをよんで斷り申は慮外なるでつちめと。にくさけに申せは仁七郎たまり兼。おのれ侍かと思ひ色々言葉をつくせし。此上は八幡のがさしとうつてかゝれば。丹右衛門倒惑して其義ならば相待べしといふ。今は其返事遅し死出の山に待よと飛かゝつて首を落し。家來を追散して石塔の南向水をむすび口に灌所へ佐太右衛門白衣に天卷下人に長刀を持せ。山のうごくがことく爰に來るを仁七郎名乗かけて打て出。しはらくしのきをけつり切むすびしが。仁七郎運命つよく是も中腰を切さげよはる所をたゞみかけて切立首尾とどめさすとき此はたらきにおどろきめしつかひの者跡なくなりぬ。その後氣をしづめて佐太右衛門丹右衛門が二つの首を長刀にて小者にかづかせ本國への土産にして立歸りける

第二 按摩とらする化物屋敷

今の世は人すなほになりて信心ふかく神國の風俗現れ惡魔を払ひ松に音なく海に浪立ずして豊後の苅内靜なる舟付とはなれり。以前此所に化物屋敷とて同心町のすゑに。層々の屋形に人住ずして荒わたり梢の秋になりて紅葉の盛枝に見なから人も手折す萩薄おのつからにみだれ唐蕙道を閉て狐狸の遊山所となり松にとまり鳥もおそれて百年も此内を見た人もなく語り傳へり。其折ふし新參の侍に梶田與右衛門とて軍法者當分三百石御合力にくだしおかれ御國へ相勤町人の屋敷をかりていまだ妻子もなく暮しぬ。御家に有たき侍なれば年寄中も懇意にしてよろしき明屋敷もかな奥右衛門に申請て。爰に落つかせたき内談あれ共幸の所もなし。有時化物屋形の事を奥右衛門承り届け。此屋敷を申請度御訴申上る所に子細あれば無用と。老中御取次もなかりき再三言上申せば願ひの通りくだし給はり。急に屋普請して移りぬ。此心底つよきに恐れてや五七日も別義なく住濟しければ奥右衛門武勇沙汰して國中の譽者なり有



夜時雨て板屋に目覺てあたりをみれば八角の牛の形せしもの劔ならべたる羽をひろげ枕近く寄時あり様を見定め先年人のおそれしは是なるべしと双物に心をつけず立出手どらへにしておのれが形を見んと。此一心通じてや其まゝ消て跡なし。其後十四五なる女と顯れ貞宗の刀孫六の大脇指拵の有のまゝ持來りて。自は此御屋敷の片陰に住者なり今迄は人をたぶらかし此打物奪取しが何事もおぢさせ給はぬ御心中又ためしなき御侍向後悪心さつて世の人にわざを致さじ。此まゝに住なれ穴御借あそばされ下されよと尻懸短く申にぞ。奥右衛門おかしくて扱は年へし狸なるべし。其理りならばゆるし置也。弥人に形を見する事なかれ。今宵は殘更淋敷に夜すがら是にて語れといやがるを引とめ。無心なれ共頼むと明かた迄肩をうたせければ。後には狸あくびして自から面影まことをあらはし。身の毛立てにげ行それより何の事なくおさまりし。密に老中迄二腰の事申けるに。取よせおのゝ改め給へば慥に見覺へ。前に此屋敷に住れし風間治右衛門さし替にまきれず。奥右衛門は天晴勇者と御耳に立同心三十人預り國中吟味役を仰付させられし御目かね邊はす万人によるしく此人なくてはと一家中思ひ付時生國但馬より早飛脚を仕立遠親類のかたより申越。當月二日牛の上刻の事。御同名奥之進殿不慮の喧嘩相手は戸塚宇左衛門即座にうつて立のく。風聞仕るは方人救多の由其者分明ならず。宇左衛門は四國へのきたるやうにさた有。其元御心底察し奉るのよし。奥迄讀にいとまなくすぐ御前に出段々敵打たき願ひ。御承引あそばされ。尤兄の義なれば堪忍成まじ。首尾よく打て追付歸參の時分は先知一倍の御加増と有難き御上意をうけ。翌日豊後を立先伊豫舟に取乘て松山にさがりぬ。此所に母人の妹縁に付榎本才兵衛と申人嫉辮なれば此許にしのび居て土佐にも行譚岐にも越さまゝ身をやつし敵の有家を尋ねしに。深く身を隠してしれがたく。二年あまり心をつくせしかひひぞなく。むなしき年月を爰にて送る無念なり。奥右衛門武藝いづれ思もなし中にも軍者なれば。此國に逗留のうち密に所望して城取の大事をおのゝ傳受する事は武道の第一なり。其弟子のうちには大津兵之助といへる美見人今年十七心ざしつよくしてやさしく。人の思ひをかけし若衆なるがいつの程に

か奥右衛門とふかく成て。此世の外まで申あはせて心中残さず互にうちとけしうへに。離うつ子細を語りければ。兵之介横手をうち。是には不思議御仕合あり。其戸塚宇右衛門は私同名越前に有し時の古傍輩のよしにて親仁存生の時分兩度迄尋ねこし。其面を見覺へければせんさくすべきたよりとよるこぶ事のためもし。奥右衛門なを力を得たり。又あるとき同國今治に居るよしつけしらすもの有て。近日立越折ふし奥右衛門散々腹中をいたませ頼みすくなき程なやみしを思へは惜き命なりと兵之介昼夜枕をはなれず。大かたに養生を仕立心に諸願をかけぬれば先礼參りに浦邊の八幡宮へ參詣の道にて宇右衛門忍び駕籠に身をちぢめ兩方にたくまじき若黨めしつれて濱より小船に乗移るを見付て是は天のあたへなるに奥右衛門ましまさぬ事の残念なりと身をもだへてもかひなし。是よりまたいづくへか立のくべし此時節にうたずは又いつめぐりあふへしと前後をみれば人もなく。取いそきて宇右衛門舟に乗を我奥右衛門が弟なりいつ迄かのがるべしあまさじとうつてかゝれば。宇右衛門下人進を切はなては是におどろき皆々しりぞきける。其内に宇右衛門ぬきあはせ奥右衛門が弟は心得がたし。然れ共むかふ者をきらはすと互に手をつくして切むすふ。しばらくたゝかひ兩人爰に一命おしますふんごみてあひうちに。兵之助宇右衛門が左かいな打をとせば宇右衛門兵之助か左の手首切落す。兩方に引のき息つぎのうちに宇右衛門家來舟に抱きのせ岸をはなれて押出す。互に此身になりて何とて命を惜むぞかへせといふ聲ばかりて残りて。舟は沖はるかになりてせひもなき仕合此まゝ腹かききらんとせしか此段奥右衛門殿に語りて後切腹せんとながらへて嬉しからぬ身をかゝはり切落したる宇右衛門か腕に我手を捨ひあつめ。ひそかに私宅に歸り其まゝ此物語と思へ共折から奥右衛門病中なれば先思案をするに。此事聞らるゝからはよもやそのまゝはおかれじ。氣色にかまはずかけ出万一しそんじありてはかへらじ。本腹の時まで相待て此事をかたるべしと申斐なき命をつなぎ世間へ病中と申なし外科の上手諸内支庵を内證にて頼み神文の上にて養生して疵も大かたなをりぬ。一門かぎつて人にあはず。ふかく取こもりて有しに。奥右衛門氣色よくけふ初立のの杖にすがりて兵之



助屋敷に見舞ければ。奥へ通して只ふたり此程つもの事のみ語るも聞も涙かりせめに申かはせし事ながら念友のふかき意氣地女の契りとは各別なる事ぞかし。互ひのうき晴しに盃かはしてのち奥右衛門扇拍子にして曲舞をうたひ兵之助に鼓所望片手のない事此時迷惑して余の慰みにまぎらかしけるに。謔なをやめずしてつねに好の鼓なればせむと望む左は虚手かいたむとて外科の玄庵に持せてふたりしてうつ鼓は鳴あしく是も興覺て又居相撲と云程に兵之介進み我戀の関取誰にても片手なけとわり陸にしてかゝる時。奥右衛門抱つきてひだりの手のなき事を見出し是はとおどろきいかなる事そと氣を取乱す時ふたつの腕を取出し宇右衛門に出合の首尾有のまゝに語りければ。奥右衛門涙に沈みしばし氣を取うしなひけるをやう／＼に本性になし。大事の身の敵を討ぬうち其心入よはしとしかれば。いかにもいかにも宇右衛門目を打取ての後に分別有とてかけ出しを。袖にすがりて引とめて兼て助太刀の望み殊更此度の心掛り。彼是もつて跡には残らぬ所存と覺悟して。右の段々一つ書にして大殿様へ御訴申上しに意氣道理を聞き召分られ御暇くだし給はり首尾よく歸宅をすべし。一代無役先知六百石相違是なしと有難き御意請て。それより奥右衛門同道して中國に越て。しるべをもとめてせんざくするに但馬の國入佐山の麓に。久松落月院といへる眞言寺によしみ有て是に身をかくし疵養生して無事になり忍びて近在をありく由を聞定め。急ぎ但馬に立越落月院の一里はなれし。淺田村にかりねしてひそかに様子を見しに。兩門共にきびしく人とがむるよしは。弥是に有しに極れりと毎日道筋立かくれ。あふ事を願ひしに。有日宇右衛門は寺かゝりの牽人に日下源五郎といへる者同道して比しも初雪のあした追鳥狩の道具を下ゝにもたせ爰に來る社仕合なれ。奥右衛門飛出るを兵之助引とめて。宇右衛門片手なき者をそなたの御手にかけてらるゝもおとなけなし。爰は私に給はれとはしり寄奥右衛門打せらるゝ汝なれ共日外の遺恨あれば命を我ら申請て打事なり。のがれぬ所さあ太刀を合せと聲をかくる。石流宇右衛門逸業者抜合一命極てはなやかなり。宇右衛門門下人浪人の源五郎兼合より打てかゝるを奥右衛門へだゝりまくり立て。明は五人ながら手を願此明先に驚き立ち

ちりに逃行。兵之介は宇右衛門を切取て是申とどめはこなた様にさし給へといふ。奥右衛門打笑ひ神妙なる御はたらきと宇右衛門が首打て目出度豊後に歸り二度其名をあけて兵之介を伊豫國へ送り届け是御前の御機嫌よく。衆道の情武道のほまれ人の鑑世かたりとなつて猶其後は兄弟のちなみをやめず國里は万里に隔てつれ共互に心をかよはせける。是武士の本意かくあらまほしき事なり。

第三 大蛇も世に有人か見た様

行春の櫻鯛堺の浦に限らざりけり。豫州宇和嶋と云所に手續の綱をおろさせ女まじりに今や引らん。五端帆の舟式艘を出嶋の宿の椽の前迄釣揚させ。潮を湛へて救の魚を放ち。是ぞ正眞の沖鱈。入目を金柑に見なし浪の浮藻を水鉢に作り。此氣色は下手な仙人より増に詠めの長して小船に棹さし。盃流しの一曲を興じてうたふ所に俄に海上震動して白浪舟をゆりあげ水より少し下に五丈ばかりの龍うねり過るを。見る者肝をけし船頭をあらけなく呵てこんな所へ乗て來るものか夕の夢見あしきにこまといふたを。女共がそれでは約束の義理が欠るといふて此様なこはい目をさせると啼出すと着物みなぬぎて大小にくゝりつけ犢鼻褌まで放して泳ぎ支度をする。またかたはらより扱も残りおほい事は飄單をもつて來ればまぎ／＼と水を飲ては死ぬ物をと悔む何も心にかゝる事はなければと祝言してから十日にもならぬ女ぼうが晩から淋しからふと涙ながら我屋敷の方を詠めやりとてもこち共は水心はしらぬと手を懐に入て舷に寄かゝつて念仏くりかへし彼觀音の力を念せは淺き所を得んと讀出すも有。船頭を呼ば取御ゆるされましよ目か舞ましてと船底に息もたてず。其中に石目彈左衛門艦前に立あがりて大躬繩を上段に構へ大音あげ正躰いかなる物ぞ此治れる時津波大平の御代にあやしき姿天晴儼物なるべしと海上を白眼つけたる有様のゆゝしさ。ふしぎや大蛇淡路が嶋の方へゆくときみへて氣色しづかに浪おさまりみな／＼夢の覺たる心ちして又右の汀に漕戻しからき命を我物に



してあがりぬ。其後城下には沙汰有時彈左衛門手柄美々敷咄すにつけて。成川專藏木村土左衛門が臆病の事。いはずしてあらはれしか共誰遮て評判する者もなかりき。され共若き衆の悪口に臆病なる事を。夕の夢み十日にならぬ祝言とはやり詞にしなしける。まだ此さたしかときかぬ男の由來を尋ねられし其夜は五月雨ふりすさみたるつれづれのしめやかなるに小谷孫九郎久米田新平松川太郎八。亭主は井田素左衛門なりしに。此男成川專藏子息瀧之助とわりなくいひかはしたる中にて。今宵は来るべしと宵より手紙に告越ければ。いづれもの長座氣の毒の所へはや瀧之助密に支閨迄音信たるに。親專藏舟遊山の時不首尾のしなくふと耳に入はつと思ひ暫したすみて聞届くれば親仁侍の一分も立ず腰拔の取さた座中大笑ひなれば。是堪忍ならぬ所よし。是までと降つて雨にそほぬれて座を立を待かけ物の見事に打果さんと思ひながら。いやく此事をいひつりてかふなる時はいよく親仁の卑氣耻の上の耻辱こゝは分別所なり。かへつて不孝の料をのがれず。堪忍ならぬ所なれ共胸をさすり齒をくひしばかり。所詮今の物語は久米田新平頼手に不足なしと無念ながら



宿に歸り。其後素左衛門新平に逢とも色に出さず時を過しぬ。其比また太田鬼下といふ衆人舟石流の兵法の師をして一家中弟子となり右の者共一所にあつまり稽古するに。戸入の請太刀折ふし新平にあたりたる時瀧之助さいわひの所と打太刀に出てつゞけて二三本したるに。それではとまるとまらぬと穿鑿仕出しけるに。新平おとなげなくせいて品柄といふては疵かつかぬによつて其證據しれず。生若輩なる口よりいはれぬ事をいはんより。勢を出せばつるしれる事瓜の葛に茄子はならずとつぶやくを瀧之介猶きかぬたくみなればいなたとへを承はることに品柄では證據のしれぬとは眞劍では拙者得いたすまいとおほすか弓矢八幡のがし申さずよく覺へ給へと云捨て歸り。家前の意趣をこれにたくみかへたる心底武士の子程とあり其日の入つ時分に新平かたへ狀をつけ今晚椿原にて仕合致すへきよしひやりて日の暮るゝを松かねに腰をかけて覺悟を極めける其比新平が念比の弟ぶんに富坂弁四郎此事を聞て。只独り爰に來るを五月闇のあやめしらず新平とこゝろへ瀧之助なりと言葉をかけしに弁四郎わざと言葉をかはず。新平にかはりて切むすびたがひに數个所手を眞てしばしたすむ所へ新平來りて瀧之助はいづかたにといふに驚き扱は人たがひかと思ふうちに。弁四郎助太刀に参りたりと云はてず又切てかゝるを飛ちがへてうつ太刀に弁四郎が首後に落とすかさず新平ぬき合ける所へ素左衛門又瀧之助が助太刀に來りてみれば打逢たひ毎にしのぎより出る火は螢のごとく飛みだれ。家前より瀧之介あまた手眞つかれ足もたまりえぬを急にたゞき付られ木の根につまづき南無三寶ところびながらうけ留てあやうき所を素左衛門なるはと勢を付新平とわたしあひて。二打三打うつと思ひしが素左衛門切倒され無念といふ聲を最後に残しぬ瀧之介は弁四郎の死骸を枕にして息をつきたるに。此音を聞て力をおとし口惜くも爰にて兩人共に討つゝ社本意なけれ。何とぞして新平を手にかへ本懐達すべく思へ共五昧つゞかず手を眞てはや太刀打もかなふまじと思案廻し小聲になつて南無あみくくと二三返となへ。誰か有はやくとどめをさせといふ聲に新平氣をくつろげ扱は仕すましたりと立よるを。寝ながら横にはらへば高股切おとしたをるゝ所を起なをりて首をうち。先本



達したりと嬉しきばかりにて次第によはりはて新平がむくろに腰をかけ差そへ腹にあてながら切まてはちからなく何ぞと問し白玉の椿が原の露と消けり

第四 初茸狩は戀草の種

作州津山の古き城下に沼背藏人子息半之丞美少ならびなく。春は限りみちかき櫻を欺き秋は月の満るを颯ると見たへ惱まぬはなし。此所は海遠く久米の皿山と聞えし麓に初茸救生で。草分衣露にそぼち。諸士是に狩して勤の暇を慰み折からのつれづれをもなだめぬ。半之丞もけふは霧の絶間かちに尾花吹あらし静なるに若鶯縷めしつれ落然に立出編笠を被き姿自慢の色香をふくみ嶺の紅葉一枝手折せ溪にしるべの草の庵に立より暫く休ひけるに同家中大道孫之進にかくまはれて國の守を望し竹倉伴藏これも茸狩に片山團右衛門といふ男にさそはれて出しが寂前より半之丞をみて戀沈み跡をしたひて同じ庵にたよりながら卒尔に詞をかくべき便もなく行于所に。半之丞常々詩哥に心をよせ此庵の借と楓林の月と云題の心を草句に二三返。吟聲の艶なるを聞に思ひのいやましけるが。伴藏も兼て此道を好るやさ男にて加様の推量は高き賤しき隔ぬならひ疎忽ながらと即座の對句に教の思ひをこめて綴れば。扱々かたじけなき御心ざしどなたは存ぜすと頂き給ふを調子に竹椽にねぢあがりて名乗あひけれ共。あらはにしては心の浅く酌るゝもはづ(か)しくよい程に挨拶して歸り。其翌日たまり兼て半之丞方へ見舞折をうかゞひ心底をかたれば。思し召千万忝し。さりながら我らごとき者にさへかまひ申者あると申せば事おかし。され共それ程の御深切あまり過分に存する上せめてはと玉の厄の底意なく見えしを伴藏付あがりして御念比の御方はどなたと問ば。是はいな事御尋ねに預り近比迷惑いたす。私程の心ざしに其御詞は御自分様には似合ませぬ。いか程仰られても此段は申さずと念者をいたはるの心ざし面にありはれてつよく云切に力なく承りかゝるからは。承らねばおかず。又存じたる者に聞ませんと歸り。な

んなく聞出しける。是男は本町二町目能登屋藤内とて名を得し町六方のかくれなく。心遣の結構なる御侍。是が兼下に御機嫌取程の器量勿論身袋よろしきにはかまはず。心底のいさぎよき男町人にはしほらしきと思ふ折から御姿を見初一命を御返事なき先に參らせたるよりかはゆがらせられ此三年の念比ぞかし。又此半藏は生國加州の人なりしが。是も水野何がしの流を汲の武道みかきなりしが尋ね行て藤内を門外に呼出し頭から刀の反を返し町人には腰が高し下におれと只一のみに眼を見出しねめ付たる氣色。藤内まづぎよつとして我に是程に物いふ者なし。いか様公儀の權威もありやと三指になつてうかゞひぬるに。半藏刀に手を懸ながら聞ばおのれめはかたじけなくも沼背殿の御惣領を勿躰なくも兄弟分とする事は摩利支丹も憎しと思しめさん。なれ共彼は形を見せ給はず我今弓矢八幡大井の神勅に任てこゝに來る殊にけふ半之丞様の御姿を拜み奉り御流をいたゞく向後よりおそらく桓武帝の末孫竹倉半藏平正澄御後見を仕る。只今八月廿八日より其方彼御門外にもからすねを運ぶ事を堅く停止す。推參千万言語道斷びく共せば首と胴とのきぬくさあ只今返事はくと大道に兩劍を横たへ白昼の往來とどまつて見物す石流の藤内此勢に胸轟き雷の落かゝる心ちしてふるひくいかやう共御存分にあそはし私一命おたすけ願奉りますると涙をうかべけるに不便まさりて半藏は宿に歸りぬ。是程に名を得し男達もさすが長袖のわりなく胸のほむらは塩釜の浦見は半之丞かの男と益造せし事思へば堪忍ならぬ所。世の思はく人の嘲生てかひなく直に屋敷にかけ込て半之丞に逢て段段いひもはてず藤内脇指切付るをひらりとときさりとてはそれには様子あり。先心を鎮て物を聞給へととむるをも聞入す。ひた打にうつ太刀に半之丞右の肩先をあやまり此さはぎに家老家の子共はしり出かけ隔たり藤内を微塵に斬碎き半之丞深手に見へさせ給ふと各肩にかけ内に入。藤内事は慮外者ゆへ打捨にいたしたると奉行所へ斷り。死骸は弟藤八に下さるゝにて濟ぬ。半之丞さまでの手とも思はざりし難き九月十二三日の比より驗氣をえて情藤内仕かたあまりに短氣にて仕損じ給ふ時。我此手を戻すは家來の手にかけてやみくと殺させせまじもの。悔てかひなき



事ながら去年の明日の夜は竊におぬしの部屋にともなはれ。みづから東の窓を明南面の簾を巻てしめやかに語りなくさみ式人が中にかはす枕は傾く月の桂ならてはしるものなく籬の菊の滴りを受けては不老不死の仙薬を求めても契久しからん事を誓ひしに。思ひの外のうき別れ其詞もはや夢になりたるよな。此懐しき心の中をば露もしり給はずはかなく消給ふ時さをそれがしを恨みと思しけん。そふてはない心底を。とてもかなはぬうきせに竹倉伴藏がにくき仕業ゆへまざりかうしなし。死ば俱にといへる人を先に立たる始末これはいかなる因果めぐり来て今のかなしみ。思へば兄ぶん藤内殿の敵は伴藏なるもの南無三寶をくれたり。のがさぬといまだ疵の半も平愈せざるに欠出ては絶入狂ひ出てはふしまろび。現なきふせい親父藏人をはじめつきづの者迄も興覚ながらおししづめぬ。此下心をしれる程の者は殊更哀に袖を絞りける。爰に藤内弟藤八今年十六になれるが兄やみくんと討れたるを無念に思ひ。詩。所詮敵は半之丞年來の心底。蹴したる侍畜生今は欠込て一太刀恨みん。今宵は忍びいらんとは思へ共。仕損じては返て耻に耻をかさぬる菟角時節をうかどひてと是も常々死支度して時をうつし其年の十月十九日の夜半に沼菅半之丞御見舞と云。扱社望む所と身拵して尋常に打果さんと先席間にとをし逢よりはやく半之丞涙を流しこなたに御目にかゝるも面目なし。今迄命ながらへし事は。是を其方へ渡したく思ひしゆへと下着の片袖を引ちぎりて包みたるものを投出して前に臥と見えしを引おこせばはや懐の中にて錯通しを心もとにさし込ながら息絶ぬ。扱包みたる物をあくれば竹倉伴藏が首なり。是はと切目を見るに血ひかず。いづ方にてかあらひて落着たる仕かた藤八あきれ果何事も前世の業なるべきを是程いさぎよき心底しらすして今迄半之丞を恨みたるよしなや是を種として二人の仏米をいのらんにはと出家しぬ

武 道 傳 來 記 卷 四

諸國敵討

目 録

- 第一 太夫格子に立名の男  
形は埋めと武士は朽ざる事
- 第二 誰か捨子の仕合  
腰本の久米情に身の果る事
- 第三 無分別は見越の木登  
敵も一たび主人にかたれぬ事
- 第四 踊の中の似世姿  
舌の劔に命をとる事



太夫格子に立名の男

吸付若良の煙富士を夜見る女郎町。安倍川のさはぎ三嶋屋が格子の前に。立かさなり聞耳を駿河なる時花太夫。相模吉野がつれ哥かはりさんさのふしも。色にうつりて人皆惱みふかく。身袋やぶれ菅笠とうたひしもふるきむかしとはなりぬ。戀は闇こそおかしけれ。出家も頭巾の山深く。茶間屋の客も女めづらしく。旅人も一夜切の慰みにうかれかざし扇をするも有。編笠を人もとがめず。かゝる悪所は互に堪忍することよけれ。折ふし同じ屋敷をしのびの友。青柳十藏榎坂専左衛門此兩人供をもつれずひそかにうき世ぐるひにみだれありき。宵に吞過したる酔の機嫌に正氣を忘れ。無用の口論をして日比のよしみをかへり見ず。刀ぬきあはせて切むすびしが十藏首尾よく専左衛門うつて捨取まはしよく立のき屋敷にかへりきたなしにして世上を聞あはせける。専左衛門弟専兵衛其夜の明かたに聞つけ其所に行て。さま／＼せんさくすれ共遊女町の者相手は知らぬ極り辻番任女言てかひなく。先死骸を取置て其後屋形に立歸り無念かさなり身をもだへて。うち手分明ならねば是非なし。然も掟をそむき夜中に屋敷を立出。其上所あしき身の果彼は御立腹あそばされければ。御長屋にたまりかね大横目衆内證申立のきしが。専右衛門女房のなげき殊に七歳になる専太郎。此式人専兵衛介抱して清見寺の近里にしるべ有て。俄住みのかり枕夢さへつれあひの事面影に立そひ。寢覺に専太郎が父様はと尋ねし時。なを又心も乱れて世にながらへて物思ひ身をあた浪に洗めんと妻戸あくれば浦淋しく。三保の松風吹つゞき月寒わたる小舟に。蟹の呼聲女の聲子をおもふての芦火焼。いやしき身にさへ心ざし殊勝に清見寺鐘も耳にひゞき。むかしも此里の母子を尋ねゆき近江なる三井の古寺の事共を思ひ出して一しほ袖をしほり。我相果なばさぞ専太郎が歎くべし。女の心のはかなや夜を日につぎて成人させ。是非に敵をうたせてはと覺悟しかへて身かため。愁を胸にふくませ面は鬼に見せて其後更に敵かず専太郎がひとり遊びの傀儡切竹馬を捨てさせ。女房

ながら打太刀して兵法をはげませける。専兵衛は安倍川のほとりにしのび行て喧嘩の次第世の噂を聞ともいよ／＼相手がしれざりき。この事無念なれ共是非なく色々思案めぐらし。兼て愛抄悪敷人もやと吟味せしに其思ひ當りし事もなし。分別つきはて世間の人にあふも耻かしく。脇道にさしかかり傾城町より野をわけて川邊寶臺院の前をすぎて狐が崎に暮かゝりしに。冬野の草枕して乞食四五人あつまりて。生あれば食有。是を代なして中間の酒手せんと黒き羽織をひとつ袖をかへして是を今仕立させば小判式兩にては出来まじ。長も式尺七寸あり。よい買手あらば捨ても三十五匁。五人に七匁割と算用する聲聞て立よれば。専兵衛勢におそれとがめぬ先に聲をふるはし。是は此程女郎町の喧嘩の夜拾ひましたと申にぞ取あげて紋所を見しに丸に水車これぞ青柳十藏が定紋なり。扱は敵しれたの嬉敷此羽織を落せし人は何かたへ行そと尋しに。それは存ぜず人立さはぐ中にてひろいましたと申に偽りはあらじ。此羽織我にくれよとて有合せたる金子をとらせ。此紋所を證據に十藏をぬらひける。此さた屋敷に聞えて十藏妻子もなき者なれば。立のき行がたしれずなりて専兵衛なを悔て。おのれとしれぬうちこそなれ。天をわけ地をさがし。此本望とぐべしと一筋に思ひ定め。十藏生國出羽の山形の者なれば。爰に立越一年あまりもねらひしにいまだ古郷へは歸らぬに極り。又駿河に戻りてむなしき年月をくるうちに。頼みし宿のあるじ一子に婢をむかへけるに。草ふかき所なれば祝言の作法も弁へなく。専太郎母人に尋ねける。此人都そだちにして万事心え給へは銚子の取まはしすへ／＼の女にをしへられしよそほひ。昔の姿残りてうつくしき生れ付なり。専兵衛は眞那板にかゝり結び昆布など拵へしが其夜から出来心にて兄婢を思ひ初。武士の義理をもちへり見ず。寢間に忍びて言葉かず／＼つくし人の聞え世の思はくをもかまはわば一生の迷惑爰に極り涙袂にあまひ。さりとて天命をむき道ならぬ御事思ひもよらぬ御調諳いかに女なればとて。専左衛門殿にはなれ後夫をもとむる心底にあらずと道理至極の斷り。専兵衛更に聞分ずして猶／＼無理を進み夜着の下臥する時。今は是非を一つに思ひ定め肌刀をぬきて。専兵衛が脇腹をさし通し其刀にて胸をつらぬき惜や甘



四の春の夜の夢とはなりぬ。亭主悦びの中にかゝる難義に逢。此人の親類もなきからを取置て思ひもよらぬ無常を見し事ぞかし。其後專太郎九歳になればおとなしく伯父專兵衛を恨み母をかなしみながらへてせんなしと。命を捨るを抱とゞめ武士の子としてしれたる親の敵をうたずして。今空敷なり給はゞ草の陰なる父母さぞ口おしかるべしとさまざま申を聞わけ此上ながら頼むと涙をこぼすを見て。心なき野人迄哀れみをかけぬはなし。それよれ世上をしろためとて清見寺の膏藥に遣し。藤の丸やの見世に置しに美兒なれば旅人の目に立すくに通るはなかりし年の浪沖津にかさね。十三歳になりて當年は父專左衛門七年なれば。敵十藏が行衛をさがし出し首を仏前に手向んと。いづれもに暇乞て思ひ立行心入石流侍の子也とてをの涙にくれける。めしつれし一人は親專左衛門につかはれし吉藏といへる小者なるが。むかしの御恩に尋ね出此時のうしろみする社たのもしけれ。十藏面も此者見しれば是を頼みに先東路にくだりける。此事十藏傳へ聞て若年の氣をつくし。我を打べき所存專左衛門子なりつら。世の有様を觀するに菟角は夢に極まれり我專左衛門を打て後其まゝ切腹すべきこそ武道なれ。さもしき心底おこりて世をしのび人のそしりを請ぬる事もよしなし。我かたより名乗出て子細なくうたれて專太郎が本望をとげさすべしと。はるくくの國里をいそぎ清見瀧に尋ねのぼれば。專太郎は東國に行と聞て歸れば北國にまはり。西國めぐれば南海に行一年にあまり逢ざる事をとけしなく。我生國出羽の羽黒山の麓寺觀音院にて待へしと。興津川に札を立置其身は東にくだりけるが。いつとなく疝氣になやみ様々養生するに頼みすくなく世のかぎりで見えし時。觀音院をふかく頼み我事つね申ことく。人に命を預りし身なれば。今となりての病死。ざりとは武勇の本意にあらず。然りとて共時節の命なれば是非なし。死去の後形を此まゝ土中に筑込。專太郎尋ね來らばたとひ白骨となる共。二たび我を掘出し敵をうたせ給へと健成詞殘してつゝにむなしくなりぬ。十藏遺言のとほり其からだを取置ける。專太郎は諸國めぐり來て沖津の札を見るより。出羽の羽黒に立慈觀音院に名乗入しに。住僧はしめを語り給へば。專太郎おどろき折角安にくたりし甲斐

もなく敵を手にかけざる事の殘念なり。され共十藏殿心成うたがふまじきは清見寺迄尋ね出られし所男なり。此上のねかひ其死骨を見ずしては浮世に心の殘れり。それ見せ給へと申せば。法師おつ取鐵して塚のしるしを堀のけ形を見せけるに。はや百日あまりも過けれ共。ありし姿のさのみかはらず。生ある人の眠れるごとくなり。はしり寄て聲をかけ。榎坂專左衛門が世倅專太郎なるが親の敵のからだなればうつといへば。十藏死骸眼をひらき笑ひ負して首さしのはす。此心通を見て猶いさきよく指たる刀脇さしをみれば。双引にして目釘竹をはずし置。專太郎に手むかひせずたるゝ覺悟の心入ためしなき男なり。此後恨みはなしと元のごとくに埋みて其跡ねん比にとふらひ。今は世界に望みなしと即座にもとゞり切て觀音院を師と頼み。出家堅固に勤めける。をしや感をまつ花の帽子身は墨染の櫻ちる世かたり

誰捨子の仕合

心の海を横わたしにむかし嶋原の舟つきに。辻岡角弥とて浦の吟味役人して有しが御奉公疎略して。明暮奢りを極め京より美女を取よせ。其上他國よりの縁組をかたく御法度を背き。泉州堺の手前よろしき町人の娘をよびむかへ。さまさま我まゝかさなりしを家老中ひそかに救度冥見くはへられしに。一圓承引いたさず女を幾人か手打にせし事。其外十二个条の悪事横目役より言上申せば御兪儀極り。榎崎茂右衛門矢切團平此式人に仰せ付させられ。角弥打へき御料の御書付くだし給はり。兩人上意請て。角弥濱屋敷に案内なしに入て。仰せ渡さるゝ段々聞給へと茂右衛門書付讀仕舞へど。團平おかれて不首尾の時茂右衛門ぬき打に子細なく角弥をとゞめまでさして立のく時。團平言葉あらく取前申合て鬮を取。其方は个條書を讀役此方打役に極めしに無用の出來しだて。入幡堪忍ならずと眼色かへてつめかくる。茂右衛門すこしもさはがず此義二人承れば。いづれか前後の論に及ばず是兩人の働きなり。角弥首尾よく打取こ



そ仕合なれ。御前の御機嫌なるべし急ぎ給へと首羽織につゝみ立のく所を。うしろより茂右衛門を切付しに比興者とぬき合せ。團平にうちかける太刀先さがりて終に討れにける。死骸角弥がはたらきのやうに取なをし立のく所へ歩横目千本勝五左衛門かけ付しに。我手柄のやうに次第をかたりけるに。物になれざる男にて死人改めもせずして團平口上の通りを我見たやうに申あぐれば。團平一人のはたらきに成即座に百石の御加増下され武士の面目世の聞え彼是よろしく家榮へける。茂右衛門妻はしらぬ事とて軍後をかなしみ。日比は人におくれ給はぬ御所存なりしが武運つきぬればせひもなき世の中に残りて住もよしなしと二十一にて髪をおろし山居の身なり。夫のための香花今は心もひらけて。出家堅固に勤めけるにも明暮妻の事のみわすれがたし。茂右衛門一子もなければ其家絶て。諸道具は其兄茂左衛門方に取のけ後家びくに。は是よりはごくみを遣しける。定めなき世のなりつらきは人の心ざし。團平其後は世間のよきまゝにいつとなく奢りて人皆是をにくみし。殊更家來に情をかけずひとり。恨み申ぞ因果なり。有時若等の九市郎と申者紙細工ひ付られ枕屏風を張立けるに。仕立悪敷とてさんく無調法と言葉あられなく蹴立られしを。主人ながら氣色つねに替れば。長屋に追込おかれてうきめに逢けるをのく。託言すれ共聞入給はず。ちかくに成取極れり同じ屋敷にめしつかはれて腰元の久米といふ女。いつの日か九市郎といひかはして。二世のかたらひなしてすゑくひ一つの願ひ年の明行事を待うちに此難義かなしく。雨の夜人しつまりて後九市郎追籠られし長屋の窓に立忍び。たがひのうきを語りつくし我命をとらるゝ程の事にはあらず。ざりととはむごき仕かたなり。此怨念外へは行まじそなたもかく成行身の程さぞ不便に思はるべし。何事も主命なれば是非もなし。され共身にあやまりなくて死る事後の世迄の迷ひなり。旦那に此恨みをなして此家失ふ事こそあれ。日外の上意打柏崎茂右衛門殿手に掛て角弥殿をうたれしに。主人おくれて首尾あしき故に茂右衛門殿を角弥うたれし處を切伏たるやうに御前へ披露申されしが誠は茂右衛門殿を且那だまし打にして世には手柄ふれける。是畜生なれば此事茂右衛門殿見茂左衛門殿に告しらせして主人團平をない物に

せば我相果ても思ひは残りじと涙をこぼす。とやかく歎く内に夜も明わたれば別れの後。市九郎を引出し慮外者のこゝろ立て手打になりける。腰元の久米は屋敷をぬけ出茂左衛門殿にかけ込。此段く語り舌喰切夢よりはかなく消ける此事一家中の沙汰となりおのづから天命のがるゝ所なく。團平非道あらはれかゝれば。たまり兼ねて其夜屋敷を立のきいよいよ悪人に極れば。其時の横目役千本勝五左衛門義無念に極り切腹是非もなき仕合也其後茂左衛門家老申まで御訴認申は茂右衛門事弟ながら是は各別なれば敵打たき願ひ申あぐれ共世の御仕置たゝねば子方の者詮儀してうたせとの仰出されなり。茂左衛門にも娘ばかりにて男子を持たざしあつて分別及ばず。御暇申請て浪人の身となりて諸國を尋ねめぐり。二年過ての秋の比江州志賀唐崎此兩里に有よし聞出して。相坂山を立越て関寺の邊りにして。いまだ誕生日も過まじき捨子を拾ひて名を茂吉と改め。乳姥に抱せ大津の屋形に行て此世倅親の敵打の御帳にしるし。それより有家を髓に見出して八月十四日時節を待宵の月見。所の人をさそひ。團平濱邊に出しを名乗掛て打濟し。姥抱ながら茂吉にとゞめをさせ天晴はたらき残る所なし。團平が首うつは物に入させ本國に歸りさまに。茂吉に金子拾兩付て藪の下の真岩切の許へ養子にとらせ。茂左衛門は肥前の國に歸り。團平打取上方の首尾所の御奉行よりの添状さしむぐれば殿の御機嫌よろしく。先知に式百石の御加増くだし給はり。母衣大將に御役替までなし下され武勇此時國中に其名をあげる。茂吉事筋目はいかなる者なり共。茂左衛門が才覚にて一たび茂右衛門が一子に仕立ければ。急ぎよびくだし茂右衛門名跡を相違なく継せ申せとの御意有がたく。大津に人をつかはし茂吉をよび寄九月九日の御礼日に御目見すまし家の悦びをかさね菊酔をすゝめて。千秋樂を謡ひ柏崎の名をいはるけるとぞ

無分別は見越の木登

肥後のむかしの國の守なる御城構の外新造作の門櫓長屋作り美敷敷立ならびたるはどなたの御屋敷と尋ねければ。

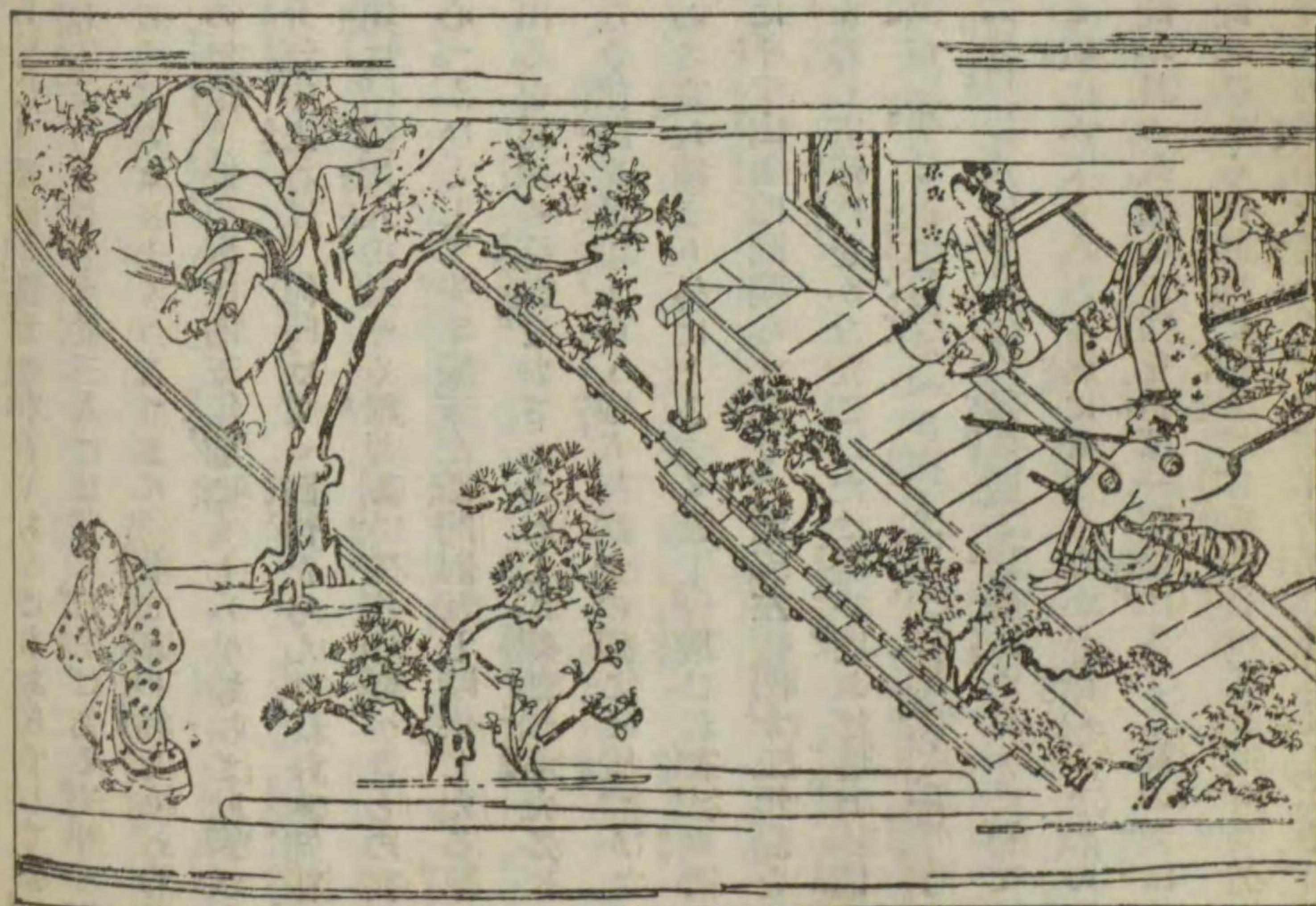


是は彼出頭に暇なき大壁源五左衛門といふ新參者。纒廿五石より三年の中に式千石とりあげたる者の拜領の地なり。今時は武道はしらても十露盤を置ならひ始末の二字を名乗ば何處でも知行の種となりて譜代の筋目正敷者はかならず先知を減少せらる。世は色々にかはりて今より末は諸侍たる者刀の代に秤を腰にさして商ひはやるへしとさたする時。源五左衛門が一子小八郎三才になりしが。折ふし五月の半筑山に楓の大木ありて其梢に若葉千染なるを。童心に急にほしきとむつかりけるに。中間を木にのほらせ其枝此枝おれと差圖するに。隣屋敷は安森戸左衛門とて家久敷侍萬に折目だかなる生れ付ながら。けふは非番の暇にて奥の間取はなして。内儀と只ふたりしめやかに物がたりし勤の苦勞も此たのしみあればこそ何心なく。假枕するをかの木にのぼりたる男。遙に是を詠め。夫婦そうなが心地よくあそぶるゝよと望の梢をば切ずし見まはすうち。戸左衛門見付てあれは源五左衛門屋敷なるが。無作法千万なる木のぼり近所の内證まで見おろすに。斷の使は來るかといへば。いや何共申來らずと云。其身常々殿の權威をかりて古座の諸士をないがしろにするさへ憎しと思ふに。此ことはりなきはいよ／＼踏付たる仕かたと。木より半分程をりかゝる所を鐵炮二つ玉こめてねらひすまして打ば。たゞ中氣もたましるもぬけて落ける。これにおどろき源五左衛門にかくといへは勿論此方より一往ことはりなきは無念といひながら。あまりなる仕こなし堪忍ならずと戸左衛門かたへ行て。事わけ二言といはぬさきに抜合せて打太刀源五左衛門が長刀鴨居に切付引かぬるを車に払ひたをし。留めまてさして今退と奥にしらせて門外に出れば。源五左衛門が若黨共さてはと切てかゝるを。式人切臥それより直に立のきける。此事大守の耳に達しければ。國のために拔郡忠功有しものと知行は召あげながら小八郎に二十人扶持下され思召子細あり母に養育致せのよし仰下され。戸左衛門は子なきによつて家絶にけり。されは家々の世ざかり限り有て源五左衛門屋敷今は身躰に持かね御物あがりの岩井惣入に下され。小八郎は外なる柳にうつりかはる世や。此母もそのかみ源五左衛門と忍びがたきを忍びいで。當國には露のゆかりもなかりしが。今は頼みなをたへて此八九年の間が憂思

ひ後家の身ながら幼穉者を撫育あげ。成人するに付ても過し人のおはさばいか程か悦び給はん。それに引かへまた行末のおぼつかなくいつか敵を打戻て二度大壁の家を榮へを見まほしく。今はゝや小八郎十五歳になればある夜ひそかに始終の子細をかたり。殿様に御暇乞で思ひ立べき由ふくめけるにおとなしくうなづきて。我三歳の時ならば今迄空敷目ををくりたるを。世間にもおくれたりと後指さしれし事の口惜。逆の事に四五年前にもしらせ給はゞ此御恨みは有まじと云にぞ老母もいさぎよく思はれて。老中瀬良内藏之介迄申上れば。何時にても討得たらん時には本知相違なく下さるべきよし仰出され。殊に本望達する迄は路金入用次第に。御用人の其やく増見勘六方迄申越べきとの御事有がたく首尾残る所なく宿に歸り二月十四日に首途祝ひ。母の心づかひとして先年源五左衛門討れし時供したる草履取自然の時の目代に其假抱置て吳々頼て主従式人同十五日に立出るを見送る迄涙をおさへかねしが親他國者たるによつて當所に縁類兄弟とても助太刀後見する者一人もなく定めなき旅路を幼稚ものゝ独り行武士の道こそ覺つかなけれ。目出度討戻て母が心を慰めよとて此詞を暇乞にして立別れぬる哀れ袖より外にとふ者もなし。願ひは鶴が崎の八幡に祈り思ひは鐘が淵に沈む心ちしてうきを戸渡る舟に漂ひ陸にイ子山陽四國殘らず巡り。源五左衛門十三年忌をはや美作誕生寺にて竊に志を施し。それより津の國難波の大湊を尋ね五畿内をかなたに吟ひ明れば春日山霞立初る今朝になりぬ。遙に故郷の空を詠めやれば山上に山あつて幾重重なる旅衣歸るべき程も白雲の往方のみ馴しく。世の哀れは我ひとり御社ふし拜みて。人泊る宿に歸れば門松の氣色に千代をうたひ。幾久敷と屠蘇酌かはずに付ても我身の上の春を思ひ。古郷の老母の事いかにおはしけん。これも氣にかゝりかれも胸にせまりながら旅のかりねの初夢うつゝにもあらず。老母はる／＼の國里たつね來り給ひて。此年月の久敷事を指を折ば一年纒にあまる袖の涙は西の海。浪の立るにもそなたの行すへのみ胸にせまりて馴しく。此思ひならば諸共に連立て本望を達せん物を申斐なく跡に残りて。今のうさつらさ草の露共消へき命なれ共せめて一たびの音信を聞たく。十三年の吊ひ迄は待しがそれに



も便りの傳なく淨雲寺の同じ者の下にもとは思ひ極めながら。一日／＼と暮して告わたる鳥と同じく鳴明し。今は姿をかへて彼人の後世いよ／＼祈る斗なり。只とにかくこがれ死ぬうちに今一たび覺ての對面を願ふ心を力にする命もしれず。うらめしき浮世の中のならひとしほ／＼と枕にイ予給ふと思へば。曉の鐘に佛消て寢覺かなしく召つれし小者を引起して夢の物がたり。聞ぬ先より涙を流し私のまざ／＼と見しも是にたがふ事なし。御袋様の御歎き御尤に存するに付ても運のつよき敵の行衛と互に男泣いか程思へばとて此まにて國本へは歸りがたし。これより東海道にかゝるべしといへば。僕すゝめて見かけたる敵にはあらず。一先忍びて御歸りあり御袋様に御對面なされ其上にて又何方へ成共御出然るべしと云にぞ一には孝の道筋豊後まで行ば。しるべの本質猶右衛門方からなり共云つかはし本望は遂され共。我々息災の様子ばかり成共知すべしと。それより引かへして又西國におもむき小倉より歩行ゆく道の側なる休茶屋に老母疲れたる躰にて腰掛にやすらひ給ふにおどろき。是はいかなる事と先だつて敵の有家今に知され共かやう／＼の夢見よりまづ御め



にかゝらんと存じ。僕の宅平にすゝめられかひなき歸國ながらといへば。老母も國元の中／＼あるにもあらずして尋ね出たる越かたのうき思ひをかたり諸共に本意遂べき願然らば又北陸道へ心ざし主従三人になりて行程に今は江州に立たる鏡山の里に着ぬ。爰にて思ひ出せばを源五左衛門殿生國は此國打原とやらいふ里より幼稚で城下に出動め給ひしに。十六才にて爰をも立退給ふとながきよつれ／＼にかたられしが耳にとまりぬ。もし大壁のゆかりあらばとひて見まほしきと打こへひそかに聞ば。沢山にころき奉公人に大壁六平といへる男ありと。つたへ聞てそれに尋ねあひ。源五左衛門何十年前以前當國去ての後今迄の首尾かたたるれば。六平横手を打てそれはわか爲には現在の兄なり。此上は敵の有家根を堀て葉を断べしとこれも御暇申て打つて行に。美濃國関原にて俄に時雨して晴間を待うちに。隙とり日を暮し難義なる所へ追剝殺十人むらがり來りて四人を中に取こめて。せひなく切むすびけるに身は長旅に疲れたるに足場あしく。され共小八郎が手にまはる程の者難倒し立歸りて見てあれば。六平宅平老母はや切伏られ給ひたるとみへて念仏かすかにして息絶ければ。南無三寶とむなしき骸に取付て呼と歸らぬ玉の緒の扱も是非なき次第。頼み切たる者共も今は野末の。薄より外には思ひもよらぬ事に独残り給ひし母まで双にかけ。年來の敵は打ずしていまやしにうきめをかさぬる事。是程侍冥加にも盡ぬる者か。よし／＼是迄とすてに自害と見えしが又心を取なをし。兩親の中の敵責て一人も孝養にせざる事腑甲斐なしと我となだめし心のうち生る心はなしに三人のなき骸片里の庵に頼て埋み。名をばうづまぬ武士のかひ／＼敷其所を無念ながら立退同じ國の府に着てしばしは爰にとまり。世のありさまをうかゞはんためさま／＼手だてをもつて其府の饗大将。白峯村右衛門といふ男に半季さためめとなりて。ある時村右衛門が若黨と共に長屋住るの木枕をならべ。四方山の雑談のついでにお手前の生國はいづくと尋ねける。詞を聞ばまさしく我國の者なり。何と返事すべしと工夫めくらし若また其ゆかりもしらずと思ひ。わざと肥後の者とこたゆれば。此男は戸左衛門國より召つれたる一人の草履取あかりなれば同國なる事を聞とがめどなたの御屋敷に居



られたといひしに安森戸左衛門殿に奉公したりと云を聞て。彼男扱は安堵したりよいかげんに嘘つく者と思ひすまし。まづ敵の末にてもなし。され共旦那の名を聞覺て今は家の絶たる事をしらず。嘘つくがにくしと思ひそれはそちの覺へちがひなるべし。其戸左衛門殿は十四五年以前に肥後を立のかれ跡はよの侍衆の御ざるはづなり。こちかよく覺へて居るに大きな嘘つきとせむらひけるにこれは面白き事をいふと覺て何と人をいつはりものとは迷惑いたすして。其戸左衛門殿実正國には御ざらぬ證據ありや。其證據なくては我いつはり者に成て一分立す堪忍ならずと。寢てゐたるを起かへり胸指とり廻せば。此男臆病者にていかにも證據を出すべし去ながら。誓効立給はねばいはぬ事といふに。成程立べしといへば。その戸左衛門殿は。則今の旦那なりしが隣の源五左衛門殿を討て退れし時。我独り供して丁ど是歳で十五年國へもどらぬ。是が證據じや寢堪忍し給へといふを聞て。是天のあたへ優曇花の開くを待えたる心地して。今はかけ込て討べき忍ひてや討んと。様々分別しきりなるを色につみ其夜の明るを待兼て。朝日に我古里の氏神を拜奉り。此度本望を遂げせ給へと祈りける所に。村右衛門登城の支度して出るを源五左衛門が一子小八郎と名乗かけると村右衛門うけとめけれ共。念力に打太刀即座に切戻せ今は是迄と嬉涙をこぼす所に。村右衛門若黨六七人ぬき連て互に手は眞ながら戦ふ音におどろき近所に大目付役の稻村與助かけ付しに。はや寢前村右衛門様子をかたりし者も切伏られ過半疵を蒙り立しるく所を。是はいかなる子細とふに一樣に口をそろへ主を殺す悪人といふに。小八郎は親の敵なりと詞たふかひにもなりはしつまらざりけるを。與助しばしと兩方へ引わけて様子を聞ば。敵にまがひなしと段々咄しければ。其比の太守小久嶋民部殿に申上あけしに然らば彼者の國へ使者を立へしそれより中は小八郎を與助に御預けにて。谷見森右衛門使者に仰せ付られ筑紫に下りぬ。しれぬは人間の命。源五左衛門に不便加へられし殿は過し九月十九日に日腫といふ病にて逝去なされ。いまた百ヶ日も立ぬ所へ大壁小八郎事段々書付をもつて奉行所迄申來るよし。家老瀧良内藏之介へうかゞふに及ばす。御代がはりて大壁の家は今迄立てもつすべきひ

ね内へ若殿の御内意なれば。たとへ鼻風に存する者ありても取あげる者一人もなし。ことに源五左衛門出頭するに任せて前後に眼見へず。權威己がまゝにふるまひしに付て意趣ふくむの族使者に立むかひて當家の扶持人ににあらずといひて。大儀共いふ礼義さへいふにおよばす歸しければ。使者美濃に立歸り此段委細に申せば敵といふ證據なきによつて主を殺す科にさだまり哀や年來のうき難義母迄に後ながら本望は遂たれ共賤しき者の手にかゝりて果しをかたりつたへてあはれなり

踊の中の似世姿

松坂越て伊勢の國日和打つゝき。隈なき月に。終夜の大踊餘念なく詠めし時。常は古勿眞實にかまえし男も釣鬚に様はかへながらそれと知られておかし。その御内儀もうかさされ隣の婢子にかり衣襖振袖にしなつてむかしにかへるけはひから。娘はことさら振よししなよしと譖らるゝをうれしがる心は淺間山胸は煙のたね。かゝりし程に東横町より無紋の挑灯救見えて。眞先に金の烏帽子をかふりたる男。唐團をかたげ跡は同じむらさきの絹縮に紅裏ひろ袖にして。筋びろうどのはやりむすびばつばの大小一様に六人深編笠の目に立て外の出たちはけをされぬ。彼金のをぼし殿音頭とりはじむるよりおもしろやと太神も御影向末社のぞめきこゝなりと月の入方もなげかしき時。此踊俄にくづれてもつての外の騒動は何事ぞと思ふうちに。はや北南の門をしめて此町内へ入給ふ人子細有て。腰の物をあらためますると所の宿老たる者牀几に腰をかけ各々名を聞は。私は魚屋町の五郎右衛門世倅私は柳町のたれかれと脇持さし出して独りゝ通り。扱かの六人組の風流男呼出せ共出かねて編笠も脱ず。様子はしらねとあやしくとがめらるゝ者はかれならんとさたして無理に引出せば男にはあらずいづれも色ある女の姿やつしたり作りたりと騒々しき中にもおかしく。おもはゆげなるつやなしてさしうつぶきて物ははず。よしゝ女のなすわざにあらず今は是までなりと



若き男をよび出し是程にいたしてもいづれをうたがふべきものなし。まづは切れ損され共おのつとあらはるゝ事もあ  
 るものなり。御本社の見通し其時を待給へと皆々戻り足にみれば西側の軒の下に斬倒されし男。是故の穿鑿ならんと  
 思ひ合せける此討れし男は當國夷町の邊りに鳥羽田勘助とてかくれなき銀かしの浪人弟助八と一所に來りて少しの間  
 の事なり。其後色々手便をもつて此敵を尋るにしれざりけり。爰に勝浦孫之丞とて手跡の名高く同所の町はづれに隣  
 國の大名より小扶持をくだし置れしにまださだまる妻女なく。独寢覺のさひしきに此夏より妾女を尋ねけるに。二  
 皮目なれば口唇あつく。姿すらりとすれば。鼻下く漸くと裏町に年比まで思ふまゝなるがあたりて是を寵愛して。吉野  
 を目前にながめ。更科の月も日もあけずかはゆがられけるに。其明の年の春より行先はしらねと毎夜宿には寢ずして  
 淋しき留主ばかり女の身にしてめいわく。おそろしくて夢もむすばず。さても人の心は是程にもかはる物か去年まで  
 は一生もはやにう房は持まし城下へ出て知行にもなる時は。我を本妻になをしてとうれしき言葉のかずくも仇に  
 なり。ます花に思ひかへられおもしろき事もなしと。有時孫之丞に段々詢けは氣色かはり立腹して散々に打擲しおの  
 れ思ふ子細なくは打ころしてもあかずと無興しながらまた立出けるに。此女心の淺く瞋恚に身を焦し所詮此意趣いか  
 程いひて我力におよばず。一大事を白狀して腹たちをやめんと思ひきはめ。孫之丞留主にひそかに立出て勘助弟助八  
 所に行て忍びて呼出し。私は勝浦孫之丞と申ものに召つかはれの女にて寵愛ふかく思はれしを。常々わろぎま  
 はされ本町の小兵衛といふ小間物賣と密通したるとくすべられしに。わたくし何心もなく七月十六日より養父入に  
 親里へ歸りし時近所のおさな友だちにもよほされ。男裝束の物ずきして大橋町にて踊るときかかれたるよしにて道な  
 き事もありやと。跡から付けてまはされし時勘介様の御姿小兵衛か風似に似たるを見そこなひて闇打にして足ばやに退  
 れし跡にてせんさく有しか共しれざるをさいわひに忍ぶ躰もせず暮さるゝ其上私の主ながら非道救へゆへ注進の  
 ため申参りぬ今晚御忍び有てうち給へ寢間の様子はかやう／＼とくはしく致ゆれば。勘八勝手を打て候へ過分至極

まづ是はと金子拾兩取いだし打戻の上はまた御礼申さんとよろこびてかへし。其夜の夜半に忍び入は折ふし孫之丞  
 留主にて彼女ひとり燈火ほのかにひかりながら淋しきあまりに夜着引かづき高聲して前後しらず臥るたるを勘八孫之  
 丞と心えてはしりかゝつて胴切にして今は本望とけたりと首を見れば是は仕損じたりとおどろく所に孫之丞歸るを敵  
 はそれかと段々述べれば今はのがれぬ所とわたりあひて是をも首尾よく打戻せ始終奉行所へ斷申上れば。敵なれば  
 勘八は別義なし彼女は主の訴人の科人なれば獄門にかけて耻をさらされける



武道傳來記卷五

諸國敵討

目錄

第一 枕に殘る藥透ひ

法師むかしに歸る暇の事

第二 吟味は奥鳴の袴

意氣地を書置にしる事

第三 不斯に心懸の早馬

なげきの中に嶋臺出す事

第四 火燧も歩行四足

鉢敲は我國声の事

第一 枕に殘る藥透ひ

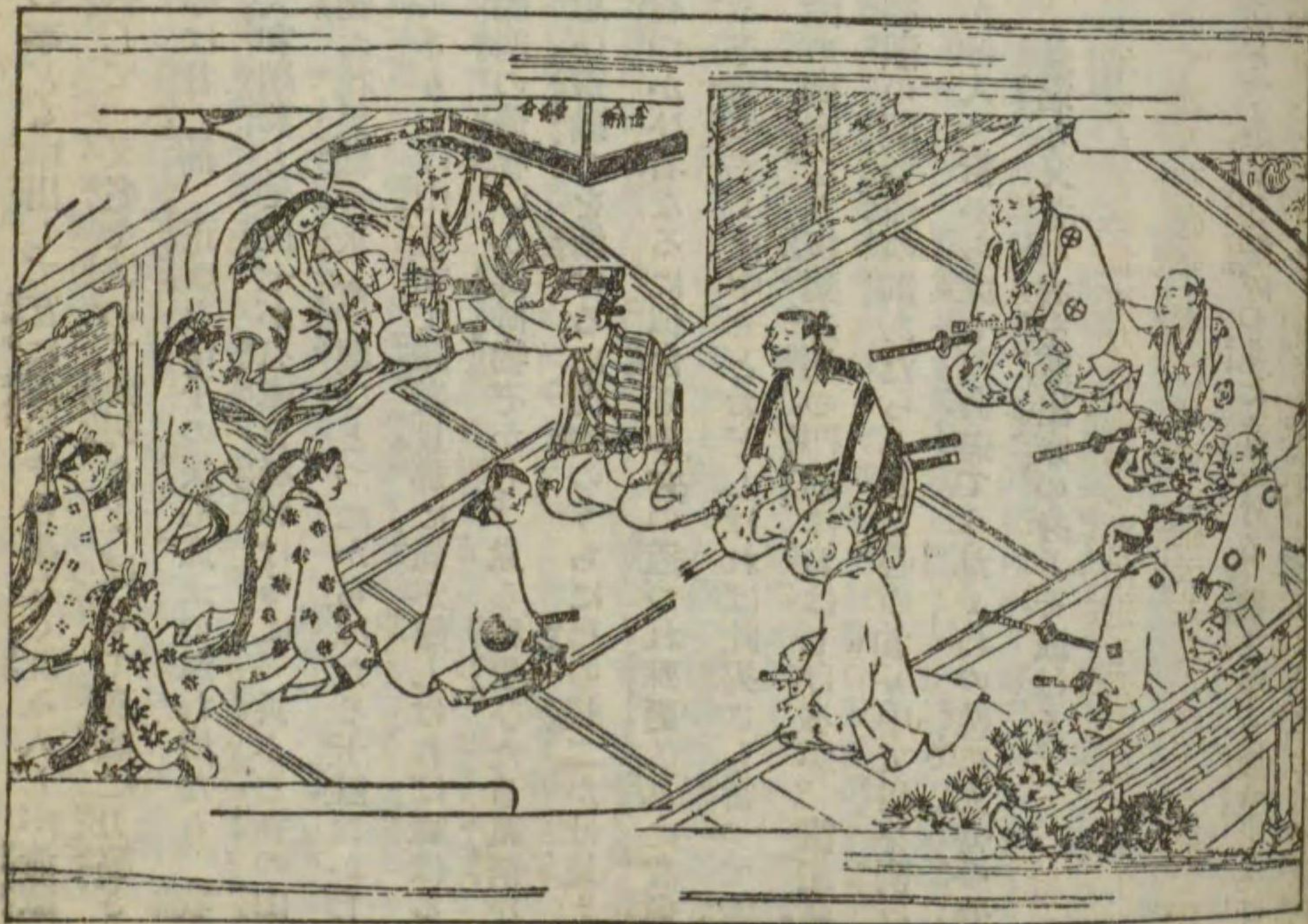
後柏原院大永の比大和の武家がたより。都の高家の御かたへ御息女を送らせ給ひけるに御年十五の春を過て秋をか  
 さね月に明し花に合し其家の風なれば哥道一入に心をよせ琵琶の翫び。酒婦の種となりて枕二つの。佛。次第に  
 疲れさせ給ひ久敷御冠も召給はず御くし自からに乱れて殿振ありしに替り色みる梢も落葉して風は無常の早使。衰眼  
 眠る山の土とはならせられての歎き。各にまさりて此姫君の御斷せめて永離の御愁歎外より見るめもいたまし世  
 に有ならひなれば是非なく歸らせ給ふに。故郷は錦の紅葉しほれて龍田の山も雪に見ながら白むくの袖に袂に御目の  
 時雨かゝるうき身そと御心もみたれて黒髪のおくれ先立給ひし御人の爲なれば。出家姿となりて南都の法花寺に入て  
 仏の道心ざし給ひしうちに。いつの比より心地なやませ給ひ。嚴き御形の青覺て胸いたませ口中さゝけて夜を寢させ  
 給はねば。日々に頼み尠く是を大殿様御歎き深かりき。諸家中神を祈り此たびの助命を願ひ奉りぬ。御手前醫者様  
 様にし奉りし験もなく都の名醫の内談せし時出頭家老坪岡藏人町醫者原川玄芳を同道して罷出遠慮なく御病室に入御  
 脈を候せて其後廣間に座して御姫様御病牀支芳見立に至極の所有。彼に種方付いたさせいづれも吟味の上御藥調  
 合さすべしと。日比目掛振を爰に出し普婆扁鵲の再來のごとく響應しければ時の權威に恐れ皆々御尤良に詞をかへ  
 す人もなかりし時。愚暗の玄芳硯をならして

筆談云 脈來數大此陰虛火動之症也 按古之聖賢指火而爲諸疾之原 所以然者火妄動則燎物 疾之象也  
 人能修道而清順則病何由生哉夫若二人鮮世接物觸事之間情欲之火無時而不起 則得疾其  
 指火而諸疾之爲原豈不宜乎 經曰 一水不勝二火 一水者腎也 二火者君火相火也 五行各一其性 惟  
 火有二 而已 陽常有餘陰常不足之理昭晰也 然者參氏甘溫藥所深禁一也 速非投於滋陰降火之劑 難救命



矣如緩治則悔噬臍有伺益乎  
 爰に國家老森尾兵庫御姫様の御病中をかなしみ昼夜老足を運び夫婦共に相詰しが京よりの窄人醫しや横川周益をこも  
 なひ出是も御脈の後書付指上ける是を醫道のまじはりたがひに意魂をみがきて時に  
 再談云愚按診脈無定一體或小或緩或沉或數變動不常夫脈不常血氣虛也譬之虛偽人一朝更  
 夕改無定一體且數大之脈來全不常故非火動之症唯考脈症屬虛而氣虛爲重也此金極似  
 火之病非參芪甘溫之輩難治曰陽生陰長之格言今此時也何可畏於不偏不倚中和之君藥哉蓋痰中  
 帶血者由脾傷不能裹血也舌生白胎者胃中有寒丹田有熱也夜不寐者由子盜母氣心虛而神不安  
 也胸痛腰痛氣者氣虛不能健運故鬱於中而變氣或滯於上則爲胸膈痛以上之諸症無疑虛也故以  
 補氣藥爲主加用安心滋補消食之劑則諸症自退矣且不須知充則害承運制之旨誤爲陰虛  
 火動而用寒涼降火之藥則聲啞喉痛上喘下泄之變症增劇扁術亦可難起乎  
 玄芳周益兩人の配劑御手前の醫者仲間にして祥に吟味を遂るに。周益種方付配々理に徹しいづれも是に同心なれ共  
 坪岡藏人身に替て取持ぬれば誰か詮義のしてもなく。玄芳藥に極り二三日あけ奉りしに是より以ての外に御眼色替  
 らせ給ひ。日毎に疲れさせられ周益見立にひとつも透す。七日過ての曙に死去あそばされ上より未々の歎き止事なし  
 御死骸は御遺言に任せ當麻寺に送りて松の煙となして年比召つかはれ女郎中御恩の程忘れず十七人立ならび下髪をし  
 からす切捨皆墨染の袖に替り。飛鳥川の水を手向夏花に籠山の梢をもとめ世になき姫君の跡吊進せ常念仏に暮しぬ。  
 定め難きは人の身の上世間の口やかましく。此度玄芳藥透ひにて頼み有御命失ひけると誰云共なく此さた募て程も  
 なく御耳に立原川玄芳所を払ふべき由仰出させられ。俄に妻子召つれ河州國分の里に立退ける。藏人は腹立して仕置  
 者にさし向ひ此所に醫師の住宅御密度ならは。横川周益も退立給へと御意をも請す我家來を遣はし。むたいに家内を

仕舞せける。周益御無理とは被じながら職業よりの仰は背が  
 たく是も同國三輪の里に立退不自由住の草薙に其身を隠し  
 ぬ。此事森尾兵庫聞付其里に人を遣し周益を信貴に呼歸し急  
 度吟味にかゝり給へば。藏人悪事顯はれ是非をかまはず兵庫  
 を待隊面を合せ打てかゝる。老人なれ共勵敷左の肩に初太刀  
 請ながら拔打に藏人切臥とどめさしかゝる所へ弟坪岡虎七か  
 け付後より下人を払ひ管鑿をさしのべ脇腹をつらぬき又突か  
 かるを兵庫入首より式尺ばかり切落し飛かゝる心はあれ共深  
 手によはり持たる刀を投付給へば。虎七が肩を越て若等が太  
 腹にたちて即座に命を果しぬ。是をみて兵庫打笑ひ脇指拔  
 て腹かき破りける迄虎七をくれて漸くに首打て此場より直に  
 立退豊樂寺の末寺榎葉井坊に忍びぬ。兵庫屋形には驚き家久  
 敷中野武太夫其所にかけ行退道を詮義すれ共奈良越の山道あ  
 またなれば先立歸りて思案を過しけるに。兵庫名跡を継人は  
 十八の年世を恨み給ふ子細有て。森尾宮内といへる姿をかへ  
 て紫野大徳寺にて。清藏主とよばれ禪學執行してましま  
 し。其弟宮松とていまだ七歳なれば敵討出る暇くだし給はず。  
 武太夫無念ながら此子の生長を待ける。此様子を清藏主傳へ





聞信貴の古里に立歸り。老母に御勘當を御ゆるしとねがひ父の事ども申出して互に涙のやむ事なく沈み入しが清藏主母の御盃を裁く時黒衣を脱捨乞請て鬨斗看を喰初其低心を還俗して。又名を改めて暫男とよぼして羽織に刀脇ざし頼綱笠に面を隠し人しれず屋敷を出此所毘沙門天に參詣し當寺は昔楠正成を申子の冥地武士の尊む所なり。我此度の大願は敵を手の下に討せ給へと心中ふかく祈りそれより大和順礼して虎七が有家を尋ねけるに。折ふし春の山鶯の関を越行に里人のとがり拐に薦包み好もしく。仏具買物お花足線香水菟蕪ひとつにからげたる干鮭おかしく鯉き寺ぞと笑ひけるに。跡より色めきたる女の此男に追付てざりと山道初て難義旦那に逢が嬉しければ社はるばるの所を行と身は汗水になりて脱かけしたる面影振袖の上に脇塞の着物いか様僻物ぞかし。見る程里びたる風情なく。髪は結振信貴の城下にはやるしめ付嶋田のふき鬢ふしぎに思ひ寄猶心を留けるに荷物の中に弓の弦二かけ見えしはいかにしても合点ゆかず。彼男をまねきおのれは正敷寺に召つかひ者なるに似合ざる女の道づれ殊更仏具に武道具是只事にあらず。某はか様の事を見出して國の掟の役人なるぞ有のまゝに申せとおどしければ此男さし當つて迷惑し。まつたく住持の大黒には非ず。信貴の御侍衆坪岡虎七殿の御妾なり榎葉井坊の門前におはしけるが。御屋敷へ御狀遣され密につれまして参る也。是に少しも偽りあらば初瀬の觀音様の罰あたらんと。心のまゝ申て埒を明け。暫男聞すまして。此者共に先立て豊樂寺に急ぎ其里の尾にかけ入。折から虎七運命盡てうたゝねの枕に立寄夢覺させて名乗かけ。願ひのまゝの切臥くび古里の母の御目に懸て。是迄と又昔の衣を懸出家の身とそ成ける

第二 吟味は奥嶋の袴

昔日誰乘初て老母の嶋夕浪さはぐ村衛に夢も結ばず糸鹿梅之助とてかゝる鄙にもまた有ものか佛の花うら風のはけしきをもちとひて瀧かたたらひける男は村芝與十郎といへる所改め身軀はかるけれ共水十郎にあらざればならぬ

情に生れ付無念や其昔は筑前にて五百石筋目も人におとらずと當に是を悔みけるは此若衆の親父糸鹿内藏は國の奉行職なれば寧ろ戀の習ひとて兄ふんといふうらめしく世間の思謂も心よからず。され共此道の隔なく忝き事嬉しき事に一命を抛て年月を送りぬ。爰に國の守なる若殿ある時梅之助を只一目御らん有て頻に召出さるべき由仰下されたるを内藏かたしけなく御請申上て歸り。此段梅之助に心得べきといふに何の色なく返事して其夜すからも與十郎と語るにも此事をはなさず心には是を思ひわづらひしは。もしせひ召出され御傍ちかく御用承はる時には與十郎手前の道を欠事の恨めしく分別し極て其明の日より病氣といひなして部屋より外に出す。親父是を氣の毒に様々と慰むるに驗なく別而若殿の御前いかゞと御機嫌の次手をもつて世忤病氣のよし申上るに。御氣色かはりて座を立せ給ひ其後近習勤めし十倉新六に御雜談あり梅之助今に本腹せずやと問せられしに。新六内々梅之助に執心ふかく多つかはしければ其返事に自身來りて。念比分有との云わけなりしか共。いひかゝりたる一言無下にはと申せし時それ程の御心底忘れ置ずといふにほだされぬ。其後勝嶋の入江に小舟うかべ其友には村芝與十郎を伴なはれて魚釣し風情心えず。又過し月みる宵浪都に三味線引せ與十郎と夜更る迄私宅にかたりながら浪都は返しぬる跡は心にくしと語り是より氣を付けるに。よいよ念比にかくれなく。それとはなしに遺恨にさしはさみ折をもつて参るべしと思ふに是をさいわひにして段々申上。此度の病氣も虚病に疑ひなしとかく與十郎生て罷有うちは大殿の御意にても御奉公致す心底にあらざと意趣ある下心よりつぶさに言上すれば然らば方便をもつて與十郎を成敗すべし去ながら大殿の者なれば一端貫ての上と家老白濱形部迄。村芝與十郎利口ものたるにより。若殿御召使なされ度由仰せ遣さるゝに是程の者御耳に達する迄もなしいか様共御用請給るべしと與十郎を呼寄仰渡しを申付たるに。有がたく直に若殿へ御目見即座に切米拾石の御加増殊に女中部屋の下横目役仰付られ首尾残る所なく外聞かたゞ面身にあまり宿に歸りぬ。其後鈴の間の番にあがるに相役三人づゝ詰しは田上礮右衛門柏義左衛門村芝與十郎なりしが。いつも三人の内式人は臥て老人宛は一時かはりに



寝ずの番。與十郎にあたりて勤しに元より此役目を仰付られたるは。何ぞ無調法を仕出させ夫を決手に成敗すべしとたくみたれ共。此男よるづ律義につとめ越度なく古座の者にまさり奉公するにつけて少も見おとされざるを。右の新六若殿の御心底を察し時の權をかつて己が娘野沢女中頭をつとめしを幸に随分與十郎越度になるべき事をたくみ給るべしといひしに。野沢心やすく頼まれ昼夜是を心がけたる時夜半の比與十郎袴を脱て高架に行けるを竊に是を盗て足ばやに奥に入妻戸かたくしめぬ。與十郎歸りて見るに袴なし。相番は前後しらず寢入て音なく不思議におもひて通路の扉をみれ共緊敷鎖し。弥工夫に墮ず終夜是を思案するに行衛合点ゆかず。去とては奇妙千万と思ひながら相番の者に穿鑿してもともしるべき事に非ず。なまなか不埒なる事を尋て未審と。夜明ても是をかたらずして番より下る時に礖右衛門此躰をみて御手前の袴はといへば夜アより見えざれ共事やかましく詮義するに及ばず太儀なれ共新敷拵るばかりといへば義左衛門聞てそれは先勝手づくの事。こゝは御城内の番所なるに盗人來るべき道にあらず。また只見えすといふたばかりにしておひても濟ぬ事なり。礖右何と申合点がまいらずとやかく沙汰する時女中頭野沢奥よりはしり出夜前當番の衆老人も歸らるゝ事無用。子細は大目付津川重五左衛門殿御出なされてからの穿鑿と云捨て奥に入ぬ。扱こそお見やれ。是はまがひなき怪事なりと行衛氣づかひして居るとはや櫻の間に呼出され。野沢口書をもつての詮義。夜前九つの時計過て南女中部屋のかたにあやしき男の面影見えたるよし西の深殿なるかたより告來り。一と是をたゞすに別義なきゆへいかなる者か目にかゝりたると其なりけりにすます所に。今朝ほのく成時梅の庭の忍び返しに奥嶋にかた色のうらつきたる袴打かゝりて。有しまゝに今に是あり。まつたく外より來るべきにあらず。まづ當番の者を改むべきよしなり。いづれもはかまに別義なきかといはれし時。礖右衛門まかり出これに相詰し與十郎今朝白衣なるを改むる所に。夜中より見えざるよし申たるといふ時。與十郎這出まざしく是は狐狸のしわざと存ずるは。しばしの間の義に離とも影の見え申さざればかなき仕合御了儀をもつて御詮義願み奉る拙者もし不

義の心あつて忍び入程の事に是を落して來るべき物にあらず。私一分に致して露程も覺えなき御事と。いひもはてぬに然らば其見えたる時急度穿鑿せずして礖右衛門とがむる迄は隠したるや。此いひわけいかにしてもはれず。但しやかましくむつかしと改めざるとは公儀にむかつてはいはれざる。私にしておのづから其方越度極りぬ。それ式人の者に預ると座を立さまに。此上は南部屋にも不義の相手あるべし是を糾明すべしといひすて、若殿へ申上るにかねての巧と悦び給ひ。二言といはずしばり首打れて。さだめなきかな村芝與十郎葉すゑの露と消ぬ。其まゝ梅之助に只今登城すべししぼしの内叶はざる御用あり。もし病中といはゞ乗物にて迎ひ來るべしと歩行六尺數千人御手醫者坂川玄春御使者には今の御物甲斐品之丞をつかはされけるに。内藏是は冥加なき仕合と早々梅之助を送り。扱御前に出たるに今まで御前に罷出ざる御不足かずありて。それも様子を聞ばにくからず。ざるによつて與十郎事不義の科にかこつけて。今朝成敗したれば此上はもはやさはる事は有まじ。身に奉公すべしと仰らるゝ半よりはつと思ひながら色に出さず。是は御意共覺えず與十郎と拙者義さらく左様の事にあらず。か様なる義は御側に倭人有て跡かたもなき讒言申上たるものにて御座有べしといふことばの下より新六罷出て。何と御側の倭人とは誰をさすぞ其上その方と與十郎念比の事は國中にかくれなきによつて某申上たり。生若輩なる口よりいはれざる過言一つには御前をものはどからぬそれを倭人といふと色をかへて詞だゝかひするを若殿兩人を御なだめ有て。それはともかくも梅之助身が近習へ詰れば別義なし。向後互に意趣に含む事なかれと奥に入せ給ひけるに梅之助直に宿に歸り。扱もせひなき次第是新六がなせる所與十郎露もしらせ給はずやみくとなられたる事のかなしきに涙にくれながら歎こまゝと書置其夕暮立出て新六か歸さを待かけたるに菱蔓の紋挑灯是新六と詞をかけ抜合せて打一太刀に切臥若輩二人も遁さず切倒し。鐙持小者追散し今は是迄と新六が死骸に腰をかけこゝろしづかに切腹し。みづから首掻おとして消ぬ。この太刀音近所におどろきかけよるにはや兩方事きれて。一通の書簡あり披き見るに。およそ此一道におひては高き賤しき隔なく



たとへば一天の王子も草露の牧笛を鳴し給ひて。御思ひをばれさせ給ひき。いはんやその下來は申も愚なれ共戀慕に捨る命は風塵よりかろく屍を箱笥に刻るゝとも一たびかはす侍の一言をや。爰にこの戀しらずありて謾に忠信の者を無実の科に偽て殺害す。よしや存命て人皮畜の世界にあそんで契絶ふならんより。邪魔の関を踏破て永き黄泉の旅枕かぬる食は是ぞ鴛鴦の劍を以ていとしとおもふ兄分の敵を打てうきよの夢を覺するものなりと見るもの感涙の雨さかりなる梅のあたり落花の名残ををしまぬ人なく今にかたりつたへて聞さへあはれなり

第三 不斷心懸の早馬

男は當流諸礼はむかしの物かたきこそよけれ。和朝の風俗は嶋國の果迄も万事替らず。其時津波しづかに佐渡の國主に召つかはれし。大組頭に椿井民部御用の事ありて召れしに。早馬に乗て番町筋の四辻まはる時。綱嶋判右衛門といふ人に行違へば。民部詞を懸て判右衛門殿御ゆるされませい鐘をはずしましたと云捨て通りける。この斷りを判右衛門聞屈けぬこそ是非なけれ。屋敷にかへりしほし思案して菟角は堪忍成かたしと分別極め一門中を呼集めて次第を語りけるいづれも。内談してさま／＼申中にも老人役に久木勘右衛門申されしは。民部程の侍がよもや詞もかけずに乗打すべき故なし。貴殿耳に入たる事も有へし。民部三千石其方は三百石祿のかるきを見くだす心底にあらねば爰は分別所と申かれき。判右衛門一通り委細に承り届け。尤民部礼義あつたにもせよ此方の聞ぬからは是非もなき仕合なり。此上は堪忍ならぬに治定して親類も同心の後。右の段々書中にしたゝめ民部かたへ遣はしける。民部其使に返状いさぎよく申越ぬ鐘をはずし謙退の辭を正しく懸申つれ共今更此斷は申さぬなり。明晩長林院の松原へ出合太刀先の御所存其意を得い。明日酉の下一刻に立向ひ面談の時ほうつさじと書をくりける。此事自然と沙汰して横目俊津田求馬聞屈け御前へ申上れば。兩方共に武士の義を立る所至極なり。民部鐘はずし礼義を正しながら此時におよひ其

斷りをかまはず。一命を捨る心ざし是神妙のいたりなり。又判右衛門心底民部詞をきかぬにして我老人の堪忍にて濟所を身を捨申入事是又道理に歸したり。元意趣なき義なれば自今以後兩方共に。遺恨さしはさむ事なかれと大勝慶はせ給へば。上意有難く御請申別条なく屋形に歸りて。民部妻子を召つれ其夜立のき渡せる船を急ぎ。佐渡の國をはなれ越後の寺泊といふ浦邊に着ぬ。かゝる折ふし跡より福井丹後安徳寺勘太夫伴采女此三人小早浪をくゞらせて程なく追付御暇も乞請ずして國遠いたさるゝの段以外の御立腹先く歸宅申され其上の願ひと申渡しければ。民部少もおどろく氣色なく拂髪したる首を見せ此仕合なれば外に主取仕り勤むる望みにあらねば。いかな／＼上意にても此身跡へは歸らじ是より武州淺草の邊りに住宅仕る子細ありと申はなれて。此一言に取つく嶋もなく舟は佐渡にもどりて御前よろしく申あげ先其分に濟ける。それより民部は東武に行て淺草の寺町ちかくに借座敷して門柱に椿井民部と筆大に張札して菱垣のかりなる風情軒は雨もりて月すごく。壁は蕙のみ嵐の吹込身をいとほ世をかまはず。心のまゝに一日を暮し遊興有程つくして秋の夜の哀れ一しほ菊も霜枯にちかき比。ひとりの息女十一にして琴の曲すぐれて好給へは母は是に和せて時勢をうたひてよねんなく見え給ひぬ。此哥面白き半に女の聲してけはしく板戸敲き明抱たる子をさし出ししは是を爰に頼み奉る。只今御門前にて親の謝討と申て肌刀抜てかけ出る。民部それはとつゞきて出給ふを内義おしとよめ。こなたの御命は義理の預り物にあらずや助太刀ならば女に女よしと長刀の鞘はづして門に出給へば。長月廿四日の宵出初る月にほのあかく其面影も見えわたり相手たくましき男三人こなたはたよはき男に角前髪の若衆彼女切結び成程静にうけつなかしつ一命爰に極めたる有様なり。民部内義女に立添是に身共が後づめ。心覺の長刀なりと脇を払はせ給ふ。働き摩利支天も恐給ふべし。此かけ聲うしろに鉄山の便りと成彼女が手に懸て進みし男の脇腹切付よはるをたゝみかけ終に打臥とゝめさす時高股我とあやまり身を惱を内儀肩にかけて内に入給ひぬ。民部は擗越に見物して角前髪すそを払へ／＼。下知し給ふに力付踏込て切付飛かゝつて首を打。此勢におくれて老人



にげ行を今独りの男追付打とめ、式人ながら浅手をひて嬉しや敵は残らず打たぞと聲をかけあふ時民部廣庭に入て氣を鎮めさせて後様子を尋ね給ふに兩人礼義を演て此度の首尾偏に御影ゆへなり。殊更御内方様の御働きに願ひのまゝに此女本望をとげ此嬉しさ御恩報じがたしといつれも涙をこぼし是なるは信州松本にて高倉庄左衛門と申者の娘。私義は大野笹右衛門と申て同じ家中に罷有しが此五ヶ年以前に庄左衛門筆と成此女とかたらひ申。未十日も立ざる中に岩谷喜平次と申者庄右衛門と口論座にて打捨國本を立のきける。舅の事なれば外に見られず。御暇申請三年あまり流浪をいたしやうく此程付出し今宵の首尾。本國へ歸宅の土産には喜平次が首なりと。言葉に悦びを含み段々心底を残さず語り。是なる若年者は私弟笹之介と申なり。是を追付御礼にさし越申べしと。互に武士のつめひらき聞いたのもしき事ぞかし。各々夜明がたに立行を民部門をくりして此上ながら猶仕合よく御歸國を願ふなり。扱此度それがしが女さへ力をそへしに我ながら助太刀用捨する事まつたく身には非ず此段は後日にするゝ事ぞと是を暇乞のおさめにして別ぬ。扱又佐渡が嶋に有し綱嶋判右衛門國に堪忍成かたく御暇申請。十三に成一子判之丞同妻を召つれ急ぎ江戸に立越民部かたへ尋ね互に涙に沈み。されば武士の義理程是非なき物はなし。兩人か寂後は何の遺恨もなく世間の思はくばかり恥て。身命捨る夢路の友けふをかぎりなれば。うき世の名残酒心よく酌かはし二人が妻もうちまじり。古里にてはあひぬぬを思ひもよらぬ爰に近づき。むかしを語り今の歎き一人の男子ひとりのむすめ。此行すゑを思ひやられて今相果けふ人々の身の上よりなをかなしきは女心にことほりなり。民部内方申出されて判右衛門殿一子の判之丞に民部殿娘のお松を妻あはせたまき願ひなげきの中によろこびの。盃事跡の事家來に申付兩方の内儀一度に髪を切捨て。いまだ御命のうちに出家姿となり給ひぬ。何か世上に残らぬ仕かた哀れをふくみ殊勝さかぎりなかりき。民部判右衛門今はと思ひ定め袴かたぎぬをはなやかに死出立をあらため。是ぞ佛の淨土寺を頼み。法の庭なる草むらに疊六帖敷ならべ兩人座をしめりんじうを厭念して。ひだりの手に手を組合南無といふ聲をあいづに切付露ものぞ申ける。

第四 火燧もありく四足の庭

大雪軒より高く國はへだてながら目前の白山水邊ははなれて橋の浮舟漕通ひて適々の御出これはく。此比の氣色は隣家を見うしなひて。市中の山居と存るなといひかはしたる朋友四五人。語るには夜のながきを重寶におとし咄も耳馴たるははいひ盡して何と化物の出る百物語とやらをはしめてはといへば。是一興たるべしと行燈かすかに帷子を打掛火燧も取て退各々座をしめむかし虚屋敷にと。云程の事おそろしく目に見ぬ鬼も佛に立。はなしの六七十もすむ比より透間漏風もそれかとおどろき片隅にゐたる男も次第に轉出。天井に鼠の噪ぐも雷のおちかゝるかと思はる。屋ねを物めがありくやうに聞へもはや九十七八にかたりつめたる時皆々面の色を透へて五人一所に鼻を突合せ今は咄一つに極りたるにそ目を見合せ手に汗を握り身柱もとより何ものやら抓たてると樽椽より爪の長き物這出る音頻りなるに心魂も消くなりながら。さすがすゝみも果す刀取まはして一度に聲をかけてはらりと立障子を明る返は叶はず睡にて穴を明て吹ば寂前自をける火燧の樽椽より下におりて霜枯の菊晶にはしり出たるにいざしとめ給はぬかといへば先こなたにいや御時宜に及ひませぬといはれぬ所て礼義を述て埒あかざるを。中にも亭主武邊人にすぐれそのまま廊下にはしり行と手鑑提てかけ出ぼつ詰て突とめ。しとめたりと呼る聲に力をえて各々かけつけ。まづは御手柄是を殿の御耳に達せんとはやとりくなるに。亭主噪がず。これ人のうたかふ事なればいづれも證據狀を書て給はれ



といへば。心得たりと天正三年十一月廿八日の夜畠山の末孫友枝爲右衛門重之化生の者をしとむる所実正明白なり。其爲如件花崎波右衛門笠井和平常盤瀧右衛門戸嶋與四左衛門と連判を居ていさ正跡見せ給へと。蒲團をまくれば日比手飼の犬也宵のあたゝかなるに塙とせしが。夜更寒ずるをいとひてかけ出たるにぞありける。是に興覺て大笑ひして歸りぬ。其後更さは一ばいに成て扱も今は御代静謐に治り血臭き事なきによつて。此比去方にて諸歴々衆犬を突とめたりとて證據状を取是をいひ立に外に知行望むよし。向後人の首捕刀を止て犬を切には生くら物よしと名をさゝぬ斗に評判しけるを右同座の戸嶋與四左衛門傳へ聞て何とやはいはれぬ所に爲右衛門か武邊して諸士の物笑ひになり我々まで面目を失ひ。此云わけ立すと。波右衛門に語り悔む所へ。爲右衛門も當番にて來かゝり是を聞て拙者衆人の迷惑に極る。それは誰々の批判にて聞れしといふ時篠村三九郎といへる男不圖きたり何心もなくいづれもは此比のさたを聞給はずやといひしに。それは何事ならんといふに犬を突とめたる感狀の事と。きをひかゝりて咄を是は幸の所へお出。則其臆病者は拙者なるが此事に付て御一分立ぬ衆も此座にあり。其申わけにどなたにても仰せらるゝを相手に致すべきと存ずる所へ御自分御出定て申出したる者は有べけれ共連も仰られまし。とかく御不祥ながら我ら相手にこなたを致すといひかけられて三九郎もひかれぬ所。二言と遅くせずせひなくことばをつがひ。こゝは御城内番おりに次第と約束を極めその明の夕暮中橋にて出合。目釘竹の飛程たゝかふよし。右の四人ものがれぬ所とかけつけたるに三九郎方にも助太刀ありて兩方三十二人切合討るゝ者十五人爲右衛門は三九郎同林八郎を討ながら餘多手を眞與四左衛門瀧右衛門は即座に切れ和平波右衛門以上三人草履取衆人めしつれ其場より直に立退ける。其後三九郎子林八郎弟三八十二才になりしが喧嘩の時節十死一生に煩ひ有て此事今しらせければ。自御暇の事御前へ申籠たるにいさぎよしと三九郎甥。芝村湖助に後見仰付られ兩人其明の春より立出北國海道残らず尋ねのぼり。京三条通信濃屋に宿とりて有時は清水の群集に立まじりわらひありくに終に巡りあはずこゝに三ヶ月足をとどめ旅より旅のかりぬ物うき夜半時

に空也上人の流を汲鉢藏の物哀なる聲して生死無常の理を聞とおどろく人もなしと。くどくにも先立給ふ父の事を思ひ出し夢を結はず閑居しに此者共は皆其筋ありて山城の國に限りたるに今宵の二人つればなまり離なるはふしぎなりと湖介氣を付て施物やる次手にほかげに貞をよくみれば。和平浪右衛門なり。まづ是をとらへけるに三八扱は敵よと刀ぬきかゝるを湖介しばしとめて。各々はまさしき相手にあらざれば打に及ばず。扱爲右衛門は何方に忍び居申やもし是をしらせ給はずは御兩人共のがさぬといふ勢に。此者後れながら土はたがひなり我々も彼者ゆへに社流浪いたせ。何をかつゝまん爲右衛門は今西の京大將軍に戸川友元といふ醫者の庵に身を隠して用心ふかく致せ共。夜は糧もとめんため太平記を素讀して今宵も出べしといふにまかせて堀川を上へあがれば一条反橋にて言ばをかけて打戻せ兩人の者はたすけて歸りぬ



武道傳來記 卷六

諸國敵討

目録

第一 女の作れる男文字

姉より妹か奉公振の事

第二 神木の咎めは弓矢八幡

同行三人若衆願礼の事

第三 毒酒を請太刀の身

神鳴りに月代差合の事

第四 碓引へき垣生の琴

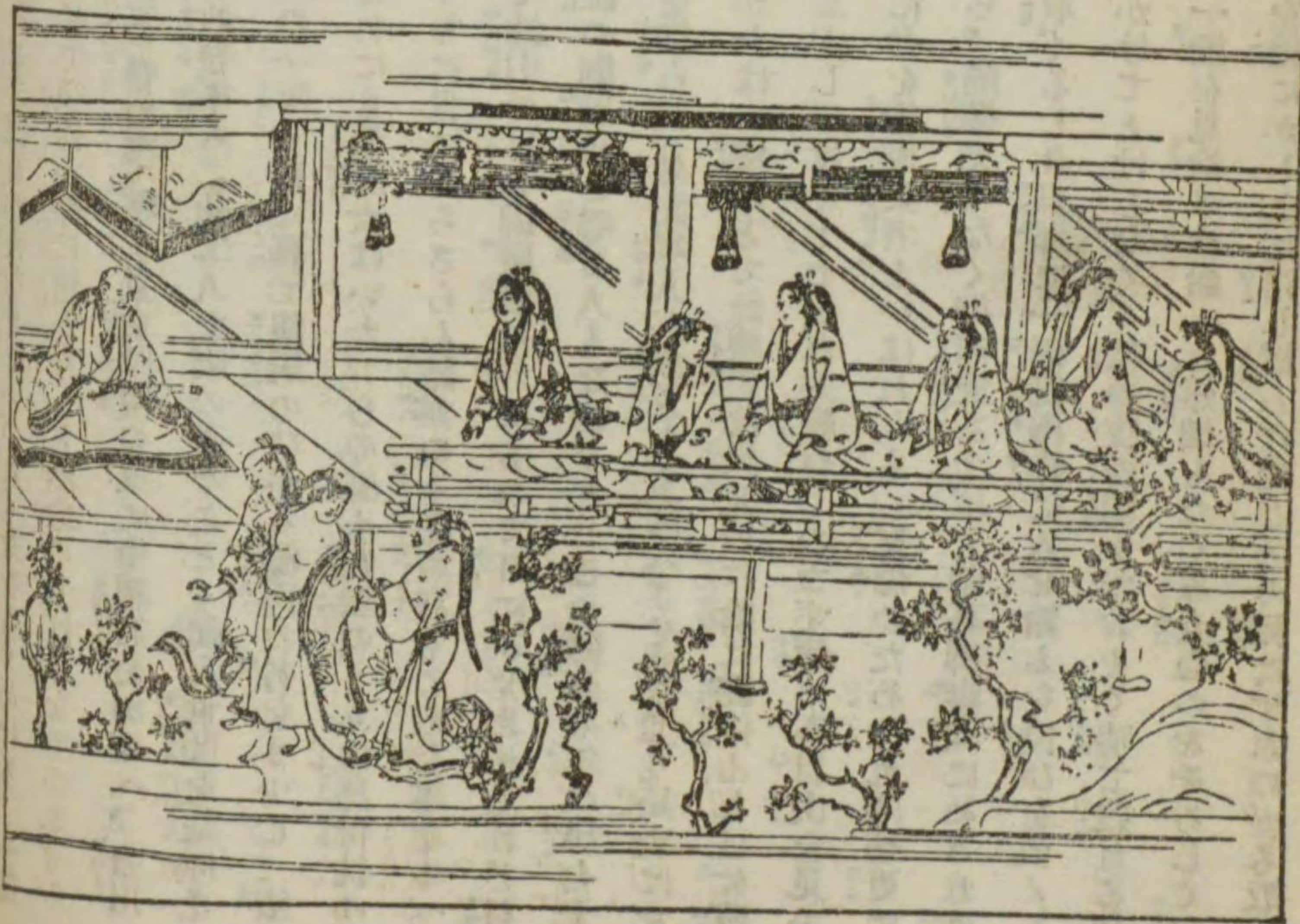
鴛鴦の劍袢をとす事

第一 女の作れる男文字

咲をうれしからねば散に敷きなし、東山の櫻は残り人はむかしの春の事。都を見立岡崎の奥に樂隠居をかまへ、泉川修理太夫吉連入道し給ひて随夢と改め弓馬の家久敷水越外記徳仙寺隼人。此二人を兩の手のことく頼み世間を是にさばかせ内證美をつくしたる居間廣間花麗歡樂爰に極め。世の人の一年一日に暮て銀燭のひかる源氏の名をうつし。須磨やどり木花散里うつせみの夜のころもをかざらせあれにもこれにも手懸女はいたづらの昼も蘭帳のうちに房付枕ゆたかにかしら撫させ足さすらせ。夢見て覺て金盃甘露の酔のうちに世にあらさらん譚菊のみ花清宮もこんな事なるべし。それは見ぬ唐の鳥の高ふとまりし梧の木も玉琴となりて連引の爪昔御屋形の外にもれて耳にひびきわたれど石流都人稀にも是に氣を移さず。松吹風に聞なしかゝる殿作り誰の御屋敷と尋る人もなかりき。この随夢の年の程七十古來稀成御身にして世をいやましに耻給はずよしなき御無理を仰られ。外記隼人が異見をも聞入させ給はず。後には女藤の中間にさへ疎み果ける。殊更此程しきりに御契りの深きかたは一橋殿とて此親里は伏見の片陰に託任りして佐脇玄丹といへる目醫者の娘なりしが艶女に生れ付見し人なづみふかし。はや十七なれ共縁付このます親の不自由を見かね、折ふし此屋敷美女尋ね給ひしを幸に當分百兩請取金子に身を捨御妾者といはれしも。父母のためなれば是更に口惜からず只御主のお氣に入るをわすれずして勤めける心から。随夢又もなく御寵愛あそばし朝暮御寢間にめされ外の女中はあだなる花となれ共是をそねまざいかにしてもお氣取ぐるしき且那に一橋御機嫌に入せ給ふを悦びをの、隙をうき世の思ひ出に。百菊の長座敷に集り双六哥かるた謎かけてとけしなく。秋の夜の明かたおそく晴て残れる月を恨み。薄雲といへる女藤且那の御情の遠ざかるをかなしみ一橋を見捨て給へる難儀をたくみ女心のおそろしく男文字にて一橋にかけしや思ひのふかき所見えわたりたる折文を爰にかしこに落し置しにはじめの程はすゑの女も取あ



げずしてはき捨塵塚に埋みぬ其後幾度かかさなりて有時隨夢の御めにかゝり御齋義あるに一橋かたへの通はせ文にまぎれなし。其文章あひなれて後の思ひを書つゞけし。隨夢ことの外にせかせられ女禱かしらの木幡に仰せ付られ一橋に尋けるに夢にも覺えなく現にもしらずと曇らぬ心底をたゞしく申分の段々。木幡聞届て人のそねみにてかく有まじき事にもあらず。そなたの御かたより外への文ならばいひわけは成かたし菟角美女は悪女の敵と申傳へしと大笑ひして御前に出。一通り申あげしに中々存ぢの外なる御機嫌其女を八塩紅葉の廣庭にまはせとの仰せにまかせ。女中間のうたてや一橋を引立出るよりいかなるうきめやらんと色をうしなひ泪ぐみ人々の足もとも定めかね身をふるはせけるに。一橋すこしもさはぎなく常よりうるはしき良ばせしておそれずゆたかに座して旦那御出を待うちにも哀ことしのうき秋色にそまれる紅葉も料なければ枝は折れしそれにも心なき風にはしらすと身よせて無常を觀する所へ隨夢立出させ給ひ。其女丸裸にと御言葉かゝる迷惑ながら金天鵝絨の後帯に各手をかけて色はへたる袖妻をまくりとればうつくしき肌を折からの嵐あたり



てくれなひの耻かくしひとへのありさま。生命ながらざりとはむごき御しかたなりといづれも身をちよめける。一橋世にながらへてかひのなき事なれ共。つみなき身の程人にしらせて後何か命は借からしと無念のしはしをのがれ身の因果を觀念の時。汝にかくし男なくは諸神誓文に五つの指の爪自はなるとあれば。是非もなき糺明なれども其まゝ切刻み血は眞紅の糸をみたしひとつと救算てはなちけるさへ目もやられざりしに。なを心づよくも指を切と有し時に命がをしきとて其身になりては何かせんなし。ざりとは畜生にはおとれり。此一念外にはゆかし心まかせにと首さしのべしを手うちになして面影の美花ちる思ひをなして。皆なき跡を吊ひからだは鳥部山の灰とはなりぬ。此事伏見に傳て玄丹夫婦の歎き。身をもだへてもせんなく後日の恨みをふくみ娘が敵と思ひ込しに時節を筋骨いたむわづらひ思ふにかひぞなく日救をふりける。一橋が妹に小吟とて十六に成し。姉に見ます程の美形なりしか八幡の神主に橋本權太夫といへる若男にそゝのかされて。おもしろづくの縁の道すぎし年の霜月比親の家出をして水無瀬の里に忍びてそれよりは伏見へも音信絶て久敷。親の事も姉の事も忘れて明暮つれそふ男かはゆがりて世をいたづらに身をなし是より何をかたのしみと思ふ折ふし京の事聞より中々有にもあられず。權太夫やはたに歸りし留主に子細あつて我事。今生の別れ此程の情には姿繪にみづからを移し置けふを命日にとはせ給へ。かならず伏見にらせ給ふまじ自然の首尾にて二たびまみゆる事も有ぬべしと。筆に思ひを残し夜に入て此里の屋を出て行方しらずなりき。權太夫歸りての歎き独りつかひし下女に尋て様子しれず是をこがれて胸せまり次第におとろへ。つるにうき身のはて息引とる迄女の事ばかりいひて死ける。小吟京に行てすこしのゆかりを尋ね都の奉公を望みといへば此姿にてあら世に流れあり銀になし給へとあなたこなたの肝煎宿を頼みしに。京にも稀なる色盛見る人これをこがれるに。願ひあるゆへに外へは行ず。やうく隨夢の屋かたに女の入をうれしく。給銀のねがひもなく先目見へを申けるに。風情よければ其日より宿にはかへさずめしつかはれしに小吟身にのぞみあるゆへに人の氣をとり勤めければ。みなよ



しなに申なして。有時雨の日のくれかたに小吟はじめて御寢間にめされ心よくうちとけ給ひし折を得て。肌刀にして  
腕さし通し一橋が妹なるぞ。姉の敵とつゞけさまにとどめさし其上に腰をかけむねつらぬき身をかため。うれしげに  
笑たる最後見し人心ざしをかんじける。女のはたらき前代たけしなき敵うち今の世迄も語りつたへり是皆薄雲といへ  
る女の仕業あらはれ隼人が手にかけて打て捨此跡程となりてもとの草むらとかはりぬ

第二 神木の咎めは弓矢八幡

昔但馬なる出石の里のいつの春。山は茂りあひ小鳥の啼こなりと。風あたゝかなる野末に茅花摘捨さし竿手毎に持  
せ友とせし男をかたらふ。比は同じ人心此森陰に行歸り追遙あるが中に葉田與七郎といへる若侍。半弓の自慢して  
目にかゝる程の翹あまた射落しけるを。同道の小伴新四郎これをとどめて。こゝは宮地なれば神は木のはさへ惜み給  
ふ況や殺生をや。これより朝來山の麓にて思ふまゝに狩すべし。此所は遠慮し給へとすゞめければ。與七郎打笑ひて  
何崇といふ事のあらん。それはちか比なまぬるきせんさくあれに見えたる松の葉隠れに殘る雪にまがひの白鷺矢つは  
御望み次第に射落して見せ申さんと引しほりてはなつ矢眞たゝ中を射抜て先は御手柄と讀し詞の下に。あまり矢向ひ  
の尾に遊びし大石半九郎が右の肩骨より心もと迄窺深にたちまち絶入して倒所。あしければはや事きれる。同道の  
久志小左衛門おどろきあたり見廻す時與七郎は是を夢にもしらず。新四郎に向ひ何と此拳にて自然の御馬向にての。  
ほし甲ちがふべき物に非ずと胸をたゞいて半弓小者に秀させて立出るを。小左衛門扱は此男いかなる意趣かありての  
事しかたも有べきものと身繕ひして追懸しが。もし又人逃ひもやと聊尔に詞をかけず。先僕が持る弟矢と一手にま  
がひなき證據に立歸りて。立たる矢を引ぬきて是にくらべての上。是しはし同道あるを御存知なきかといふに。驚  
き後を見歸りて段々聞ば。きく程此方に少しも覺えなしとは云ながら。是非なき過。いかやう共御了簡に離ひ申さん

といへば。小左衛門も承り居けたり。尤も意趣あつての事に非ざればいよ。是非に及ばぬ事ながら半九郎死骸を  
聞くと持て歸り彼者兄弟縁類に向ひ何共私の一分立かたし互に不祥の事ながら打果さねばならぬ首尾と。いふにひ  
かれの梓弓忽神罰の顯はれ最前諫言したる新四郎も遁ぬ所と覺悟して二人が切結ぶを。側にながめて居る時。與七  
郎はや切殺されし助太刀心へたりと切結び。終に小左衛門を打て直に同國二見の浦より舟に乗丹後の成相の里にしる  
べ有て五日影を隠しそれより大和國初瀬の里にゆかりの者を頼て爰に居をくろめける。其時の首尾に小者二人は忽に  
相果誰しれる者なかりしに。小左衛門が草履取餘多手は眞ながら其里の者共板に乗て小左衛門屋敷に送り様子をどふ  
に深手なれば返答もさだかならず。息の下より旦那を討給ひたるは小伴新四郎殿にて有しとばかりを最後に果ければ  
扱は敵は一人に極りたりといふ所へ。大石半九郎息半三郎様子いかゞとかけ付る與七郎はいまだ妻なかりしが弟分  
松淵時之助も來り。小左衛門一十沢之助と三人一所により擧てとかく我々敵は新四郎にまがひなしと御申上て立出  
ける。いづれも同じ十六七様に姿かへて西國順礼五幾七道より順逆かまはず打札の敵にあはせ給へと誓願空しか  
らしと末を心に観念して。四國西國の津に至る迄二年にあまるうき旅ぢ夢も結ず。今は河内國藤井寺にさしかりけ  
る。こゝに新四郎が妻此事を思ひこがれて其翌の年果しに。猶又一人の娘の残りて不便をとどめたる由傍輩のうちよ  
しみ深かりし梅垣平藏方より文こまゝと書送りたるに新四郎もつらきうき住るに敷きに哀をかさねせめては忘れ形  
みの娘を成共行末しらぬ身の行衛。今一たび見まほしく忍びやかに呼越たきわがひの返事するに。平藏も尤の事に  
思ひて。竊に乗物に乗て遣しける此三人の者藤井寺より大和の坪坂を心ざして行に立田越にかゝる時麓の茶屋にしば  
し休ふ所に此乗物も同じく立休みけるに。茶汲女こがしを酌て乗物の側に行ば。戸をは明ずして内より簾を少し巻上  
たるけはひの物床敷。此三人の血氣さかりに心うつりてさし吹けば。其あてやかなる美形此年月國くにさまよひ目に  
かゝる程の女色。是にならふへきなし。哀いかなる御方の花の姿吉野は爪に見劣り。此嶺の紅葉も時雨塵の芥とは成



ぬ。日比の一念つゝ打忘れて。誰か先に見初たると私言ての諍誠に猛き武士も聖の御國を傷らるゝ此惑ひの道に踏迷ふ慣ひ思ひやられてさも有べし。かゝりし程に吞たうもない白湯をのみ俄に足を痛ませ此棄物いつ迄も此所を動かすもあれかしと。迎もかなはぬ戀に氣を惱まして時をうつしけるに。ふしきや乗物の中より利根なる多かけ出けるを見れば沢之助はやく言葉かけてあの犬は敵新四郎が日比秘藏せしに少しもたがはずといふより。今迄思ひこめし戀心たちまちひるがへり誠に氣を付ればそれにちがふ事なし。何共心えねばいざ跡をしたふて見届くべしと五六里の間を跡になり先になり。終に初瀬の里につけ届て。奥深き編戸しめし薬屋に昇入るゝと内より新四郎ころび出で。扱もはるはるのうき旅ぢよくこそと悦ぶ跡を柴垣の際より見届け。扱こそ新四郎なれと我さきとはしり入を澤之助をとなく押とどめもはや敵は掌のうちに有。周章る所にあらず。扱各々一所の敵なれは一度にも討べき事ながら。先太刀は拙者給はるべしといへば半三郎此方も親の敵と穿義はおはらざる間に時之助たまり兼て跡よりつゞき給へと内に入ばをくれたりと三人同音に名乗かけ扱つれてかゝれば。新四郎さはがぬ跡にて天巻して刀を提て立出しばらく待給へ此子細は段々の首尾あり先聞給ふべしと半九郎與七郎に討れし事を語る詞の下より半三郎眼色かはつて今迄思ひしに迷て時之助も同敷見合て切結ぶを沢之助も肝つぶれて詠めるし時。其助太刀の子細御自分と拙者箇様なりといふと。また扱合てたゝかふにはや時之助と半三郎は互ひに深手負ながら兩方共に疲れ倒れて寝ながら今はかなはずとさし透て果ける。沢之助も思ひ籠たる一念の太刀に新四郎が右の腕を打落し南無三寶とさし添抜間に。新四郎娘長刀を小脇にかいこみてはしり出沢之助を水車に切臥。立歸りてみれば新四郎も深手一つに非ず。苦て即時に息絶ぬ。此娘の歎き一かたならず旅の疲のうき思ひ。二年の内の難義語りも果ざるに此有様目もあてられず。頼む木の下に雨も涙もたまらぬ所に逆縁ながらと道明寺の側に庵下。妙理比丘尼と名を改めて此七人の菩提を問ける。

第二 毒酒を請太刀の身

彌州にありし事語り傳へて。其時の大守森脇主税之助病死あつて若殿市丸殿遺跡を継給ひ。代々の家絶す國の成敗を執行給へり。ある時家老祝山中務に仰出さるゝは御慰み旁々家中の若き者共。それ〴〵に武藝嗜める品時ならず御らん有べし。其うち先人〴〵勝れたる藝書付をあぐべきよし畏て相心得。いづれも其頭〴〵に觸てさし上るに。何の何某は疋田流の兵法馬は大窪が印可居合は片山伯嚙流弓は當流。鎧は大嶋流誰は鉄炮。彼は何〴〵といづれか一藝なきはなかりき。其日廣間の當番には外山白右衛門坂野用助乙息流之進一所にならびて。白右衛門云けるは。何と今の書付の披露の内能井五助が武藝の品〴〵多き社会点ゆかず。其子細はあの青男つね〴〵の有様から生ぬるく殊更終に弓を手に取たるを見たる者なし。鎧などは念もない事及ぶまじき人を並に書付をさし上る事。是程の嘘はつかれうものにあらずと大笑ひしけるを。鎧の間に五介從弟白橋元左衛門是を聞てたまりかね。其番より歸り様に五助がもとに立よりけふ誰〴〵打よりて此さたありしとせしらせければ。よくぞ聞せ給はれ是には分別する事ありと其翌日家老中務まで申込けるは。此度書上たる武藝の品〴〵御前にて仕りたきねがひ中務取次で窺ひければ。幸御機嫌よろしく今日御らん有べきよし仰出され。五介忝しと支度して櫻の庭の廣縁に立出れば。殿にも御出座有て皆〴〵相詰。まづ弓をはじめて三寸の的をかけしに三手の矢五本當り殊更手前見事なるに列座驚き入。次に竹刀其入身には小石與四郎とて家中若手の内の達者なるが出たるに。三本ながら突とめ其次に兵法笠田卜立が一の弟子救枝友平立合けるに品柄たゞきおとしかさねての時には打合せるまでもなく勝負を見せければ。是までにて置べしと仰せ付られ。若殿の御感甚しく其外の諸役人に至る迄舌をまいて。人は侮られぬ物かなと今迄おかしがりし者共も興を覺しけり。しばらく有て。五助御前に呼出され御褒美として加増百石下され當座の面目外聞かた〴〵有がたく退出すれば家中に其跡えかくれなく



それより三日過て右の三人の方へ狀を付けるは拙者事先日御評判の武藝の義今月廿五日櫻の庭におひて上覽に入たる通り偽りなきは定て各々も御見物有べし。然る上は御取沙汰一分堪忍ならず伺公致べきやこなたへ申入べきかと讀も切ず驚て其まゝ用介瀧之進を呼よせ何と返事をせんといへば兩人おなじく色を透へこれは先誰がいひはじめて此やうなるすさまじき事を仕出して氣遣ひする事ぞ。惣して人の噂をせぬがよい今からも有べき事いづれもたしなむべしといへば。今それをいふて埒のあく事かとかく此返事の仕やうはとあたまをわらして用介やう／＼今分別出たりと云に何と問へはまづいかやうに思案しても死る事はすかぬによつて爰はちんじてやるにはしかず。其返事に。仰下さるるの取さた此方三人の者は貴公様の事微塵影にても日向にても悪敷申たる事なし万一脇に憎しむ者あつて我々にめいわくさせん爲に申たるにぞ有べし。それは御不祥なから堪忍あそばして給はれと小野流のふるひ筆をとめてつかはせば。五助つく／＼段々の斷りをみて。此上に何共いひやるべきやうなし先思案すべしと其日は暮けり瀧之進用助は白右衛門方に取こもり何と五介は堪忍してくれうか心もとなきは。あれ程の藝をかくして居る程の者じやによつてそこがすまぬ事なりと。一所に額を合せ手に汗をにぎり。嗚あればすはやそれかと肝をひやし。又談合して昨日の御返事をつかはさるべしと。感慙にいふて取て參れと家來を白眼つけて又五助方にやれば。五助分別してさたせさる事に此方より狀を付るは却て無調法なり。され共いはぬといふを是非共相手にすべしといふも道理しらすに似たり。但し元左衛門が聞透へたるも覺束なし。もし実にいひたるにしても狀付られての上申さぬといふ程の腰ぬけなれば。相手にして面白からずと思ひかへして御斷りを承り届くるうへは互に意趣ふくみ申さすとの返事を見て。三人の者共二三度をしたゞき扱も大事の命を拾ひたりと祝ひ。酒など飲てよるこびまづ其通りにてすみけり。其後途中にて逢度毎に何とやら氣味わるく。其上此事誰云共なく果し狀付られて侍事したりとの取さたかくれなく。かれこれ心よからず三人より會ひて是を舌にして此比のとりさた聞てむやくしき事といへば。我々も左衛門におもふ何とぞ

して五介をころす分別は有まじきかといへば。あれ程の手者なれば先太刀打はとてまかなはじ。とやかく案じ入て白右衛門小聲になつて云けるは。先日意趣互ひに少しも残らぬ中直りに無茶の振舞に是非呼請食類に雜へ一服さすれば骨折ずしてころりとやるがといへば。是に過たる方便なしと日眼をさだめ。御茶進じ度よし五介方へいひやればさしてすまざれ共行ねば先度の意趣残るやうなりと心得忝じけなし參るへしと返事するに其日いづれも相伴にて馳走様なる躰にもてなし。後段すむと心もち例ならず宿にかへると五躰血筋引て身をもたへ。半時ばかり惱み血を吐て息絶ぬ。前廣より醫者もそれとは見ながら大事の事なれば聊尔にいひ出さずふしぎなる病とばかり評判して其なりけりに野べの送り人は煙のたね。一子五七郎幼少なれば本知半分にて跡目たちて濟ぬ。彼者共はしすましたりとよろこび此内證は誰もしらず過行春は夏にかはり。此三人の者は平生兄弟同前にかたり。たとへいかなる事ありても引まじきかたらひなしぬ。其日は白右衛門方にあつまりて雜談する次手に明れば端午の節句月代を剃べし幸其方家來関内髪眼よくいたすよし頼むべしといへば云付て剃せけるに。折ふしの夕立しきりに降て雷耳のあたりに轟きわたりはや落かゝるかと思し時。瀧之進日來雷公をこはがる事人にすくれたれば。此ひびきに動顛して関内まづ待てくれよと。半分頭剃かけしを周章て立さはぎ天井の板の厚き所はないかと迷廻り脱捨し單羽織の有程引かふり。桑原／＼と身を縮めかた隅に倒臥たるおかしさ。白右衛門用助大笑ひして扱も結構なる御侍。それ／＼又ひかりたるはとおどしかけて興がりけるに程なく空はれて後瀧之進這出しを其頭つきはどこの去荷物を持れしぞ扱も億病千万なりとおどけたるを。瀧之進虫にさはり鼠前も笑物にするのみならず比興なる侍などいはれそれさへ心にかゝる人には物のいひやうあり。雷は武邊の外好といふ者なし。もし比興のせんさくならば其方達こそ侍畜生なりと顔色をかへていへば。座興に思ひし兩人も此一言に堪忍ならず。侍畜生とは何ぞと刀を取まはす時されば過し年熊井五助と太刀打はならずと何ぞや女童のたのむ毒薬をもつて殺す勿論我は同心にあらざれ共それを改むれば傍輩のちなみをむな



しくすると思ふ計にだまりぬ。何と共しかたが侍のいひ出す事かと同じく刀を取まはずに。兩人目を見合せ南無三寶内輪破れして大事の事を人にもらす悪人とふたりして切伏まづ門をうたせ心静に支度し路金迄才覺し直に勢州長嶋にしれる者ありて立退ける。此事意趣はたしかならずして國中にかくれなし。爰に瀧之進が一子角之丞御暇申上て敵ねらひに立出諸國尋ねめぐり此度は東海道にかゝりそれ共知ず此長嶋に入て一日逗留するに。彼式人の者は芦屋町針立の賢意といへる者を頼て居しが今は頼みななし亭主は元より貧乏しければ爲かたなくて門論編笠深く被り連ぶしに小濱町を通るを角之丞見付て詞をかけ敵二人を薄手をも戻す物の見事に打戻せ此首國の産物にと下人に持せて夜を日に継いで屋敷に歸り。母に對面して箇様々と語詞を押とよめ。それは聞迄もなし。先聲を高くするな扱も父瀧之進をはしめ曰右衛門用助先年五助に遺恨有て毒藥にて殺したるよし露顯あり。子息五七郎親の敵は其方ならびに白右衛門用介と一昨日打に出たりしはらくも爰にはたまられず我も諸共にいづくへも退べしと其夜の九つ過に又密に家久敷下人独りめしつれ親子伴て立出江州醒井の宿にするべを頼て世の浮住るをとよめける。扱又五七郎は三人をねらひて國々残らず姿をやつして通り今は勢州鳥羽に着て旅籠する宿に一夜を明すに障子のあなた旅人の物語するを聞ば。扱も先月十八日長嶋にての敵打の段々聞ほど角之丞が有様なり。此上は、や三人の敵二人は相果たり。殘多き事ながら力なき仕合せためて角之丞は本國に歸るらんとそれより引返して又本國に急て行ば醒井の宿何心なく打過るに比は極月十三日家々煤掃とて諸道具大道に積重しを取入るに古簾を釣る貧家に似合ざる鑢長刀萬籠の上に挑灯くもり付。其袋の紋井筒の内若松是は敵の乙見が定紋なると氣を付て其隣なる家に立寄籠忽ながら此北隣の御亭主は何人にてさふらふといへば。されば主は終に見たる事なし伊勢の牽人衆とやら聞及びたりといふに。いよく覺束なくそれより辻堂に行て小者に持せし着籠取出し身拵へするうちに小者に汝は旅人の昧して見聞して參れと云付しに走行籠籠をかりたしといふ調子にはいりて襟見聞てかへり成程解之悉股にまがひなしといふに驚て答ふかけし喉解之

は水風呂に入ながら此脈をみて言ばをあはせ母親に刀給れといへるに。五七郎是をみるより其脈をば討ず心静に支度いたさるべしといひ捨て表に出れば。母親浴衣をうちきせいさぎよくすべしといさめて簾の内に見物して互に汗水になつて戦ふうちに五七郎刀の目釘はしりと落たるに弓矢八幡運命盡たりと差添ぬかんとせしすまをたゝみかけて打を母親是をみて角之丞しばしとよめ其方は道をしらぬ男かな。軍前此方湯あがりの支度を待給はずや。其心底を顧ず心なきしかたと耻しめ。随分心静に目釘をとめ給へと其間をまたせて又打合けるが。角之丞深入して指三本落されてひるむ所を踏込て大袈裟に討とよめ荒嬉しや年來の本望遂たりと息をつぐ所へ母親かけ出。扱もあそばしたりと角之丞が觸體をつくく詠めながら涙をばながさず。誠に我子ながらも心の剛なる事は中々御自分におとる者にあらず。され共父瀧之進武士の本意に背きたる冥理の程弓矢神にも見はなされし天罰のがれずして角之丞に酬て只今御手にかゝりたり。討もうたるも武士のならひ天晴神妙なる御はたらき御父五助殿草ばの影にてもうれしと思しめさん。爰にてほろりと潜然。我身は頼みなき者なれば思ふにまかせぬうきにうきをかさぬる事の行衛こそさだめなけれ。角之丞が跡をばよきに吊ひて給はれと云捨て内に入。黒羽二重の羽織を取出し。是は角之丞に着せんと思ひしはかりにていまだ手も通さず是を道すがらの風いとひにあそばせと持て出し此御心底忝なしと暇乞して本國に歸るを念比に見をくりそれより濃州関の藤川といふ里の側に草の庵を結ておこなひ澄せし心の水のあはれをとよめけり

第四 確 引べき垣生の琴

過し比越の國の太守に増倉治部太夫と聞えし。同家老徳沢形部ある時大小性役勤し赤西専八廣間に傍輩二三人相詰て居しを呼立ちと申度事有と御居間の前裁の片陰迄つれ行別義に非ず。只今殿の仰付られしは思し召子細あるの条出崎新五平を討て來るべき器量撰てつかはすべきとの事なり。大切の御意なるに誰と差圖すべき者御自分ならで外に是



なしと述べられぬるに。専八承り届けながらそれはいかやうなる越度あつての事にて此仰付にてさふらふと云時形部さ  
れば拙者も御心入はかりがたしといへば。専八尤御自分の御詞を疑ひ申には非され共進の事に直に御意を承り度  
と云にいかにもよき御念なり。さらば御前へ御出あれと伴ひ此よし申あぐれば。専八召出され形部申付たる一義首尾  
致せとの由畏入て私宅に歸り其咎はしらね共武士の習ひ程世に定めなき物なし。今迄は互に傍輩のよしみ深かりし  
かひなく我身に思はぬ御意をうけて討こそ本意なけれど。つぶやきながら新五平所に入つて一つ二つ物語して御意な  
りと詞の下に討すまして出るを家來立騒ぐに。是は上意なりまつたく當座の喧嘩に非ずと云聞せ直に屋敷も取あげら  
れける。移りかはる世の習とは云ながらしれぬは人の行末哀なるは此内室親里は隣國の片陰に日陰の牽人の娘なりし  
が。新五平親と古傍輩のよしみにて其身死すべき前の秋より外聞よろしく取はやして婚禮の儀式して世に頼む方なく  
おはしけるに。思ひもよらぬ此次第に驚きながら詮かたなく此まゝ同じ道にも果べきと思ひ詰しにその身只ならぬ忘  
れ形みの中々に一たび是をまみへたく心ひかれて。袖は涙の潤かねしより奈央の海を跡に出ながら誰を頼む共なく比  
は卯の花山を詠め過里の垣根に色こほす雪の高濱はるく見え渡り越の舟路もこがれくし旅の。空定めなき短夜  
有明の嶺の麓にやうくゆかりを尋ねけるに其里の侘しきうき住みたとへかたなくけふと暮し。あすの命も頼みなき  
まばらやに心ち例ならずして二日惱み取上邊といふものもなくてつる生れけるは。殊更男子にて猶果報つたなき身  
の果と恨てかひなく月日を送りぬ。此所には物織女もまれなるにやとはれてうき世を暮すたねとして此子成人して今  
は十四才そたちいやしげながら生れ付すがそれと見えて。爪はづれの尋常佛の艶きに付てもありし世を思ひくら  
べて母のなげき大かたならず。され共國を出さまに親より給はりし新羅琴跡付に長國國宗の大小けなさず。ながきよ  
の折りの手ずさみに組の證哥をうたひて諸共になくさめて住みせし哀はかぎりもなかりしが。世は不定の習にて赤西  
専八少しの過に御前を仕せんし牽人となりて四五年さまよひ漸く此里近き城下に又身軀渡りけれ共。此人の事は夢

にもしらすりける。ある日傍輩馬山九郎八にいざなはれ野がけのなぐさみに出て。此山陰に百舌をおとして歸る細道  
に琴のねかすかに音づるを松吹風と聞捨て行に猶瓜音のちかく氣たかくて救ならぬ思ひはなくてあれかしと聲の  
あらしにつどひきしに是は合点のゆかぬ。山里にかゝる音信のする事けと各立とまりて耳をかたづけ其かたをみれ  
ばあやしの竹の編戸のうち也。いかなる者ぞと覺束なく立よりて吹ば薩長なる女も三十五年にはうるはしき姿して東  
の母屋によりかゝりたる有様。世を恨み詫たる良はせながら調べしは尋常ならず。側に庄之介母の手跡のかな文うつ  
して何となき粧。此美形にあきれて是はふしぎなる者共進の事に尋てみるべしと御免と云て内に入て菓茗飲ちらし  
て立出。世にはさまくのなれ果も有物かなと何心なく歸りて。専八庄之助に深く泥み誰しらず行通ひ。いつとなく  
執心かけ其後は念若の誓約堅く。庄之助を城下に件ひ母にも扶持を合力し行末はいかやう共申上て庄之介をも身味有  
付べき心から他事なく思ひかはして一年餘も過て母専八をつくく詠めてあの男は髓に御意蒙りて新五平殿を討たる  
男にまがひなしとよ所ながら先祖をとへば何年の事共かたるに。弥たがはず。有時庄之介を近付いつは語らんと思ひ  
しが其方が父新五平殿。尤上意打とはいひながら専八手に懸たれば汝が親の敵にまぎれなし。潔く討て孝養にすべ  
しと。云に驚き扱はそれ共しらず過しぬる事こそ無念なれ。併ら自の遺恨にあらず。主の仰なれば専八もせひに  
及ばぬ所なり。もし敵討べきならば治部大夫殿にこそさふらへ。殊に此年月の厚おん須弥よりもたかし。かれこれ私  
の敵とて討べき義理に非ず。爰は分別して御らんあれといひもはてぬに母顔色かはりて逆も其方は得うつまじ。前か  
たよりかくとしらばたとへば干死にするともかれが合力うくべきに非ず。其方假の兄弟の契約したればとて誠の親  
に思ひかゆる事が侍の道か。よし。我夫の敵其方が手には懸まじと守り刀を懐に押込かけ出給ふをすがり付。  
それ程に思し召ならば私手にかけて本望達し申さんとなだめ置て其支度するに付ても。假初の事ながら此二年ら契  
り深くかはせし詞の松に誓ひしも皆いつはりとなり。いとほしと思ふ兄弟分を手にかくべきか是をつみて討べきに非



ずと。いつにかはりて専八を呼請恨めしき良ばせ。専八見とがめて何とやら異有様心にかゝる事有やとふに思ひのまさりて涙は袖に餘たるに猶心えず。いかなる思ひにか語り給へといへば。扱もせひなき次第拙者は出崎新五平が世伴御自分に覚え有べし然ば。勿論上意といはひながら承はるに堪忍ならずと其時は胎内にやどりぬし事段と語りて扱只今迄御懇意中へ詞に盡されずと云きりもやらず打しほれたるに。専八横手を打て扱も人間の行衛はしれざる者。なる程手に懸し事まがひなし討て本望遂給へと大小抛出して首をさしのべたるにぞ庄之助が思ひ一かたならざる至極の所其有様を何しに討るべき御自分にも太刀取揚て給はれと云に哀は深く見へし時母次の間にたゞみ此昧をみて。庄之助を呼立潔よき心底残る所なし。今宵かぎりの事なれば今迄のよしみに暇乞の盃したかるべしと。母のはからひを語りて土器を取出し自持て出て常のごとく夜更る迄語に時移り母も次の間に朝寢の夢見明して朝の五つになれ共起すさし吹てみれば二人枕をかはして臥たるを油断者と聲かくれ共言なく。ふしぎに思ひて立寄ても驚かぬに夜着を取て見れば専八が心もとより我背申迄貫て死したり。母二目共見ず同し枕に是も自害してはてしを聞さへ哀はつきず。

武道傳來記 卷 七

諸國敵討

目 録

第一 我が命の早使

灸居ても身のあつきを知ぬ事

第二 若衆盛は宮城野の花

義理に身捨るはほめ草の事

第三 新田原藤太

百足枕神に立事

第四 愁の中へ櫛看

敵うたて横手を打事



第一 我が命の早使

月ばかりはらぬ昔の空日向ふ國の守につかへし磯邊頼母とて勇に色ふかく春秋の花紅葉紅圍長時に。いまた妻女はさだめず幾人か翫び酒煙日々に長じて勤めも自からに欠ぬ。有時己が家老塚林權之右衛門を呼て。公用の事につゐて急用これ有の間。伯父春川主計殿へ此書簡早々持參致すべしと周章敷云付られ問返すに及ばず支度して參州よし田に急ぬ程なく着て主計に對面し子細は御書中に御座有べしと指上ける。何事やらんと封切て披見ありぬの半過ておどろける景色にて其まゝ懐におさめ。權之右衛門が良を打ながめ何と國にかはつた事はなきかといへば畏てまつ殿様に御機嫌よく御座なされまし。三侯修理助殿の跡目の義甥の内匠殿へ仰付られて先家中迄悦び扱は城下の町はづれに童共集りて土遊び致しけるに丈五寸ばかりの朽木を掘出し捨置たるを極樂寺の長老是を見付給ひ行基の御作の觀音にて寺の傍に假堂の奉加を進てしつらひこれへの參詣國中群集仕る事中、影敷此比喧嘩これ有けれ共それはしづまり。又旅芝居二三間くだり水茶屋入幡の前より立ならび京大坂のごとく御國の賑ひ申はかりなしと何心なく語れば。主計一圓合点のゆかぬ良して。いやよ所の事は聞たうなし頼母が屋敷にかりたる事はなきかと尋ねしに。されば御當代になりて諸國御節略に付御自分様七年以前に御越の時有し泉水も内證舟遊山の聞えよろしからじとそれを潰し跡には蘇鉄山をいたし。其外の榮耀道具みな減少いたし只今は結句大檀那の時の借金迄相濟し世間御勝手共によく罷なり拙者迄大慶に存ずるといへば。主計重て別義に非ず頼母わかき者にてさそ其方が世話に成らん。京より美女呼寄し事此比江戸參勤の衆の物がたりにて聞し。親はやく果誰有て諫言すべき者其方より外になしと云時權之右衛門御意返し申せば慮外がましく存ずれ共。尤且、那年若ながら勤の欠たる事なく交りも御家中におゐてはいづれにおとり給はん。され共御説言いままはなきにやつてははからひとして此比京より女呼寄下し置ぬ。其上の御氣遣はる

龍有から少しも遊さるましと何心なく語し時。主計氣色かはり膝立直し其方は近比利口に物云大膽者これ、此状をみよと抛出しけるを取揚てみれば何く此者重罪有といへ共當地にて手打いたせば世間事やかましく罷成につき其元へつかはす事早々御成敗あそばし給はれはよしはつと驚きたるを。主計何とそれは屋敷に別義なき麻か其段々委細に白状すべしと刀に手をかけて白眼つけし時。權之右衛門少しもさはがず御紙面の通討め奉り覺悟仕る上はいか様共御はからひにまかすべし。殊更御手討に預らば本望の到り別に子細申上る事會て是なしと。さしうつふきてゐるを主計重て。様子なきをうてとは申越まじ必定其方に越度有にまがひなし。子細をいはずは只今討がといへば。成程御討あそばせ元より一命をさしあげての勤なれば何しに前後を顧るべしといさきよき氣色主計しばし分別してよし、右にて誠に討べきと思へは此状見する迄もなし其方年來の旧功何の過り有べしといへるに。權之右衛門涙を流し誠に磯邊の御家久敷打續私不肖なれ共代々執權役相勤しに最早此度御家の滅亡なり。此御心入と存したらば御手討に逢迄もなく静めやう有し物を口惜やと男泣。主計見てさそ有らん軍前より思ひしにたかはらずあたりにもなし子細語るべしと御尋ね中々申上るも御耻かしく憚多存れ共私女房友沢七郎平娘去年御存知の通り祝言致す所に當八月の中旬より頻に暇を乞し謂を達而承はるに勿躰なくも旦那此女に御心をうつされ。貞女の道を守らんとすれば主命に背く此つらさとさめくと申せしを。何そ主命を夫にかゆべしや。いか様共御意に隨ふべしと一先なだめ置ぬ。必定是を思し召詰られて私を無実の科におとし給はんとの御はかり事。此上は人非畜生を主共存せず。猶又二君に仕べき心底にも非ずはやく首打て給はれと前後思ひくらべし心のうち主計も横手を打やう、に宥て長屋の一間なるにいたはり入て置ぬ其明の日呼出されしに權之右衛門大小羽織のみ残していつくへか行方知すなりけるよし申上ければ主計飽れて尤不便千万なる事に思はれ頼母が心底憎き仕かた。此上はおのがまゝにさせて思ひ知すべしと權之右衛門が大小ならびに羽織をもたせて使者をつかはし申越る、通り成敗したるしなりとてをくりければ。頼母悦ぶ事限りなく。され共屋



敷中には是をかくし置其夕權之右衛門が妻に灸なされ度よしにてたひ／＼の使來れども再三に及び辭退するにかなはず奥ふかく召れ詢きかゝり給ふに。右より合点せざれば幾度仰られても此段は御免なさるべし。殊に權之右衛門が留主の内しばらくも人の思はく有と立歸る所を引とゞめ、扱は權之右衛門に貞女の道をかくまじきばかりならばつゝむにあまる思ひより。伯父主計方にてはやく成敗して其しるしは是みよと。大小羽織を取散しければ。此女氣も魂も消とつながらぬ玉の涙はせきかねながら此心をつゝみて扱は心にかゝる雲もなし。いかやう共御意にはもれず。然らば私御心にならうへは向後御本妻を祝言き給ふ事は御とゞまり遊ばすかといへば。それは／＼世上のおもはくかへり見るやうな淺き事にあらず。其方さへかはらずはと打くつろぐ所を頼母に飛かゝり夫の敵をのがすべきやと脇指を抜所を取て伏ても男のきたなさは今の一言に似合ぬ仕かた只今さしころすが承引せまじきやといらざる所に念を入れて問返すに女ばうしら／＼とうち笑ひやれ侍。畜生めたとへ身はづた／＼になるとも其方に身をまかすべきや口をしくも止ととお手前が手にかゝりて夫婦共に殺さるゝ事の無念やと體を立て諦こそこはりなれ。頼母なを／＼立腹して此まゝ殺すもおかしからずと庭前の櫻にしばらく付、手籠提てなぶり殺し目もあてられぬ有様なるをいまだ息のかよふうちに内庭の片隅に堀埋められし姿の花は根にかへりあたら朽木となりぬ。かくすよりあらはるゝはなく此事親里友沢七郎平もつたへ聞しかど其比不慮の越度ありて改易に逢て備前國に立退けれ共其妹、娘を修理殿の中小姓増井兵藏に嫁置しが。此事を聞いて頼りに又兵藏に暇を乞いはれいかなるととがめられて。此段／＼かたりて女ながら姉の敵を討んねがひ。兵藏聞よりも頼もしく少しも氣遣ひするな。其方にかはつて打べしと俄に御暇を貰ひ牢人して折を窺ひてねらひ寄。其日は頼母當番にて歸るは夜の四つ半。外堀に夫婦待かけて。さきに持せし挑灯切落せばあやめもしらぬ五月闇。此太刀風に周章て若黨三人惣堀へ轉び落けるに頼母驚き是は何者ぞと聲かけし時。汝が手にかけし女の敵をしらぬかといふに。物／＼しや籠おこせと取返るをふみ込めて二尺餘、切落され刀に手をかくるを馬より引ず

りおろし胸骨を踏付。やれ女共來て敵を打と手を持添て首うつてさあ本望はどげたりといふ所へ。軍前堀にはまりし若等這あがりのかさじとひとつにかたまり兩人を中にとり籠てたゝかふに。兵藏ははやあまた手おひ疲れて立かぬるを駒よせに取つかせて。女なりともおのれらと男二人に立むかひて切あふ時兵藏聲として南無阿弥陀仏とうちたをれたるを聞いて。今は是までと思ひさだめ切死にして兩人共に爰にて果ぬる心のうちこそあはれなれ。扱權之右衛門が行衛は見へさりつるがふたゝび故郷をかへり見ず。今は小田原の片山陰に發心して行ひすましたま／＼城下に出て控鉢せし時此きたつたへ聞て墨の袖を絞りいよ／＼三人の菩提をとふらひける世のことはりせめてかなしきものかたりにこそ

第二 若衆盛は宮城野の萩

古歌に聞し御侍みやぎ野の。萩山勝五右衛門といへる男久敷率人にて此里にねぐらの鳥の尾羽打からし此身の果のなれるふたりの中に勝之助とて石流は我子程ありけるよと姿の花を思ひ出に詠めくらしつ殊更諸礼の家として指南に違あらす同し世を侘し牢人田越弁左衛門と念比に昔の全盛を語り相しに勝五右衛門衰老して自から弱りはかなくも臨終の折から勝之介を弁左衛門に呉ゝ頼み置る一言忘れず幸千海右衛門殿家老屋嶋十郎右衛門に日來出入ければ勝之介器量勝れたるを云立且那へ御草履取なり共とねがひしに右衛門元來小姓御好なればよき次手を以て其筋目たゞ敷美形なるよし申あぐるに早速召出され御寵愛かぎりなく昼夜御側をはなれず勤しに。傍輩葉田川九郎治勝之介目見えのはじめより戀惱み度々匆通にかき詢きぬれど。勝之介御目がねを守り御心底は忝なしと様々云なだめつかはしけるをきかず。太刀さきにて本望達せんと云こしたる明の日御膳あがりて勝之介雉の間を通る襖の影より九郎治立出子細は覺有べしと切付しを抜合せ二打三打受ながして九郎治を水もたまらず泡となしぬ。手ばしかく仕舞直に弁左衛門宿に歸



りケ様／＼と段々語りければ我息のかよふうちは少しも氣遣ひなる事なしと。まづ奥の一間に影をくろめし所へ十郎右衛門はやかけ付勝之介は是へ参りたるが定て子細はきき給ふべし元我取次の者なれば随分最眞致す心底なれ共他所へ退べきにあらずと穿鑿極りて我來れり。いよく勝之介は行衛知ざる分に申おかん。云に及され共御いたはり頼み申と云捨て歸り弁左衛門へも歸らざる由いへ共右衛門殿合点せられす。尤九郎治兄弟すらなき者なれば誰有て敵打べき者なし主従のよしみに天地の間を尋ね出して成敗すべし。幸十郎右衛門取次たる者なり。急度追手をかけて搦出せと氣色かはりて仰付られ。十郎右衛門分別こゝに定かねしが。旦那此内證御存知なきゆへにかゝる憎しみふかし。なまやか勝之助を伴ひ出て九郎治不義の跡を申上なば却て褒美有へき者なり。若承引なき時はせひなし。諸共に切腹すべしと分別極て。弁左衛門方に行様子いふに合点せず勿論御心底疑ひ申にあらねど若旦那それを承引なされざる時は勝之介が命はなき物然は私一分立すこゝは御分別なされといへば十郎右衛門とかく此分にては濟す屋敷へ歸りて何をもつて拙者一分も立す貰かけしは我。給はらぬは御自分打果さねば濟ぬ事と云かけられてひかず。切結びしに勝之介其時ははや縁ある寺にあづけられ誰有て助太刀に出合者もなく老魅力なき弁左衛門を心やすく討て屋敷に立歸り。其段々語るに今は勝之介事脇になりて弁左衛門兄弟あるべし十郎右衛門用心致せと家中心ち安からず。右衛門殿かさねて領地の外の濱の急ぎ退べしと仰付られ忍びやかに有様をやつし送られけるこゝに弁左衛門弟弁藏同家中三形式部殿に勤しが此事聞もあへず宿に歸りねらひ支度する所に十郎右衛門が召つかひの下女暇を出され弁左衛門が宿にちかき人置渡がもとにあつまり下藤のすぢなき者にて内證取さたし外の濱のそこ／＼とやらんへ立忍ばれたると語るを聞て悦び立出る所に勝之介傳へ聞今は身あらはれてはしり來り。元より坂身のがれず御供申さんと云所へまた弁藏日比目かけし窄人宇野彦之丞正木宅平篠井門藏林折右衛門三柄廻右衛門各懸付此度の御事と支度して以上十三人外の濱に急ぎ聞し所に付て操練みるに嚴敷用書して大敷なる惣敷の内に門もかためて番の者數十人内よりかり初に出入者も改

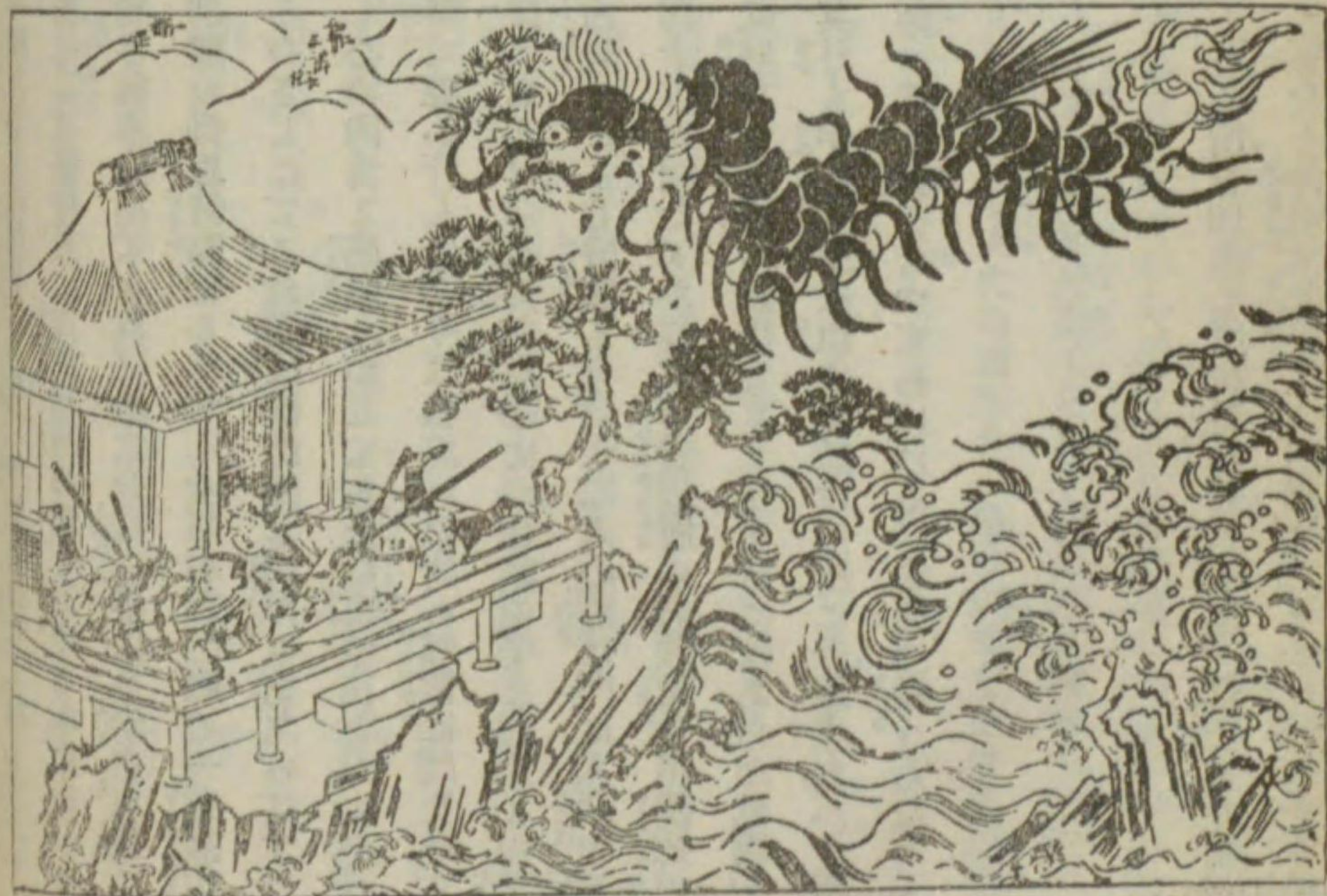
めそこ／＼に氣を付たる有様たやすく討るべきとは見え先づ側家のをかりみな／＼身振へ長旅の疲れしはし骨をやすめこよひの四つ半時南の門より取かくべしと相談を極め心を一致にして空行月に古里を詠めやり哀やしれぬ命など口ずさみて並みたる時庭の枯垣のもとに人のうめく聲頻りなるに驚き何事立出てみれば勝之介自ら草はを朱の血染になして伏ぬ。これはいかにとみるに一通を残し置ぬ。はしめ弁左衛門殿の御恩滄海よりふかく十郎右衛門殿の一言高山より高し然れば何れば向て弓を引ん。され共ふかき方に恩を謝せん心ざしにてこれ迄は御供致し憤りをあらはすのみなり。各々首尾よく本望を遂給へ心底紙上に盡し難しと。書留し心の内皆々感涙なしかしてあたら姿の花を土にかへしぬはや時分よしと云程こそあれ手毎に續松をふり立門前により擧て聲かけしに。今はのがれぬ所と尋常に門をひらかせけるにはや軒ばに挑灯杖をならべ其身は着籠に天巻し牀机に腰うちかけ。長刀を右手につき家の子それ／＼の覺悟すがた兩方に取まはしこかげ／＼にかゞり火を焼たてあたかも白昼のごとし弁藏も今は十二人心靜に門に入双方互ひに立別れ門をしめさせ神妙に名乗合て切結ふと土煙を立て以上四十五人相たゝかふ太刀音近所の者共驚き出隣郷の者は此篝火雲にうつろひ火事と心えかけ付ける程に。百姓救百人此堀を十重百の重にとりまきそれにはあらぬ見物と立かさなりて膽をひやして目を駭かす。すでに討るゝ者二十七人其外も半死半生に血まよひける所に弁藏小たかき所にあがりはや敵は打おふせたりと云時門をひらきてしつめよと大勢のぼり梯をもつてわけける。未聞の敵うちなりしかたりつたへておびたゝし

第三 新田原藤太

昔日薩摩の國籠嶋にて諸役人宿番を勤められし御茶屋の藤書院といふ所を四人して御番せられしに。浮橋太左衛門卷田新九郎此兩人は宵から夜半まで休みてそれより明る迄勤る番くりなり沖浪大助申迂久四郎此二人は行燈の光を受



て独弁をひらき小者に煎茶などはこぼせて淋しさをまぎらかし  
 夜半の時計待かね殊更春のならひの長雨やめば間もなく降出し  
 蛙の諸聲耳にひびきて目覺しの友となりぬ折ふし天井板に音あ  
 りて黒き物落かゝる所を大助脇指を抜打に何かはしらす少し手  
 こたへせしに燈よせてみれば其長巻尺四五寸はかりの百足を  
 ふたつにきりはなちいまだうこくを取あつめて塵塚に捨てせけ  
 る久四郎横手を打て扱も早業古の田原藤太が勢田の橋は磯な  
 り。沖波殿の今宵の御手柄眼前に是はくとはめければ大助も  
 興に乗じ天晴此男古今居合の名人なり。はやい所を御目につ  
 たとさつと笑てすましける其後大助内用ありて町筋に出しに。  
 南郷主膳と云出来出頭に出合けるに大助を見かけ是藤太殿何  
 かたへの御越なるぞと申されし。某は大助と申なり藤太と官  
 位は致さぬと申。主膳重て此程の百足の首尾家中にかくれもな  
 き是ぎた。田原藤太殿と云捨て通られける大助宿に歸り覺悟し  
 て相番の中辻久四郎方へ行て前夜の義は當座の一興にして武士  
 の高名になるへき事にはあらず。其通りの義を方々取させら  
 る。一段日來別してかたりたるかひなし。今日途中にて主膳藤太  
 と申されし事心外なり。是みな貴殿の披露なるべし此義覺悟な



らずと果し眼にて腹立。久四郎少しも感く気色なく拙者の申分一通り聞給ひて後成程お相手に命は惜まじ。申かけら  
 る。からは覺悟なりしかじ此義におゐて日本の神ぞ他言は申さず。外にも兩人同番有。此衆中寢間にて様子を聞て自  
 然沙汰せられし事存せず此久四郎は申さぬなれ共。其夜一所に有しが不祥なりいざ心底に任せ給へと身拵して立ける  
 を大助引とゞめ只今の理り至極仕る。此段は免し給とそれより直に主膳屋形に仕掛案内申せば奥座敷にて鼓の音山姥  
 の曲舞なかなばなれば。しばし返事はなかりき大助支關前に立ながら。其語につれて諷しまひぬれば。主膳立出御見舞  
 めづらし。さあ座敷へ御通り申さる。大助はしり懸り藤太が太刀先覺たかと一刃字に切付れば。白額是はと抜合  
 せ戦ふ所に主膳弟善八鐙の鞘をはづしてかゝるを引放して踏込切折ば脇指抜んとする隙を飛かゝりて討は主膳後より  
 たゞみ懸て打を其鐙を取直して突倒し兄弟ながらとゞめまでさしける時。家來四五人抜つれて打てかゝるを。二人突伏  
 一人大袈裟に成をみて此勢ひに皆々逃去太刀をし拭心靜に立退ける。此事大守聞し召れいかなる意趣と穿鑿なかな  
 る所へ。久四郎登城して此たび主膳事段々ケ様／＼の次第とはじめの通り申上それにつき拙者快からず切腹仰付ら  
 れ下されはと心底言上すれば。主膳が仕かた侍の道にかけたるわろ口なれば跡目を潰せとの御意にて。其方が申分  
 ちか比神妙なる。憤り少しも憚る事なくいよ／＼恙なく相勤べしと御褒美の御詞かず。久四郎面目身に餘り宿に歸  
 りぬ。扱主膳屋敷は思ひよらぬ事に取あげられ子息善太郎當年六才になりし母親諸共家來筋目なる者の里に立退し哀  
 年月累て今は十六才になればせひ親の敵を討べしといさぎよく立出國尋ねめぐれど四五年あだにたち此度は四國に  
 渡り阿波の磯崎に着て万景詠め盡されぬ景色誠に其むかし西行も爰に心をとめたるゆかりとし。其具足の物今に残れ  
 るよし旅の疲れのうきを忘れがてら立よりて見るべしと。其庵に尋行住持にあひて冥寶おがみたきねがひ然らばそれ  
 へ入給へと子細らしき貞つきして。あれなる松は御存ぢの磯崎の名木これか西行のあふみ菅笠此きせる筒が富士を詠  
 めに行れし時のなり。あれにかゝりしゆうぜん繪の布呂敷ふるけれ共破れぬがふしぎなり。誠しやかに語りぬ。秋の



日のならひ程なく暮てすぐに其假齊に一夜の袖枕夢ともなく現共あらず其長十丈ばかりの百足血射塗なるが夜光の玉をかゝやかし。善太郎が枕本にたゞずみ我は汝が生國棒の津の片山陰に住者也其方がねらふ敵は攝津の國古曾根といふ所にあり、と御告御かたち消るが如く見え給はず。其夜の明るをまちて舟をもとめ津の國に急てうかゞふに先其村の小家に立よりもし西國方より爰に居住する者はなきかと尋ねしに。あれに見えたるはこそ西のはてよりおはせし率人なるよしといふにまかせて立より様子きくに人音せずあやしやと立入てみれば年比四十餘り女火燵の櫓に腰をかへて天巻し扱もせいなや膝を立てる力もなく絶人ばかりなる躰空よりおろせし繩に取付たるは産をする有様誰是を拵抱する者一人もなし何かはしらず不便につれて座敷にあらがり腰をかへてやれば。詞かくる迄はなく手を合せてさても忝なしと云聲の下より産けるに氣力まさりてかひ／＼しく勿躰なく御手にかけんやと。みづからはや湯をあびせながらどなたさまも存ぜず只今の御心ざしのありがたきに付ても。我つれあひはよし有西國の人なりしが不慮の事ありてより此國にくだり給ひ。うき住のなかにも惣領の子出来たるをたのみにせしかひなく。親仁ははや七月前に果られありたきまゝに日をおく。此わすれ形みの出来るはおのが妹にあらずやそれをもかまはず不孝をかへりみず剩親の百ヶばかりといふにもはや十九器量人にまけず親仁の名をかたどりて大七と申けふもこの寒きに襦袢一枚になりて親の秘藏の百足丸といふ大脇指をさして川狩にとはねど子細をかたりけるうれしき今生れしは女子なればまづは敵の種はつきぬ暇乞して出ればかす／＼礼をいひておくり出けるしらざる事は力なしそれより芥川にいそぎけるに天神の森にて名のりかけ大七を見事に討てかへりける

第四 愁の中へ樽肴

古住參州に小見山惣左衛門とて物頭役を勤め方に理屈がましく武を高く振ひ付届けを第一に覺へたる男。傍觀深谷惣左衛門息祝言の祝義として珍しからぬ塩鯛柳樽若黨與四兵衛に口上云つて遣し其戻り足に岩平徳内へ御娘子御死去の悔申入御返事に及ばず歸るべしと使請取て行に聞達て惣左衛門にて吊の悔云捨にしてはしり出。それより徳内方にて樽肴をもつて目出度といふに家來合点せず是は門逐ひにて有べしといへば。無調法千方に成程ケ様に承りたると達而斷るに付て旦那にかくといひあぐるにそれならばまづ留め置とて使をかへしぬ。扱また惣左衛門にてはことぶき半に凶々敷使亭主氣にかけて直に惣左衛門方に行て京前は各別の御使いかなる思し召そと苦々敷いひ出せば惣左衛門横手を打て近比迷惑徳内方への使ひの通りを云分たるに惣左衛門かへつて氣の毒に思ひ此類ひの事おほしかならず使の者は御免を蒙るといひて歸りけれども。また徳内思はくかれこれ憎き奴と與四兵衛呼つて手打にせぬばかりにしかられるをもはや首をも討るゝかと脇指ひねくり廻し慮外面に顯れたるにたまりかねて抜打にするを丁とうけて切むすび惣左衛門が小鬘にしたゝか手を眞せながらかなはじと逃出其隣屋敷里鐘郷左衛門長屋に欠込子細かたりて頼みけるに。此由郷左衛門にいへば随分いたはりてかくまふべしと疵をば内縁有外科にかけて養生させける。惣左衛門も門迄追かけ正敷爰に欠込しか共家來を他の屋敷へ切散す事を遠慮して先内に歸れば頭の疵けしからず痛み是を惱て公儀を止て居しを。家中の取きたよからず家頼に斬れたる淺ましと云はやらすを壁に耳有てこれを惣左衛門に告たるに此上は諸士に面を合すべきに非ず畢竟かの者を貰て討べしと使をやるに郷左衛門一圓旨す再三の使に是は各別の欠込者の事なればいつ迄も了簡頼むよし云たるに天地は動共渡すまじきと返事しきるに。此まゝにて止ば猶々耻辱かさなり。今はせひに叶ず押付て貰ふべしと先立て状を付追續て若黨三人召つれ死に糞束して玄関に入とかねて覺悟の者共立合郷左衛門家來四人討れし時自身手鐙の鞆はづして二人突倒す働きのうちにはや與四兵衛を引出し首を打をみるより惣左衛門を突伏即座に切腹してあたり侍二人相果けるに郷左衛門が一手弥七無分別に此場より行衛知ず立退しが越前



敦賀に父郷左衛門が兄有に年を送りぬ。然るに惣左衛門果し七月有て生れたる子専太郎成人して諸國をねらひに出し子細は互に親と親相果たる上は意趣なしといへ共弥七立退たるに是を敵と脇より取難すに自敵を打に出ざれば一分立ず方尋ね廻りそれ共しらず敦賀に來り聞は里鐘の同名あるをふしぎに様子窺はん爲此屋敷に忍入濡縁より簀子の下に隠れ一間なる下に一夜を明す合点して身を縮て窺ぬ。爰に弥七從弟娘に美女有しが縁遠く十九の秋迄丸瘻の出來心して弥七度々物を通はせ共會て是を取揚ざるを恨て今や命を捨てしといふに不便は増りながらそれとはなしに有んと思ひ今宵密に忍び給へとつぶやくに悦びて來り此比の物思ひざりとは心づよしなどはむれけるに。弥七兎角の返事なくこなたの思しめしの通りに隨ひたくはあれ共我に思ふ子細有。是をかたらん爲にまねきたるなり。是を聞けて給るべし。われもとしばしもこゝに居ものにもあらざりしに。過し年此段々の首尾有てくるしからぬ所を何の思案なくたち退意趣残らぬ事に敵となり彼者の一子我をねらひに出たる由。然れば明日にも相果し時は末もとどかぬ事に浮目見給はんもよしなし。若又此まゝ存命とても一たび敵に逢ざるうちは枕をかはず事せまじと誓願を立たり。奥の首尾もいかゞ。はや歸り給へといさめける心のうちいさぎよしと思ふ時。娘涙を流して迎も承引なされぬ上は分別極めたりと。懐より剃刀取出して危をとめて立噪く時。専太郎此心入を感じ様の下より弥七弥七と聲かけたるに興を覺し何者そといへば惣左衛門が一子専太郎なり對面すべしといふに疊をあげて覺悟すれば先座敷へあがらぬ先に下より大小を渡し其心底にあらず。元より意趣なき事ながら世間の手前にかく身を碎てねらふといへ共其方今宵の心根是程の戀に我に廻り逢べきを大切に潔清振舞にもはや遺恨残らず。二度武士たつべき共思はず互に戀慕をはれ給へと其座にて響切て出たるに彌七も是を感じ。一夜は比翼の契りをなして執心を晴させ二念をつかず發心して専太郎か閉籠し嵯峨の片庵に尋ね行て諸共に父の菩提を訊ける心を殊勝なれ

武道傳來記卷八

諸國敵討

目録

第一 野机の煙くらべ

身はひとつを情はふたつの事

第二 借や前髪箱根山嵐

涙の時雨に木綿合羽の事

第三 幡州の浦浪皆歸り討

雪の夜鷄思ひもよらぬ命の事

第四 行水でしるゝ人の身の程

伊賀の上野にて打治めたる刀箱の事



第一 野机の煙くらへ

石火電光秋こそ物うきはじめなれ。嵐にもろき梢の一片ちりて丹波の峯別る、横雲の朝無常野に白布の幕うたせ御駕籠物静に毘屋に入奉りいづれも無紋の袴しほれて義式に焼香有し時。三十あまりの美男兩人一度に立て香箱の蓋をあけ前後をあらそひけるは唇の侍外より見ぐるしかりけり。老人は國見求馬今独りは猪谷久四郎とて此二人は大殿の御物あがりにて祿も同じことく千石の光りを顯し世に榮へける。此度の御死去に兩人共に御供申心ざし御遺言にかたく留るべきとの御事なれば思ひ極めし命をながらへ若殿様へ一命を捧げ御奉公を相勤る心底いやしからざる者共なりしが。人には意地といふ事ありて年比互ひに武をあらそひける殊更此度の首尾兩人共におとなしからずと年より中の差圖にて香爐二つ出して求馬久四郎前後なく御焼香を濟しぬ。此上に何の子細もなかりしに久四郎立さまに袴の裙を踏で晴がましき所にしてころびけるこそよしなけれ。求馬家來何とやら笑ひぬる有様に見へければ。久四郎せき心より又宸前の焼香の遺恨に心をなし三昧はなれて福智山の入口にて求馬を討てすぐに何國をしれず立のきぬ。折ふし悪く此事よろしからぬ沙汰して久四郎を悪みける。求馬子共は龍之助とて十一歳其次を虎之助七歳になりて童子心にも親の敵を心かけける。それより三年過て兄弟御暇を申請母親にも泪の別れして家久しき下人に大木角右衛門今津ぬ吉。此二人付添旅のはじめの國めぐり。いつあふべきも定めなく年月かさね尋ぬけるに。きのふけふの心にくれてそれよりは九年の憂事を明し龍之助は二十六歳虎之助は十九の冬のすゑに敵の久四郎事出羽の庄内にしたしみ有て身を隠すのよしほのかにしらせける者有て。又都より打立其城内ははかりあつて領境の里に入しれず借宿して。角右衛門は斗塩を賣ば。文吉は葉黃葉賣ぬ。龍之助は虫嚼齒の妙薬をうり弟虎之助は小間物賣の眞箱に編笠かぶり屋形町をまはりしのびに敵の有家を開共今にしれぬ事を歎き有時淋しき町はつれにさしかより夕ぐれいそぐ春の名残に

心もなき雨ふりて軒づたひに歸るに花山の酒機嫌なる奴薄色櫻をあらけなく手折てにかさして歸る醉の良つき春の木のままの入りのごとく照て眼に角を入て往來に鞆あてをしてさはぎ來る是かや春の物くるひと人みなおそれをなして薨門口をさしてけり。虎之助もかゝる所に來合せながら男にげられもせず。望み有身のよしなき所にゐるも難義と思ひしに。下見せあげて籠のうちより廿あまりの女房やさしくさりとてはあふなしこなたへはいり給へと戸さし明るを嬉しく内に入て此難をのがれしほらく爰に休て内證を見しに草ふかき宿ながら火燧に袖の紫ふとんをかけて眞綿引矢筈のもとに伽羅割のなたなどの有しに。何とやらこの女奥ゆかしく心を付しにみよしの染のきる物に前結びの帯の悪さ只者とは思はれず。立別るゝ事のをしく幾度わらんぢの緒をしめて隙入けるに六十ばかりの老女せんし茶わかしてさし出し給はるこそ嬉しけれすこし乱ておかしき事いふべき口つき見て。彼女おばさまといひてさしあひをいはせざりし。此利發なをまたかはゆらしき面影を見そめ。明日の日のふの礼にもてなして色ふくみし匂ひ袋を參らせる其後は自からしたしくなりて毎日音信けるに。姥御の留主の事も有てよき物かたりして歸り。いよくわけもなく心を通はせいつとなく老女の見も耻ず面白づくの念比をかさね。ある時女たはむれてひとり笑ひの人形あるべし。慰みに見せ給へといふ。あらば何惜からじそれはもたぬといへは。小間物賣のもたぬとは我取出すと箱を明れば何もなく大脇指をこしを見付そなた様を宸前から世のつねの商人とは見請ずいかなる事ぞかし女の無用なる尋ね事ながらかりそめながら契りをこめて子細を聞てはおかれじ先。自か命は貴あへ參らせ置からはと義理つまり至極の所此上は包みかたく生國は丹波の者にて猪谷久四郎といへる者此所に隠るのよしそれ尋ねぬると語りも果ぬに。それこそ私存じたる事有。此國の家老衆柳田長五左衛門と申かたに。しのびてかくまへおかれ出崎といふ所に下屋敷有けるが中く用心きびしく外門二重三重番所かりそめには出入なりかたし私是を存じたるは此秋の出替りに置べきよしにて參りけれ共。何とやらおそろしく思はれ欲捨て牽人してそなた様にふしぎの縁を結びぬ命を進すべしと云一言はたがへし今に



人置われをしるべは行先の三月五日よりそこへ奉公に出。みづから手引をして心任せにうたせ申べし。只今は名を夢  
 樂と申し段々語れば虎之助涙をこぼしいまだなじみもなきうちに身に替ての心ざし二世迄も忘れおかじとなをく  
 情を掛あひける。それより先に龍之助兩人の家來にも。様子を語り聞せ。商の見せかけもそこくにして。其時を待  
 けるに程なく春の出替り比になりて人置の許へ行て日外のかたへ銀さへよくは宿をりをせすはしたばかりを遣はし御  
 奉公に參らふといへば人置よろこび。夢樂の御方へ申て一年切に其身とつかひ女と二人を仕着の外銀百五拾目に極め  
 表向の女郎分に出しに。思ひの外なる事になりて夢樂御内證に引こまれて心にもあらぬ枕物語是非もなき事ながら是  
 皆虎之助様と申かはせし爲なれば逆も身は捨物にして御機嫌に入ける此事すこしもつゝまず有のまゝにちいさく効し  
 たゝめて下女によくく申ふくめ嶋田わけの髪の中へ彼奴を入て袋に扶持かた米のはね入させ。御門を出しけるに子  
 細の有屋形なれば身をふるはせ万事を改めて出しけるに髪は思ひもよらず。たびく虎之助と狀取かはしける。首尾  
 心かけぬるに女の身は是非もなくつるに懐胎して物思ふうちに月かさなりて男子を安産しけるに。うき中にも子とい  
 ふもの不便にて。此女捨がたくなりてけふよりはそれかしが奥さまなりとあまたの女に言葉なをさせ。さりとは  
 さりとては御恩忘れかたき御仕かたなれば。心も乱れかゝりて虎之助事を夢樂にかたり反り討にさせんと女心のはか  
 なき時。扱も口惜や一たび虎之助のと申かはし今また榮花に思ひ替事なかれと心底をかためける折ふし花の盛にな  
 りて毎年三月十七日には父親の命日にして光明院といふ山寺へ參詣するなり。され共人を忍ぶ事あれば長持に入仏  
 事道具見せて參る事なり。そなたより乗物にてまいられ此程の氣つまりを晴し給へとあれば。是天のあたへとよろこび  
 此事書したゝめ宵に虎之助方へ申つかはしければ是を待えたる嬉さ明れば十七日に以上四人身拵へして其寺の道筋  
 に待ければ約束にたがはず塗長持うへにかんてん干大根など置て荷ひ來る跡先より切立三人の中間残りず打て捨扱長  
 持の櫛を貫武運のつきの久四郎求馬が兄弟の仲子龍之助虎之助之介なるぞ比まゝ打もあまりむごしせめて立いで太刀うち

せよと蓋をあくれど足たゝす時刻移れば是非なく首をうちからだ斗長持を兩人家來其寺に荷ひ行ば住持立出それは是  
 へと法師あまたにかゝせ去年のけふは雨にてさんくけふの日和の仕合と物語しながら蓋をあけて是はと驚きさはく  
 所へ彼女來てなけく事をなけかすはじめの段々をかたり此子も我はらはかし物と其まゝさしころし其手にてしがいし  
 て目前の落花とはなりぬ。此女しかたおしまぬ人はなかりき龍之助は生國に歸り父求馬の耻をすゝぎ弟虎之助は彼  
 女の事を思ひやりて叡山にのほり出家して其跡を吊ひけるとなり

第二 惜や前髪箱根山風

茂き小笹をわけて衆道の道に入初るは出羽の國の戀の山ばかりにはあらず近道に筥根を越て。むかし小田原の城下  
 に水際岸右衛門といへる弓大將の一子岸之助。自然と美形に。佛そなはり見し人は是を焦れ余所目の関守なくは思ひの  
 峠にのぼりつめ水海の底にも沈むかし。おなし家中に出頭若さかりの男松枝清五郎いつの程にか色ある兄弟分の契約  
 不斷妹背のごとく姿を二子山にならべ。愚に命く鳥のやどり木に夜を籠屋もうつゝのごとく情の夢をわきまへず寝に  
 もあらず目の覺るにもわりなき誓の詞耳なき揺り枕も後には笑ふなるべし。岸之助今年にはや十七才の春秋月花と詠  
 めくらし光陰の名残おのづからにおしまれしものことほりぞかし。岸右衛門は次第に衰老の身となり。勤め夫年よりは苦  
 勞になり行年の程一日もはやく岸之助を男躰させ。其身は朝夕のね覺心易きねがひより外はなかりき。有時岸之助を  
 呼て元服する支度すべし御前へははや御機嫌をもつて申上たりといひ付られしに此事清五郎に語れば念もない事よし  
 の川ながるゝ水に行年のかへらぬ花をやと合点せざるに年の半もたつを岸右衛門もつての外無興して散々しかられし  
 迷惑浮世のならひととして我身ながら我まゝにならず此内證をいまだしらしめされざる親仁のむかしを尋ねたし家の長  
 卿たる者に竊に是をかたり親父にまた傳へさせければそこに漸く合点ゆかれしからは相役の鳶尾與七右衛門に様子



をかたり此趣き清五郎へよろしく頼むよし。心得たりとそれより當番の書院に上がりし所に、清五郎も宿番のよしにて御廣間にて行合しより。態々参りて申さんと存する折からよくこそ御目にかゝれ。別義にあらず岸之助親岸右衛門年まかり寄たるに付勤め形のごとく威がたく。それにつき岸之助に一日もはやく元服させたまねがひこれは立身奉公の事なれば了簡あつて赦し給はれと拙者に其方へ傳へ給はれとの事清五郎合点せず。與七右衛門打笑ひ勿論若き時のならひ某などもおほえなきにあらず。可惜前振をおしきは常の人こゝろされ共外の事と各別の義御耳にも達したる上の様子もあり。身が頼まれしかひには清五郎殿聞せられて給はれ。六十にあまりたる者が八幡頼みまする幸今日は日がらよし。今晚元服致させると云捨て立けるを清五郎いや是與七右殿拙者は合点いたさぬといへ共聞ぬ顔して御番御油断なく御つとめ申たる事は其通りに仕る。さらばといひながら歸り。直に岸右衛門所に立寄只今昼番勤て歸ります。扱元服の事は拙者是非と申て参りたる上は別義なし御望のごとく御前首尾よかるへき瑞相則今日元服日。最早清に五郎殿には今宵宿番なれば歸らるまじ。目出度初冠あそばせと何の子細なくいひて戻られける跡にて。風は剃刀の利く柳髪をや吹落すらん。明れば清五郎番よりおりて歸る道にて増川横右衛門星村九郎八にあひ先もつて此比は御目にかゝらすかはりたる咄はとかく緩りと承はるへし御兩人ながら御入あそばせと伴ひて入一つふたつ大坂より参りたる落しばなし次に二道の色噂になりて。いふはくどけれ共御亭主の御仕合に及ぶ者は他國はしらす岸之助殿の器量にましてまた有べし共覺えず。され共年月の流るゝには柵もなく人はひとつも闕ては詠めのうすくなる物ながらいつ迄も置たきは前髪といへば。清五郎此詞耳に嬉しくとまりこれはよい所を仰らるゝ。拙者もそれ一つを思ひ入にてある所に氣のみしき親仁にて此比は是非元服させたまよし某聞入ざるとて相役與七右衛門を頼み昨日もお城にて傳言なれ共一圓合点いたさぬなりといひ切たりと云所へ岸之助御見舞と來りけるに。宿を出さまに時雨のしたれば雨羽織着ながら頭巾ふかく被り何れも御出と時宜はして。頭巾はとらず座につくを清五郎是をとがめて若き者の今から頭さむがる

さへあるにいかにか御兩所ながら御心やすきとて無礼なる仕かたと白眼はくつゝ、笑ひしに。横右衛門氣を付て今のほなしの様子にてはなきかといふに清五郎心もとなしと無理に頭巾をとれば南無三寶櫻に大風花なき枯木男となる姿是程にかはる物かいとへば。兩人いやゝ世間のさかりより吉野の春の暮にまよふべしと座興いへ共清五郎無機嫌になりて挨拶そこゝにしらけたるに首尾あしゝと二人は歸りぬ跡にて岸之助懐より髪ふくさ物につゝみて出して其方へわたしますといふを取てなげ付其方はたれにゆるされて元服したると氣色かはりたるにおどろき。はてきのふ與七右殿に苦しからぬ程に元服せよとのこなたと申かはし來られしといふを。無心底者と引よせてさし殺し。それより與七右衛門所に行ば折ふし宿に居合せしに拙者しかとも合点いたさぬを元服させ給ひ世間我ら一分立申さすと。扱打にするを切むすび與七右衛門老足ふみさだめがたく危き所へ岸右衛門公用の事ありて來かゝりしが我子のはや討れたるといふ事もしらず。此ありさまをみてまづ相役のしたしきかたにひかれて與七右助太刀いたすと詞をかけて清五郎に切てかゝる。され共力かひなき老武者の打太刀強ひ若ひ手にたゝきつけられ兩人共に切倒しとどめをさして退所を與七右衛門若黨龜右衛門通がさじと切太刀清五郎大袈裟に別れてふしぬ。下ゝなから即座に主の敵のみか三人の敵まで打とめ計る

第三 幡州の浦浪皆歸り打

人は地道なるこそよけれ。毎年信濃の國桐原のさとり賣馬引せて弥太夫といふ馬口勞幡州立野に立超ける。昔は武士の名馬を持事第一にたしなみぬ。此たびの若馬は鶴毛のふとくたくましく天晴名も高く龍山と申て自慢する甲斐こそあれ其比小湊井右衛門とて家中一番の馬好まづ此屋形に行て見せけるに。其勢耳に替てもほしき心底あらはれしに。弥太夫仕合爰と思ひの外に高ばり金三枚と申出すを拾式兩より十五兩迄望しに。大かた談合しまりて代金は明朝

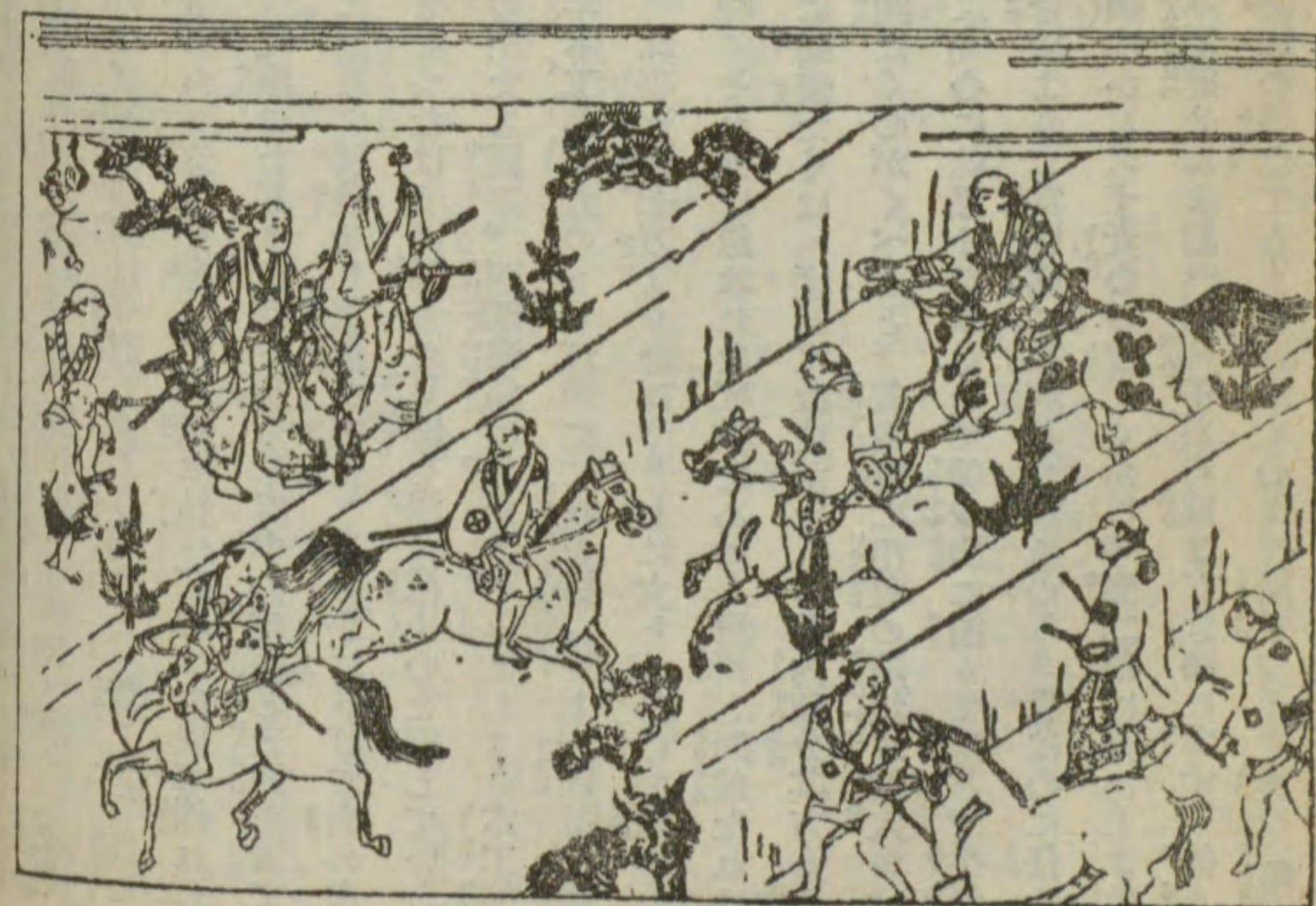


相わたすにして既につながせ弥太夫は宿に歸る時。道にて出来出頭の樗木工弥に逢其方が軍前に引る馬代金にかまはず此方へ取べしと云に欲心萌し。其御心底ならば只今引て參るべしまた井右衛門方へ行ば折ふし公用ありて留主なり。少しのうち借たきよし若黨合点せず。旦那の御前は我らに任せ給へ。いまだ金取たるにてもなしと無理に引出し木工弥方に行ば悦ぶ事限りなく代金三枚に極め則明朝渡すべしと約束して歸りぬ木工弥其夕梅の馬場にて輪乗までしたるを見る者手を打て是程の馬。今では家中におそくはならびあるまじと諷られて猶自慢して私宅に歸りける。其中に富森久九郎といへる男其足より直に井右衛門方に行扱も今朝御手前の既にて見し鬮毛を木工弥求しとて秘藏に乘たり。あれ程の馬何として買れぬぞと云に井右衛門おどろき我留主の内に引て行さへ憎に分別有と。急ぎ弥太夫を呼にやり段段不届なる仕かた買共買ず共急度引て參れとあらけなく呵れ。迷惑なから又木工弥方へ行しばしのうち借たきと云。子細を聞ば始に井右衛門殿契約され共手形も致さず所詮御留主のうちに引て參た御腹立此上はたとへ百兩にても賣は致さねど右の云わけにちよつとおめにかけて參らん間いかやう共御恩に着申べしと達て云に。然らば馬は此方の馬なりと返る念を入れて借ぬ。それより井右衛門屋敷へ引ば先既につながせ弥太夫を呼出し金子十五兩相渡し。請取手形いたせといふに是は近比迷惑といはせずぬにおゐては一寸も頼らせぬがと刀に反を打ばいかにも仕るべしとて賣手形髓に書て其足より直に本國へ走ける。井右衛門は其夜の明るを待兼未ほのくより鞍轡をあらためて美敷敷粧せしれる方には云に及ばず乘ありきて見せけるを驛他仁介此事を木工弥に語りきのふ其方の乘れし馬をは今朝井右衛門我買たる馬として自慢たらへて通りたりといふに木工弥大きに無興し弥太夫を呼にやれば宿にはは夜脱して居す既に我梅のばにて乗たるを誰知ぬ者なし然るを井右衛門に取れたりと評判に逢ては一分立すと驛他仁介前を乗通りたらは定て小松馬場にてせむべしと狀しためて下人に持せやりて渡せば。井右衛門うなつき晩程此松原へ竊に立合此方も僕一人もつれずたがひに一騎打と其宮に立より返事さらへて書て使もどして宿に歸り支度して兩人立出。云しん

とくに只一人つゝ見事なる仕かたぞかし。比は極月の下旬しかも其夜に降雪馬蹄三尺ふかく袖打払ふ暇なげ戦ひけれ共。木工弥元より一流の兵法。たやすく討るまじと思ひしより井右衛門請太刀二つ三つ討れながら無念やとそこ倒伏て四五返南無あみた仏へと唱へはやくよつてとめをさせといへば木工弥扱は今討し太刀手應せしと覺しが。頭に深く切込たるよと嬉しく近寄に音なし。扱こそ息絶たりと留刀さしかる所を寝ながら横に払へば二つに成て倒れしを首尾よく仕舞。幸是より三町南に。徳山八平隠居して入。此庵にたどり行ば。折ふし雪中の夜梅と云題を置て燭を取て遊ぶ所に此有様をみて子細二言に及ばず先持佛檀の下に隠し。秘藏せし唐雞を突殺し自身手にさげて右の木工弥が死骸の際より此血を絞こぼし。そこより北の藪の窟端までつたはせ。歸りに足跡を消て様々心を盡していたはる武士の意氣地ぞかし其翌日此きた家中一倍になりけれ共血の引たる様子。西國海道に退たるとみえしより木工弥子息孫七同しく弟今助御暇を申上て出ける。こゝに哀なるは先年木工弥傘人のうち江戸にて娘を嫁置し夫は身上輕き奉公人牛俣弥二郎といへる男しかも祿よりは内證負しかりき。此事を孫七方よりいひやりしに女とりわけて歎きいかに女子に生れたり共武は弟共には眞まじと弥二郎に暇を乞し時。それ程に思はれなば我ためにも舅親と同前なれば遁べきに非ずしかじ彼敵の有柄いづく共しれざるうちは尋るに路錢たくはへずしては成がたし。其内隨分其方も外なるいとなみしてなりとも路金たまる分別我も勤めの隙は油断なく心がくべしと。終夜野に出里の境垣に輪穴かけて犬を釣て是を賣。女房は人目を忍び絞り煙草入を縫貫縫を顧す。心に此思ひをふくみて朝夕胸に迫りて忘れず半年は末をたのみに誰しらぬ賤の手業男も雨の夜は怠り月の夕も仕合によりて空敷露に袖絞りて歸るのみ。世は心に任せぬ習なるに思ひの外事に身を瘦しぬるぞ頼もしき。され共金銀はかどらず女心の淺しくある時弥二郎に恨めしき色を見せ我も男に生れなば今迄かくしてもおらし。せひねらひて本望達せんと思へば男子から成まじき事に非ず。他人の身の念力うすきよりいつか望を遂ん。侍は其わかちなき義理の道たてるも立ざるも心々の胴骨つよき者の羨



き時殊更今なりと云心底の程弥二郎是を耳に障て。かく武士の道ならぬ事に殺生するもその爲ならずや。尤親の敵を討べき思ひ大切なるよりいへばとて。夫たるものを蔑にする悪口一度二度ならずと内證は調らす心はせく餘りに。女房をさし殺し六つに成し女子をもなからへてうきめ見んよりともし刀にて突殺し其身も自害して果けり。扱孫七宇助は西國残らず尋しに逢ず引返して江戸に下り尋るに行衛をしらず無念ながら孫七裏棚かり宇助は四谷熊之進殿へ小性分に出し是ももし敵の便共ならんかと動し。或時小性中間四五人次の間に集り四方の咄するに。宇助は壁にもたれかゝり。夜前の酒宴に草臥たりと云ながら居眠しばしとて柱にあたりて立かけの髪茶筌になりぬ。目覺て是を不審して誰がほときぬらんとあたりを見廻す所に。戸川浪之助壺口仙六興かる咄を打笑ひてゐたるを聞宇助扱は髪そこなはしたるかおかしきかと理不盡に切付しに。云わけするに隙なく二人して打とめ熊之進に此よしいひあくるに。浪之助を不便がらるゝ宸中にて宇助は手打とさたさせて置ぬ。扱孫七は杖柱と頼つる独の弟におくれ。今は力を失ひしが従弟に櫻北右衛門と云半人は是を便りに心を合せねらひしに。ある夕風の心地して



床に着。三日ほどほりて抱擁出九日めに相果けり。彼井右衛門は八入に七十日かくまはれ。西風烈き夜密に國を立忍び。當所に所縁のあるに始は影を隠しけれ共。孫七兄弟は西の國にくだりたると聞て心を緩し編笠ふかく被りて久敷氣積りを暗さんと寺社の景地を心ざして行に。番町にて孫七是を見付小湊井右衛門遣さぬと詞を懸し時うろたへ者人遯ひと云に見損じたりやと編笠隙所を抜打に切倒しける。以上四人の敵今は老人も残らず絶て井右衛門が手柄隠れなし世にはかゝる例も有物かは

第四 行水てしるゝ人の身の程

白妙に降つてきて下野の國黒髪山も。夜の間に姿の替りて老の首と見なしぬ。年をかさねてむかし語り聞しは那須の何がし殿に勤めし菅田傳平陰山宇藏此兩人申出してけふの雪の面白きにいざ追鳥狩をはじめ酒の肴に雉子四五羽手に取たるやうに進めければ。いづれも飛出る若者共三十余人さそひ合せ其身かる行に拵へ手毎に棒乳切木或は割竹にて敵立驚く鳥のほろゝうちよはりしをとらへける。有人申せしは此原の殺生石にとまりし諸鳥たちまち落ちてほねをもおらずつかみ取といへば。をのゝ是はふしぎと其石の邊りに行て見しに。人の申せしにたがはずとまらんとすれば其まゝこけ落て鳥意に限らず殊更驚はもろく。山鳥のおのが命しらす飛かゝつて落るを皆取事を論じて懸付しに。いまだ片生にしてかけ廻りしをあなたこなたにぼつ付終にとらへてそれよりすぐ鍋掛の里に行て鳥共毛焼して萩柴おりくべ。酒事になして寒さをしのぎけるに。菅田傳平申せしは彼石に落たる鳥はかならずあたる事なり。それも人によるべしと申せばなまぬるき世中堪忍せざる若者命惜からずと胴辛焼かしら迄あまらずあばれ喰の中に熊川茂七郎思案顔して喰ざりしに是を見て心ある人はいづれも用捨して酒計を吞くらしけるに高砂丹兵衛横手を打て茂七郎殿の長生鳥をまいらぬ人ゝは五百八十年も生残りて見給へと四五度も申ければ茂七郎刀をつ取立所を皆引とめ子細なく



かり宿を立て歸りさまに人の透間を見て丹兵衛を待臥して軍前の事覺たかと一文字に打てかれば丹兵衛もおくれぬ男にてしばらく切結ぶうちに茂七郎運盡て棚橋にあらりしに薄雪にて朽木の穴見えずして太股迄是にふん込身のはたらきなりがたく打留られける。それより丹兵衛行方しらず退ける茂七郎一子茂三郎七歳なれば敵討事も果しなく母親歎きの中にそだてあげて十六才になりぬ。され共丹兵衛見しらざりければたとへめぐりあひても討べき便りなく又後見頼む方もなく明暮無念をかさねける。やう／＼思ひ出して因幡なる伯父を頼て丹兵衛をうたすべし。汝が父のためには兄なれ共様子あつて挨拶悪敷久々不通なりしが此度立越頼みなば。よもや外には見捨給ふまじと。ぬこま／＼と書したゝめ茂三郎を仕立熊川茂左衛門殿かたへ遣はしけるに旅の日救をかさねて因幡の國に着て屋形に尋ね入。有し事共語りければ茂左衛門涙を流し茂七郎に恨みの事共忘れ其丹兵衛悪し。我助太刀して是非本望をたつせさすべし心やすかれと頼もしく請合御暇申請茂三郎を伴ひ諸國を尋ねめぐりしに丹兵衛も何國を定めず森沢團齋と云卒人に鑑の名人有しが一向是を頼みにして上下八人にして有時なら都猿沢の池の前なる宿にとまりけるに。時節と隣に茂三郎も一宿せしに互にかくとはしらざりし夕暮になりて下々水風呂に入しに。かたみ替に後を流しけるに背中明所もなく灸をすへけるに。けふあつてあすしれぬ身なるに。何か養生入べし萬に付て浮世といへばいかにも世に隠るゝ主を持っていづれ定めがたき身とつぶやきける。茂三郎小者垣越に聞てかゝる事を申者有と語りけるに。茂左衛門密に裏に出吹みしに年月ねらひし丹兵衛なれば。おどりあがりてよろこび。それより心を付て聞合せけるにあすは七つ立にして伊賀越に行とはや出立焼など馬を約束し用意せはしきに。こなたは随分さたなし夜半に立て道すがら足場のよき所を見繕しに心よき所もなく既に伊賀上野になりてせんずる所爰に極め。まがりとの角を見立。以上四人いさみて酒屋に入て釣懸外に引請て。それながらさしつさゝれつ心祝ひして縁がはに腰をかけてゐるならび其日も八つのおさかりになりて乗懸式置を追立上野の宿に入るは互にあやうき所なり。團齋得ものゝ鑑持町はつれのやねにもたしかけて

勝に入けるは丹兵衛が武命の盡なり。茂三郎馬の眞先に向ひ熊川茂七郎が仲子茂三郎親の敵うつそと各乗懸て切太刀に高股落して。ひらけば丹兵衛抜合一命爰にして戦ひしは天晴ぶしの働なり。時に團齋飛をり助太刀うつを茂左衛門横手なきて兩方手者なれば暫が程秘術を盡しける。され共茂三郎茂左衛門利の劍なれば次第につよくうち留てとゞめをさし。其身も深手なれば死骸に腰を掛息をつぎける内に其國の守より大勢懸付いさめて歸古今武士の鑑刀は鞘におさめ御代長久松の風靜なり

貞享四年卯初夏

江戸日本橋青物町

萬屋清兵衛

大坂吳服町眞齋橋筋角

岡田三郎右衛門



日本永代藏



日本永代藏 卷一

目 録

① 初午は来て来る仕合

江戸にかくれなき俄分限  
泉州水間寺利生の銭

② 二代目に破る扇の風

京にかくれなき始末男  
壹歩拾ふて家乱す忤子

③ 浪風静に神通丸

和泉にかくれなき商人  
北濱に箒の神をまつる女

④ 昔は掛算今は當座銀

江戸にかくれなき出見せ

日本永代藏



壹寸四方も商賣の種

⑤ 世は欲の入札に仕合

南都にかくれなき松屋が跡式  
後家は女の鑑となる者

本朝永代藏 卷之一

初午は乗てくる仕合

天道言ずして國土に恵みふかし。人は実あつて偽りおほし。其心は本虚にして物に應じて跡なし。是善惡の中に立てすぐなる今の御代を。ゆたかにわたるは人の人たるがゆへに常の人にあらす。一生一大事身を過るの業士農工商の外出家神職にかぎらず。始末大明神の御託宣にまかせ金銀を溜べし。是二親の外に命の親なり。人間長くみれば朝をしらず短くおもへば夕におどろく。されば天地は万物の逆旅。光陰は百代の過客。浮世は夢囈といふ。時の間の煙死すれば何ぞ金銀瓦石にはおとれり。黄泉の用には立がたし。然りといへども残して子孫のためとはなりぬ。ひそかに思ふに世に有程の願ひ何によらず銀徳にて叶はざる事天が下に五つ有。それより外はなかりき。是にましたる寶船の有べきや。見ぬ嶋の鬼の持し隠れ笠かくれ蓑も暴雨の役に立ねば。手遠きねがひを捨て近道にそれ／＼の家職をはげむべし。福德は其身の堅固に有。朝夕油断する事なけれ。殊更世の仁義を本として神仏をまつるべし。是和國の風俗なり。折ふしは春の山二月初午の日。泉州に立せ給ふ水間寺の觀音に貴賤男女參詣ける。皆信心にはあらす。欲の道づれはるかなる若路姫萩萩の燒原を踏分。いまだ花もなき片里に來て此佛に祈誓かけしは。其分際程に富るを願へり。此御本尊の身にしても。独り／＼に返言し給ふもつきず。今此娑婆に應どりはなし。我頼むまでもなく。土民は汝にそなはる夫は田垂て婦は機織て朝暮其いとなみすべし。一切の人此とくと戸帳ごしにあらたなる御告なれ共。諸人の耳に入ざる事の淺まし。それ世の中に借銀の利足程おそろしき物はなし。此御寺にて万人かり錢する事あり。當年壹錢あづかりて來年式錢にして返し。百多請取式百多にて相濟しぬ。是觀音の錢なれば。いづれも失墜なく返納したて



まつる。をの／＼五錢三錢十錢より内をかりけるに。爰に年のころ廿三四の男産付ふとくたくましく。風俗律義にあたまつき跡あがり、信長時代の仕立着物袖下せはしく裾まはり短く。うへした共に袖のふとりを無紋の花色染にして。同じ切の半襟をかけて。上田嶋の羽織に纏うらをつけて。中脇指に柄袋をはめて。世間かまはず尻からげして。爰に参りし印の山椿の枝に野老入し髷籠取をへて下向と見えしか。御寶前に立寄て借錢尅貫と云けるに。寺役の法師貫ざしながら相渡して其國其名をたづねもやらず。彼男行がたしれずなりにき。寺僧あつまりて當山開闢より此かた。終に尅貫の錢かしたる例なし。借人ははじめなり。此錢濟べき事共思はれず自今は大分にかす事無用とさたし侍る。其人の住所は武藏江戸にして小網町のすゑに。浦人の着し舟問屋して次第に家榮へしをよろこびて。掛硯に仕合丸と書付水間寺の錢を入置。獵師の出船に子細を語りて百多づゝかしかけるに。かりし人自然の福有けると遠浦に聞傳へて。せんぐりに毎年集りて一年一倍の算用につもり十三年目になりて元尅貫のぜに八千九拾式貫にかさみ。東海道を通し馬につけ送りて御寺につみかさねければ。僧中横手打てその、ちせんぎあつて。すゑの世のかたり句になすべしと都よりあまたの番匠をまねきて。寶塔を建立有難き御利生なり。此商人内藏には常燈のひかり。其名は網屋とて武藏にかくれなし。惣じて親のゆづりをうけず其身才覺にしてかせぎ出し。銀五百貫目よりして是を分限といへり。千貫目のうへを長者とは云なり。此銀の息よりは幾千萬歳樂と祝へり。

二目代に破る扇の風

人の家に有たきは梅櫻松楓それよりは金銀米錢ぞかし。庭山にまさりて庭藏の詠め四季折々の買置是ぞ喜見城の樂と思ひ極て。今の都に住ながら四条の櫛をひがしへわたらず。大宮通りより丹波口の西へゆかず。諸山の出家をよせず。諸御人に送付す。すこしの風氣中腹には自樂を用ひて。扇は家藏を大事につとめ。夜は内を出ずして若ひ時

ならひ置し小籠を、それも雨露をはかりて地蔵にして我ひとり。扇になしける。灯をうけて本見るにはあらず。覺たとをり世の費ひとつもせざりき。此おとこ一生のうち草履の鼻緒を踏きらず。釘のかしらに袖をかけて破す。万に氣を付て其身一代に式千貫目しこためて。行年八十八歳世の人あやかり物とて升掻をきらせける。さればかぎり有命此親仁其年の時雨ふる比。憂の雲立ところをまたず頓死の枕に残る。男子一人して此跡を丸どりにして廿一歳より生れ付たる長者なり。此世倅親にまさりて始末を第一にして。あまたの親類に所務わけとて箸かたし散さず。七日の仕揚八日目より薨門口を明て。世をわたる業を大事にかけて。腹のへるをかなしみて。火事の見舞にもはやくは歩まず。しはひせんさくにとしくれて。明れば去年のけふぞ親仁の祥月とて旦那寺に参りて。下向になをむかしをおもひ出して泪に袖にあまれる。此手袖の碁盤嶋は命しらずとて親仁の着られしが。おもへはおしき命今廿二年生給へば長百なり。若死あそばして大ぶん損かなと是にまで欲先立て歸るに。紫野の邊り御藥苑の竹垣のもとにして。めしつれたる年切女齋米入し明袋持し片手に。封じ匆一通拾ひあげしを取てみれば。花川さままいる二三よりとうらかきそくる付ながら念を入れて印判おしたるうへに。五大力ぼさつとそめ／＼と筆をうごかせける。是は聞もおよばぬ御公家縁の御名なりと。それより宿にかへり人にたづねければ。是は嶋原の肩上郎のかたへやるなるべしと讀すてけるを。是も杉原反故一枚のとく。損のゆかぬ事とて物しづかにとき見しに。尅歩ひとつころりと出しに。是はと驚き先付石にてあらため其後群の上目にて尅刃式分りんとある事をよろこび。胸のおどりをしづめ思ひよらざる仕合は是ぞかし。世間へさしたる事なかれと。下々の口を閉て。扱彼ふみを讀けるに戀も情もはなれて。かしらからひとつ書にして。時分からの御無心なれ共。身にかへてもいとほしさのまゝ春切米を借越つかはし参らせし此内式奴はいつぞやの諸分その残りは皆合力。年々つもりし借錢を濟し申さるべし。惣じて人には其分限相應のおもはく有。大坂屋の野風殿に西國の大臣菊の節句仕舞にとて。一步三百をくられしも。我らが一角も心入は同じ事ぞかし。あらば何か情かるべしと。



哀ふくみての匆草。讀程ふびんかさなり。いかにしても此金子をひろふてはゐられじ。此存念もおそろし。其男にかへさんとすれば住所を知らず。先のしれたる嶋原に行て花川をたつね渡さんと。すこしは鬢のそけを作りて宿を立出し後此一步只かへすも思へばおしき心ざし出で。五七度も分別かへけるが。程なく色里の門口につきてすぐには入かね。しばらく立やすみ。揚屋より酒取に行男に立寄。此御門は斷なしに通りましてもくるしう御ざりませぬかといひければ。彼男返事もせずおとがひにてをしへける。さてはと編笠ぬぎて手に提。中腰にかめてやう／＼に出口の茶屋の前を行過て女郎町に入。一文字屋の今唐土出掛姿に近寄。花川さまと申御かたはと尋ねけるに。太夫やり手のかたへ貞を移して私はぞんじませぬと斗。やり手青腰簾のかゝるかたに指さして。どこぞ其あたりで聞給へといへば。跡なる六尺目に角を立て其女郎つれておじやれ見てやらふと申せば。つれ參る程なれば御まへさまに御尋ねは申ませぬと。跡へさがりてあなたこなたにたづねあたり様子を聞ば式奴どりのはしけいせいなるが。此二三日氣色あしくして別籠り居らるゝよしそこ／＼にかたり出



この挿畫は前項に人けるも

ければ。彼匆草かへりさまに思ひの外なる浮氣おこりて。元此金子我物にもあらず。一生の思ひ出に。此金子切に。けふ一日の遊興して老ての咄の種にもと思ひ極め。揚屋の町は思ひもよらず。茶屋にとひ寄藤屋彦右衛門といへる二階にあがり。屋のうち九奴の御かたを呼てもらひ。呑つけぬ酒にうかれて。これより手習ふはじめ。情勢の取やりして次第のぼりに太夫残らず買出し。時なる哉都の末社四天王。願西神樂あふむ乱酒にそだてられ。まんまと此道にかしこくなつて。後には色作る男の仕出しも是がまねして。扇屋の戀風様といはれて吹揚人はしれぬ物かな。見及びて四年此かたに。式千貫目塵も灰もなく火吹力もなく。家名の古扇残りて一度は榮へ一度は衰ると身の程を諺うたひて一日暮しにせしを。見る時間時今時はまふけにくひ銀をと身を持かためし鎌田やの何がし子共には是をかたりぬ

浪風靜に神通丸

諸大名にはいかなる種を前生に壽給へる事にそ有ける。万事の自由を見し時は。目前の佛といふて又外になし。さればとよ世に大名の御知行。百式拾万石を五百石どり釈迦如來御入滅此かた今に永く勘定したて見るに。これを取つくさじといへり。大人小人の違ひ各別世界は廣し。近代泉州に唐かね屋とて金銀に有徳なる人出来ぬ。世わたる大船をつくり其名を神通丸とて三千七百石つみても足かろく。北國の海を自在に乗て難波の入湊に入木の商賣をして次第に家榮へけるは。諸事につきて其身調義のよきゆへぞかし。惣して北濱の米市は日本第一の津なればこそ一刻の間に五萬貫目のたてり。商も有事なり。その米は藏にやまをかさね夕の嵐朝の雨日和を見合雲の立所をかながへ。夜のうちの思ひ入にて賣人有買人有。巻分式分をあらそひ。人の山をなし互に面を見しりたる人には。千石万石の米をも賣買せしに。兩人手打て後は少も是に相違なかりき。世上に金銀の取やりには預り手形に請判館に何時なりとも御用次第と相定し事さへ。其約束をのばし出入になる事なりしに。空さだめなき雲を印の契約をたがへず。其日切に



損徳をかまはず賣買せしは扶桑第一の大商人の心も大腹中にして。それ程の世をわたるなる。難波橋より西見渡しの百景。救千軒の間丸。堯をならへ白土雪の曙をうばふ。杉ばへの俵物山もさながら動きて。人馬に付おくれれば大道。藤き地雷のごとし。上荷茶船かぎりもなく。川浪に浮ひしは。秋の柳にことならず。米さしの先をあらそひ若ひ者の勢。虎臥竹の林と見へ。大帳雲を蹴し十露盤丸雪をはしらせ。天秤二六時中の鐘にひびきまさつて。其家の風暖簾吹かへしぬ。商人あまた有が中の嶋に岡肥前屋木屋深江屋肥後屋塩屋大塚屋桑名屋鴻池屋紙屋備前屋宇和嶋屋塚口屋淀屋など此所久しき分限にして商賣やめて多く人を過しぬ。昔こゝかしのわたりにて纏なる人などもその時にあふて旦那様とよばれて置頭巾鐘木杖替草履取るも是皆大和河内津の國和泉近在の物つくりせし人の子共。物領残してすゑすゑをてつち奉公に遣し。置。鼻垂て手足の土氣おちざるうちは。豆腐花柚の小買物につかはれしが。お仕着二つ三つ年をかざねけるに。定紋をあらため。髪を結振を吟味仕出し風俗も人のやうになるにしたがひ。供はやし能舟遊びにもめしつれられ。行水に救かく砂手習地舞も子守の片手に置習ひ。いつとなく角前髪より銀取の袋をかたげ。次第おくりの手代ぶんになつて。見るを見まねに自分商を仕掛。利徳はだまりて損は親方にかづけ。肝心の身を持時親請人に難義をかけ。遣ひ拾し金銀の出所なく其なりけりに内證。喫濟て荷ひ商の身の行す幾人かかぎりなし。おのれが性根によつて長者にもなる事ぞかし。惣じて大坂の手前よりしき人代つゞきしにはあらず。大かたは吉藏三助がなりあがり。銀持になり。其時をえて詩哥鞠楊弓。琴笛鼓香會茶の湯も。おのづからに覺えてよき人付會むかしの片言もうさりぬ。菟角に人はならはせ。公家のおとし子作り花して賣まじき物にもあらず。是を思ふに奉公は主取が第一の仕合なり。子細は繁昌の所にはよらず。北濱過書町のほとりにすみけるさし物細工人有しに。此職人にもちいさき弟子二人ありしが。新屋天王寺屋などの十貫目入の銀箱。不斷手に懸て寸法は覺えて其銀はつるに手に取たる事なし。此弟子おとなしくなりて一分見世を出しけるに。親方にかはらず。鐵監火籠箱の仕置。是より外をしらず。此

者も同じ所から大所につかはれなば。それ／＼の商人になるべき。物を見及びぶびんなり。すぎはひは草ばふきの種なるべし。此濱に西國米水揚の折ふし。こぼれすたれる筒落米をはき集めて。其日を暮せる老女有けるが。形ふつゝかなれば廿三より後家となりしに後夫となるべき人もなく。ひとり有世倅を行すゑの樂みになしき年をふりしに。いづの比か諸國改免の世の中すぐれて八木大分此浦に入舟屋夜に揚かね。かり藏せまりて置へきかたもなく。沢山に取なをし捨れる米を塵塚まじりにはき集めけるに。朝夕にくひあまして壺斗四五升たまりけるに。是より欲心出來て始末をしけるに。はや年中に七石五斗のばしてひそかに賣。明のとしなをまたのばしける程に。毎年かさみて二十餘年に胞くり金拾式貫五百目になしぬ。其後世倅にも九歳の時よりあそばせずして。小口俵のすたるをひろひ集て。錢ざしをなはせて兩替屋問屋に賣せけるに。人の思ひよらざる錢まふけて。我手よりかせぎ出し後には。慥成かたへ日借の小判當座かしのはした銀。是より思ひ付て今橋の片陰に錢見せ出しけるに。田舎人立寄にひまなく。明がたより暮がたまでわづかの銀子とりひろげて。丁銀こまかねかへ。小判を大豆板に替。秤にひまなくかけ出し。毎日／＼つもりて十年たゝぬうちに。中間商のうはもりになつて諸方に借帳。我かたへはかる事なく銀替の手代これに腰をかめ機嫌をとる程になりぬ。小判市も此男買出せば俄にあら賣出せば忽ちさがり口になれり。自此男の口を窺ひみな／＼手をさげて旦那／＼と申ぬ。中にも先祖をさかしてなんぞあれめに隨ひ世をわたるも口惜きと我を立ける人。物の急なる時にさしあたつて迷惑し。是も又御無心申さるゝ。金銀の威勢ぞかし。後は大名衆の掛屋あなたこなたの御出入もつはらしければ。昔の事はいひ出す人もなく。歴々の鞞となつて家藏救をつくりて母親の持れし筒落掃藥箆子淵團扇は貧乏まねくといへ共此家の寶物とて乾の隅におさめをかれし。諸國をめくりけるに今もまだかせいで見るべき所は大坂北濱流れありく銀もありといへり。



昔は掛筭今は當座銀

古代にかはつて人の風俗次第者になつて。諸事其分際よりは花麗を好み殊に妻子の衣服。また上もなき事共身の程しらず。冥加をそろしき高家貴人の御衣さへ。京織羽二重の外はなかりき。殊さら黒き物に定まつての五所紋。大名よりすゑの万人に此似合ざると云事なし。近年小ざかしき都人の仕出し。男女の衣類品々の美をつくし。雛形に色をうつし浮世小紋の模様。御所の百色染解捨の洗鹿子。物好各別世界にいたりせんさく。女の身持娘の縁組より内證うすくなりて。家業の障となる人救しらず。婚嫁の平生きよらを見るは渡世のためなり。万民の美婦は春の花見秋の紅葉見。婚礼振舞の外は。目立衣裝を着重ず共すむ事なり。有時室町のかた脇に仕立物屋の軒かほりて。橘の暖簾掛りて。當世着物の縫出しすぐれて都の手利ありて。絹綿爰に持つとひてさながら衣掛山を我宿に見し事ぞかし。仕付の糸火熨あつるを待兼しほととぎす。初空卯月一日は衣かへとて色よき裕を縫かけしをみるに白き紋羅のひつかへしに。緋縮綿を中に入れて三枚かさねの裕。兩袖襟に引綿むかしはなかりし事なり。此うへは万の唐織を常住着となすべし。此時節の衣裝法度諸國諸人の身のため。今思ひあたりて有がたくおぼえぬ。商人のよき絹きたるも見ぐるし。袖はおのれにそなはりて見よげなり。武士は綺羅を本としてつとむる身なれば。たとへ無儀のさふらひまでも。風義常にしておもはしからず。近代江戸靜にして松はかはらず常盤ばし。本町吳服所京の出現世紋付鑑にあらはし。棚もり手代それ／＼に得意の御屋敷出入ともかせぎに勵あひ。商賣に油断なく弁舌手だれ智恵才覺。算用たけてわる銀をつかまず。利徳に生牛の目をもくじり。虎の御門の夜をこめ。千里にゆくも奉公。朝には星をかつき秤竿に心玉をなして。明暮御機嫌とれ共。以前とちがひ今はん昌の武藏野なれ共。隅から角まで手入して。更に隠取もなかりき。御祝言又は衣配の折からは其役人小納戸かたの好みにて一商して取けるに。今時は諸方の入札すこしの利潤を見掛

て喰ひ詰になりて。内證かなしく外聞斗の御用等調へ。剩へ大分の賣かゝり救年不埒になりて。京銀の利まはしにもあはず。かはし銀につまりて。難儀俄に取りひろげたる棚も仕舞がたく自小前になりぬ。免角はあはぬ算用江戸棚残て何百貫目の損。足もとのあかいうちに本紅の色かへてと。銘々分別する時。又商の道は有物。三井九郎右衛門といふ男手金の光むかし小判の駿河町と云所に。面九間に四十間に棟高く長屋作りして。新棚を出し。萬現銀賣にかけねなしと相定め。四十余人利發手代を追まはし。一人一色の役目。たとへば金欄類一人。日野郡内絹類一人。羽二重一人沙綾類一人。紅類一人麻袴類一人毛織類一人。此ごとく手わけをして天鳶免一寸四方。段子毛貫袋になる程。緋縮子鑑印長。龍門の袖覆輪かた／＼にても物の自由を賣渡しぬ。殊更俄か目見の熨斗目いそぎの羽織などは其使をまたせ救十人の手前細工人立ならび。即座に仕立これ渡しぬ。さによつて家榮へ毎日金子百五十兩つゝならしに商賣しけるとなり。世の重寶是ぞかし。此亭主を見るに。目鼻手足あつて外の人にかはつた所もなく家職にかはつてかしこし。大商人の手本なるべしいろは付の引出しに。唐國和朝の絹布をたゞみこみ品々の時代絹。中將姫の手織の蚊屋丸の明石縮阿彌陀の涎かけ朝比奈が舞鶴の切。達磨大師の敷蒲團林和靖が括頭巾三条小鍛冶が刀袋何によらずなといふ物なし。萬有帳めてたし

世は欲の入札に仕合

用心し給へ國に賊家に鼠後家に入聲いそぐまじき事なり。今時の仲人頼もしづくにはあらず。其數銀に應じて。たとへば五十貫目つけば五貫目取事といへり。此ごとく十分一銀出して煙呼かたへ遣しけるは内證心もとなし。一代に一度の商事此損取かへしのならぬ事よく念を入し世の風義をみるに手前よき人表むきかるう見せるは稀なり。分際より万事を花麗にするを近年の人心よろしからず。煙取時分のむす子ある人はまだしき屋普請部屋づくりして。



諸道具の拵下人下女を置添て富貴に見せかけ。婢の敷銀を望み商の手だてにする事心根の恥しき世の外聞ばかりにをくりむかひの駕籠。一門縁者の奢くらべ無用の物入かさなりて。程なく穴のあく屋ねをも齎す家の破滅とはなれり。或は又娘持たる親はおのれが分限より過分に先の家を好み。身袋の外掣の生れ付諸藝ありて人の目立程なるを聞合けるに。小鞆うてば博奕うち若ひ者ぶりすれば傾城ぐるひ止ず一座の公儀ぶりよき人と人の譽れば野郎あそびに金銀をつりやしぬ。是を思ふに男よくて身過にかしこく。世間にうとからず親に孝ありて人ににくまれず。世のためになる人聲に取たきとて尋ても有べきや。よい事過てかへつて難義ある物ぞかし。上つかたにさへ不祥はある物ましてや下つかたの人。十に五つは見ゆるし小男なり共はげあたまなり共。商口利て親のゆづり銀をへらさぬ人ならば縁組すべし。あれは何屋の誰殿の掣ぞと。五節供に袴肩衣ためつけ。紋付の小袖に金拵の小脇指。跡より小者若ひ者挿箱持つれたる當世男見よげにして。娘の母親よろこぶ事なり。それも分散にあへば衣類双物も皆人手にわたりてあしき男の袖を花色小紋に染て着あるひはまたうら付の木綿袴きたるよりはおとれり。婢も高人の家は各別民家の女は琴のかはりに真綿を引。伽羅の煙よりは薪の燃しざるをばさしくべたるがよし。それ／＼に似合たる身持するこそ見よけれ。世間躰ばかり皆いつはりの世中に時雨降行奈良坂や。春日の里に曝布の買問屋して。有徳人松屋の何がしとてありしが。むかしは今の秋田や樽屋にまさりて。世盛の入重櫻爰の都に花をやつて春をゆたかに暮され所酒のから口饅のさしみを好み。其身榮花に明し。此家次第におとろへ。天命をしる年になりて。平生の不養生にて頓死をせられける。妻子に大分の借金を残しこれを譲られる。人の身袋死ねばしれぬ物ぞかし。此後家今年三十八にして小作りなる女。殊更きめごまかにして色白く。うち見には二十七八。人の好める當流女房。跡を忘れて又の縁にもつきかねざる風俗なりしに。若年の子共をあはれみ。人のうたがはぬ程に髪切て。白粉絶て紅花の口びる色さめ。男模様の着物帯も細きを好み押艶男にまされど。女の儀もつかはれず。世の根つきも手細工には及がたく。いつとなく軒もる雨に

しのお草しげりて。野を内に見る鹿の聲。不聞聞よりはかなしく。繪巻の外につれあひの事ゆかし。女ばかりも世を立がたき事今ぞ身に覺えける。今時の後家立るは其死跡に過分の金銀家督ありて。欲より女の親類異見していまだ若盛の女に。無理やりに髪をきらせ。心にもそまぬ仏の道をすゝめ。命日を吊はせける。かならずうき名立て家久しき若ひ者を旦那にする事。所々には是を見及びける。かくあらんよりは外への縁組人の笑ふ事にはあらず。彼松屋後家こそ世の人の鑑なれ。いろ／＼の渡世して心まかせにかなはず。むかしの借銀濟へき調法もならず。次第にまづ敷なる時一生一大事の分別出し。住宅を借かたの衆中に渡すべきと申せば。人皆あはれみて今取べきと云者一人もなし。借銀五貫目此いゑ賣ば三貫目より内なり。後家町中に敷き此家をたのもしの入札にして賣ける。吾人に銀四匁つゝ取て突當りたる方へ家を渡すなれば。てんほにして銀四匁と札を入ける程に三千枚入て銀拾式貫目請取五貫目の借銀はらひ七貫目残りて。後家二度是より分限に成ぬ。人に召つかはれし下女札に突當て四匁にて家持となれり



日本永代藏 卷二

目録

① 世界の借屋大將

京にかくれなき工夫者  
餅搗もさたなしの宿

② 怪俄の冬神鳴

大津にかくれなき醬油屋  
何をしても世を渡る此浦

③ 才覚を笠に着大黒

江戸にかくれなき小倉持  
身過の道急く犬の黒焼

④ 天狗は家名の風車

紀伊國に隠れなき鮎あびす

横手ふしの小荷の出所

⑤ 舟人馬かた鐘屋の庭

坂田にかくれなき亭主振  
明れば春なり長持の蓋



世界の借屋大將

借屋請狀之事室町菱屋長左衛門殿借屋に居申されり藤市と申人髓に千貫目御座り。廣き世界にならびなき分限我なりと自慢申せし。子細は二間口の棚借にて千貫目持都のさたになりしに。烏丸通に三十八貫目の家賃を取しが利銀つもりておのづから流れ始て家持となり是を悔みぬ。今迄は借屋に居ての分限といはれしに。向後家有からは京の歴々の内蔵の塵埃ぞかし。此藤市利發にして一代のうちにかく手まへ富貴になりぬ。第一人間堅固なるが身を過る元なり。此男家業の外に反故の帳をくまり置て見世をはなれず。一日筆を握り兩替の手代通れば錢小判の相場を付置。米問屋の賣買を聞合せ。木藥屋吳服屋の若ひ者に長崎の様子を尋ね。操綿塩酒は江戸棚の狀日を見合せ。毎日万事を記し置ば紛し事は爰に尋ね洛中の重寶になりける。不斷の身持肌を單綿緋大布子綿三百目入てひとつより外に着事なし。袖覆輪といふ事此人取はじめて當世の風俗見よげに始末になりぬ。革足袋に雪踏をはきて終に大道をはしりありきし事なし。一生のうちに絹物とは袖の花色。ひとつは海松茶染にせし事若ひ時の無分別と廿年も是を悔しく思ひぬ。紋所を定めず丸の内に三つ引又は卷寸八分の巴を付て土用干にも疊の上に直には置ず。麻袴に鬼縁の肩衣幾年か折目正しく取置れける。町並に出る葬礼には是非なく鳥部山におくりて人より跡に歸りさまに。六波羅の野道にて奴僕もろ共苦參を引て是を陰干にしてはら藥なるぞと。只は通らず跪く所て燧石を捨て袂に入れて。朝夕の煙を立る世帯持はよろづか様に氣を付ずしてはあるべからず。此男生れ付て忤きにあらず。万事の取まはし人の鑑にもなりぬべきねがひ。かほどの身袋までとしとる宿に餅搗ず。鬧敷時の人遣ひ諸道具の取置もやかましきとて。是も利勘にて大佛の前へあつらへ老貫目に付何程と極めける。十二月廿八日の曙いそぎて荷ひつれ藤屋見せにならべうけ取給へといふ。餅は搗たての好もしく春めきて見えける。且那はきかぬ良して十露盤置しに。餅屋は時分柄にひまを惜み幾度か

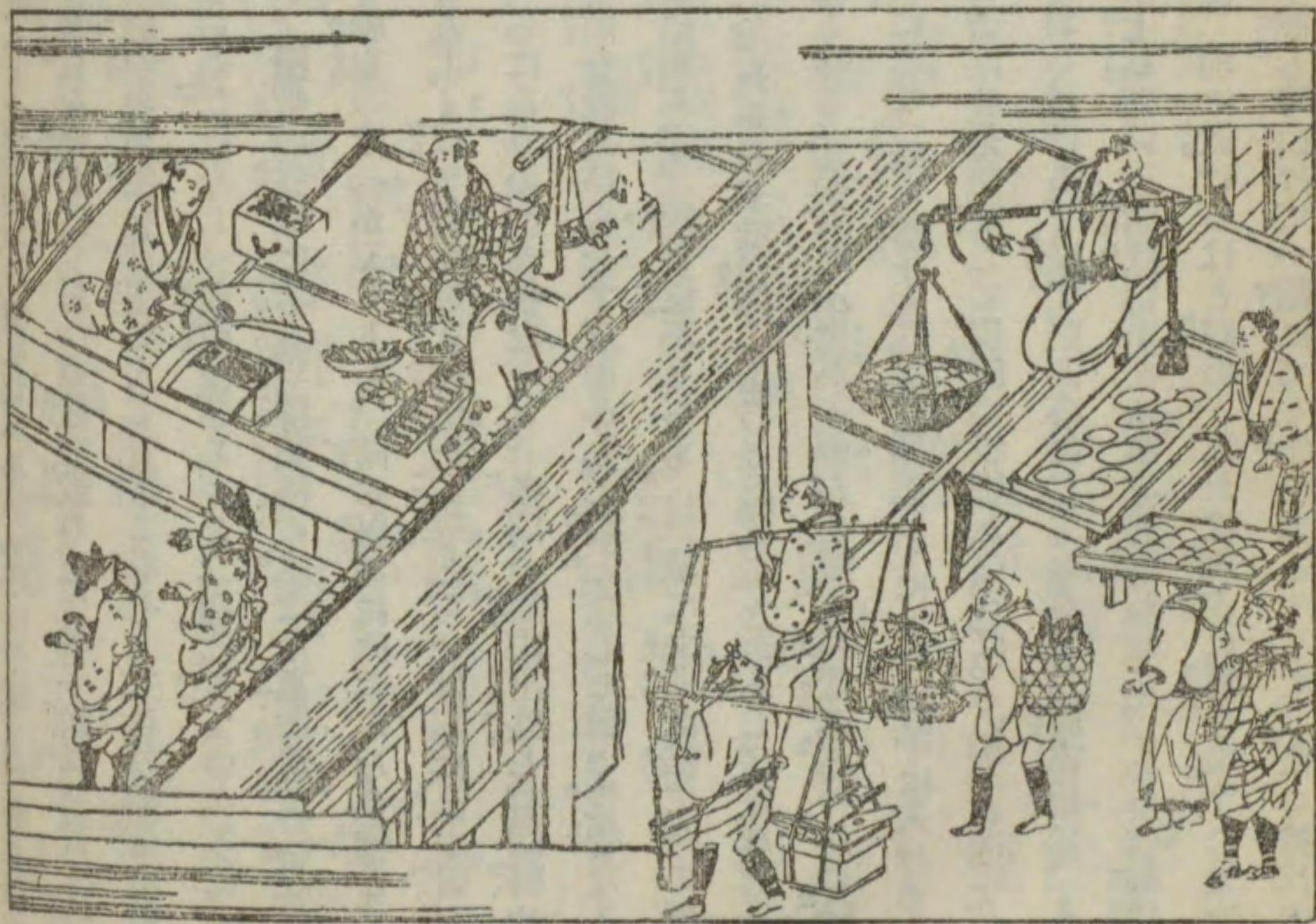
断て。才覺らしき若ひ者杜斤の目りんと請取てかへしぬ。一時はかり過て今の餅請取たかといへははや渡して歸りぬ。此家に奉公する程にもなき者ぞ温もりのさめぬを請取し事よと又目を懸しに。思ひの外に滅のたつ事手代我を折て喰もせぬ餅に口をあきける。其年明て夏になり東寺あたりの里人茄子の初生を籠に入れて賣來るを七十五日の齡是たのしみのひとつは式敷。二つは三敷に直段を定め。何れか二つとらぬ仁はなし。藤市はひとつを二敷に買ていへるは。今一敷で盛なる時は大きな有と心を付る程の事あしからず。屋敷の空地に柳柵櫻桃の木はな菖蒲葱改仁など取まげて植置しは。ひとり有娘がためぞかし。よし垣に自然と朝貞のはへかよりしを。同じ詠めにははかなき物とて刀豆に植かへける。何より我子をみる程面白きはなし。娘おとなしく成て頓て婿入屏風を拵とらせけるに洛中盡を見たらば見ぬ所を歩行たがるべし。源氏伊勢物語は心のいたづらになりぬべき物なりと。多田の銀山出盛し有様書ける。此心からはいろは哥を作りて誦せ女寺へも遣ずして筆の道を教ふもせず京のかしこ娘となしぬ親の世智なる事を見習ひ八才より墨に袂をよごさず。節句の雛遊びをやめ盆に踊らず。毎日髪かしらも自梳て丸曲に結て身の取廻し入手にかゝらす。引ならひの眞綿も着丈堅横を出かしぬ。いづれ女の子は遊ばすまじき物なり。折ふしは正月七日の夜近所の男子を藤市かたへ長者に成やうの指南を頼むとて遣しける。座敷に燈かゝやかせ娘を付置露路の戸の鳴時しらせと申置しに。此娘しほらしくかしこまり。灯心を一筋にして。噂の聲する時元のごとくにして勝手に入ける。三人の客座に着時臺所に摺鉢の音ひきわたれば。客耳をよるこばせ是を推して皮鯨の吸物といへば。いやくはじめてなれば雜煮なるべしといふ。又ひとりよく考て煮麩とおち付ける。必ずいふ事にしておかし。藤市出て三人に世渡りの大事を物がたりして聞せける。一人申せしは今日の七草といふ謂はいかなる事ぞと尋ねける。あれは神代の始末はしめ増水と云事を知せ給ふ。又老人掛鯛を六月迄荒神前に置けるはと尋ぬ。あれは朝夕に肴を喰ずし是をみて喰た心せよと云事也。又太箸をとる由來を問ける。あれは穢し時白けて一膳にて一年中あるやうに。是も神代の



二柱を表すなり。よく〜万事に氣を付給へ扱宵から今まで  
各々咄し給へは寂早夜食の出べき所なり。出さぬが長者に成  
心なり。寂前の摺鉢の音は大福帳の上紙に引綱を摺したとい  
はれし

怪我の冬神鳴

細波や近江の湖に沈めても一升入壺は其通り也。大津の  
町に醬油屋の喜平次といふ者有ける。此所は北國の舟着殊更  
東海道に繁昌馬次かへ駕籠車を轟し人足の働き。蛇の鮎鬼  
の角細工何をしたらばとて賣まじき事にあらず。近年問屋町  
長者のごとく屋造り昔にかはり。二階に撥音やさしく。柴屋町  
より白女よび寄客の遊興昼夜のかぎりもなく。天秤のひどき  
わたり金銀も有所には瓦石のごとし。身袋程高下の有物はな  
しと喜平次荷桶おろして無常觀じける。我商に廻れるさきさ  
きにも世は愁喜貧福のわかち有てざりとは思ふまゝならず。  
かしこき人は素紙子きて愚なる人はよき絹を身に累ねし。菟  
角一仕合は分別の外ぞかし。然れ共其身相ずして錢が一忽  
天から降ず地から涌ず正直にかまへた分にも埒は明ず。身に



應じたる商賣をおろそかにせじと一日暮しを樂しみける。開寺のほとりに森山支好といへる人かたのごとく薬師は上  
手殊に老巧なれ共叡の山風程の事にもかつて薬まはらず。門に噂の聲絶て。内に神農の掛繪も身ぶるひして万の  
紙袋の書付ほこりに埋れ冬も羽二重のひとへ羽織。せんじやうつねにかはらぬ衣袋つき醫師も傾城の身に同じ呼ぬ所  
へはゆかれず。宿に居れば外聞あしく毎日朝脈の時分より立出て。四の宮の繪馬をながめ。又は高觀音の舞臺に行て  
近江八景もあさゆふ見てはおもしろからず。身すぎはかけて隙の有程氣の毒なる物はなし。人には繪馬醫者といはれ  
て口おしかりし。有人取立基會の宿して一番に三錢づゝ茶の代とりて漸く死ぬを徳にして世をおくる人も有。また馬  
屋町といふ所に坂本屋仁兵衛殿とて以前は大商人なりしが大分の銀をなくし残る物とて家藏賣て式拾八貫目ありし  
を取て退。其後三十四五度も商賣かへられしうちに今は残らず喰込て何をすべきたよりもなく。むかしの厚贖もう  
すく仁昧おかしげなればひとつも埒のあかぬ男。貧乏神の社人になれとて一門中是を見かざる。され共母親の隠居銀  
拾貫目あるをひとりの子なればふんにおもはれせめてはこれをとらせ世にすむ種ともなれかし。然れ共仁兵衛に渡  
しては一年もあるまじ。姉嬢にあづけて月に八拾目づゝ利銀わたし。此有切に五人口を過よといはれし。先夫婦子が  
老人弟に仁三郎とて背僕病。ひとり乳のませし姥が足たゝずして外に頼む嶋もなく爰にかゝり舟。日和を見てもと  
れを老人出て行といふものもなし。さりとては拾貫目の利銀にて八拾目取。五人口は過がたし比銀朔日に請取五匁の  
屋賃をのけて置。白米のよきに味噌塩薪をとゝのへ常住香の物菜。此外にはいかな〜三月の鯛を壹枚松茸壹斤式分  
する時も目に見るばかり。咽がかはけば白湯に焦穀油火も眞中にひとつとしてこれを寝さまに消て鼠のあるゝをか  
まはず。益正月の着物もせず年中始末に身をかため。慰には觀世紙縷をして明暮不自由なる世や。あきなひの道しる  
とて百目にたらぬかねにて七八人樂々年こすもあり。又松本の町に後家有。独りの娘に黄唐茶のふり袖に菅笠を着  
せて言葉すこしなまりならひ。ぬけ参りの者に御合力と御伊勢様を賣て此十二年も同じ偽にて世を過る女もあり。



又池の川の針屋ほそき事なれ共娘を京への縁組を聞立。銀式千枚付るとて仲人かゝがとびまはり。しいたら百貫目は付てやらるべしと私語し。人の内證はしれぬ物此大津のうちにもさま／＼ありと。醬油賣まはるさき／＼にて見聞。喜平次が宿にかへりて語りける此女房ずいぶんかしこく子共も奇麗にそだて。人の物をもおはず年とり物をも師走のはじめ比より調へ節季に帳かたげた男の良を見ぬを嬉しやとて万事を仕舞けるに。此幾年か錢とりあつめて七匁五分か八匁。七匁六分八匁九分残り。つゝに拾匁とちて年越たる事なく。板木でをしたるやうな此家の若多びすといはひけるに。瓦落／＼と空さだめなや。多神鳴十二月廿九日の夜の明かたにおちかゝりて。一跡に一つの鍋釜微塵粉灰にくだかれ。是を敷くにかひなく片時もなければならず買もとめしに。其との暮にそれ程たらずして九匁廿四五所に買かゝりやかましき事を聞ぬ。是をおもふに當所のかならず違ふものは世の中。我も神鳴の落ぬまでは世にこはき物はなかりしにと悔みぬ

才覚を笠に着る大黒

一に俵二階造り三階藏を見わたせば。都に大黒屋といへる分限者有ける。富貴に世をわたる事を祈り五條の橋切石に掛かはる時西づめより三枚目の板をもとめ。是を大黒に刻ませ信心に徳あり次第に榮へ。家名を大黒屋新兵衛としらぬ人はなかりき。男子三人無事に撫育いづれもかしこく。親仁よろこひ老後の樂を極め追つけ隠居の支度をせしに。惣領の新六俄に金銀を費し算用なしの色あそび。半年立ぬに百七拾貫目入帳の内見へざりしに。逆も埒の明さる愈儀なれば手代ひとつに心をあはせ。買置の有物に勘定仕立七月前を漸くに濟し。向後奢を止たまへと異見さま／＼申せしに更に聞入ずして。其年の暮に又式百三十貫目たらず今は内證に尾が見えて稻荷の宮の前にしるへの人ありて身を隠しぬ。律義なる親仁腹立せられしを色／＼説ても機嫌なをらず。町衆に袴きせて旧里を切て子をひとり捨ける。され

ば親の身として是程までうとまるゝ事大かたならぬ悪心なり。新六是非もなき仕合はや當分の借屋にも居られぬ首尾になりて。爰を立退東のかたへ行道の草鞋錢とともなく。かなしさは我身ひとりとなげくに甲斐もなし。比は十二月廿八日の夜水風呂に入しを。それ親仁様といふ聲おそろしく。濕身に綿入ひとつ肩にかけ。左に帯を提て下帯には氣をつけずして逃のび。けふ旅立にも尻からげきのどく廿九日の空さだめなく。たまりもやらぬ白雪の藤の森の松にふりしこりて。菅笠なしの首筋に入相の鐘も胸にひゞきて大龜谷勸修寺の茶屋の奇麗に湯釜の沸をこのもしく。たへかたき寒さをしのぐ物よと思ひながら一錢もなければ腰かけを見あはせ大津伏見駕籠の立つどき大勢のどさくさまぎれに咽のかはきを止。立さまに人の脱捨し豊嶋庭をはづし。はじめて盗心になつて行に小野と云里につきぬ。落葉して梢ざびしき柿の木の下に童子友達の集りて。借や弁慶が死けると悔むを聞ば。特牛程なる黒犬なるを立寄て是を貰彼庭につゝみ音羽山の麓に行て。野に鉄つかふ夫を招き。これは疝の妙薬になる犬なり。三年あまり種々の薬をあたへ今黒焼になすといへば。さては諸人の爲ぞとあたりの柴枯笹をあつめ。火打袋を取出し煙の種となし里人にも。わづかにとらせ残るを肩に置いて。山家の作りとばになりて。狼の黒焼はと膝の可笑げに賣て行も歸るもの関越てしるもしらぬもにつき付商ひ。随分道中の人になれたる心の針屋筆やかたられて追分より八丁までに五百八十が物代なして。先は才覚男此取返し京にて出れば遠い江戸迄は行ずに濟事をと。心ながら泣つ笑つ勢田の長橋すゑに頼みをかけて草津の入宿にて年を取。姥が餅をむかしの鏡山に見なし。頼て心の花も咲出る櫻山色も香も有若さかり。かせぐに追著貧乏神は足よはき老曾の森の注連餅もおのづからに春めきて秋見る月もたのもしく。不破の関戸の明暮。美濃路尾張を過て東海道のをく廻り都をいで、六十二日めに品川に着ぬ。是迄の口をすぎ錢式貫三百延し。賣残せし黒焼を磯浪に洗めてそれより江戸入を急ぎしに暮て行當所もなければ。東海寺門前に一夜を明しけるに。其かた陰に薦かふりて非人あまた臥けるが。春も浦風あらく浪枕のさはがしく。目のあはぬ夜半まで身の上の事共物がたりするを聞に。



皆筋なき乞食人は大和の竜田の里の者。すこしの酒造りて六七人の世を樂々とおくりしに。次第にたまりし金銀取あつめて百兩になる時。所の商まだるく。万事うち捨爰にくたるを。一門残らずしたしき友の色と申てとめける。我無分別さかんにまかせ。吳服町の肴棚かりて。上上吉諸白の軒ならびには出しけれ共。鴻の池伊丹池田南都根づよき大木の杉のかほりに及びがたく酒元手を皆水になして。四斗樽の薦を身に被りて古郷の竜田へもみぢの錦は着ず共せて新しき木綿布子なればかへるにと男泣して是に付ても仕付たる事を止まじき物ぞといふ程よろしからずよい智恵の出時もはやおそし。又老人は泉州堺の者なりしが万にかしこ過て藝自慢してこゝにくたりぬ。手は平野仲庵に筆道をゆるされ。茶の湯は金森宗和の流れを汲詩文は深草の元政に學び連誹は西山宗因の門下と成。能は小島の扇を請職は生田與右衛門の手筋。朝に伊藤源吉に道を聞。ゆふべに飛鳥井殿の御鞠の色を見昼は玄齋の碁會にまじはり。夜は八橋檢校に彈ならひ一節切は宗三に弟子となりて息つかひ。淨るりは宇治嘉太夫節おどりは大和屋の甚兵衛に立ならび。女郎狂ひは嶋原の太夫高橋にもまれ野郎遊びは鈴木平八をこなし。噪ぎは兩色里の太鞍に本透になされ。人間のする程の事其道の名人に尋ね覺え何をしたらばとて人の中には住べきものをと腕たのみせしが。かゝる臻り穿鑿當分身業の用には立がたく十露盤をおかず秤目しらぬ事を悔しかりぬ。武士つとめは勝手をしらず。町人奉公もおろかなりとて追出され。今此身になりて思ひあたり諸藝のかほりに身を過る種をおしへをかれぬ親達をうらみける。今老人は親から江戸の地生にて通り町に大屋敷を持って。一年に六百兩づゝさだまつての棚賃を取ながら。始末の二字をわきまへなく。其家迄賣はたし身の置所なく心の燃る火宅を出て。車善七が中間はづれの物もらひとなりぬ。思ひくゝの身の上物語ざりとは同じ思ひに哀ふかく。新六枕に立より我らも京の者なるが旧里断れてお江戸を頼に下りけるが。各々咄しを聞に心ぼそしと恥をつゝまず申せば。三人共に口を揃て佗言の手便はあらずや姨様もないか何とぞ下り給はぬがよい物をと云。はや跡へ歸らぬむかし今から先の思案なり。扱面々の利發にてかく淺ましく成給ふは不思議なり。

り。何事を見立給ひても有べきといへは。いかなく此殿き御城下なれ共日本のかしこき人の密會錢三多あだにはもうけさせず。只銀がかねをためる世の中といへり。久敷見及び給ふ内に。商の仕出しはなきかと尋しに。されば大分にすたり行員から拾ひて靈岩嶋にして石灰を焼か物毎鬧しき所なれば刻昆布花鱈かきて計賣か。つゞき鱒を買て手拭の切賣か。か様の事ならてはかるい商賣有まじと云にぞ智恵付。よの明かたに立別れけるが三人に三百の置錢悦事限りなく。御仕合みへて富士山程の金持に今の事ぞと申ける。それより傳馬町の太物棚にしるべ有て尋行此度の子細をかたれば哀れをかけ男の働べき所は爰なり。ひとかせぎと云にぞ力をえて思ひ入の櫛を調へきり賣の手拭。然も三月廿五日はじめて下谷の天神に行て手水鉢のもとにて賣出しけるに。參詣の人買ての幸と一日に利を得て。毎日是より仕出して十ヶ年立ぬ内に五千兩の分限にさゝれ。一人の才覚者といはれ。新六か指圖をうけて所の人の賣とは成ける。暖簾に背登きたる大黒を染ければ笠大黒屋といへり。八つ屋敷かたに出入九つ小判の買置十て丁ど治りたる御代に住る事の目出たし

天狗は家なの風車

智恵の海廣く日本の人の祖をみて身過にうとき唐樂天が逃て歸りし事のおかし。詩をうたふは耳遠く横手ぶしといへる小哥の出所を尋ねけるに和路大湊泰地といふ里の妻子のうたへり。此所は繁昌にして若松村立ける中に鯨恵比須の宮をいはひ。鳥井に其魚の胴骨立しに高さ三丈ばかりも有ぬべし。目なれずして是にけう覺て浦人に尋ねければ。此濱に鯨突の羽指の上手に天狗源内といへる人。毎年仕合男とてむかし此人をやとひて舟を仕立けるに。有時沖にむら夕立雲のごとく。塩吹けるを目がけ一の錨を突て風車の験をあげしに。又天狗とはしりぬ。諸人浪の聲をそろへ笛太鼓鉦の拍子をとつて大綱つけて轆轤にまきて磯に引あげけるに其たけ三十三尋式尺六寸千味といへる大鯨前代の見



はじめ七郷の賑ひ籠の煙立つべき。油をしぼりて千樽のかぎりもなく。其身其皮ひれまで捨る所なく長者に成は是なり。切かさねし有様は山なき浦に珍しく雪の富士紅葉の高雄爰にうつしぬ。いつとも捨置骨を源内もらひ置て是をはたかせ。又油をとりけるに思ひの外成徳より分限に成。すゑくの人のため大分の事なるを今まで氣のつかぬこそおろかなれ。近年工夫をして鯨網を拵見付次第に取損ずる事なく今浦に是を仕出しぬ。昔日は濱びさしの住みせしが。檜木造りの長屋式百余人の獵師をかへ舟ばかりも八十艘何事しても頭に乘ても今は金銀うめきて。遣へど跡はへらず根へ入ての内證吉是を楠木分限といへり。信あれは徳ありと仏につかへ神を祭る事おろかならず。中にも西の宮を有がたく例年正月十日には人よりはやく参詣けるに。一年帳縫の酒に前後をわすれ。漸く明かたより手船の式十挺立を押しらせ行に。いつの年よりおそき事を何とやら心がりに思ひしに。年男の福太夫といふ家來子細らしき白つきして申出せしは。二十年此來朝多びすに参り給ふに當年は日の入旦那の身袋も挑灯程な火がふらふと。思ひもよらぬあだ口いよゝ氣をそむきて脇指に手は掛しが爰が思案とおさめて。春の夜の闇を挑灯なしにはあるかれじと足を延し胸をさすりて苦笑ひの中に。早船廣田の濱に付て心靜に参詣せしに。松原淋しく御灯の光り幽かに皆下向ばかりにて。参るは我より外になく心をせきて神前になれば。お神樂といへど社人は車座にゐて錢つなきかゝり。誰の彼のと兼ひあひ舞姫の跡にて靴ばかり打てそこゝに埒明鈴も遠ひからいたゝかせて仕舞れける。神の事ながら少腹立て大かたに廻りて又舟に取乗。袴も脱ず浪枕していつとなく寝入けるに。跡よりゑびす殿ゑびしのぬげるもかまはず。玉禪して袖まくり片足あげて岩の鼻から船に乗移らせ給ひ。あらた成御聲にてやれゝよい事を思ひ出してゐてから忘れたは。此福を何れの獵師成共機嫌に任せ。語與ふと思ふに今の世の人心せはしく。我云事斗いふてざらゝと立行ば何を云て聞かす間もなし。おそく参て汝が仕合と耳たぶによらせられ小語給ふは。魚嶋時に限らず生船の鯛を何國迄も無事に蕭やう有。願し鯛の腹に針の立所尾さきより三寸程前をとがりし竹にて突といなや生て鯛の腹治新敷

舟人馬かた鏡屋の庭

北國の雪竿毎年老丈三尺降ぬと云事なし。神無月の初めより山道を埋み人馬の通ひ絶て明の年の汽漿の比迄はおのづからの精進して。塩鯖賣の聲をも聞かず壘桶の用意。燒火をたのしみ。隣むかひも音信不通になりて半年は何もせず明暮煎じ茶にしておくりぬ。諸事を兼ねたくはへ置し故に渴命に及ばざりき。かゝる浦山へ馬の背ばかりにて荷物をとらば万高直にして迷惑すべし。世に船程重寶なる物はなし。爰に坂田の町に。鏡屋といへる大間屋住けるが。昔は纒なる人宿せしに其身才覺にて近年次第に家業へ諸國の客を引請。北の國一番の米の買入。惣左衛門といふ名をしらざるはなし。表口卅間裏行六十五間を家藏に立つたけ。臺所の有様目を覺しける。米味噌出し入の役人燒木の請取看奉行料理人椀家具の部屋を預り菓子捌き真茗の役。茶の間の役湯殿役又は使番の者も極め。商手代内證手代金銀の渡し役。入帳の付手。諸事老人に老役つゝ渡して物の自由を調へける。亭主年中袴を着てすこしも腰をのさず。内儀はかるひ。衣裝をして居間をはなれず。朝から晩まで笑ひ良して中々上方の間屋とは各別。人の機嫌をとり身過を大事に掛ける。座敷救かぎりもなく客老人に老間づゝ渡しける。都にて蓮葉女といふを所詞にて枚といへる女三十六七人。下に絹物上に木綿の立嶋を着て大かた今織の後帯。是にも女かしら有て指圖をして客に老人つゝ寢道具あげおろしのために付置ける十人よれば十國の客難波津の人あれば播州網干の人もあり。山城の伏見衆京大津仙臺江戸の人入まじりての世間咄し。いづれを聞ても皆かしこく其一分を捌き兼つるは独りもなし。年寄たる手代は我ためになる事をしておく。若ひ手代は悪所つかひ仕過しとかく親かたに徳をつけず。是をおもふに遠國へ商につかひぬる手



代は律義なる者はよろしからず。何事をもうちばにかまへて人の跡につきて利を得る事かたし。又大氣にして主人に損かけぬる程の者はよき商賣をもして取過しの引戻をも埋る事はやし。此問屋に數年あまた商人形氣を見及びけるにはじめの馬おりより葛籠をあけて都染の定紋付に道中着物を脱かへ。皺皮取すて新しき足袋草履鬘撫つけて岐楊枝誰に見すへき米鉢をつくるひ。此あたりの名所見に行とて用を勤めし手代を案内につれける人。今迄幾人かして出られたためしなし。親かたかゝりの程なく親かたになる人は氣の付所各別なり。爰に着といなや面若ひ者に近寄いよく、跡月中比の書狀の通りと相場かはりたる事はないか。所て氣色はかはる物にて日和見さだめがたく。あの山の雲たちは二百日をまたすに風とは御らんなされぬか。當年の紅の花の出来は青亭は何程と入事ばかりを尋ね。干鯉のぬけ目のない男間なく上がったの旦那殿より身袋よしとなられける。いづれ物には仕やうの有事ぞかし。此鐘屋も武藏野のごとく廣ふ取しめもなく。問屋長者に似て何國に内證あぶなかりしは。さだまりし貢錢とるをまだるく手前の商をして大かたは仕損じ損をかねぬる物ぞかし。問屋一片にして客の賣物買物大事にかくれば何の氣づかひもなし。惣して問丸の内證脇よりの見立と違ひ思ひの外諸事物の入事なり。それを実躰なる所帯になせはかならず衰微して家久しからず。年中の足餘り元日の五つ前ならではしれず。常には弄用のならぬ事なり。鐘屋も仕合の有時來年中の臺所物前年の極月に調へ置それより年中取込金銀を長持におとし穴を明て是にうち入。十二月十一日さだまつて勤定を仕たてける。たしかなる買問屋銀をあつても夜の寝らるゝ宿なり

日本永代藏 卷三

目録

- ① 煎じやう常とはかはる問藥  
江戸にかくれなき箸削  
小松さかへて材木屋
- ② 國に移して風呂釜の大臣  
豊後かくれなきまねの長者  
程なくはげる金箔の三の字
- ③ 世は拔取の觀音の眼  
伏見にかくれなき後生嫌ひ  
質種は菊屋が花さかり

- ④ 高野山借錢塚の施主  
大坂にかくれなき律義屋



三世相よりあらはるゝ猫

⑤ 紙子身躰の破れ時

駿河にかくれなき花菱の紋  
無間の鐘を聞は突そこなひ

煎じやう常とはかはる問薬

四百四病は世に名醫ありて驗氣をえたる事かならずなり。人は智惠才覺にもよらず貧病のくるしみ是をなをせる療治のありやと家有徳なるかたに尋ねければ。今迄それをしらす養生さかりを四十の陰まで。うかく暮されし事少し見立おそれ共いまだよい所あるは革足袋に雪踏を常住帶るゝ心からは分限にもなり給はん長者丸といへる妙薬の方組傳へ申し△朝起五兩△家職式十兩△夜詰八兩△始末拾兩△達者七兩此五十兩を細にして胸霽用秤目の違ひなきやうに手合念を入。是を朝夕吞込からは長者にならざるといふ事なし。然れ共是に大事は毒断あり○美食淫乱絹物を不斷着○内義を乗物全盛娘に琴哥かるた○男子に万の打囃○鞠楊弓香會連俳○座敷普請茶の湯救奇○花見舟遊び日風呂入○夜歩行博奕若雙六○町人の居合兵法○物參詣後生心○諸事の扱請判○新田の訴詔事金山の中間入○食酒蕨若好意當なしの京のぼり○勸進相撲の銀本奉加帳の肝入○家業の外の小細工金の放目貫○役者に見しられ揚屋に近付○入より高借銀先此通りを斑猫比霜石より怖敷口にていふも扱置心に思ふ事もなかれと少き耳に小語給へば是皆金言と悦び彼福者の教に任せ朝暮油断なく所は御江戸なれば何をしたらばとて商の相手はあり。珍敷見立もがたと日本橋の南詰に曙より一日立つくしけるに流石諸國の人の集り。山も更にうこくかことく京の祇園會大坂の天滿祭にかはらず。毎日の繁昌此御時君が代の道廣く通り町十二間の大道所せきなく此橋の上に馬乘一人出家老人鐘巻筋朝から晩迄絶る事なく。され共人の大事にかくる物はおとさず錢を巻ぬいかなく目に角立ても拾ひがたし。是を思ふに佩につかふべき物にはあらず。菟角商賣に一精出し見んと心は働きながら手振てかゝる事は今の世の中に取手の師匠か取揚婆より外に銀に成物なし種蒔ずして小判も巻歩もはへる例なし何とぞ只取事と氣を付心を碎中に屋形くに行て殿作り仕舞大工屋根齋おのがひとつれに式百三百人辰巳あがりなる高咄し逆賣にして天窓つきおかしく衣裏の汚齋



物袖口のきれたる羽織のうへに帯して間棹杖に突も有、大かたは懐手腰の屈みし後付其職人とは看板なしにしれける。跡より番匠童に鉈木屑をかづかせけるに可惜檜の木を切をちて捨るをかまはず。是らまで大様なる事天下の御城下なればこそと思はれ。是に氣を付けてひとつ／＼拾ひ行に。駿河町の辻より神田の筋違橋迄に一荷にあまる程取集め其まゝ是を賣けるに式百五十匁手取して足もとにかゝる事を今迄しらの事、其後は日毎に暮を急ぎ大工衆の歸りを見合其道筋に有程拾ひけるに五荷よりすくなき事なし。雨の降日は此木屑より箸を削て。須田町瀬戸町の青物屋におろし賣。箸屋甚兵衛と鎌倉柯杖にかくれなく次第分限となりて。後は此木屑大木となりて材木町に大屋敷を求め。手代ばかりを三十余人抱へ河村柏木伏見屋にも劣まじき木山をうけ。心の海廣く身躰直體の風帆柱の買置に。願ひのまゝなる利を得て幾程なく四十年のうちに拾万兩の内證金はぞ若し時吞込し長者丸の験なり。今は七十余歳なればすこしの不養生もくるしからじとはじめて上下共に飛驒袖に着替。芝肴もそれ／＼に喰覺へ筑地の門跡に日参して。下向に木引町の芝居を見物夜は暮友達をあつめ。雪のうちは壺の口を切水仙の初咲なげ入花のしほらしき事共。いつならひ初られしも見えざりしが銀さへあれば何事もなる事ぞかし。此人前後にかはらず一生慍くは。富士を白銀にして持たればとて武藏の土羽芝の煙となる身を知て老の入前かしく取置。世に有程のたのしみ暮し八十八の時。聞傳へ舛搦をきらせ子共の名付親に頼。人のもちひ世のさたに飽て此人死光さながら仏にもなるゝ心ちせり。後の世も悪からしと万人是を羨みける。人若時時して年寄ての施肝要也。逆も向へは持て行ずなふてならぬ物は銀の世中

國に移して風呂釜の大臣

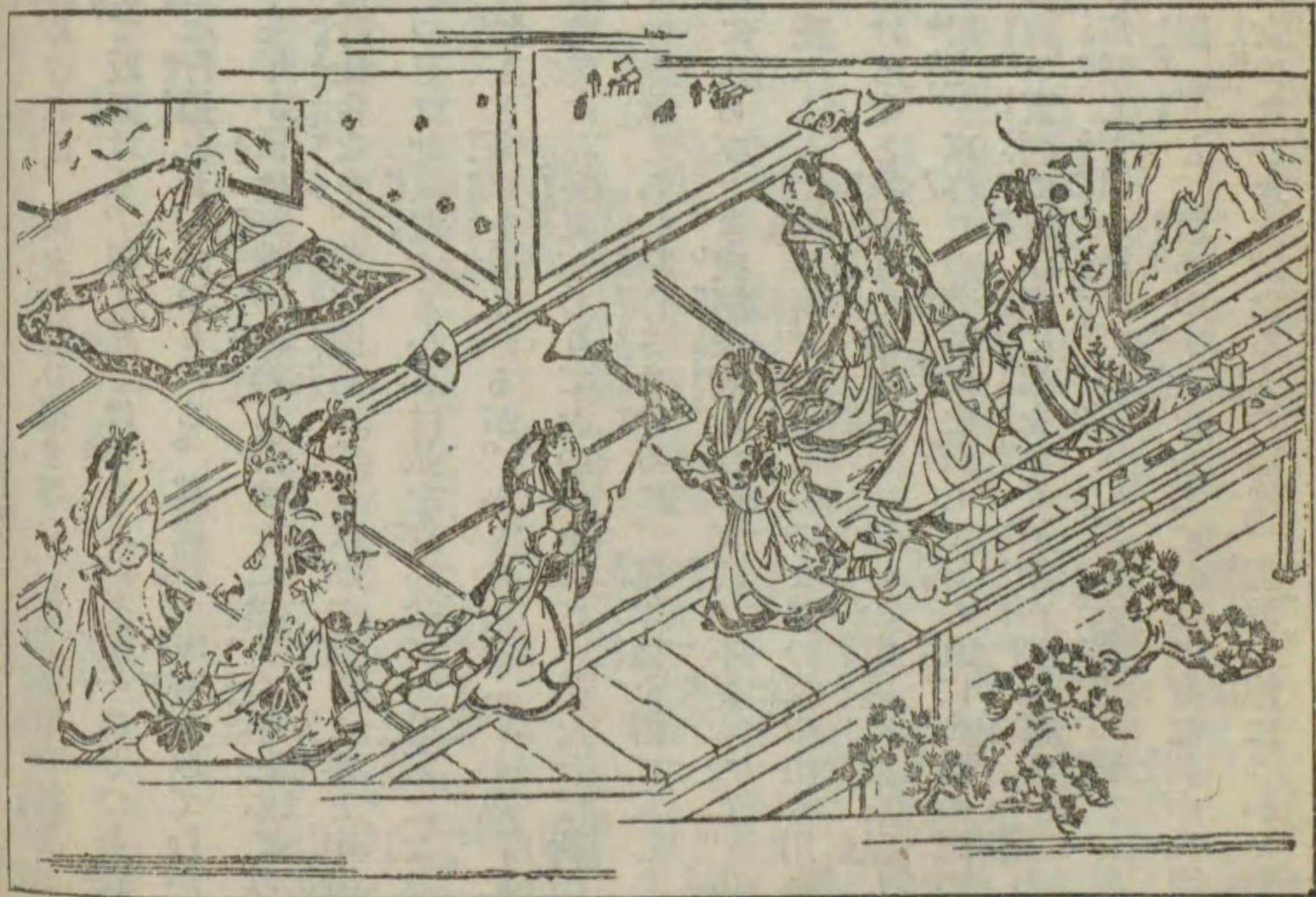
殿中の醫師見放既に末期の水今ぞ生死の海船具にて入けるに是さへ咽を通りかね。いづれも手足を握り是く西方

極樂へ只一道に。とこへも寄りに參る事を忘給ふな親仁徳と進めければ。又中眼に見ひらき我は行年六十三定命さし引なしに浮世の帳面さらりと滑て閻魔の筆に付かゆるに胸算用を極めければ。何をか思ひ残す事なし汝等過賄の種を忘れなと。云おかるゝも外の事なく往生いたされしを各々歎きを止て取置ける。扱も死ては何も入ぬぞ帷子ひとつと錢六匁を四十九日の長旅のつかひ地獄の馬に乗給ふも成まじきと終に行道をおもひやりける。其後親の家督を取てむかしにかはらず豊後の荷内に住て萬屋三弥とて名高し万事掟を守り三年か程は軒端の破損も其まゝに愁を心根にふくみ命日を弔ひ慈悲善根をなし。独りの母に孝を盡せば何事も願ひに叶仕合なり。親仁遺言にすきはひの種を大事と申置れしが。菜種は油のしほり草此種の事なるべしと。一筋に思入いつぞは此買置するか又は是を作らせて。分限になる事を明暮工夫めぐらしける。有時里をはなれし廣野荒て古代より眇と薄原を通りけるが。かゝる所を狼の臥戸にするも國士の費とおもひ付。竊に菜種を蒔散して心見けるに。其時節に花咲実がのりておのづからさへ是なれば新田に申請て十年は無年貢爰を切平して。所々に幾村か人家を立つけ鋤鋤とらせ耕作させけるに。毎年徳を得て人しらの金銀溜りそれより上方への船商ひあまた手代にさばかせ。西國にならびなき次第長者となりて何の不足もなし。其後母親同道して京の春に逢り。何國も花の色香に違ひはなくて。花みる人に違ひ有。おもしろの女藤の都や山も川もちらぬ花の歩行をみて。かなしやいかなる因果にて田舎には生れけるぞと我國元の事を忘れて毎日の遊興に氣を乱しける。され共限り有て歸るさに色よき妾者十二人抱て豊後に下り居宅を京作りの普請美を盡して軒の瓦に金紋の三字を付ならべ四方に三階の寶藏廣間につゞきて大書院。六十間の廊下東西に筑山南に鄰を堀せ岩組西湖を移し。玉の蒔石唐木かけ橋亭に雪舟の卷籠銀骨の瑠璃燈をひらかせ。瑪瑙の釘隠し青貝の椽鼻。眞綿入の疊に天意兔の縁を付其外の結構記し難し雪の朝を詠夏の夕涼み。玄宗の花軍をやつし。扇軍とて數多の美女を左右に分て其身は眞中に座して汗しらの姿を兩方より金地の風に扇ぎ立られ風つよきかたの女になびきまげたる方の扇は。振取て池にうかめ扇



ながしを慰の一景。むかしの眞野の長者も此密には何としてかは及ぶまじ内證は人しらわばとて天の咎も有べし。一家是を悔めと更に止事なし。年久敷手代根帳をメ錢藏銀藏は渡して。三間に五間の小判藏ひとつ主人のまゝにもさせざるうちは其家たじろく事は思ひもよらざりしに。世は無常なり此男五十八の冬のはじめ霜の朝風といふばかりにむなしくなりぬ。其後は輪ども請取て心まかせの奢を極め。我住國の水の重きを改め免角都の水に増たるはあらじと。音羽の瀧のながれを毎日汲せ。先ぐりに幾樽か遙なる舟路を取よせ。手前に湯屋風呂屋を拵へ日毎に焼せける。むかし千賀の浦を六条に移され塩釜の大臣あり。是は都の水を桶に移されければ。風呂釜の大臣とぞ申ならはし。追付朝夕の煙絶にし事を待みしに案のことく一年の暮に惣勘定せしに五十貫目余のさし引に老奴三分本銀に不足出来せめ。夫より次第に穴明て千丈の堤も蟻穴よりもれる水に滅することく其身に悪事かさなり一命迄ほろび世に残れる物は人の寶とぞなれり

世はぬき取の観音の眼



聖念佛の目暮しと云はむかし伏見の御上代の時諸大名の御成門軒をならべてかゝやき。金銀珠玉を鑲め何れの工匠か珊瑚を削りなして。紅梅の枝に春を移し五色の浮雲をしづかに。龍はさながらに動き。虎はそのまゝかける勢ひ見ぬ唐土の二十四孝を越前の殿の御門に。ありくと美形を彫物に此清らなる事言葉にも伸がたし十五万石三年の物成是に入れるとなり。彼京の鉦たゞき孟蘭盆の比勸進にまはりしが。朝日影御成門にうつろひしに是に氣をとられて詠めるに。先大舜の耕作の所斑牛のいかな事作り物とは思はれず。淀鳥羽に歸る車をとどめ己が友かと道づれをこひける。又老萊子が舞振足にはたらきて音曲の有やうに思はれ。手にふれし風車にあたり草木もなびくがごとし。郭巨か堀出し金の釜あれにて食も焼れまじ茶沸す事も勿寐なし。ほしや小判に碎き一生樂くと世をわたるものと。それ心をとられ是に目をよるこぼし実秋の日のならひにてはや暮ておどろき。願以此功德空袋かたげて都に歸るを見て人申ならはして日暮坊と其すゑ今に名たかし其時の繁昌にかはり屋形の跡は芋島となり。みるに寂しき桃林にはな咲春は人も住かと思はれける。つねは昼も蝙蝠飛て螢も出べき風情なり。京海道は昔残りて見世の付たる家もあり。片脇は崩次第に人倫絶て一町に三所ばかりかすかなる朝夕の煙蚊屋なしの夏の夜蒲團もたすの冬を漸くに送りぬ。葛籠吹矢の細工人はまだしも歴々なり。取齊の屋根の輪扇の要刻み灸箸を削り荷繩なひ賣したればとて細長ひ命はつながらまじうき世に住に哀れ多し。町はづれに菊屋の善藏といへる質屋有しが。内藏さへもたす車のかゝりし長持ひとつ物置にも藏にも是を頼みにして此道をしるとて式百目にたらぬ元銀にて。先練に利を得て八人口を大かたにして渡世しける。此家に質置ざりとはかなしき事かずなり。降かゝる雨にぬれて古傘一本六分かりて行ば。朝食焼捨し跡まだ洗ひもやらぬ羽釜さげきて錢百ばかり行も有。八月にも帷子着たる女房がうす汚たる二幅ひとつに三分かりて身の見へすくをもかまはず行。また八十ばかりの腰かゞみ婆々能生てから今年もしれぬ身をして。一日もかなしく兩手のない佛一鉢さかな鉢ひとつ持てきて四十八ばかりの世やまた十二三のむすめ六つ七つの小坊主と昇階子な



がきを跡向漸くに劣てきて錢三十多かりてすぐにかた見世にある黒米五合手束木買て歸る。扱もいそかしき内證しはし見るさへ身に應て泪出しに亭主は中々心よはくはならぬ商賣是程いやな事はなし。これにも請人印判吟味かはる事なく掟の通り大事に掛ける。千貫目かるにも判ひとつとわづかなる事に念入を思はれける。利といふ物つもれば大分なり此菊屋四五年に銀式貫目あまり仕出し。なをひすらく人に情をしらず。足もとなる高泉和尚の寺にまいらず。祭にも五香の宮に參詣せず神仏の願ひいかなく思ひ出しもせざる男。遠ひ初瀬の觀音を信心し俄にあゆみをはこぶを人の氣もあのことくかはる物かと世間にて是さたぞかし。此寺の御開帳七日を古代より判金一枚づゝに極めおかれしを。菊屋式貫目の身袋にて三度まで開帳すれば本願坊をはじめ一山に名を聞傳へまたもなき後生ねがひ古今に三度迄老人しての開帳なき事申侍る。有時心をつけて戸帳を見しにかけまくも長竿にして一端つゞきの十端ならびを用捨もなくあげおろしに半ことの外毀見ぐるしかりき。菊や申せしは我たびく開帳せしに戸帳かくきれ損じけるを寄進に新しく掛かへんといふ。僧中これをよろこび都より金欄とりよせあらためける。そのうち菊屋申は此ふるき戸帳を申うけ京の三十三所の觀音へかけたきといへば。安き事とてつかはしけるを殘らず取てかへる此唐織申もおるか時代わたりの柿地の小釣淺黄地の花免紺地の雲鳳。其外も模様かはりぬはみな大事の茶入の袋表具切に賣ける程に。大分の金銀とりて家榮へ五百貫目と脇から指圖違ひなし。觀音信仰にはあらず是をすべき手だてでもすかぬ男。一たびはおもふまゝなりしが元來すぢなき分限むかしより淺ましくほろびて後には京橋に出てくだり舟にたより請賣の燒酎諸白あまひも辛ひも人は醉されぬ世や

高野山借錢塚の施主

物には時節松の咲散人間に生死なげくべき事にあらず。然れ共命は養生の一大事なるに。毒魚と知ながら鱈汁是に風

味かはらずして漢魚といふもの何の氣遣なかりき。女房は縁組のはじめより祖母になるまで手池にせしを無分別に水をへらしぬ。此貧取かへす事なく一生損にたつなれば人たしなむべきは是長命は其心にありと。堅作り親仁わかひものともに異見を申せし。むかし難波の今橋筋にしはき名をとりて分限なる人其身一代独り暮して始末からの食養生殘る所なし。此人も男ざかりにうき世を何の面白事もなく果られ其跡の金銀御寺へのあがり物四十八夜を申てから役に立ぬ事なり。され共年久敷内藏に隠れ世間見なんだ銀が人手にまはりて九軒の二日払ひの用にも立道頓堀の座拂ひのたより共なる。寶といふ字の消る程今は世のすれ者となりけると大笑ひせし。此しはき人は五十七。癸の辰にてありしが。又癸辰の年辰の日の辰の刻に相果られしといへば是もふしぎの宏才なる人有て三世相命鑑を操けるに此男先生は鎌倉の將軍頼朝公より西行法師に給はりし鏝の猫。値遇の縁にひかれてたまへ人界に生を受。その身は金ながらつかふ事ならず。人の子の物に成ける此はづなり。其金猫は西行しばし手にふれて里の童子にとらせける其猫ほしやと見もせぬむかしの物語にも先搔つき欲をまるめて今の世の人間とはなりぬ。分限は才覺に仕合手傳ては成がたし。随分かしこき人の貧なるに愚なる人の富貴此有無の二つは三面の大黒殿のまゝにもならず。鞍馬の多門天のをしへに任せ百足のごとく身を働て其上に身袋のならぬ是非もなし。天も憐み有諸人も不便をかくるなり。おのれがかせぎは疎畧して居宅を奇麗に作り朝夕酒宴美食を好み衣類腰の物を拵へ分際にて過たる人附會。傾城狂ひ治郎遊び尻も結ばぬ糸のごとく針を藏に積ても溜らぬ内證人の物を見せかけにて借込是を濟すべき分別なし。是は我と覺ての仕業手を出して昼盗人より悪し。末々一度は倒るゝつもりに五七年も前より覺悟して。弟を別家に仕分て分散に是を遁れさし。京の者は伏見に名代を替ては屋敷をもとめ置。大坂の者は在郷の親類に田島を買せ置ぬ。身の置所を先へ跡の虚敷を借錢のかたへ渡して古帳を枕にして横に寝てかゝるこそうたてけれ。町衆扱ひにかゝり年分に其家を立んといへばかへつて是を迷惑がりて外聞は灰まで渡し住家を立のき三月の節句を心やすく桃の酒を祝り。有時十疋貫目の分



散にある物式貫五百目課せ方八十六人毎日勘定に出合。中間事に始末する人なく遺日記に温飽甚切酒肴さま／＼の菓子好み半年あまり隙を費し取物はみなになして埒の明所は老人手前より四分五リンつゝ出してつくばひ。町内へ礼いふてまはるもおかしかりき。むかし大津にて千貫目借銭おひければ世になき事と申せしに。近年京大坂に三千貫目式千五百貫目の分散いづれ遠國のちいさき所にはなひ事ぞかし。ならばなき大湊なればこそ借人もあれかるも是程迄は商人也手柄にも百貫目迄はかられぬ物といへり。むかし難波江の小嶋に伊豆屋といへる手前者自然と倒れ。正直の首をさげて詫言して財宝渡して六分半あり。残る三分半はいつとも仕合次第に濟すべしと結構つくにたち退て生國伊豆の大嶋に行て親類を頼み日夜に世をかせぎ一たび元のごとくと思ひこみし所存より大分まふけて二たび大坂にのぼり。あつて過たる分散の残り銀こと／＼く濟しぬ。それよりは十七年すぎぬれば國遠してしれぬ人もあり。此分の銀は大神宮へ御初尾にあげ。又六七人も死うせて子孫のなき人の銀は高野山に石塔を切て借銭塚と名付其跡をとふらひけるかゝる人前代ためしなき事なり

紙子身袋の破れ時

商賣ひだり前なる呉服屋忠助とてむかしは駿河の本町に軒ならべし中にも。花菱の大紋に家名をしらせ住國はおろかなく。東國北國にあまたの手代出見世をかざらせ次第に人まし内の賑ひ大釜に富士の煙の絶ず水瓶に湖水を湛へ。朱腕龍田のもみぢを散し。白箸むさし野に立霜柱のごとく。朝の繁昌夕に消てかくも又なりはつる世の習ひ其時節とはいひながら。亭主の心かけ悪敷か故なり此人親代にはわづかの身袋なりしか安部川紙子に縮朽を仕出し又はさまざまの小紋を付此所の名物となり諸國に賣ひろめ。はじめは老人なれば卅余年に千貫目といはれける。其子には利發生れおとりて忠助家をして三十年あまり勘定なしの無帳無分別十貫銀の玉にもぬけて春の柳の風に手前乱れて日當りの

水のごとくむかしの水に歸り。湯を呑べき薪もなくかやうにおとろへる事世にためしすくなし。惣じて金銀もうくるは成がたくてへる事はやし。忠助財費みなになして今となつて合点の行事おそし。是非なく淺間の宮の前なる町はづれにかりの世のかり屋すまるもうたてく。人の情も家繁昌の時にて親類縁者の遠ざかればましてや他人は見ぬ良も恨かたし。是程まで主をたをしたる手代共家名をかへて音信不通に見捨盆のさし鯖正月の鏡餅も見た事なくて。かなしき月日をおくり世上はいそがはしき師走にも隙にして。兩隣あつまり暮ちかき年せんさく。をの／＼忠助をさしてこなたもわかひやうに見えてから。白にふるめきたる所あり殊更成人の子共達。大かた中つもりにも違ふまじ四十八九か。忠助機嫌かはりて歴々のお目違ひ。私事當年三十九に罷成といふ。いづれも合点せずいかにしても三十九四十にしては請取がたし物もありやうに語り給へと皆々問つめられ。年は四十七なれ共三十九がまこといふ。其子細を聞ば元日に雑費も祝はす初着物もせず。松かざりは思ひもよらず方東やら。南に梅が咲やら。唇さへもたずして年をとらぬ年が八年有によつて四十七ながら三十九しやと大笑ひして暮ける。我も遠江の新坂あたりまでの路銀あれば忽に分限になる覺へ有と隨に申せは小家住の人人にはやさしく錢巻貫式百つなき集め合力せしをよろこび。其座よりすぐに旅たちさだめてよろしき新類ありて敷きをいふか。又はむかしの賣がけに斷り申分別かどの道にも年とり物には成へしといづれも推量して待ける。忠助が心さし人の心はく違ひ。瀬にかはる大井川をわたりて佐夜の中山に立せ給ふ岑の觀音に參り。後世はともあれ現世を祈りていつの世には埋みし無間の鐘の有所を尋て。骨髄抛て我一代今一たびは長者になし給へ子共か代には乞食になる共只今たすけ給へと。心入ならく迄も通じて突にける。此鐘を突て分限にならば今の世の人末の世には她になる事もかまふべきか。増て蛭の地獄など恐しからず。愚なる忠助無用の路錢をつかひて爰に來にけり先さし當て是程の損になりぬ駿河に歸りて語れば聞人毎に其心からあれと指をさしける。此所は桑の木のみ物竹細工名人あり。忠助是を見ならひ養水入花籠をつくりて十三になる娘に府中の通り筋へ賣に出



し其日をなりわひにをくりけるに。この娘親に孝なる事國中にかくれなし。然も其形うるはしく氣を留て見る程美女なり有時江戸の福人伊勢參宮の南向に是を見そめ。親もと尋ね貫ひ独り有子の娘になし其後忠助夫婦一家残らず東武へ引こし子にかゝる時を得て一生樂とをくりぬ。美目は果報のひとつと是を聞つたへて随分女子を大事に生育けれ共安倍川の遊女はしらすつゝに好女見た事なし。兔角美形はないものに極れり。是をおもふに唐土麻居士が娘の靈照女は悪女なるべし美形ならばよもや籠は賣せてはおかし

日本永代藏 卷 四

目 録

① 祈る印の神の折敷  
京にかくれなき桔梗染屋  
わら人形の夢物かたり

② 心を疊込古筆屏風  
筑前にかくれなき舟持  
蜘蛛の糸のかゝるためしも

③ 仕合の種を蒔錢  
江戸にかくれなき千枚分銅  
そなはりし人の身の程

④ 茶の十徳も一度に皆



越前にかくれなき市立  
身は燃杭の小釜の下

⑤ 伊勢海老の高買

堺にかくれなき樋の口過  
能は棧敷から見てこそ

祈るしるしの神の折敷

大繪馬掛 奉る御寶前洛陽清水寺に。吳服所の何某銀百貫目を祈り其願成就して是に名をしるして懸られしと語りぬ。今其家の繁昌を見競。一代に金銀もたまる物ぞと室町の是きたなり。人皆欲の世なれば若惠比須大黒殿毘沙門弁才天に頼みをかけ鉦の緒に取付元手をねかひしに。世けんかしこき時代になりて此事かなひがたし。爰に桔梗やとて纒なる染物屋の夫婦渡世を大事に正直の頭をわらして暫時も只居せずかせげ共。毎年餅搗おそく肴掛に鯛もなくて春を待事を悔みぬ。宝船を敷寢にして節分大豆をも福は内にと随分うつかひもなく。貧より分別かはりて世はみな富貴の神仏を祭る事人のならはせなり。我は又人の嫌へる貧乏神をまつらんとおかしげなる薬人形を作りなして身に濫帷子を着せ頭に紙子頼を被せ手に破れ團をもたせ見ぐるしき有様を松飴りの中になをして元日より七種迄。心に有程のもてなし此神うれしき餘に其夜枕元にゆるぎ出。我年月貧家をめぐる役に身を隠し様々なしき宿の借銭の中に埋れ。悪さする子共を嘗るに貧乏神めとあて言をいはれながら分限なる家に不斷丁銀かける音耳にひびき積の虫がおこれり。朝夕の鴨輪杉焼のいたり料理が胸につかへて迷惑。我は元來其家の内儀に付てまはる神なれば。奥の寢間に入てかさね蒲團釣夜着はんやの括り枕に身がこそばく。白むくの寢巻に留らるゝかほりに鼻ふさぎ花見芝居行に天鷲菴窓の乗物にゆられて目舞心に成もいやなり。夜は蠟燭の光り金の間にうつりてうたてかりき。貧なる内の灯十年も張かへぬ行燈のうそくらきこそよけれ。夜半油をきらして女房の髪のおを事かきさすなどかゝる不自由なる事を見るをすきて年々を暮しぬ誰とふ者もなくなげやりにせられ我は貧よりおこり。なをく衰微させけるに此春其方心にかけて。貧乏神を祭られ折敷に居て物喰事前代是がはしめなり。此恩賞忘れがたし。此家につたはりし貧錢を二代長者の奢り人にゆつり。忽ちに繁昌さすべし。それ身過は色々あり。柳はみどり花は紅井と。二三度四五度繰返しあら



たなる御天夢覺ても是を忘れず。有難く思ひ込。我染物細工なるにくれな井との御告は正しく紅染の事なるべし然れ共是は小紅屋といふ人犬分仕込して世の自由をたしぬ。そのみ近年砂糖染の仕出し重ひ智恵者の京なれば大方の事にて利を得る事思ひも寄すと。明暮工夫を仕出し蘇枋木の下染其上を酢にてむしかへし。本紅の色にかはらぬ事を思ひ付是を秘察して染込自ら歩行荷物して江戸に下り本町の呉服棚に賣ては登商に奥筋の絹綿とよのへさす手引手に油断なく鋸商にして十年たぬうちに千貫目余の分限とはなりぬ。此人數多の手代を置いて諸事さばかせ其身は樂を極めわかひ時の辛勞を取かへしぬ。是ぞ人間の身のもちやうなりたとへは万貫目持たればとて老後迄其身をつかひ氣をこらして世を渡る人一生は夢の世とはしらず何か益あらじ。されは家業の事武士も大名はそれ／＼國につたはりてねがひなし末々の侍親の位牌知行を取樂と其通りに世を送る事本意にあらず。自分に奉公を勤め官職に進めるこそ出世なれ。町人も親にまふけためさせ讓狀にて家督請取仕にせおかれし商賣又は棚賃借銀の利つもりしてあた世をうか／＼とおくり二十の前後より無用の竹杖置頭巾長柄の傘さしかけさせ世上かまはず潜上男いかにおのれが金銀つかふてすればとて。天命をしらす人は十三才迄はわきまへなくそれより廿四五までは親のさしつをうけ其後我と世をかせぎ四十五迄に一生の家をかため遊樂する事に極まれり。なんぞ若隱居とて男さかりの勤をやめ。大勢の家來に暇を出し外なる主取をさせすゑを頼みしかひなく難義にあはしぬ。町人の出世は下を取合其家をあまたに仕分るこそ親方の道なれ。惣して三人口迄を身過とはいはぬなり。五人より世をわたるとはいふ事なり。下人老人もつかはぬ人は世帯持とは申さぬなり。且那といふものもなく朝夕も通ひ盆なしに手から手にとりて女房も手くふなどいかに腹ふくるればとて口をしき事ぞかし。同じ世すぎ各別の違ひあり。これを思はゞ暫時も油断する事なかれ金銀はまはり持念力にまかせたまるまじき物にはあらず。我夫婦よりはたらき出し今七十五人の龍將軍大屋敷ねがひのまゝに七つの内藏九の間の座敷万木千草の外銀の生る名木はびこりて所はしかも長者町にすめり。

心を疊込古筆屏風

時津風靜に日和見乗覺て。西國の巻尺八寸といへる雲行も三日前より心えて今程舟路の體成事にぞ。世に舟あればこそ一日に百里を越。十日に千里の沖をはしり万物の自由を叶へり。されば大商人の心を渡海の舟にたとへ我宿の細き溝川を一足飛に寶の嶋へわたりて見ずは打出の小槌に天秤の音きく事有べからず。一生秤の皿の中をまはり廣き世界をしらぬ人こそ口惜けれ。和國は扱置て唐へなげかねの大氣先は見えぬ事ながら唐土人は律義に云約束のたがはず。絹物に奥口せず薬種にまぎれ物せず木は木銀は銀に幾年かかはる事なし。只ひすらこきは日本次第に針をみちかく摺織布の幅をちよめ傘にも油をひかず錢安きを本として賣渡すと跡をかまはず身にかゝらぬ大雨に親でもはだしになし只は通さずむかし對馬行の莫若とてちいさき箱入にしてかぎりもなく時花大坂にて其職人に刻ませけるに。當分しれぬ事とて下つみ手ぬきして然も水にしたし遣はしけるに。舟わたりのうちにかたまり煙の種とはなざらりき唐人是をふかく恨み其次の年なを又過つる年の十倍もあつらへければ。欲に目のあかぬ人我おそしと取急下しけるに大分漆に積せ置て去年たばこは水にしめされ思はしからず。當年は湯か塩につけて見給へと皆つき返され自らに朽て礫の土とは成ぬ。是を思ふに人をぬく事は跡つゝかず。正直なれば神明も頭に宿り貞簾なれば仏陀も心を照す。免角は天に任て長崎商ひせし人筑前の國博多に住なして金やかやいへる人海上の不仕合一年に三度迄の大風。年々の元手打込で残る物とて家藏ばかり軒の松風淋しく。めしつかひの者も暇出して妻子も一日暮しのかなしさ俄に何に取付嶋もなくなみの音さへ恐しく。孫子に傳て舟には乗まじきと住吉大明神を心誓言に立ある夕暮に端居して涼風を願ひ四方山を詠めしに雲の峯に立かさなり龍ものぼるへき風情空定めなきは人の身躰我貧家となれば庭も茂みの落葉に埋れいつとなく雀の宿にして萬の夏虫野を内になし諸聲の哀れなり。見越の大竹より杉の梢に蜘蛛の糸筋はへて。是をわた



れば嵐に切れて中程より其身落て命もあやうかりしに又も糸かけて傳へばきれ。三度迄難義にあひしに終に四度めにわたりおゝせて間もなく蜘蛛の家を作りて飛蚊の是にかゝるをおのか食物にして猶々糸くりかへすを見てあれさへ心なかく、菓をかけおゝせて樂しむなればいはんや人間の氣短に物毎打捨る事なかれと。是より思ひ付て居室賣其時を見合せ少しの荷物を仕入。むかしにかはりて手代もなく我と長崎に下り人の賣の市にまじはり唐織藥種鮫諸道具見しに買はあがりを受るをしりながら。金銀に餘慶なく京堺の者によい事させて智恵才覺には天晴人にはおとらね共。是非なき革袋に取集て五十兩。爰の商人の數にはいらす。はかどらぬ弄用捨てわざくれ心になりて丸山の遊女町に行て全盛の時に身なし太夫を今宵ばかりを一生のおさめと以前の便を求め。花鳥といへるに逢初しよりあさからず常よりしめやかなる枕屏風を見しに兩面の惣金にして古筆明所もなく押けるがいづれかあだなるはなかりし。中にも定家の小倉色紙名物記に入たる外六枚見程時代紙正筆に疑ひなし。いかなる人か此太夫には送られしと欲心發りて遊興は脇になりぬ。それより明暮通ひなれて上手を仕掛しにいつとなく女蘭惱て我黒髪も惜からず切程の首尾になりて彼屏風買かけしに子細もなくくれける。取あへず暇乞なしに上方にのぼり。手筋を頼み大名衆へあげて大分の金子申請て又むかしにかはらぬ大商人と成て眷屬あまた召つかひ。其後長崎に行て花鳥を請出し願ひの男豊前の浦里に有なれば其元へ金銀諸道具何に不足もなく拵へ縁に付れば花鳥限りもなく悦びこの御恩は忘れじと申ぬ。一たびは傾城をたらすにといへど是らは悪からぬ仕かた其目利ぬからぬ男と世間皆是をほめける

仕合の種を蒔錢

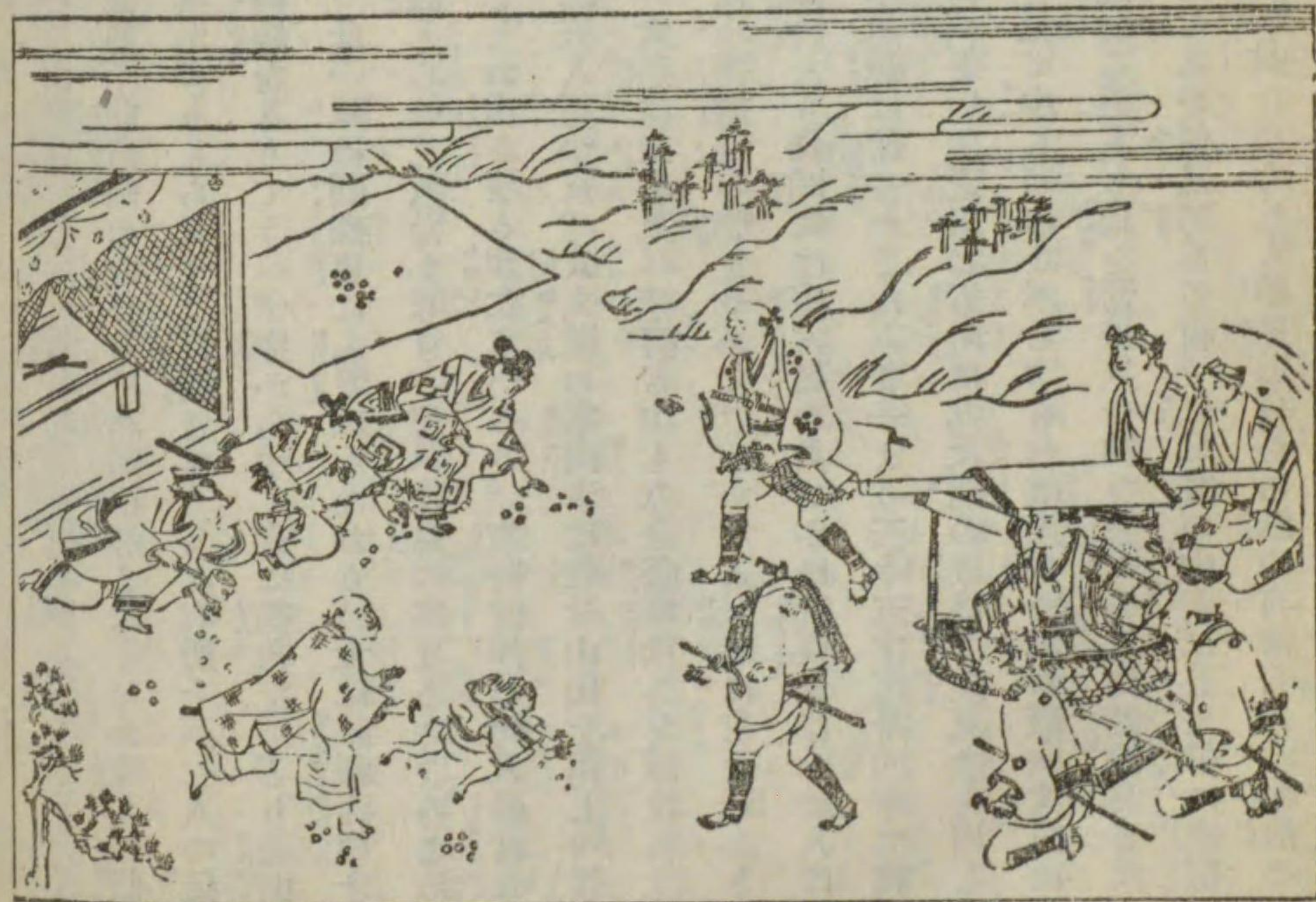
人は正直を本とする事は神國のならばせなり。伊勢の社のかろ／＼數百二十末社紙表具の神味思へば淺猿なる事なれ共。何の儼りなき心を敵に懸て人も驚らす。此秋津洲に住者歩をはこびぬ。さればいづれの世より小才（註） 觀らしく。宮通りの蒔錢に鳩の目と云。おかしげなる蒔錢百といふて六十つなぎにして扱もせちがしこき人心驚なる福の神是を笑ひ給ふべし。爰の繁昌申もおろかなり。大々神樂の寶の山諸願成就十式貫目此御初尾の絶る間もなく。笙の笛貝杵子して世渡る海の若利布に眞砂の數をしらず其外末々御師手前右筆のなき人は諸國檀那まはりのお定りの狀ひとつ錢壹匁つゝにして是を書て年中妻子はごくむ人何百人か其かぎりしられず。口過さま／＼に有所をかし人の氣をくみて商の上手は此國なり相の山の袖乞迄も心ながく道者の機嫌をとりてうへず寒からず。身に絹布をかざり連引の三味線に乗て淺ましや心ひとつといふ一節いつ聞ても替らず。此一里の間殊更に慰にもなれり。世に錢程面白き物はなし。あまたの講參りはあれ共終に此乞食のたんのする程錢とらせし人なかりき。思へは錢の事なるによろこばせたり物なり。嶋原正月買の庭錢はすれと京の人すぐれてしはしとお白石まく親仁もいへり。有時江戸の町人參宮せしに乗掛さのみかざらず。駕籠ぶとんも紫の目に立ずして供二三人召つれ。太夫殿の案内者に任せ山田を出し時新錢式百貫調へから尻馬に付て間の山五十町のうち時散しければ。大道は土も見へず野も山もみな錢掛松かと思はれ立かゝりて拾へは松原踊の袖にあまり味噌漉よりこぼれてしばしは小哥撥音の鳴をやめて。いかなる長者に有やらん其名を尋しに。武州境町の邊りに分銅屋の何某とて人のしらぬ銀持なり世間には唐大名の見せかけ商賣おほし此人は面むきかるうして内證のつよき事闇に鬼をつながごとく。年越毎に仕合かさなり廿一より三十五才迄卅四年に我とかせぎ出し金七千兩を一子にゆづりぬ。抑商のはじめは都傳内といふ芝居の近所に九尺間の棚借て錢見せを出し諸見物の札錢を賣けるに銀式匁三匁のうちにて五厘毫分の掛込を見て少しの事ながらつもれば大分の利を取。次第に兩替屋となりて是補分限根のゆるぐ事なし其隣にすぐれて利發なる男あり鳥を鷺の見せ物を拵へ一年は崗鷹鳥とて作り物珍ら敷一日に五十貫つゝも取込又ある年は。形のおかしげなるを便乱坊と名付。毎日鏡の山をなして俄に家藏求へき人はさもなく。今に奥山入海に心をなし自然淺黄色なる猿もがな。もしも手足の付たる鯛の有事もと水の泡の



世わたり消る事安し。惣じて役者子共の取銀は當座の化花ぞかし玉川千之丞女がたして河内通ひの狂言一番を一日小判壱兩に定め一年三百六十兩づゝ取ぬるも伊勢へ引込死る時は昔の舞臺衣裝も残らず。其時の榮花を樂しめる外なし。金銀溜て商人になるべき心掛しるにもあらず。其道ををしる事人の肝心なり。過にし西の年諸道具迄も煙となし皆丸裸になりしが程なく以前のごとく酒屋は杉をしるしの門はかはらず。本町の呉服棚をれその錦を飭り傳馬町の絹屋綿屋も同じ棚つき佐久間の面は萬の紙賣。舟町の魚市米柯杖の賣買尼棚の塗物問屋通り町の繁昌此時なるへし風絶て雲静に降照町は下踏雪踏の細工人白銀町の槌の音昔見し人家職かはらず。此前日用取は其妻山伏は其貞腫物切疵の膏藥賣は今も同じ聲。独りも身遣をかへたるは見えず。貧者ひんにて分限は分限に成ける。是程ふしぎなる事なしと彼分銅屋見廻り置て語りぬ。廣き町筋に只壱人其時分銀拾ひてや手馴し珠數屋をやめて中橋に刀脇指の棚出して一度は榮て見えしが程なく今の劍昔の菜刀とさびて又もとの珠數屋を後主大事として命の珠をつながれ人はしつたる道を一筋に覺て

茶の十徳も一度に皆

越前の國敦賀の湊は毎日の入舟判金壱枚ならしの上米ありといへり。流の川舟の運上にかはらず萬事の間丸繁昌の所なり。殊更秋は立つゝ市の借屋目前の京の町男まじりの女尋常に其形氣北國の都ぞかし。旅芝も爰を心かけ巾着切も集れば今時の人かしこく印籠はじめからさげず。鼻紙袋も内懐に入しは手のとゞく事に非ず。此中にても錢を壱多只はとられず盗人中間もむつかしの世や魚角正直の頭をさげて當座の旦那あひしらひに。物買をまねき商上手の者は世をわたりかねず町はづれに小橋の利助とて妻子も持ず口ひとつを其日過にして才覺男荷ひ茶屋しほらしく拵へ其身は玉だすきをあげてくゝり袴利根に烏帽子おかしけに被き人よりはやく市町に出ゑびすの朝茶といへは商人の移り氣咽のかはかぬ人迄も此茶を呑て大かた十二匁づゝなげ入れ日毎の仕合程なく元手出來して葉茶見せを手廣く其後はあまたの手代をかゝへ大問屋となれり。是迄は我はたらきにて分限の成人のほめ草なびき。唇の乞聲にも願ひしに。壱兩よりうちにて女房をよばす四十迄はおそからずと當分の物入を弄用して。銀の溜るを慰に淋しく年月を送りぬ。それより道ならぬ悪心發りて越中越後に若ひ者をつかはし。捨り行茶の煮辛を買集め京の藥物に入事と申なし香茶に是を入ませて。人しれずこれを商賣しければ一度は利を得て家榮へしに天是をとがめ給ふにや。此利助俄に乱人となりて我と身の事を國中に觸まはり茶菓くゝと口をたゝけば扱はあの分限さもしき心底よりと人の附會絶て薬師をよべと行人なくおのづから次第よほりに湯水のかよひ絶て既に末期におもむき。我今生のおもひ晴しに茶を一口と涙を漏す。目に見せても咽に因果の閑居て。息も引入時内藏の金子取出させて跡や枕にならべ。我死だらば此金銀誰物にかなるべし思へは惜やかなしやとしがみ付涙に紅ひの筋引て貞つきはさながら角なき青鬼のことし。面影屋内を飛めぐりて落人を押付けはよみがへりして銀を尋る事三十四五度に及べり。後には下も愛想つきて物す









を働き老の樂みはやく知べしとうをつかね大黒殿の御託宣なり。去ながら今程能事をさせぬ事はなし。金銀昔に増り次第に沢山に成けるをどこへ取て置て見せぬ事ぞ合点のゆかぬ事也。是程人の出しかねる金銀を分もなき事には少しも遺ふ事なけれ。溜るはとけしなくへるははやし。有時夜更て樋口屋の門をたゞきて酔を買にくる人あり。中戸を奥へは幽に聞えける。下男目を覺し何程がのと云六借ながら老翁がのと云空癡入して其のち返事もせねばせひなく歸りぬ夜明て亭主は彼男よび付て何の用もなきに門口三尺ほれと云。御意に任せ久三郎諸肌ぬぎて鍔を取堅地に氣をつくし身汗水なしてやう／＼掘ける。其深さ三尺と云時錢が有はづいまだ出ぬかと云小石貝殿より外に何も見えませぬと申。それ程にしても錢が老翁ない事よく心得て。かさねては老翁商ひも大事にすべし。むかし連歌師の宗祇法師の此所にまし／＼。哥道のはやりし時貧しき木藥屋に好る人有て各々を招き二階座敷にて興行せられしに。其あるじの句前の時胡椒を買にくる人有。座中に斷を申て老兩懸て三多請取心靜に一句を思案して付けるを。去とはやさしき心ざしと宗祇殊外にほめ給ふとなり。人はみな此ごとくの勤め誠ぞかし。我そも／＼は少しの物にて一代にかく分限になる事内證の手廻しひとつなり。是を聞覺てまねなばあしかるまじ。たとへば借屋住の人は毎日其割にして家賃を外にのけ置べし借銀も此ごとく利を一ヶ月も重ぬやうにまはせばいづれには勝手の商ひする物なり。借銀の濟しやうはもうけの有時其半分のけおき老貫目の内へ百目つゝにてもあくれば十年には濟事也算用なし打込置て帳にて合る人は手前うすくなる物ぞかし我物ながら小遣帳を付べし。買物は買ながら違ひ有物なり。商事せぬ日は少しにても錢銀出す事なけれ。万事を通ひにて取事なけれ當座に目に見えねばいつとなくかさなり払ひの時分書出しに驚く事なり。又家賃置程の身躰にならば外聞かまはず賣捨べし。迎も請歸したる例なく利にたゞまれて只とらるゝやうになる物なり。まだも時所を去て分別かゆれば戸棚の一つも残る。なりわひの渡世は送る物なり境といふ所に俄分限者稀なり。親より二代三代つゞきて古代の買置物今に賣ずして時節を待は根つよき所なり。朱座落着鉄炮屋は御用人藥屋中

間は隨に長崎へ取やり銀余所より借事なし。世間うちばにかまへ又有時はならぬ事をもする也。南宗寺の本堂庫裏に至る迄巻人しての建立殊勝なる事なり。心はともあれ風俗は都めきたり。此前京の北野七本松にて觀世太夫一世一代の勸進能有しに。金子巻枚宛の棧敷を京大坂に續ては堺へ取ける至穿鑿も是にてしれぬ。奈良大津伏見も人は替らねと此棧敷一軒も取らず申せば安き事ながら町人心は判金一枚にてかりさじき論じて所せきなく見物する事千秋万歳の御代にぞ住ける